

大阪府豊中市

螢池西遺跡

—阪神高速道路大阪池田線池田延伸工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

(本文編)

1998年3月

螢池西遺跡調査団

大阪府豊中市

蛍池西遺跡

－阪神高速道路大阪池田線池田延伸工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

(本文編)

1998年3月

蛍池西遺跡調査団

序

螢池西遺跡内では、昭和59年3月よりこれまで16回もの調査が行われてきた。そうした経緯のなかで、貴重な遺物の出土や遺構の検出もあって、本市内でも注目に値する遺跡の一つであることが知られるようになった。これまでの調査では、旧石器時代のナイフ形石器や盤状剥片石核、多数の弥生土器、古墳時代の須恵器と土師器が出土し、当遺跡が旧石器時代をはじめ弥生時代から平安時代にかけての複合遺跡であることが判明した。

加えて今回の調査では、幅20mをもつ自然流路や粘土を採掘した土坑群、素掘りの井戸など古墳時代以降に属する耕作の痕跡、歩行する牛かとみられる動物の足跡、集落と関連をもった河川、小溝の群集、井戸、柱穴などの遺構が検出されている。遺物としては弥生土器、須恵器、土師器をはじめ、盤状剥片や鐵形木製品などの稀少な遺物も出土した。

以上の事象を総合し、近隣にある螢池北遺跡や螢池東遺跡、螢池遺跡で確認されている弥生時代から平安時代にいたる集落の存在などを勘案すれば、周辺地域に依存していたこれら集落との相互関係がある程度究明し得るものと考えている。

調査の詳細については本文に叙述されているが、Ⅲにあるごとく遺跡の自然科学的研究として花粉・植物珪酸体・珪藻分析、土壤理化学分析、土器胎土分析など、できるかぎりの分析を試み、周辺諸遺跡の中にある本遺跡の意味づけを考察することに努めた。

調査にあたっては、阪神高速道路公団ならびに大阪府教育委員会、豊中市教育委員会をはじめとする関係者の方々には種々のご協力を賜りました。ここに厚く謝意を申し上げます。

平成11年3月31日

螢池西遺跡調査団

団長 亥野 強

例　　言

1. 本書は、大阪府豊中市蛍池西町1・2丁目に所在する蛍池西遺跡第4～9・11次調査の報告書である。
2. 蛍池西遺跡第4～9・11次調査は、阪神高速道路大阪池田線池田延伸線工事に伴い、阪神高速道路公団より調査の依頼をうけ、蛍池西遺跡調査団を編成し実施した。
3. 蛍池西遺跡調査団は団長・調査委員・調査員から構成され、その事務局は豊中市教育委員会社会教育課に置くものとした。なお、調査団および現地調査・整理作業の詳細については、「I 2. 調査の経緯と経過」に記した。
4. 本書のうち、「I 3.周辺の調査」、「II 3・4・6・18～21」は柳本照男が、「III 31.出土した石器」を川村慎也（兵庫県教育委員会）が、IIIを除くその他は橋田正徳が執筆した。また、遺物観察表については浅田尚子が作成した。なお、「III 自然科学分析の成果」については、パリノ・サヴェイ株式会社より正稿をいただいた。
本報告作成にかかる全ての編集作業は橋田が行った。
5. 本文挿図中には、陸軍測地部製作『京阪地方仮製貳萬分之毫地形図』明治20（1887）年発行・国上地理院製作『大阪西北部』平成9（1997）年発行・『伊丹』平成8（1996）年発行（ともに1:25,000）・大阪府製作『豊中都市計画地図4・7』平成7（1995）年修正（1:2,500）を加筆、縮小などの改変を加えて使用した。
6. 本文挿図中の方位は、原則的に座標北を使用したが、多くの部分で磁北を使用せざるを得なかった。このため、磁北使用分についてはM.N.を表記し、座標北は無表記として区別した。
なお、当遺跡の所在地は国土座標第VI系に属し、座標北は真北に対しN-0° 0' 17" -W、磁北はN-0° 6' 40" -Wである。
7. 本文挿図中の土色表記については、原則的には農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財團法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』に基づくが、第4・5次調査については『新版標準土色帖』導入以前の調査であったため、これに基づいていない。よって、土色表記に際して、修正マンセル方式による色相(Hue)表記があるものは『新版標準土色帖』に基づくものとして、導入以前の調査については色相表記を行なわないことで区分した。
8. 調査にあたっては、大阪府文化財調査研究センター　合山幸美氏、三宮昌弘氏よりご教示いただいた。また、出土遺物のうち石器については、関西大学　山口卓也氏よりご教示いただいた。記して謝意を申し上げます。

目 次

序

例 言

I 遺跡の周辺と調査の経緯	1
1.遺跡の位置と環境	(橋田) 3
2.調査の経緯と経過	(橋田) 14
3.周辺の調査	(柳本・橋田) .. 18
II 発掘調査の成果.....	33
1.調査区の概略	(橋田) 35
2.周辺の地形と基本層序	(橋田) 39
3.A-1区の調査	(柳本) 43
4.A-2区の調査	(タ) 49
5.A-3区の調査	(橋田) 67
6.A-4区の調査	(柳本) 75
7.A-5区の調査	(橋田) 79
8.A-6区の調査	(タ) 84
9.A-7区の調査	(タ) 88
10.B-1区の調査	(タ) 95
11.B-2区の調査	(タ) 98
12.B-4・5区の調査	(タ) 100
13.B-6区の調査	(タ) 103
14.B-7区の調査	(タ) 108
15.B-8区の調査	(タ) 113
16.B-9区の調査	(タ) 123
17.B-10~12区の調査	(タ) 128
18.B-13~17区の調査	(柳本) 130

19.C-1区の調査	(柳本)	141
20.C-2区の調査	(タ)	144
21.C-3区の調査	(タ)	155
22.D-2・3区の調査	(橋田)	159
23.D-5区の調査	(タ)	162
24.D-6区の調査	(タ)	175
25.D-7区の調査	(タ)	194
26.D-8区の調査	(タ)	206
27.D-9区の調査	(タ)	210
28.D-10区の調査	(タ)	214
29.E-1区の調査	(タ)	217
30.E-2区の調査	(タ)	232
31.出土した石器	(川村)	256
III 自然科学分析の成果 (パリノ・サーヴェイ株式会社)		261
1.螢池西遺跡の古環境		263
2.螢池西遺跡の土坑内容物について		273
3.螢池西遺跡出土土器の胎土分析		279
IV まとめ (橋山)		295
1.螢池西遺跡出土の旧石器		297
2.弥生時代後期～古墳時代中期の様相		300
3.古墳時代後期の様相		304
4.奈良～平安時代の様相		309
5.中近世の様相		317

挿 図 目 次

I 遺跡の周辺と調査の経緯

I - 1 図	市内遺跡分布図	4
I - 2 図	螢池周辺の遺跡	6
I - 3 図	山ノ上遺跡第6次調査	7
I - 4 図	螢池北遺跡第12次調査	8
I - 5 図	螢池東遺跡第9次調査	9
I - 6 図	上津島遺跡第5次調査	10
I - 7 図	曾根遺跡大型建物群	11
I - 8 図	調査区の位置	16
I - 9 図	調査区位置図	17
I - 10 図	第1次調査区グリッド位置図	18
I - 11 図	調査区平面・断面図	19
I - 12 図	第6グリッド出土遺物	21
I - 13 図	第3グリッド出土遺物	23
I - 14 図	第12グリッド出土遺物	24
I - 15 図	第2次調査区グリッド位置図	25
I - 16 図	調査区平面・断面図	26
I - 17 図	出土遺物1	27
I - 18 図	出土遺物2	28
I - 19 図	第14次調査区配置図	29
I - 20 図	調査区平面図	29
I - 21 図	出土遺物1	30
I - 22 図	出土遺物2	31
I - 23 図	第16次調査区平面図	32

II 発掘調査の成果

II - 1 図	遺跡周辺の地形	39
II - 2 図	調査区壁面柱状模式図	40・41
II - 3 図	A - 1 区位置図	43
II - 4 図	包含層出土遺物	43
II - 5 図	溝2出土遺物	44
II - 6 図	建物復元想定図	44
II - 7 図	A - 1 区平面・断面図	45～46
II - 8 図	S P - 22遺物出土状況	47
II - 9 図	S P - 22出土遺物	47
II - 10 図	A - 2 区位置図	49
II - 11 図	包含層出土遺物	49
II - 12 図	土坑1平面・断面図	50
II - 13 図	土坑2平面・断面図	50
II - 14 図	A - 2 区平面・断面図1	51～52

II - 15 図	A - 2 区平面・断面図2	53～54
II - 16 図	土坑3・4平面断面図	55
II - 17 図	溝1断面図	55
II - 18 図	溝1・土坑2出土遺物	55
II - 19 図	落ち込み1出土遺物	56
II - 20 図	落ち込み2上層出土遺物	57
II - 21 図	落ち込み2下層出土遺物	57
II - 22 図	溝2遺物出土状況	58
II - 23 図	溝2出土遺物	59
II - 24 図	溝2出土遺物 木製品1	60
II - 25 図	溝2出土遺物 木製品2	61
II - 26 図	溝2最下層出土遺物	61
II - 27 図	溝2出土遺物 木製品3	62
II - 28 図	溝3断面図	63
II - 29 図	A - 3 区位置図	67
II - 30 図	土坑群断面図	68
II - 31 図	A - 3 区平面・断面図1	69～70
II - 32 図	A - 3 区平面・断面図2	71～72
II - 33 図	土坑群出土遺物	73
II - 34 図	A - 4 区位置図	75
II - 35 図	出土遺物	75
II - 36 図	A - 4 区平面・断面図	77～78
II - 37 図	A - 5 区位置図	79
II - 38 図	A - 5 区平面図	79
II - 39 図	土坑群平面図	80
II - 40 図	土坑1～5断面図	81
II - 41 図	七坑群出土遺物	81
II - 42 図	井戸1出土遺物	82
II - 43 図	井戸1平面・断面図	82
II - 44 図	A - 6 区位置図	84
II - 45 図	包含層出土遺物	84
II - 46 図	A - 6 区平面・断面図1	85
II - 47 図	A - 6 区平面・断面図2	86
II - 48 図	土坑1・2断面図	87
II - 49 図	上坑3・4断面図	87
II - 50 図	A - 7 区位置図	88
II - 51 図	包含層出土遺物	88
II - 52 図	A - 7 区平面・断面図	89～90
II - 53 図	土坑1平面・断面図	91
II - 54 図	土坑2平面・断面図	91
II - 55 図	溝1平面・断面図	92

II - 56图	溝1出土遺物	92
II - 57图	溝2~4平面圖	92
II - 58图	溝4出土遺物	93
II - 59图	B-1区位置圖	95
II - 60图	柱穴·溝平面圖	95
II - 61图	B-1区平面圖	96
II - 62图	柱穴·溝斷面圖	97
II - 63图	B-2区位置圖	98
II - 64图	河川1出土遺物	98
II - 65图	B-2区平面·斷面圖	99
II - 66图	B-4·5区位置圖	100
II - 67图	B-4·5区平面圖	100
II - 68图	B-4区土坑1~3斷面圖	101
II - 69图	B-5区土坑1平面·斷面圖	101
II - 70图	B-5区土坑1遺物出土狀況	101
II - 71图	B-5区土坑1出土遺物	101
II - 72图	B-5区井戶1平面·斷面圖	102
II - 73图	B-5区井戶1出土遺物	102
II - 74图	B-6区位置圖	103
II - 75图	上坑1平面圖	103
II - 76图	B-6区平面圖	104
II - 77图	土坑2遺物出土狀況	105
II - 78图	土坑1~3斷面圖	106
II - 79图	土坑3~6斷面圖	106
II - 80图	上坑出土遺物	107
II - 81图	B-7区位置圖	108
II - 82图	包含層出土遺物	108
II - 83图	土坑1出土遺物	108
II - 84图	B-7区平面·斷面圖	109~110
II - 85图	土坑群斷面圖	111
II - 86图	B-8区位置圖	113
II - 87图	包含層出土遺物	113
II - 88图	水成層出土遺物	113
II - 89图	土坑1遺物出土狀況	114
II - 90图	土坑1出土遺物	114
II - 91图	B-8区平面·斷面圖	115~116
II - 92图	土坑2遺物出土狀況	117
II - 93图	土坑2·3出土遺物	117
II - 94图	土坑3·河川1遺物出土狀況	118
II - 95图	土坑4遺物出土狀況	114
II - 96图	土坑4出土遺物	119
II - 97图	土坑群斷面圖	120
II - 98图	河川1斷面圖	120
II - 99图	河川1出土遺物	121
II - 100图	B-9区位置圖	123
II - 101图	土坑群斷面圖	123
II - 102图	B-9区平面圖	124
II - 103图	土坑1遺物出土狀況	125
II - 104图	土坑2遺物出土狀況	126
II - 105图	土坑2出土遺物	126
II - 106图	B-10~12区位置圖	128
II - 107图	B-10·11区平面圖	128
II - 108图	B-12区平面圖	129
II - 109图	B-11区土坑1·2斷面圖	129
II - 110图	B-12区溝1·倒木痕斷面圖	129
II - 111图	B-13~17区位置圖	130
II - 112图	B-13区出土遺物	130
II - 113图	B-13区平面·斷面圖	131
II - 114图	B-14区出土遺物	132
II - 115图	B-15区出土遺物	132
II - 116图	B-16区出土遺物	132
II - 117图	B-17区出土遺物	132
II - 118图	B-14区平面·斷面圖	133~134
II - 119图	B-17区平面·斷面圖	135
II - 120图	B-16区平面·斷面圖	136
II - 121图	C-1·2区平面圖	139~140
II - 122图	C-1区位置圖	141
II - 123图	包含層出土遺物	141
II - 124图	南壁斷面圖	142
II - 125图	溝1·2平面·斷面圖	142
II - 126图	井戶1出土遺物	143
II - 127图	井戶2出土遺物	143
II - 128图	井戶2平面·斷面圖	143
II - 129图	井戶1平面·斷面圖	143
II - 130图	C-2区位置圖	144
II - 131图	包含層出土遺物	144
II - 132图	C-2区平面圖1·2	145~146
II - 133图	C-2区平面圖3	147~148
II - 134图	C-2区平面圖4·5	149~150
II - 135图	溝斷面圖	151
II - 136图	土坑2遺物出土狀況	151
II - 137图	土坑2·6出土遺物	151
II - 138图	溝1遺物出土狀況	152
II - 139图	溝1出土遺物	152
II - 140图	溝4出土遺物	152
II - 141图	河川1斷面圖	153
II - 142图	河川1出土遺物	153
II - 143图	C-3区範圍圖	155

II-144図	溝1・2断面図	155
II-145図	出土遺物	155
II-146図	C-3区平面・断面図	157~158
II-147図	D-2・3区位置図	159
II-148図	D-2・3区平面図	159
II-149図	D-2区河川1断面図	160
II-150図	D-2区河川1出土遺物	160
II-151図	D-3区河川1断面図	161
II-152図	D-3区河川1出土遺物	161
II-153図	D-5区位置図	162
II-154図	河川1上層出土遺物	162
II-155図	D-5区平面・断面図	163~164
II-156図	河川1遺物出土状況	165~166
II-157図	河川1断面図	167
II-158図	河川1中層1出土遺物1	168
II-159図	河川1中層1出土遺物2	169
II-160図	河川1中層2出土遺物1	170
II-161図	河川1中層2出土遺物2	171
II-162図	河川1下層1出土遺物	171
II-163図	河川1下層2出土遺物	172
II-164図	D-6区位置図	175
II-165図	土坑1出土遺物	175
II-166図	七坑1平面・断面図	175
II-167図	土坑2断面図	176
II-168図	上坑2出土遺物	176
II-169図	D-6区平面・断面図	177~178
II-170図	河川1断面図	179
II-171図	河川1最上層出土遺物	179
II-172図	河川1遺物出土状況1	180
II-173図	河川1遺物出土状況2	181
II-174図	河川1上層出土遺物	182
II-175図	河川1中層1出土遺物1	183
II-176図	河川1中層1出土遺物2	184
II-177図	河川1中層1出土遺物3	185
II-178図	河川1中層2出土遺物	186
II-179図	河川1下層出土遺物1	187
II-180図	河川1下層出土遺物2	188
II-181図	D-7区位置図	194
II-182図	井戸1平面・断面図	194
II-183図	D-7区平面図	195
II-184図	井戸1出土遺物	196
II-185図	土坑群断面図	196
II-186図	河川1断面図	196
II-187図	河川1遺物の出土位置	197
II-188図	河川1上層出土遺物	198
II-189図	河川1中層出土遺物1	199
II-190図	河川1中層出土遺物2	200
II-191図	河川1下層出土遺物1	201
II-192図	河川1下層出土遺物2	202
II-193図	D-8区位置図	206
II-194図	耕作痕1出土遺物	206
II-195図	土坑群断面図	206
II-196図	D-8区平面図	207
II-197図	土坑群出土遺物	208
II-198図	D-9区位置図	210
II-199図	包含層出土遺物	210
II-200図	土坑群断面図	210
II-201図	D-9区平面図	211
II-202図	土坑群出土遺物	212
II-203図	D-10区位置図	214
II-204図	土坑1・溝1・河川1断面図	214
II-205図	D-10区平面図	215
II-206図	溝1・河川1出土遺物	216
II-207図	E-1区位置図	217
II-208図	包含層出土遺物	217
II-209図	南区平面・断面図	218
II-210図	中央区平面・断面図	219~220
II-211図	北区平面・断面図	221~222
II-212図	土坑1遺物出土状況	223
II-213図	土坑1・溝1平面・断面図	223
II-214図	土坑1出土遺物	224
II-215図	土坑2平面・断面図	225
II-216図	土坑2出土遺物	225
II-217図	河川1出土遺物	225
II-218図	河川1・2断面図	225
II-219図	河川2(南区)出土遺物	226
II-220図	河川2(中央区)出土遺物	227
II-221図	上坑3出土遺物	227
II-222図	土坑3平面・断面図	227
II-223図	井戸1平面・断面図	228
II-224図	上坑4出土遺物	228
II-225図	溝5・6平面・断面図	229
II-226図	E-2区位置図	232
II-227図	調査区北部包含層出土遺物	232
II-228図	E-2区平面・断面図1	233~234
II-229図	E-2区平面・断面図2	235~236
II-230図	E-2区平面・断面図3	237~238
II-231図	調査区南部包含層出土遺物	239

II - 232図 調査区南部包含層下層出土遺物	239
II - 233図 土坑1平面・断面図	240
II - 234図 土坑1出土遺物	240
II - 235図 土坑2平面・断面図	240
II - 236図 土坑3平面・断面図	241
II - 237図 土坑3出土遺物	241
II - 238図 土坑4出土遺物	241
II - 239図 土坑4平面・断面図	242
II - 240図 土坑5平面・断面図	242
II - 241図 土坑5出土遺物	243
II - 242図 土坑群断面図1	243
II - 243図 土坑群断面図2	244
II - 244図 上坑8平面・断面図	244
II - 245図 河川1遺物出土状況	245～246
II - 246図 土坑群出土遺物	247
II - 247図 漢1断面図	247
II - 248図 河川1断面図	247
II - 249図 河川1出土遺物1	248
II - 250図 河川1出土遺物2	249
II - 251図 河川1出土遺物3	250
II - 252図 河川2出土遺物	251
II - 253図 河川2断面図	252
II - 254図 石鏃	257
II - 255図 旧石器	258
II - 25図 盤状剥片	259
III 自然科学分析の成果	
III - 1図 D - 6区河川1分析試料 採取層位	263
III - 2図 A - 2区基本層分析試料 採取層位	264
III - 3図 主要花粉珪藻化石群集	265
III - 4図 主要花粉化石群集	269
III - 5図 植物珪酸体組成	270
III - 6図 試料採取層位	274
III - 7図 D - 6区土坑1の 脂肪酸・ステロール組成	275
III - 8図 B - 9区土坑7の 脂肪酸・ステロール組成	276
III - 9図 土器試料1	282
III - 10図 土器試料2	283
III - 11図 土器試料の重鉱物組成	286
III - 12図 段丘堆積土(第VII層)の 重鉱物組成	286
IVまとめ	
IV - 1図 莳池西遺跡における旧石器の分布	297
IV - 2図 市内旧石器分布状況	298
IV - 3図 弥生時代後期～ 古墳時代中期の遺構分布	300
IV - 4図 密集土坑群分布範囲	304
IV - 5図 市内密集土坑分布状況	305
IV - 6図 服部遺跡第3次調査区	307
IV - 7図 奈良・平安時代の遺構分布	309
IV - 8図 上小名田遺跡	310
IV - 9図 粟生間谷遺跡	310
IV - 10図 川除・藤ノ木遺跡	311
IV - 11図 三田遺跡	311
IV - 12図 長原遺跡N G81-10、 82-6次調査区	312
IV - 13図 市域における集落関連遺構の推移	314
IV - 14図 服部遺跡第5次調査SB-1・2	315
IV - 15図 遺構の分布	317
IV - 16図 遺跡周辺の水利状況	318
IV - 17図 市内における 井戸灌漑と天水利用の分布	318
IV - 18図 新免遺跡第40次調査区井戸1・2	319
付図 調査区全体図	

表 目 次

I - 1 表	調査工程表	15	II - 40 表	E - 2 区土器観察表 1	253
I - 2 表	調査区名称一覧	17	II - 41 表	E - 2 区土器観察表 2	254
II - 1 表	調査区一覧	38	II - 42 表	E - 2 区土器観察表 3	255
II - 2 表	A - 1 区土器観察表	48	II - 43 表	石器観察表	260
II - 3 表	A - 2 区土器観察表 1	65	III - 1 表	珪藻分析結果 1	266
II - 4 表	A - 2 区土器観察表 2	66	III - 2 表	珪藻分析結果 2	267
II - 5 表	A - 3 区土器観察表	74	III - 3 表	花粉分析結果	268
II - 6 表	A - 4 区土器観察表	76	III - 4 表	植物珪酸体分析結果	270
II - 7 表	A - 5 区土器観察表	83	III - 5 表	螢池西遺跡の 土壤理化分析結果	
II - 8 表	A - 6 区土器観察表	87	III - 6 表	分析試料一覧 1	277
II - 9 表	A - 7 区土器観察表	94	III - 7 表	分析試料一覧 2	280
II - 10 表	B - 2 区土器観察表	98	III - 8 表	段丘堆積土 (第Ⅶ層) 分析試料一覧	281
II - 11 表	B - 5 区土器観察表	102	III - 9 表	重鉱物分析結果一覧	284
II - 12 表	B - 6 区土器観察表	107	III - 10 表	薄片観察結果	289 - 290
II - 13 表	B - 7 区土器観察表	112	IV - 1 表	市内旧石器出土遺跡一覧	298
II - 14 表	B - 8 区土器観察表	122				
II - 15 表	B - 9 区土器観察表	127				
II - 16 表	B - 13 区土器観察表	137				
II - 17 表	B - 14 区土器観察表	137				
II - 18 表	B - 15 区土器観察表	137				
II - 19 表	B - 16 区土器観察表	137				
II - 20 表	B - 17 区土器観察表	137				
II - 21 表	C - 1 区土器観察表	143				
II - 22 表	C - 2 区土器観察表	154				
II - 23 表	C - 3 区土器観察表	156				
II - 24 表	D - 2 区土器観察表	161				
II - 25 表	D - 3 区土器観察表	161				
II - 26 表	D - 5 区土器観察表 1	173				
II - 27 表	D - 5 区土器観察表 2	174				
II - 28 表	D - 6 区土器観察表 1	190				
II - 29 表	D - 6 区土器観察表 2	191				
II - 30 表	D - 6 区土器観察表 3	192				
II - 31 表	D - 6 区土器観察表 4	193				
II - 32 表	D - 7 区土器観察表 1	203				
II - 33 表	D - 7 区土器観察表 2	204				
II - 34 表	D - 7 区土器観察表 3	205				
II - 35 表	D - 8 区土器観察表	209				
II - 36 表	D - 9 区土器観察表	213				
II - 37 表	D - 10 区土器観察表	216				
II - 38 表	E - 1 区土器観察表 1	230				
II - 39 表	E - 1 区土器観察表 2	231				

図 版 目 次

- 図版1 A-1区遺構1
(1) 調査区全景1(南から)
(2) 調査区全景2(北から)
- 図版2 A-1区遺構2
(1) 遺構検出状況1(北半部)
(2) 遺構検出状況2(中央部)
- 図版3 A-1区遺構3
(1) SP-16
(2) SP-16断面
- 図版4 A-2区遺構1
(1) 調査区全景1(北部)
(2) 調査区全景2(南部)
- 図版5 A-2区遺構2
(1) 土坑1断面
(2) 上坑2遺物出土状況
- 図版6 A-2区遺構3
(1) 落ち込み検出状況
(2) 落ち込み完掘状況
- 図版7 A-2区遺構4
(1) 溝2検出状況
(2) 溝2遺物出土状況
- 図版8 A-3区遺構
(1) 調査区全景1(北部)
(2) 調査区全景2(南部)
(3) 上坑10遺物出土状況
(4) 土坑12遺物出土状況
- 図版9 A-4区遺構
(1) 調査区全景1(南から)
(2) 調査区全景2(北から)
- 図版10 A-5区遺構
(1) 調査区全景
(2) 土坑1断面
(3) 土坑2断面
(4) 上坑3断面
(5) 土坑4断面
- 図版11 A-6区遺構
(1) 調査区全景1(北部)
(2) 調査区全景2(南部)
(3) 土坑1断面
(4) 土坑2断面
- 図版12 A-7区遺構1
- (1) 調査区全景1
(2) 調査区全景2
(3) 土坑1完掘状況
(4) 土坑1断面
- 図版13 A-7区遺構2
(1) 調査区全景3
(2) 調査区全景4
(3) 埋没地形堆積状況1
(4) 埋没地形堆積状況2
- 図版14 A-7区遺構3
(1) 耕作痕
(2) 溝1断面
(3) 溝2断面
- 図版15 A-1・2区出土遺物
(1) A-1区2(包含層)
(2) A-1区16(SP-22)
(3) A-1区6(SP-22)
(4) A-1区9~11・14・16・17
(SP-22)
(5) A-2区11(包含層)
(6) A-2区17(土坑2)
- 図版16 A-2区出土遺物2
(1) 25・29(落ち込み1古段階)
13・14(包含層)
- 図版17 A-2区出土遺物3
(1) 30・32~34(落ち込み2上層)
44・45・48・49(溝2)
- 図版18 A-2区出土遺物4
(1) 50(溝2)
(2) 55(溝2)
(3) 56(溝2)
(4) 53(溝2)
(5) 2〔クサビ状木製品〕(溝2)
(6) 1〔藤形木製品〕(溝2)
- 図版19 A-2区出土遺物5
(1) 5〔木槌〕(溝2)
(2) 4〔木錘〕(溝2)
- 図版20 A-3区出土遺物
(1) 2(土坑1)
(2) 6(土坑6)
(3) 8(土坑11)

- (4) 9 (土坑12)
- 図版21 A-3・4区出土遺物**
- (1) A-3区10 (土坑14)
 - (2) A-3区11 (土坑14付近)
 - (3) A-4区5 (包含層)
- 図版22 A-5区出土遺物**
- (1) 井戸1出土遺物
- 図版23 B-1区遺構**
- (1) 調査区全景
 - (2) 溝・柱穴
 - (3) 柱穴1断面
 - (4) 溝1・2断面
- 図版24 B-2区遺構**
- (1) 調査区全景
 - (2) 河川1断面
- 図版25 B-4・5区遺構1**
- (1) B-4区全景
 - (2) B-5区全景
- 図版26 B-4・5区遺構2**
- (1) B-5区土坑1遺物出土状況
 - (2) B-5区土坑1断面
 - (3) B-5区井戸1
 - (4) B-4区土坑1～3断面
- 図版27 B-6区遺構1**
- (1) 調査区全景
 - (2) 土坑3断面
 - (3) 土坑8断面
- 図版28 B-6区遺構2**
- (1) 土坑1断面
 - (2) 土坑1遺物出土状況1
 - (3) 土坑1遺物出土状況2
 - (4) 土坑1遺物出土状況3
- 図版29 B-6区遺構3**
- (1) 土坑2断面
 - (2) 土坑2遺物出土状況
- 図版30 B-7区遺構**
- (1) 調査区全景
 - (2) 調査区北壁断面
- 図版31 B-8区遺構1**
- (1) 調査区全景
 - (2) 調査区南壁断面
 - (3) 土坑3断面
 - (4) 河川1断面
- 図版32 B-8区遺構2**
- (1) 土坑1遺物出土七状況
- 図版33 B-9区遺構1**
- (1) 調査区全景
 - (2) 七坑5断面
- 図版34 B-9区遺構2**
- (1) 土坑2遺物出土状況
 - (2) 土坑2断面
- 図版35 B-10～12区遺構1**
- (1) B-10区全景
 - (2) B-11区全景
- 図版36 B-10～12区遺構2**
- (1) B-12区全景
 - (2) B-10区井戸1
 - (3) B-12区倒木痕断面
- 図版37 B-14・16区遺構**
- (1) B-15区全景
 - (2) B-16区全景
- 図版38 B-17区遺構**
- (1) 調査区全景
 - (2) 溝完掘状況
- 図版39 B-2～7区出土遺物**
- (1) B-2区1 (河川1)
 - (2) B-5区1 (土坑1)
 - (3) B-6区4 (土坑2)
 - (4) B-6区1 (土坑1)
 - (5) B-7区3 (土坑1)
- 図版40 B-8区出土遺物**
- (1) 4～6 (水成層) 14 (土坑4)
 - (2) 8 (土坑2)
 - (3) 21 (河川1)
 - (4) 17 (河川1)
- 図版41 B-8・9・17区出土遺物**
- (1) B-8区15 (河川1)
 - (2) B-9区1 (土坑2)
 - (3) B-17区2 (包含層)
- 図版42 C-1区遺構**
- (1) 調査区全景1 (東から)

- (2) 調査区全景 2 (西から)
- 図版43 C-2区遺構1
(1) 調査区全景 1 (西から)
(2) 調査区全景 2 (東から)
- 図版44 C-2区遺構2
(1) 河川 1
(2) 河川 1断面
- 図版45 C-2区遺構3
(1) 土坑 3
(2) 土坑 3 遺物出土状況
- 図版46 C-3区遺構
(1) 調査区全景 1 (北半部)
(2) 調査区全景 2 (南半部)
- 図版47 C-1・2区出土遺物
(1) C-1区1 (包含層)
(2) C-1区3 (包含層)
(3) C-2区4 (土坑2)
(4) C-2区12 (河川1)
(5) C-2区5 (土坑6)
(6) C-2区7 (溝1)
- 図版48 D-2区遺構
(1) 調査区全景
(2) 河川 1断面
- 図版49 D-3区遺構
(1) 調査区全景
(2) 河川 1断面
- 図版50 D-5区遺構1
(1) 調査区全景
(2) 河川 1断面
- 図版51 D-5区遺構2
(1) 河川 1 遺物出土状況
(2) 河川 1 遺物出土状況 (拡大 1)
(3) 河川 1 遺物出土状況 (拡大 2)
- 図版52 D-6区遺構1
(1) 調査区全景
(2) 河川 1断面
- 図版53 D-6区遺構2
(1) 河川 1 上層遺物出土状況
- 図版54 D-6区遺構3
(1) 河川 1 中層遺物出土状況
- 図版55 D-6区遺構4
(1) 河川 1 遺物出土状況 1
(2) 河川 1 遺物出土状況 2
(3) 河川 1 遺物出土状況 3
- 図版56 D-6区遺構5
(1) 土坑 1断面
(2) 土坑 1 遺物出土状況
- 図版57 D-6区遺構6
(1) 土坑 2断面
(2) 土坑 2 遺物出土状況
- 図版58 D-7区遺構1
(1) 調査区全景
(2) 河川 1断面
- 図版59 D-7区遺構2
(1) 河川 1 遺物出土状況
(2) 河川 1 遺物出土状況 (拡大 1)
(3) 河川 1 遺物出土状況 (拡大 2)
- 図版60 D-7区遺構3
(1) 河川 1 遺物出土状況
(2) 井戸 1断面
- 図版61 D-8区遺構
(1) 調査区全景
(2) 土坑 2 遺物出土状況
(3) 土坑 6断面
(4) 土坑 6 遺物出土状況
- 図版62 D-9区遺構
(1) 調査区全景
(2) 土坑 10断面
(3) 土坑 4 遺物出土状況
- 図版63 D-10区遺構
(1) 調査区全景
(2) 溝 1断面
(3) 河川 1断面
- 図版64 D-2・3・5区出土遺物
(1) D-2区1 (河川 1)
(2) D-3区2 (河川 1)
(3) D-5区3 (河川 1上層)
(4) D-5区8 (河川 1中層 1)
(5) D-5区9 (河川 1中層 1)
(6) D-5区6 (河川 1中層 1)
- 図版65 D-5区出土遺物 2
(1) 7 (河川 1中層 1)
(2) 13 (河川 1中層 1)
(3) 14 (河川 1中層 1)
- 図版66 D-5区出土遺物 3
(1) 11 (河川 1中層 1)
(2) 12 (河川 1中層 1)
(3) 16 (河川 1中層 1)

(4) 18 (河川1中層1)

(5) 19 (河川1中層1)

(6) 27 (河川1中層1)

図版67 D-5区出土遺物4

(1) 28 (河川1中層1)

(2) 29 (河川1中層1)

(3) 30 (河川1中層1)

(4) 31 (河川1中層1)

(5) 32 (河川1中層1)

(6) 34 (河川1中層2)

図版68 D-5区出土遺物5

(1) 36 (河川1中層2)

(2) 39 (河川1中層2)

(3) 51 (河川1中層2)

(4) 55 (河川1中層2)

(5) 61 (河川1中層2)

(6) 59 (河川1中層2)

図版69 D-5区出土遺物6

(1) 64 (河川1下層1)

(2) 65 (河川1下層1)

(3) 67 (河川1下層1)

(4) 69 (河川1下層1)

(5) 73 (河川1下層2)

(6) 74 (河川1下層2)

(7) 76 (河川1下層2)

(8) 77 (河川1下層2)

図版70 D-6区出土遺物1

(1) 1 (土坑1)

(2) 2 (土坑2)

(3) 4 (河川1上層)

(4) 6 (河川1上層)

(5) 5 (河川1上層)

(6) 7 (河川1上層)

図版71 D-6区出土遺物2

(1) 8 (河川1上層)

(2) 9 (河川1上層)

(3) 11 (河川1上層)

(4) 15 (河川1上層)

(5) 16 (河川1上層)

(6) 17 (河川1上層)

(7) 19 (河川1上層)

図版72 D-6区出土遺物3

(1) 20 (河川1上層)

(2) 21 (河川1中層1)

(3) 23 (河川1中層1)

(4) 30 (河川1中層1)

(5) 27 (河川1中層1)

(6) 32 (河川1中層1)

図版73 D-6区出土遺物4

(1) 34 (河川1中層1)

(2) 36 (河川1中層1)

(3) 55 (河川1中層1)

(4) 56 (河川1中層1)

(5) 53 (河川1中層1)

図版74 D-6区出土遺物5

(1) 35 (河川1中層1)

(2) 40 (河川1中層1)

(3) 49 (河川1中層1)

(4) 50 (河川1中層1)

(5) 51 (河川1中層1)

(6) 52 (河川1中層1)

図版75 D-6区出土遺物6

(1) 39 (河川1中層1)

(2) 42 (河川1中層1)

(3) 42 (体部線刻拡大)

(4) 57 (河川1中層1)

(5) 47 (河川1中層1)

図版76 D-6区出土遺物7

(1) 60 (河川1中層1)

(2) 61 (河川1中層1)

(3) 62 (河川1中層1)

(4) 63 (河川1中層1)

(5) 72 (河川1中層1)

(6) 76 (河川1中層1)

図版77 D-6区出土遺物8

(1) 69 (河川1中層1)

(2) 70 (河川1中層1)

(3) 65 (河川1中層1)

(4) 71 (河川1中層1)

(5) 67 (河川1中層1)

(6) 74 (河川1中層1)

(7) 77 (河川1中層2)

(8) 79 (河川1中層2)

図版78 D-6区出土遺物9

(1) 81 (河川1中層2)

(2) 87 (河川1中層2)

(3) 90 (河川1下層)

(4) 95 (河川1下層)

(5) 88 (河川 1 下層)

(6) 98 (河川 1 下層)

図版79 D-6区出土遺物10

(1) 91 (河川 1 下層)

(2) 106 (河川 1 下層)

(3) 109 (河川 1 下層)

(4) 112 (河川 1 下層)

(5) 110 (河川 1 下層)

(6) 115 (河川 1 下層)

図版80 D-7区出土遺物1

(1) 4 (河川 1 上層)

(2) 5 (河川 1 上層)

(3) 8 (河川 1 上層)

(4) 10 (河川 1 上層)

(5) 14 (河川 1 上層)

(6) 15 (河川 1 上層)

(7) 18 (河川 1 上層)

図版81 D-7区出土遺物2

(1) 19 (河川 1 上層)

(2) 21 (河川 1 上層)

(3) 26 (河川 1 上層)

(4) 20 (河川 1 上層)

(5) 22 (河川 1 上層)

(6) 31 (河川 1 中層)

(7) 29 (河川 1 中層)

(8) 30 (河川 1 中層)

図版82 D-7区出土遺物3

(1) 38 (河川 1 中層)

(2) 40 (河川 1 中層)

(3) 41 (河川 1 中層)

図版83 D-7区出土遺物4

(1) 53 (河川 1 中層)

(2) 62 (河川 1 下層)

(3) 70 (河川 1 下層)

(4) 74 (河川 1 下層)

(5) 78 (河川 1 下層)

(6) 75 (河川 1 下層)

(7) 83 (河川 1 下層)

図版84 D-7区出土遺物5

(1) 85 (河川 1 下層)

(2) 86 (河川 1 下層)

(3) 87 (河川 1 下層)

(4) 92 (河川 1 下層)

(5) 94 (河川 1 下層)

(6) 95 (河川 1 下層)

図版85 D-8~10区出土遺物

(1) D-8区2 (土坑2)

(2) D-8区6 (土坑2)

(3) D-8区8 (土坑5)

(4) D-9区7 (土坑6)

(5) D-9区5 (土坑4)

(6) D-10区2 (河川1)

図版86 E-1区遺構1

(1) 北区全景1 (北から)

(2) 北区全景2 (南から)

(3) 井戸1断面

(4) 土坑4断面

図版87 E-1区遺構2

(1) 中央区・南区全景

(2) 溝5・6全景

(3) 溝5・6断面

図版88 E-1区遺構3

(1) 土坑1・溝1全景

(2) 土坑1遺物出土状況

図版89 E-1区遺構4

(1) 土坑2

(2) 土坑2遺物出土状況

図版90 E-1区遺構5

(1) 河川1断面

(2) 河川2断面(中央区)

(3) 河川2上層遺物出土状況(南区)

図版91 E-2区遺構1

(1) 調査区北部全景(溝1)

(2) 調査区中央部全景1

(3) 調査区中央部全景2

図版92 E-2区遺構2

(1) 調査区南部全景1

(2) 調査区南部全景2

(3) 土坑8断面

図版93 E-2区遺構3

(1) 土坑3

(2) 土坑4

(3) 土坑4遺物出土状況

図版94 E-2区遺構4

(1) 土坑5遺物出土状況

(2) 土坑5断面

(3) 上坑5完掘状況

図版95 E-2区遺構5

- (1) 河川1遺物出土状況(中層)
- (2) 河川1断面(上～中層)

図版96 E-2区遺構6

- (1) 河川1遺物出土状況(下層)
- (2) 河川1断面(中～下層)

図版97 E-2区遺構7

- (1) 河川1遺物出土状況(中層1)
- (2) 河川1遺物出土状況(中層2)
- (3) 河川1遺物出土状況(下層1)
- (4) 河川1遺物出土状況(下層2)
- (5) 河川2(南)断面

図版98 E-1区出土遺物

- (1) 9(包含層)
- (2) 11(土坑1)
- (3) 10(土坑1)
- (4) 15(土坑1)
- (5) 18(土坑1)
- (6) 55(土坑3)
- (7) 36(河川2南区)
- (8) 42(河川2南区)

図版99 E-1・2区出土遺物

- (1) E-1区43(河川2中央区)
- (2) E-1区48(河川2中央区)
- (3) E-1区54(河川2中央区)
- (4) E-1区50(河川2中央区)
- (5) E-2区1(北部包含層)
- (6) E-2区24(南部包含層)
- (7) E-2区26(南部包含層下層)
- (8) E-2区31(土坑3)

図版100 E-2区出土遺物2

- (1) 33(土坑5)
- (2) 34(土坑5)
- (3) 37(土坑5)
- (4) 36(土坑5)
- (5) 35(土坑5)

図版101 E-2区出土遺物3

- (1) 39(土坑6)
- (2) 68(河川1)
- (3) 50(河川1)
- (4) 52(河川1)
- (5) 54(河川1)

図版102 E-2区出土遺物4

- (1) 53(河川1)
- (2) 66(河川1)

- (3) 57(河川1)

- (4) 67(河川1)

- (5) 55(河川1)

- (6) 51(河川1)

図版103 E-2区出土遺物5

- (1) 59(河川1)
- (2) 78(河川1)
- (3) 79(河川1)
- (4) 81(河川1)
- (5) 71(河川1)
- (6) 80(河川1)
- (7) 82(河川1)

図版104 E-2区出土遺物6

- (1) 86(河川1)
- (2) 87(河川1)
- (3) 89(河川1)
- (4) 90(河川1)
- (5) 94(河川1)
- (6) 93(河川1)
- (7) 91(河川1)
- (8) 95(河川2)

図版105 石器1

- (1) 石鎚1

図版106 石器2

- (1) 石鎚2
- (2) 石鎚3

図版107 石器3

- (1) 剥片・削片・石核

図版108 石器4

- (1) 17【石核】
- (2) 18【スクレイパー】
- (3) 19【スクレイパー】

図版109 石器5

- (1) 25【盤状剥片】

図版110 硅藻化石

- (1) 硅藻化石

図版111 花粉化石1

- (1) 花粉化石1

図版112 花粉化石2

- (1) 花粉化石2

図版113 植物硅酸体

- (1) 植物硅酸体

図版114 重金物1

- (1) D-6-91(b類)

- (2) D-6-26 (a類)
- (3) A-2-31 (e類)
- (4) D-5-17 (f類)
- (5) D-6-81 (a類)
- (6) D-6-98 (b類)

- (4) 地山2 直交ボーラー
- (5) 地山5 下方ボーラー
- (6) 地山5 直交ボーラー

図版115 重鉱物2

- (1) D-7-37 (h類)
- (2) D-7-77 (c類)
- (3) A-2-a (g類)
- (4) A-2-c (d類)
- (5) 地山2
- (6) 地山5

図版116 胎土薄片1

- (1) A-3-2○ 下方ボーラー
- (2) A-3-2○ 直交ボーラー
- (3) B-7-5○ 下方ボーラー
- (4) B-7-5○ 直交ボーラー
- (5) A-2-6○ 下方ボーラー
- (6) A-2-6○ 下方ボーラー

図版117 胎土薄片2

- (1) D-6-91 下方ボーラー
- (2) D-6-91 直交ボーラー
- (3) D-6-26 下方ボーラー
- (4) D-6-26 直交ボーラー
- (5) A-2-31 下方ボーラー
- (6) A-2-31 直交ボーラー

図版118 胎土薄片3

- (1) D-5-17 下方ボーラー
- (2) D-5-17 直交ボーラー
- (3) D-6-81 下方ボーラー
- (4) D-6-81 直交ボーラー
- (5) D-6-98 下方ボーラー
- (6) D-6-98 直交ボーラー

図版119 胎土薄片4

- (1) D-7-37 下方ボーラー
- (2) D-7-37 直交ボーラー
- (3) D-7-77 下方ボーラー
- (4) D-7-77 直交ボーラー
- (5) A-2-a 下方ボーラー
- (6) A-2-a 直交ボーラー

図版120 胎土薄片5

- (1) A-2-c 下方ボーラー
- (2) A-2-c 直交ボーラー
- (3) 地山2 下方ボーラー

I 遺跡の周辺と調査の経緯

- 1 遺跡の位置と環境
- 2 調査の経緯と経過
- 3 周辺の調査

1. 遺跡の位置と環境

(1) 地理的環境

螢池西遺跡は、大阪府豊中市螢池西町一帯に所在する。遺跡は北緯 $34^{\circ} 47' 40''$ 、東經 $135^{\circ} 27' 10''$ を基点に南へ500m、東西300mの範囲で広がり、面積にして約250,000m²をはかる。市内において見る限りでは、中規模の遺跡と言える。遺跡の北方には開析谷を挟み螢池北遺跡が、段丘崖を隔てた東側には螢池東遺跡、螢池遺跡、刀根山南遺跡が近在する。また、平野部に目をむけると西に大阪空港A遺跡・同B遺跡・中村銅鐸出土地点（伊丹市）・豊島南遺跡（池田市）、南に箕輪遺跡が、やや離れて南西に勝部遺跡・原田西遺跡・走井遺跡が位置する。

ところで豊中市内の地形を概観すると、市内は南北で丘陵部と沖積平野に区分することができる。市域北部に広がる丘陵は、千里川を境界に北側の待兼山丘陵、南側の通称豊中台地に二分される。このうち、螢池西遺跡が立地する待兼山丘陵は千里丘陵地域の北西端にあり、標高80m前後の待兼山を頂点に南北に千里川・箕面川に挟まれた独立塊状の地形を呈する。丘陵は待兼山を境に東側は大阪層群上部（茨木累層）と中・高位段丘堆積層からなる尾根地形を、また西部は低位段丘堆積層からなる台地状の平坦な地形を特徴としている。また、丘陵の周囲は侵蝕作用により多数の開析谷が認められるとともに、西側一帯は明確な段丘崖により、千里川・箕面川・猪名川等の沖積作用で形成した平野部と区分される。なお、当丘陵およびその周辺には多数の遺跡が存在するが、その分布状況から丘陵の南北でそれぞれ箕面川水系・千里川水系に依拠する遺跡群に区分できる。

このような丘陵において、螢池西遺跡は低位段丘の裾野、大きさは丘陵と平野の境界部分に立地する。市内の範囲に限ってみると、遺跡の多くが中・低位段丘上に立地し、丘陵と平野の境界部分に立地する遺跡は他に原田遺跡以外になく、当遺跡の立地はやや異質とも言える。ただ、平野部と丘陵上の双方との関連が予想できる位置でもあり注意されよう。また、遺跡が直接依拠した河川は待兼山丘陵を水源とする複数の小河川などにまとめられる。これら的小河川は、既に埋没したか、あるいは現状で用水路となって名残りをとどめている程度であるが、丘陵の開発が進む以前にあっては一定の水量を有したことが予想される。なお、小河川は千里川の一支流となる可能性が考えられることから、螢池西遺跡は千里川水系を軸とした遺跡群に所属するとも言えるが、千里川本流に対する依存度は本流沿いに分布する遺跡とは明らかに異なり、一定の独自性が想定できる。

次に螢池西遺跡周辺の交通網をみると、高度経済成長期以降には大阪国際空港や阪神高速道路大阪池田線などの主要幹線道により、一帯は近代交通の要衝ともいいく様相を呈する。しかし、明治十四年作成の『仮製武萬分壹地形図』をみると、幹線道や街道は低位段丘上をとおり、遺跡一帯には麻田村から伊丹市小坂田村・岩屋村に通じる生活道が認められるにすぎない。これらの生活道のうち、伊丹市小坂田村へ向かう道は猪名川に阻まれるもの、渡し舟を利用することで伊丹へ向かうルートになり、また岩屋村へ向かう道も勝部・走井へ通じることからあながち軽視できないが、遺跡の立地を考えるうえで重要な影響を及ぼすものとは考えにくい。これは周辺の螢池北遺跡、螢池遺跡、螢池東遺跡が、能勢街道や西国街道などの主要幹線道と密接にかかわる位置にあることと比べてみればより明確となろう。

以上、螢池西遺跡はその地理的環境を見る限り、周辺の諸遺跡とはやや異なる位置にあり、半野

1. 遺跡の位置と環境



1 太鼓原古墳群	11 桜井谷塚群	21 金寺山廻寺	31 岡町南遺跡	41 原田遺跡	51 若竹町遺跡	61 烏豫村圓墳
2 肥畠春日町古墳群	12 陰池北遺跡	22 新免高山古墳群	32 桜塚古墳群	42 曾根遺跡	52 石連寺後寺	62 小曾根遺跡
3 野瀬遺跡	13 陰池東遺跡	23 金寺山廻寺等石造石	33 下原城跡群	43 曾根城遺跡	53 宮内遺跡	63 南郷目代今西反掘款
4 肥畠寺日町遺跡	14 番池西遺跡	24 本町遺跡	34 長野寺遺跡	44 原田中町遺跡	54 利倉北遺跡	64 北条遺跡
5 少路遺跡	15 陰池遺跡	25 新免遺跡	35 梅塚古墳	45 原田北町遺跡	55 利倉遺跡	65 上神島川庄遺跡
6 特應山古墳	16 陰池薄陣遺跡	26 茵町遺跡	36 塔跡敷石地	46 塔跡駆除跡	56 利倉東遺跡	66 上岸島遺跡
7 特應山遺跡	17 宮刀根山遺跡	27 山ノ上遺跡	37 原田西遺跡	47 勝島北遺跡	57 利倉西遺跡	67 上岸島南遺跡
8 内田遺跡	18 駒神山古墳	28 志川遺跡	38 藤原遺跡	48 曾根原遺跡	58 勝倉の前遺跡	68 桶狭ポンプ場遺跡
9 桜井谷石野牧布地	19 上野遺跡	29 阿町北遺跡	39 藤原東遺跡	49 横山遺跡	59 服部西遺跡	69 畠田遺跡
10 桜原遺跡	20 無野田遺跡	30 阿町東遺跡	40 原田城跡	50 服部東遺跡	60 懸樋遺跡	70 宮内遺跡
			71 岛江遺跡			

I-1 図 市内遺跡分布図 (1 : 50,000)

に立地する諸遺跡との間に濃密な関係を求めたり、丘陵上の遺跡と同じように取り扱うことはできない。しかし、地形界などで隔てられながらも、近接した位置で各々の遺跡が展開する状況から、一定の時間枠において何等かの関連を想定する余地を残していることは指摘できよう。

なお、待兼山丘陵の地形・地質的特徴については「螢池北遺跡（宮の前遺跡）第12次調査報告書」⁽¹⁾および「宮の前遺跡・螢池東遺跡・螢池遺跡・螢池西遺跡 1992・1993年度発掘調査報告書」⁽²⁾において述べられているところであり、丘陵の詳細については前者の報告を参照していただきたい。

（2）歴史的環境

螢池西遺跡は弥生時代後期から奈良時代を中心に、旧石器時代から近世にいたる長い期間、断続的に営まれる。また、遺跡の内容は集落を主体とするが、時期毎に著しく変化する。このような当遺跡の歴史的環境を水系という軸を単位に復元した場合、一定の有効性は期待できるものの、その地理的環境を踏まえるならば、さらに周辺の地形や交通などの要件についても加味する必要がある。よって、ここでは遺跡の環境について、待兼山丘陵西部一帯を中心猪名川東岸域のうち箕面川以南から千里川以北の範囲を何がしかの影響を及ぼし得る空間として認識し、螢池西遺跡が成立する旧石器時代より記述していくことにする。

旧石器時代 螢池西遺跡において明確な旧石器時代の文化層は今なお確認されていないが、既往の調査ではその存在を想定し得る遺物の出土が報告されている。なかでも、第2次調査で出土した盤状剝片・石核やナイフ形石器⁽³⁾、また遺跡からはやや離れた位置ではあるが、(財)大阪府文化財調査研究センター（旧(財)大阪文化財センター）による螢池西遺跡（その1）調査区⁽⁴⁾などでは第12層（黒色粘土層下に堆積する青灰粘土層）下部を中心サヌカイトおよび結晶片岩・チャートを素材とする剝片11点が、同じくセンターによる（その3）調査区⁽⁵⁾では同層から国府型ナイフ、翼状剝片、チップ、石核など19点が直径5mの範囲から出土していることはその一例である。これら後2者の遺物については、遺物の出土層位にばらつきがあり近傍から流入した可能性がきわめて高いとされるが、（その3）調査区における遺物の内容については、製作工房の存在を推定しうる内容であると指摘されている。また、第2次調査出土上の盤状剝片石核についても河川出土遺物ではあるが、出土状況については河川との関係は考えにくいとされることから、それぞれの調査区の近辺に製作地の存在を考えることは可能であろう。ここで問題となるのは、これら製作地の存在が予想される位置である。螢池西遺跡（その1）・（その3）調査区ではその位置を低位段丘上に求めているが、第2次調査はその位置から低位段丘に製作地の所在を求めるることは考えにくく、製作地が低位段丘上の螢池遺跡とともに当遺跡内の複数か所に存在する可能性が想定できる。

上記にみる当遺跡とその周辺における旧石器の散布状況について、さらに周辺の諸遺跡と比較してみる。まず、当遺跡とは開析谷を隔てて北方の段丘上にある螢池北遺跡ではナイフ形石器2点が出土しているが、池市側にあたる宮の前遺跡でも数点の出土が確認されており、遺物の総数は当遺跡を上回るものと考えられる。また、南東の千里川北岸に位置する笠輪遺跡では国府型ナイフ形石器が1点、同じく千里川北岸ではあるが、ほぼ丘陵の反対側にあたる柴原遺跡では国府型ナイフ形石器1点が出土し、同遺跡北方に位置する内田遺跡でも小型の国府型ナイフ形石器1点が表採されている。このように当遺跡の周辺においても旧石器の出土はみられるが、遺物は製品に限られ石

1. 道跡の位置と環境



I-2図 螢池周辺の遺跡 (1:20,000)

核の出土例は当遺跡の他には知られていない。また、市域における旧石器の分布も当遺跡を中心とする兼山丘陵周辺部に多い傾向を見出しうることは、一時であるがこの地域が旧石器人にとって活動の場としての領域をなし、その中心が当遺跡一帯であった可能性が想定できよう。

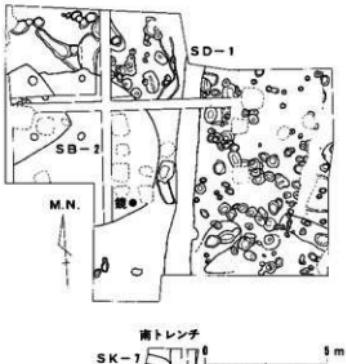
縄文時代 待兼山丘陵西方の低位段丘一帯では、当該期の所産となる遺構は確認されていない。ただ、宮の前遺跡北西に位置する住吉神社付近で石棒が採集され、また当調査区でもこの時期の所産となる可能性が考えられる石器が出土していることから、周辺に集落等が存在する可能性は残されている。一方、当遺跡から後背湿地を隔てて西方の大坂空港A遺跡

⁽⁶⁾ では勝坂式が、またB遺跡では元住吉山式の土器 ^{I-3図} 山ノ上遺跡第6次調査 (1:200) 片が採集されており⁽⁷⁾、当該期の集落が猪名川の自然堤防上で展開した可能性が考えられる。よって、当遺跡周辺における人々の活動領域は、猪名川流域にその中心を移した可能性も想定できるが、その様相については不明である。

なお、市域およびその周辺におけるこの時期の遺跡の多くは、箕面山系から派生する高位段丘および千里川・箕面川中流から上流域に分布する。千里川水系中上流部では野畠遺跡（中期末～後期前半）・野畠春日町遺跡（中期）・内田遺跡（後期）・柴原遺跡（晚期）が、また箕面山系から派生する段丘では箕面市瀬川遺跡・稻遺跡・池田市伊居太神社参道遺跡・元大阪教育大学門前遺跡・池田城下層遺跡・京中遺跡・豊島南遺跡・神田遺跡などが知られている⁽⁸⁾。これら諸遺跡における動向については多くの課題を残すが、少なくとも当該期の人々が猪名川および千里川、箕面川あるいはこれらに流入する小河川を軸に活動の場としていた可能性が想定できる。

弥生時代 市域における弥生時代前期の集落は、小曾根遺跡・勝部遺跡など平野部を中心に展開するが、勝部遺跡東方に位置する山ノ上遺跡第3・6次調査では縄文晩期の遺物を共伴する弥生時代前期の溝などが確認されており、この時期には豊中台地縁辺部まで人々の活動領域が拡大されている⁽⁹⁾。一方、待兼山丘陵西側周辺では大阪空港B遺跡で第I様式（中）の良好な遺物が採集されており⁽⁷⁾、勝部遺跡と同様に猪名川の自然堤防沿いにおいて集落が形成した可能性が考えられる。しかし、集落の領域は後背湿地に規制されたのか、豊中台地のように丘陵近辺まで拡大された形跡はなく、待兼山丘陵と丘陵から派生する段丘上に集落が本格的に展開するのは中期以降となる。

弥生時代中期になると、当遺跡北方の螢池北遺跡（宮の前遺跡）で集落が出現する。螢池北遺跡では、これまで中国自動車道・大阪中央環状線の建設に伴う発掘調査をはじめとする既往の調査により、多数の方形周溝墓と住居跡が発見されている。なお、遺跡および各調査の状況については、すでに『螢池北遺跡（宮の前遺跡）第12次調査』⁽¹⁰⁾などで紹介されているので詳細は割愛するが、主要な遺構の時期は第II様式から第IV様式の範囲にあり、待兼山丘陵周辺で本格的に展開する集落としては最も早い。また、遺跡から検出されている方形周溝墓群の規模は市域内でも有数であり、





I-4図 蛍池北遺跡第12次調査
Ito池北遺跡第12次調査では、遺物の様相や周囲の立地をみると、大阪空港A・B遺跡一帯が中核的な集落となる可能性が残されている^[6-7]。

一方、市中部の豊中台地では第IV様式末頃にピークを迎えた新免遺跡の周間に本町遺跡・岡町北遺跡・山ノ上遺跡などの枝ムラ群が出現し、後期以降もその状態が継続する。ただ、中核的な存在であった新免遺跡では後期以降衰退はじめるようである。また、平野部では後期以降これまで中核的な存在であった小曾根遺跡が衰退はじめ、やや遅れて終末期に服部遺跡・穂積遺跡・上津島遺跡などで多数の集落が出現する。このうち、穂積遺跡は銅鐸未製品や多数の収入土器にみられるような流通上の拠点的な集落として発展し、さらに南部の上津島一帯でもこのような動きが現れるなど、市南部では北部とは異なる新興の中核的集落が展開するようになる。

このように、第IV様式末頃からはじまる集落の変動は、各地域で若干の時期差はあるものの市域全体でおきた現象といえる。しかし、当地域においては中核的な集落がほぼ完全に解体するという、他地域とは異なる様相を呈し、以後小集落が点在するだけにとどまる可能性が想定でき、市中南部

当集落が当地域の拠点となる可能性が指摘されているが、これまで検出されている住居の数や地形から推定される集落領域の範囲は限られているため^[8]、この指摘については若干の疑義を残している。続く第Ⅲ様式の段階になると、当地域の周辺では待兼山遺跡が丘陵頂部付近に出現する。待兼山遺跡の実態はまだ明確にはされていないが、断面V字状の溝などが検出されていることから、高地性集落であったことは確実である^[9]。ただ、平野部では螢池北遺跡以外に大規模な集落の形成は確認できず、大阪空港建設時に外縁付紐式銅鐸が出土した中村銅鐸出土地点^[10]は当該期の集落を考える上で注意されるだけにとどまる。このように、第Ⅲ様式から第Ⅳ様式にかけての時期は、高地性集落である待兼山遺跡が出現し、当地域の社会情勢に変動があった可能性が考えられるが、今のところその状況については不明な部分が多い。

第Ⅳ様式末頃になると、螢池北遺跡が衰退はじめる一方で、当遺跡に集落が出現するなど集落の交代が見られはじめる。螢池北遺跡は第Ⅳ様式末頃に衰退はじめ、第V様式の造構はほとんどみられなくなり、ほぼこの時期に集落が解体するものと考えられる。また、池田市豊島南遺跡もこの時期断絶するようである。その一方、当遺跡はこの時期から集落の形成がはじまり、第V様式以降本格的に展開する。また、高地性集落と考えられる待兼山遺跡は継続しており、大阪空港A・B遺跡などでも集落が本格的に展開するようであるが、これらの遺跡の状況については明確ではないことから、当地域における中核的な集落の比定は困難である。ただ、遺物の様相や周囲の立地をみると、大阪空港A・B遺跡一帯が中核的な集落となる可能性が残されている^[6-7]。

に比べ早く衰退する点で注意される。

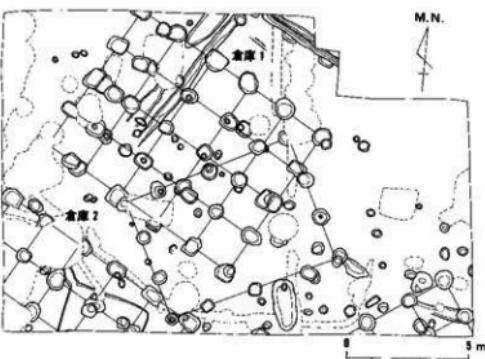
古墳時代 古墳時代前期初頭段階における当遺跡およびその周辺の集落の様相は、既不明瞭になるが、前期中頃から当遺跡でふたたび集落が展開するようになる。また、豊島南遺跡では布留式段階の焼失住居が検出され、大阪空港A遺跡においても採取された遺物から前期後半から中期にかけて集落の展開が予想される。これら各遺跡では集落の変遷が解明できるような調査例はなく、その状況についてはなお明確ではないが、終末期以降散漫ながら継続的に集落が展開していた可能性が想定できる。

一方、農中台地における集落の動向をみると、新免遺跡ではほぼ弥生時代終末期に集落の状況は不明瞭となるが、古墳時代前期段階の構造も散発的に見られることから、規模を縮小しつつも引き続き集落が営まれている。また、曾根遺跡でも集落の一部が確認されており、終末期以降も継続して集落が展開しているようであるが、不明瞭な部分が多い。このような状況は市内全域でも指摘できるところであるが、市南部では穂積遺跡が集落の位置を南へ移動しながら展開し、また猪名川河口付近の自然堤防上に立地する上津島遺跡や島山遺跡などが、この時期さらに発展の兆しをみせる点で注目される。

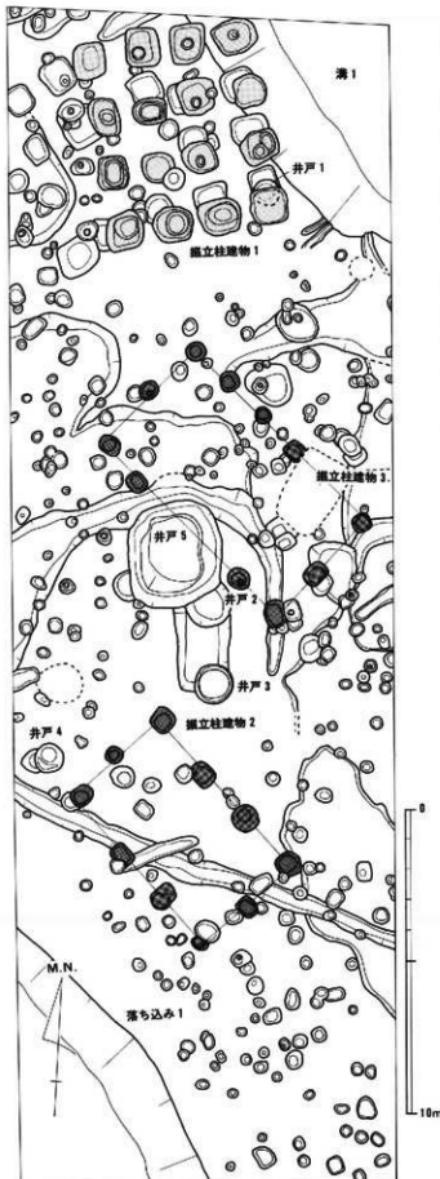
ところでこの時期、五月山山系に池田市娘三堂古墳・池田茶臼山古墳が、また待兼山丘陵に待兼山古墳・御神山古墳がつくられる。これらの前期古墳は箕面川左右岸の首長墳とされるが、いずれも単独で存在し、水系を単位とした首長墳の系譜は中期に継続しないことが指摘されている。

中期における集落も依然散漫な様相を呈しているが、この時期から当地域一帯に大きな動きがみられるようになる。当遺跡東方の低位段丘上に位置する螢池東遺跡では、少なくとも6棟以上からなる大型倉庫群が展開し、卓越した権力がこの地域に関与したことが明らかになりつつある⁽¹⁾⁻⁽⁴⁾。しかし、この時期の古墳を概観すると前期のような首長墳はみられず、大型倉庫群の出現とは対照的な様相をみせる。また、これら倉庫群は中期中頃には廃絶し、螢池東遺跡は作りつけのカマドを有する竪穴住居からなる集落へ転換するなど、当地域が流動的な様相をおびていた可能性が考えられる。その一方で、当遺跡では前期から引き続き集落が展開する可能性があり、段丘を境に集落の動態は異なる様相を呈するようである。

中期になると、螢池東遺跡における集落の展開に対応するかのように螢池北遺跡において小円墳群が東西2群にわかれ作られてはじめる。このほか、待兼山丘陵中央頂部付近では中期から後期にかけての埴輪片が出土しており、中小古墳からなる古墳群が存在した可能性が指摘されている⁽⁵⁾。ただ、いずれも首長墳としての規模は期待できず、この時期当地域では、中型以上の古墳の造営は見られない。



I-5図 螢池東遺跡第9次調査



後期になると、螢池東遺跡の集落が螢池遺跡の方へ南下する傾向をみせ、また箕輪遺跡などではこの時期の建物跡が、螢池北遺跡では小方形墳が作られる。しかし、当遺跡では集落の存在を想定する状況は見られなくなり、後期後半以降には密集土坑群が現れ、生産の場へ変わっていく。

その一方、豊中台地北部から千里川水系にかけての集落は、桜井谷一帯の須恵器生産の本格化とともに盛況をみせる。また、箕面川水系や五月山から派生する段丘では集落の状況こそ明確ではないものの、池田市鉢塚古墳・二子塚古墳などの中型古墳がつくられており、当地域とは著しく異なる状況が想定できそうである。そして、後期末には当遺跡をはじめに螢池東遺跡・南刀根山遺跡などでも密集土坑群がみられるようになる一方、螢池北遺跡で土葬墓と目される土坑が検出されており、墓地的な土地利用がなされた可能性が考えられる。

奈良時代 当遺跡では引き続き密集土坑群が作られるが、遺跡北部ではこの時期の溝が検出されていることから、一定の地割りを作り水田が開発されていた可能性も考えられる⁽¹⁴⁾。また、段丘上の螢池・螢池東遺跡では古墳時代以降の集落が引き続き展開し、螢池北遺跡でも新たな集落が出現する。なお、螢池・螢池東遺跡が立地する螢池中町一帯の旧地名は麻田とよばれ、「麻田連」(『新撰姓氏録』卷二十四 右京諸藩下)との関連が指摘されている⁽¹⁵⁾。

螢池・螢池東・螢池北遺跡の集落は複数の掘立柱建物からなる建物群が丘陵全体に分散して展開し、集落の景観

← I-6図 上津島遺跡第5次調査

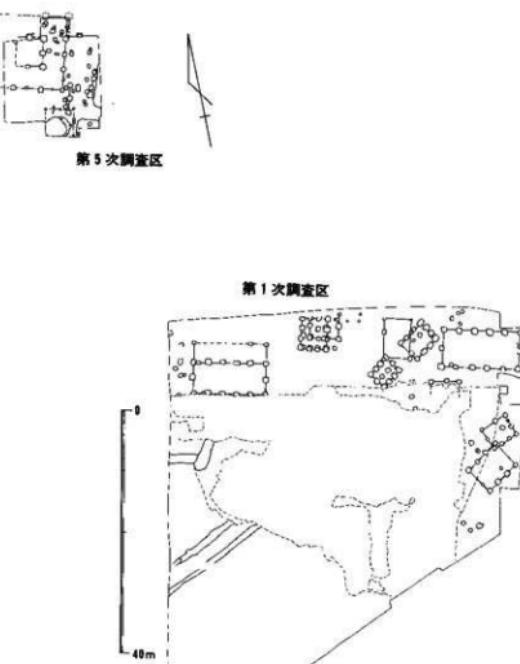
は比較的疎塊村に近い様相を呈する。このうち、螢池北遺跡の集落については、かつて官衙との関連が指摘されたが、近年の官衙関連遺跡の調査・研究をふまえるならば、螢池北遺跡の集落を構成する建物群の規模は比較的均質であり、傑出した規模でしかも計画的に配置されたような建物群はみられないことから、官衙に関連する施設の存在は想定しにくく、一般的な集落と見なしえる。

一方、市域の様相をみると、桜井谷窯跡群では縄丘窯跡と2-19-2号窯の操業が知られるだけで須恵器生産は衰退に向かい、また豊中台地における集落は継続するものの、古墳時代後期にみる盛況ぶりは見られなくなる。南部では、猪名川河口沿いに立地する扇田

遺跡で破片ながら三彩小壺が出土し、上津島遺跡（第6次調査）では難波宮6013形式の重圓文軒丸瓦が柱穴内から出土した大型倉庫⁽¹⁰⁾が検出されており、一帯は猪名川河口沿いの港湾をひかえる特異な集落として繁栄したようである。

平安時代の様相 当遺跡における密集土坑群は8世紀中頃には作られなくなり、平安前期の段階では相当の範囲が耕地化したものと考えられるが、9世紀後半には奈良時代に掘削された溝が埋没しており耕地の一部は放棄されていた可能性がある。また、螢池北・螢池東・螢池遺跡では引き続き集落が営まれ、9世紀後半頃になると螢池北遺跡で板塀に囲まれた建物群が出現する⁽¹¹⁾が、この時期から集落における関連施設の数は減少はじめ、10世紀頃には三遺跡の集落は解体に向かうものと考えられる。

このような一般集落の動向は当地域に限らず、猪名川河口沿いの一帯を除く市域全般でも認められる。一方、文献では撰津職が停止されてから、大規模開発に関わる記事が散見されるようになる⁽¹²⁾とともに、曾根遺跡では前段階の建物群とは明確に異なる官衙または郷規模の領主居館に推定される大型建物群が出現する。



I-7図 曾根遺跡大型建物群

1. 遺跡の位置と環境

10世紀後半～11世紀前半にかけては、低位段丘上の螢池北・螢池東・螢池遺跡では集落はなくなり、かわって当遺跡において建物群が展開する。しかし、当遺跡における建物群は一群にとどまり、集落としてのまとまりは想定しにくい。また建物群自体も11世紀後半以後には継続せず、流動的な様相を示す。

一方、市域全体をみると、まとまりのある集落は猪名川河口一帯の上津島遺跡などや吹田街道と能勢街道が交差する穗積遺跡（第4次調査）など特殊な様相を呈する事例に限定される。このほか、平野部・丘陵部にかかわらず、これ以前には明確な集落が見られなかった複数の遺跡で、若干の建物群や集落関連構造が確認されるだけにとどまる。このように9世紀後半以降にはじまる古代集落の解体といいまって、このころから明確な集落領域を形成しない建物群が市域全般に出現する動きが現れてくる。9世紀後半以降は班田制の再編成など律令的公民支配に変化が現れてくる時期だけに、このような在地の動きは中世集落の形成過程との関連から注目されよう。なお、この建物群を最後に、当遺跡における集落関連構造はみられなくなる。

平安時代後期～鎌倉時代 11世紀後半になると、ふたたび市域各地で明確な集落の形成がはじまる。当該地域は遅くとも12世紀に立券されていた豊島荘の範囲に含まれるものと考えられるが、この段階の集落は低位段丘上の螢池遺跡・螢池東遺跡で展開し、当遺跡内に集落が展開した形跡は見られない。平野部では摂関家領垂水西牧小曾根村および穂積村に比定される小曾根遺跡・穂積遺跡、摂關家領桜橋（東）荘の一部になる可能性が考えられる上津島遺跡・上津島南遺跡・丘陵部では六草御稻田または六草郷との関連も想定される原田遺跡・曾根遺跡・概要について明確ではない止止岐荘との関連が想定される山ノ上遺跡など市中部から南部を中心に集落がみられるが、当地域では遅れて12世紀後半頃によく螢池東遺跡から螢池遺跡にかけて複数の建物群が展開するようになる⁽¹²⁾⁻⁽¹³⁾。しかし、螢池東遺跡・螢池遺跡では、12世紀以降の遺構が極めて少なく、それ以後の集落の展開については明確ではないが、集落の展開に関する状況は市中南部とは大きく異なることが予想される。

室町時代 当遺跡では引き続き耕地となっているが、現水路と並行する状況でこの時期の水路が検出されており、ほぼこの時期に現在も機能する水路の系統が完成したものと考えられる。一方、螢池東遺跡では麻山藩陣屋跡第5次調査で14世紀後半から15世紀代にかけての池状遺構と柱穴を確認しただけで、この時期の集落の状況については明確ではない⁽¹⁴⁾。ただ、天正七（1579）年の『春日社領垂水西牧桜井郷内帳帳』⁽¹⁵⁾に現れる「麻田方」については地名から当地域との関わりが考えられ、また元和元（1615）年に青木氏が祝正治氏の土地を譲り受けて麻田藩陣屋が成立していることから、遅くとも16世紀後半までは国人か、またはその被官層となりうる小領主や富農層らの屋敷地が存在していたことは確実であろう。

江戸時代以降 文禄検地により戦国時代まで継続した垂水西牧も解体し、以後幕藩体制のもとで市域一帯は天領等に分割され、入り組み支配が成立する。当地域もその例外にはならず、以後明治政府による廃藩置県の施行まで麻田藩1万石の知行地となる。麻田藩はその陣屋を螢池中町に構えるが、その遺構については『麻田藩陣屋ノ岡』（明治年製）⁽¹⁶⁾からうかがわれる。また、麻山藩陣屋跡第4・5次調査では沼状遺構の埋め立てや整地層の存在が確認されており、今後の調査の進展で、絵図の屋敷区画などが検出される可能性もあり、その成果に期待したい。

なお、当遺跡一帯は中世後期以降、近世を通じて大きな変動もなく耕地として利用されるが、第

2次大戦以降急激に大阪空港周辺の商工業地化や阪神高速道路の建設また宅地化に伴う開発が進み水田景観は失われ、現在に到ることになる。

【参考文献】

- (1) 豊中市教育委員会『蛍池北遺跡（宮の前遺跡）－第12次調査報告書－』1995
- (2) (財) 大阪文化財センター『宮の前遺跡・蛍池東遺跡・蛍池遺跡・蛍池西遺跡 1992・1993年度発掘調査報告書』1994
- (3) 松藤 和人「旧石器時代の石材移動をめぐって—国府文化期のサヌカイトを中心に—」『同志社大学考古学シリーズⅡ 考古学と移住・移動』1985
- (4) (財) 大阪文化財センター『第VI章 蛍池西遺跡（1）』『宮の前遺跡・蛍池東遺跡・蛍池遺跡・蛍池西遺跡 1992・1993年度発掘調査報告書』1994
- (5) (財) 大阪文化財調査研究センター『第Ⅳ章 蛍池西遺跡（その2～4）』『宮の前遺跡・蛍池東遺跡・麻田藩陣屋跡・蛍池遺跡・蛍池南地区・蛍池西遺跡 1993～1996年度発掘調査報告書－大阪モノレール蛍池車庫・西線に伴う発掘調査－』1997
- (6) 佐原 真「第二章 考古学からみた伊丹 第二節 繩文時代」『伊丹市史』第1巻 伊丹市 1971
佐原 真・高井第三郎・横田義章「2、大阪空港A遺跡」『伊丹市史』第4巻史料編1 伊丹市 1968
- (7) 佐原 真「第二章 考古学からみた伊丹 第二節 繩文時代」『伊丹市史』第1巻 伊丹市 1971
佐原 真・高井第三郎・横田義章「1、大阪空港B遺跡」『伊丹市史』第4巻史料編1 伊丹市 1968
- (8) 豊中市教育委員会『山ノ上遺跡第6次調査概要報告』『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 1985年度』1986
- (9) 出上雅則「II、宮の前遺跡発掘調査」・「IV、まとめにかえて」『池田市埋蔵文化財発掘調査概要 1988年度』池田市教育委員会 1989
- (10) 佐原 真「第二章 考古学からみた伊丹 第三節 弥生時代」『伊丹市史』第1巻 伊丹市 1971
佐原 真・高井第三郎・横田義章「4、中村出土の銅鏡」『伊丹市史』第4巻史料編1 伊丹市 1968
- (11) (財) 大阪文化財センター『IV 蛍池東遺跡（1・2）』『宮の前遺跡・蛍池東遺跡・蛍池遺跡・蛍池西遺跡 1992・1993年度発掘調査報告書』1994
- (12) 豊中市教育委員会『蛍池東遺跡第9次調査の概要』『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要－阪神淡路大震災復旧・復興事業に伴う発掘調査－平成7（1995）年度』1997
- (13) 大阪大学埋蔵文化財調査委員会『待兼山遺跡II』1988
- (14) 豊中市教育委員会『蛍ヶ池西遺跡』1988
- (15) 豊中市『豊中市域を中心とする古代史料（上）』1991
- (16) 豊中市教育委員会『9715 上津島遺跡第6次』『豊中市埋蔵文化財年報VOL.6』1999
- (17) 豊中市教育委員会・蛍池北遺跡調査団『蛍池北第9次調査－豊中市蛍池北町2丁目所在－現地説明会資料』1989
- (18) 『類聚四國』巻第十三 延暦二十四（805）年十一月乙酉および『日本三代実録』巻第五 貞觀三（861）年二月三日条（豊中市『豊中市域を中心とする古代史料（上）』1991に所収）
- (19) 豊中市教育委員会『蛍池東遺跡第7次調査』『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 1993（平成5）年度』1994
- (20) 豊中市教育委員会『麻田藩陣屋跡第5次調査の概要』『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 1992（平成4）年度』1993年
- (21) 末中哲夫他『豊中市史』史料編二、豊中郷土文化研究会 1961に所収
- (22) 小林 茂他『豊中市史』第二巻 豊中市 1959に所収

2.調査の経緯と経過

(1) 調査の経緯

池田市・箕面市・豊能町・能勢町などの阪神間北部地域は高度成長期以降も大阪都市圏のベットタウンとして急速に発展し、相次ぐ大規模住宅団地の開発に伴い将来の人口は1981年現在の約1.8倍程度に増加することが予想された。また、この地域における南北方向の幹線道路は少なく、国道173・176号線の交通量の増加は著しく交通混雑は年々ひどくなっている現状から、阪神間北部地域と大阪都心部を直結する交通施設の整備が必要とされるようになった。

このような状況をうけて、昭和56年（1981年）阪神高速道路大阪池田線を池田市木部まで延伸する都市計画決定がされたが、計画では農中市内における路線は螢池西遺跡を縦断することとなり、橋脚の基礎および地下埋設物の移設などにより遺構が破壊されることが明らかになった。

昭和61年（1986年）、螢池区間の工事着手に先立ち大阪府教育委員会をはじめ阪神高速道路公団と農中市教育委員会により埋蔵文化財の取扱いに関する協議が行われ、状況を確認するため試掘調査を実施した。試掘調査の結果、遺物包含層などが確認され、同年12月より順次、基礎工事および地下埋設物移設工事の着手に先立ち発掘調査を行うことになった。

なお、発掘調査については農中市教育委員会と阪神高速道路公団の協議の結果、阪神高速道路公団の依頼を受けて螢池西遺跡調査団（団長 富田 好久 玄野 強）が編成され、農中市教育委員会の指導のもと同調査団が発掘調査および出土遺物の整理を行い、本報告書の作成にあたった。

(2) 調査の経過

以上の経緯のもと、土地買収が完了した工区について地下埋設物の移設および橋脚建設に伴い、T-1表にしめすとおり順次螢池西遺跡調査団が発掘調査を行うことになった。

まず、第4次調査は昭和61年（1986年）12月15日から昭和63年（1988年）3月31日をその期間とし、1P-A18工区および地下埋設部、1P-B17~18工区および地下埋設部、1P-B2~8地下埋設部、同じく1P-B13~15工区および地下埋設部を対象に調査を行なった。第5次調査は、昭和63年（1988年）3月17日から平成元年（1989年）3月31日を調査期間とし、1P-A2~8工区のうち地下埋設部分を行うことになったが、あわせて行われた試掘調査の結果、1P-B2~6工区も加えて調査を行った。なお、第5次調査まで螢池西遺跡調査団の団長であった富山好久氏にかわり、第6次調査からは玄野強氏が団長を勤めることになった。第6次調査は平成元年（1989年）12月20日から平成2年（1990年）3月31日までを調査期間として、1P-A2~6工区を対象に、第7次調査は平成2年（1990年）11月19日から平成3年（1991年）4月30日を調査期間とし、1P-A10~12地下埋設部、1P-A16・17地下埋設部および1P-20工区を対象に、第8次調査は平成3年（1991年）9月5日から12月27日を調査期間とし、1P-A10~12・15-1~17工区を対象に調査を行った。第9次調査は平成4年（1992年）5月20日から平成5年（1993年）4月30日を調査期間として1P-A9地下埋設部、1P-A13~15地下埋設部および1P-B9~12地下埋設部、42号画渠を対象に行ったが、当初予定された橋脚部分については次年度へ延期された。第12次調査は平成5年（1993年）6月15日から平成6年（1994年）7月31日を調査期間とし、1P-A7~

9・13~15および1P-B 7~12工区を対象に調査を行い、足掛け8年にわたる発掘調査は終了した。

また、出土遺物の整理については、第4~5次調査の出土遺物を対象に、注記から遺物実測までの整理工程を平成元年(1989年)12月1日から平成3年(1991年)3月31日の期間で行い、残る遺物については平成6年(1994年)10月1日から平成8年(1996年)11月30日の期間で遺物実測までの整理工程を行い、その後平成8年(1996年)8月1日から平成10年(1998年)3月31日の期間で報告書作成に関わるすべての整理作業を実施した。

以上、阪神高速道路大阪池田線池田延伸工事にかかる発掘調査は、第4次調査にはじまり報告書の刊行まで、足掛け12年の期間を要して全ての作業が完了した。

I-1表 調査工程表

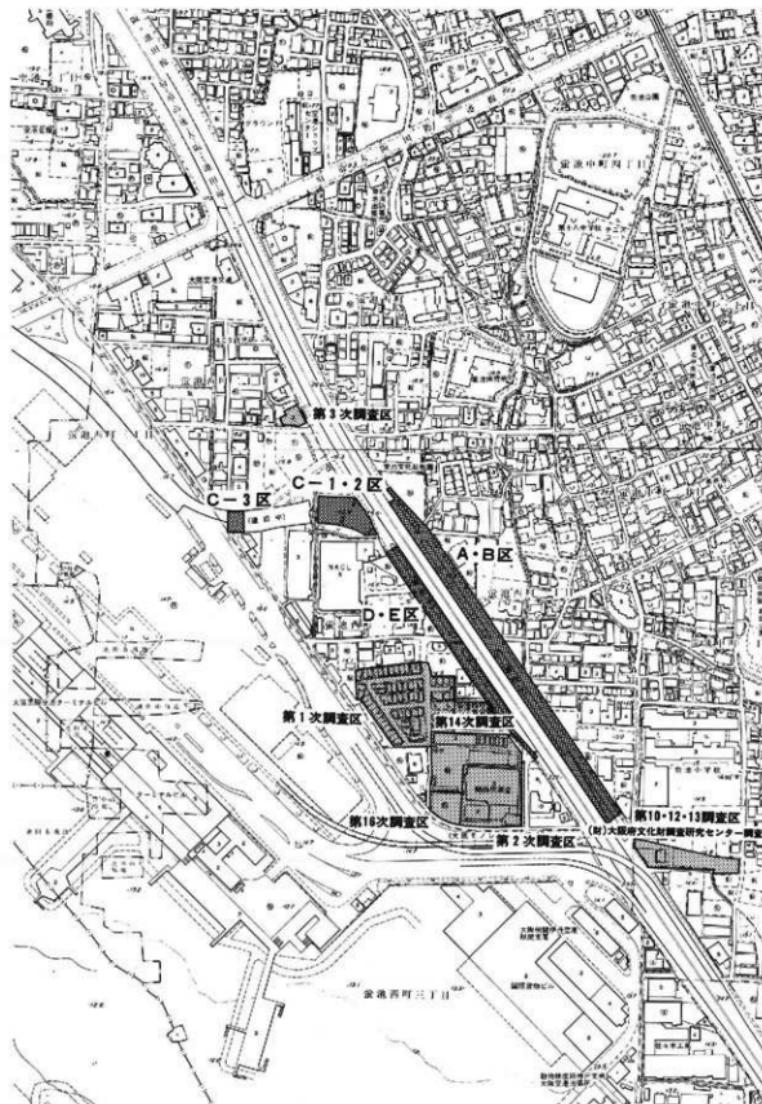
発掘調査

事業名	次数	調査期間	対象工区	調査団長	調査委員	監修担当者	整理担当者
(その1)	4次	1988年2月15日 ~1988年3月31日	1P-21-22-23および地下施設部 1P-B 2~8 地下施設部	畠田 好久 (大阪青山短期大学専任講師)	支野 強(奈良県立橿原考古学研究室) 瀬江円也(大阪府教育委員会) 柳本照男(豊中市教育委員会)	柳本照男 森 幸三	
(その2)	5次	1988年3月18日 ~1988年3月31日	1P-A 2~8 地下施設部 1P-B 2~6	高田 好久 (大阪青山短期大学専任講師)	支野 強(奈良県立橿原考古学研究室) 中井寅吉(大阪府教育委員会) 柳本照男(豊中市教育委員会)	森 幸三	
(その3)	6次	1989年12月20日 ~1990年3月31日	1P-A 2~6	支野 強 (奈良県立橿原考古学研究室)	瀬川 健(大阪府教育委員会) 柳本照男(豊中市教育委員会)	柳本照男	
(その4)	7次	1990年11月19日 ~1991年1月31日	1P-A 10~12 地下施設部 1P-16~17 地下施設部 1P-20	支野 強 (奈良県立橿原考古学研究室)	化久間貴士(大阪府教育委員会) 柳本照男(豊中市教育委員会)	柳本照男 瀬平ゆうこ	
(その5)	8次	1991年9月5日 ~1991年12月25日	1P-A 10~12 1P-A 15~1~17	支野 強 (奈良県立橿原考古学研究室)	柳本照男(豊中市教育委員会)	橋田正徳 瀬平ゆうこ	
(その6)	9次	1992年5月20日 ~1993年4月30日	1P-A 9 地下施設部 1P-A 13~15 地下施設部 1P-B 9~12 地下施設部 42号施設	支野 強 (奈良県立橿原考古学研究室)	柳本照男(豊中市教育委員会)	橋田正徳 北条みうこ	
(その7)	12次	1993年6月15日 ~1994年7月31日	1P-A 7~9 1P-A 13~15 1P-B 7~12	支野 強 (奈良県立橿原考古学研究室)	柳本照男(豊中市教育委員会)	橋田正徳 木村 淳	

出土遺物整理

事業名	期間	調査団長	調査委員	監修担当者	対象
発掘調査出土品整理 (その1)	1989年12月1日 ~1991年3月31日	支野 強	柳本照男	瀬平ゆうこ	第4~5次調査出土品の 注記から遺物実測の作業
淀池西邊跡出土品整理 (その1)	1994年10月1日 ~1996年11月30日	支野 強	柳本照男	橋田正徳 木村 淳	第6~9・11次調査出土品の 注記から遺物実測の作業
淀池西邊跡出土品整理 (その2)	1996年8月1日 ~1998年3月31日	支野 強	柳本照男	橋田正徳 浅田尚子	全調査にわたる 報告書製作作業

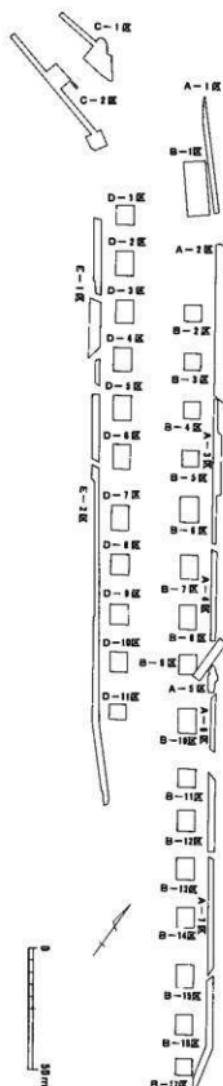
2. 調査の経緯と経過



I-8図 調査区の位置 (1:5,000)

I-2表 調査区名称一覧

事業名	次数	対象工区	調査時地区名	本書地区名
(その1)	4次	1P-B2~8地下埋設	B-1・B-2	E-2区
(その1)	4次	1P-B13~14地下埋設・1P-B13~14	C-1トレンチ C-1・2グリット	C-2区
(その1)	4次	1P-A18地下埋設 ・1P-A18	C-2トレンチ C-3グリット	C-1区
(その2)	5次	1P-A2~8地下埋設	Aライン	A-7区
(その2)	5次	1P-B2	Aグリット	D-7区
(その2)	5次	1P-B3	Bグリット	D-8区
(その2)	5次	1P-B4	Cグリット	D-9区
(その2)	5次	1P-B5	Dグリット	D-10区
(その2)	5次	1P-B6	Eグリット	D-11区
(その3)	6次	1P-A2	1グリット	B-13区
(その3)	6次	1P-A3	2グリット	B-14区
(その3)	6次	1P-A4	3グリット	B-15区
(その3)	6次	1P-A5	4グリット	B-16区
(その3)	6次	1P-A6	5グリット	B-17区
(その4)	7次	1P-A15~16地下埋設	1区	A-2区
(その4)	7次	1P-A11~12地下埋設	2区	A-4区
(その4)	7次	1P-A17地下埋設	3区	A-1区
(その4)	7次	1P-20	4区	C-3区
(その5)	8次	1P-A11	1P-A11	B-8区
(その5)	8次	1P-A12	1P-A12	B-7区
(その5)	8次	1P-A15-1	1P-A15-1	B-3区
(その5)	8次	1P-A16	1P-A16	B-2区
(その5)	8次	1P-A17	1P-A17	B-1区
(その6)	9次	1P-B7~12地下埋設	A区	E-1区
(その6)	9次	1P-A13~14地下埋設	B区	A-3区
(その6)	9次	1P-A9地下埋設	C区	A-6区
(その6)	9次	42号画廊	D区	A-5区
(その7)	11次	1P-A10	1P-A10	B-9区
(その7)	11次	1P-A13	1P-A13	B-6区
(その7)	11次	1P-A14	1P-A14	B-5区
(その7)	11次	1P-A15	1P-A15	B-4区
(その7)	11次	1P-A7	1P-A7	B-12区
(その7)	11次	1P-A8	1P-A8	B-11区
(その7)	11次	1P-A9	1P-A9	B-10区
(その7)	11次	1P-B10	1P-B10	D-3区
(その7)	11次	1P-B11	1P-B11	D-2区
(その7)	11次	1P-B12	1P-B12	D-1区
(その7)	11次	1P-B7	1P-B7	D-6区
(その7)	11次	1P-B8	1P-B8	D-5区
(その7)	11次	1P-B9	1P-B9	D-4区



I-9図 調査区位置図

(1:2,000)
(※C-3区を除く調査区の位置)

3.周辺の調査

(1) 第1次調査の概要

第1次調査は農中市螢池西町2丁目6番一帯にあたり、開発工事に伴って実施した。この遺跡は今回の工事に伴って初めて発見された遺跡であり、遺跡の状況をまず把握する必要があることから開発範囲内に12カ所の試掘坑を設け、調査を行った。

調査期間は1978年11月6日～12月5日である。

以下、主要な試掘坑で確認されたことについて記述するが、その前に基本的な層序について若干触れておく。

a. 基本層序

基本的な層序は、旧水田面の上部に存在する盛り土（厚さ0.8～0.9m）を除去してみれば、大きく上層、中層、下層の3層に大別される。上層は水田耕作土の第1層、その下部は水田耕作に伴う客土（床土）の第2層。中層は灰色を基調にした細砂層で上下の2層に分層され、中世から近世の遺物を僅かに含む。下層は黒褐色を基調にした細砂～微粒砂層でこれも上下2層に分層される。上層は砂粒を多く含み、色調は下層に比べ淡く弥生時代終末期の土器と須恵器を少量包含する（但し

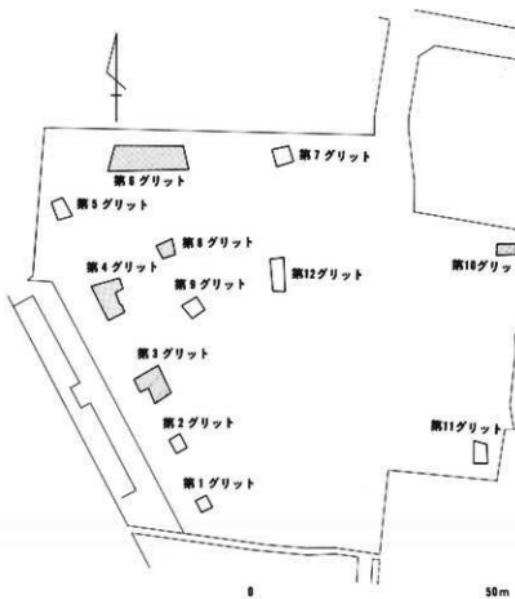
この層はすべての試掘坑には存在しない）。下層は弥生時代終末期の遺物包含層である。

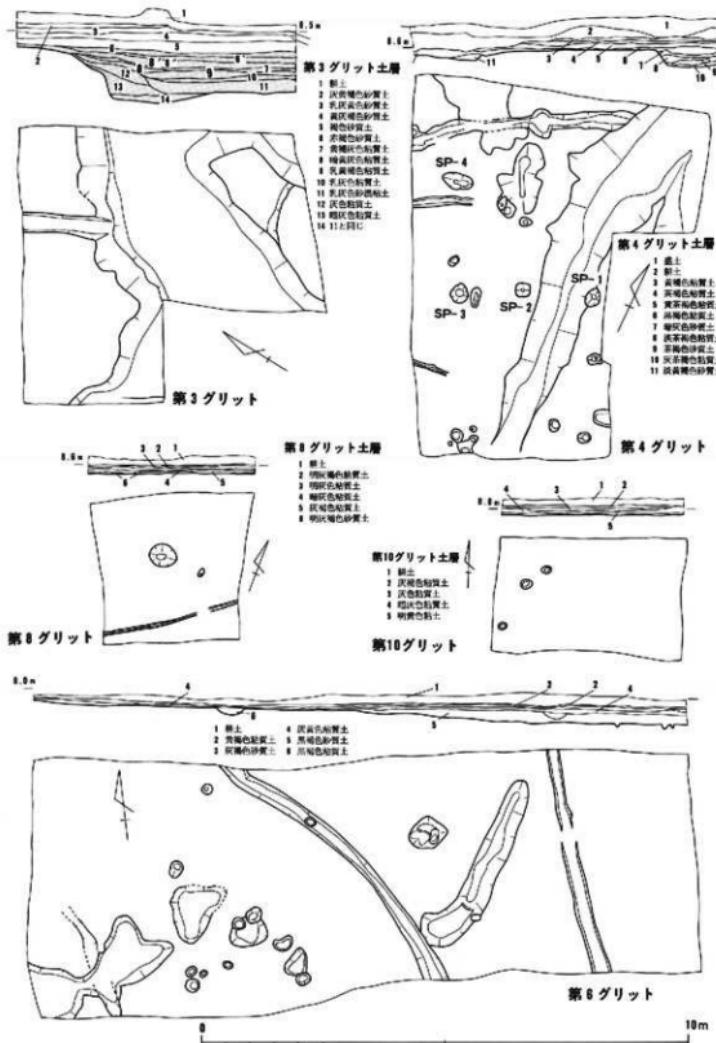
層厚は東側の10・11トレンチでは遺物包含層もなく約30cmと浅く、西側では北の各トレンチが40cm、南の各トレンチが70～80cmと深くなる。地形は北東部が高く、南西部が低い状況を示している。したがって堆積土の層厚もこの地形的な影響を反映している。

b. 検出した遺構

第1・2グリッド

調査区の南西部に設定した試掘坑である。堆積土は基本的に同じである。第1グリッドでは遺物包含層が北東部隅に落ち込み状に検出されているが、





I-11図 調査区平面・断面図 (1:100)

3.周辺の調査

第2グリッドでは水平堆積である。遺構は第1グリッドの落ち込み状に検出されたもの以外では確認されていない。遺物包含層は弥生時代終末期と推定される。

第3グリッド（I-11図） 調査区の西側中央部に設定したものである。ここでは図に示すように自然流路とみられる部分を検出した。方向は北東から南西に流れを持つと推定されるが、南側では中州状の高まりが存在することから分岐する部分と推定される。規模は北側の支流では幅約3m、深さ約1mである。遺物はこの流路の埋没に伴って上層部から出土している。出土する遺物はI-13図に示すように弥生時代終末期と考えられるものである。

第4グリッド 第3グリッドの北側20m付近に位置する。検出した遺構面は2面あり、遺物包含層の上面と下層上面である。上層で検出された遺構は溝と、その溝に一部切られた柱穴等である。

溝は北から南に流れを持ち、幅1~1.5m、深さ0.25m程度で出土遺物から7世紀代と推定される。

柱穴は20基近く検出されたが、径が小さく深さも浅いものが大半を占めている。その中で径が30cm内外で深さが35cm程度のものが数基存在する。それらがSP-1からSP-4であり、縦柱の建物の一部と推定される。東西の柱間2.7m、南北の柱間2.9mである。南北軸は約N-25°-Wである。この建物は7世紀代の溝によって切られており、下層の遺物包含層が弥生時代終末期であることから、その間の時期でおそらくは後述する第6グリッドの調査結果などから古墳時代後半と推定される。

遺物包含層の下層で検出した遺構は東西方向の小溝と不定形な落ち込みないしは窪みである。これらはその状況から人為的な遺構とは認定しにくく、遺物も出土していない。

第5グリッド 調査範囲の北西端、第4グリッドの北部に位置する。遺構と覚しきものは第3層上面で鰐溝等とみられる小溝と不定形な深い凹みを検出したのみである。その下層には包含層は存在しない。

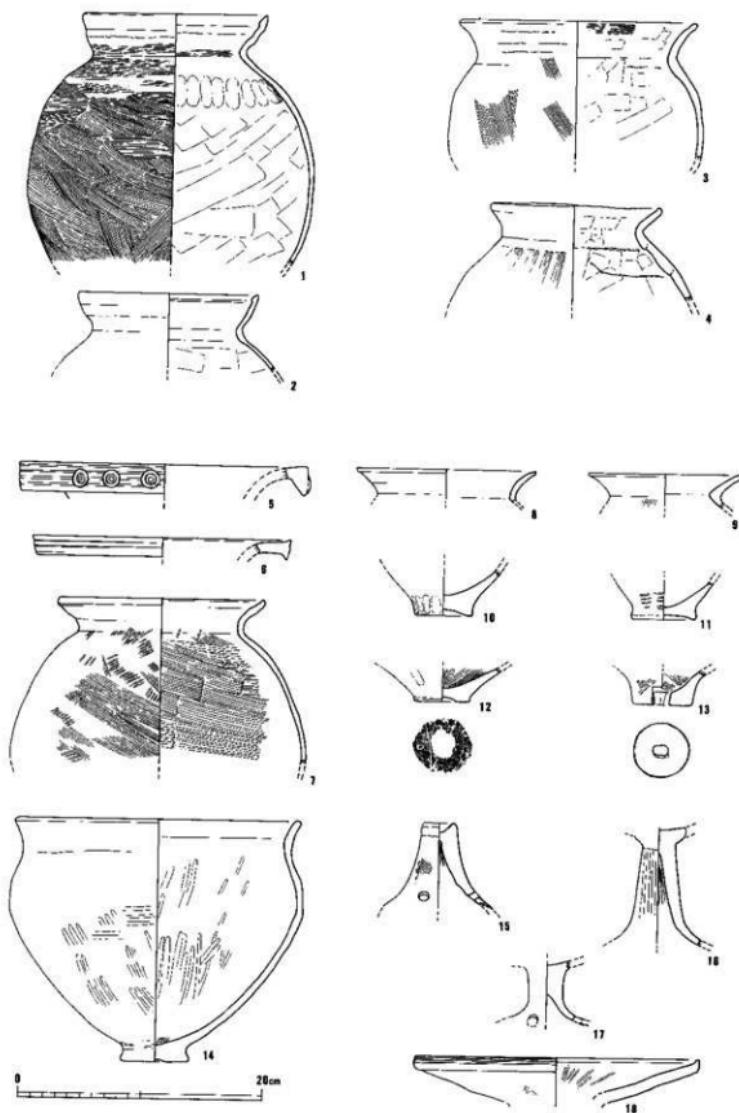
第6グリッド（I-11図） 第5グリッドの東側で調査範囲の北端に位置する。当初2.5×3.5mのグリッドを設定したが明確な遺構を検出したため、東西に拡張した。検出した遺構は小溝、溝状の土坑、円形状の土坑、柱穴等である。これらの遺構は包含層が東端から中央部付近までしか存在しないため、東側では包含層の上部で、西側では最終面で検出したものである。弥生包含層は断面観察から凹地に堆積したものと判断される。したがって下層から遺構は検出されていない。

これらの遺構のうち円形状の土坑は溝1と溝状土坑に挟まれた箇所から検出したものである。規模は直徑80cm弱、深さは30cmで内部からI-12図に示す布留式新段階の甌が土圧で押し潰された状態で出土している。この土坑の時期から、他の遺構も同じ時期の可能性が高いと判断される。

第7グリッド 弥生包含層は存在するものの遺構は検出されていない。

第8グリッド（I-11図） 弥生包含層は存在しないが、最終面で小溝らしきものと柱穴が検出されている。柱穴は直径約50cm、深さは15cm程度残存していた。南壁面に一辺50cm程度の方形プランの上坑あるいは柱穴と思われるものが存在するが深さは10cm程と浅く現状からは明確な遺構かどうかは判断できない。小溝らしきものは幅5~7cm、深さ3~4cm程で北西から南西方向に走っている。螢池西遺跡第4次調査（本報告A-7区）で検出されている轍状のものに類似し、人為的な遺構とは見なし難い。他に小穴が多数存在するが後世の杭の痕跡を見られる。

第9グリッド 包含層は存在するものの遺構は確認されていない。ただ上部包含層からは須恵器片が出土している。



I-12図 第6グリッド出土遺物 (1:4)

3.周辺の調査

第10・11グリッド (I-11図) 包含層は存在しない。遺構は第10グリッドで径15cm内外の小穴が若干存在する程度である。

第12グリッド 第9層上面で溝と柱穴を検出した。溝は幅1.6m、深さ0.35mで南東から北西に流れを持ち、埋没時に弥生終末期の土器がその上部を覆っている。また南西隅では径50cm、深さ10cmの柱穴が1基確認されているが時期は明確にできない。

上述した溝とは直行ないしは合流するとみられる別の溝を北壁西端部で検出している。規模、時期とも同様と見られ、おそらくは第3グリッドで検出した溝に繋がるものと想定される。

c. 出土遺物

遺構との関連で図示できる資料は、第6グリッド円形状土坑、及びその下層の溜り状弥生終末期包含層、第3・12グリッド溝埋没時期の資料である。

第6グリッド円形状土坑資料 I-12図1~4は布留式壺であるが、口縁端部の内面肥厚が残存しているもの(1・2)とないもの(3・4)がある。体部形態は長胴化を示し、調整は外面が粗いハケ、内面はケズリである。3・4は粗製な作りである。これらは布留式新段階の特徴を有している。

第3 (I-13図)・第6 (I-12図5~18)・第12グリッド資料 (I-14図) これらは同時期の様相を示しているとみられることから包括して報告する。壺類は二重口縁壺、広口壺、短頸壺などがみられる。二重口縁壺や広口壺の中には口縁外側に雜な波状文や擬凹線文+貼り付け竹管文等の加飾されたものがある。またI-14図4のような口縁部が垂直気味に立ち上がる複合口縁もある。なお底部は縮小傾向である。堀は口縁端部に垂直な面を持つものと持たないものがあり、叩き原体の幅も太いものと細いものがある。I-13図12は右下がりの太いタタキ、内面は斜め上方に搔き上げるような粗いハケ調整で粗製なものである。底部は縮小し、平底を僅かに残す尖り底気味のものが存在する。鉢においてはI-12図14のような大型で器高の高いものもある。高杯では杯部の有段上方が大きく外反し、屈折が弱いものである。杯部の形態では椀型のものも存在する。脚部においては脚柱が短い傾向のものでハの字形に直線的に聞くものが日につく。また短脚のものもある。他の器種としては瓶や器台等が存在するがI-12図18のような受け部が直線的に大きく聞く特異な器台もある。以上のような土器様相を概観すると、河内庄内窯は存在しないものの底部の縮小化、高杯などから弥生終末期の様相を有していると見ることができる。したがって庄内古段階(1式)の資料として位置付けておく。

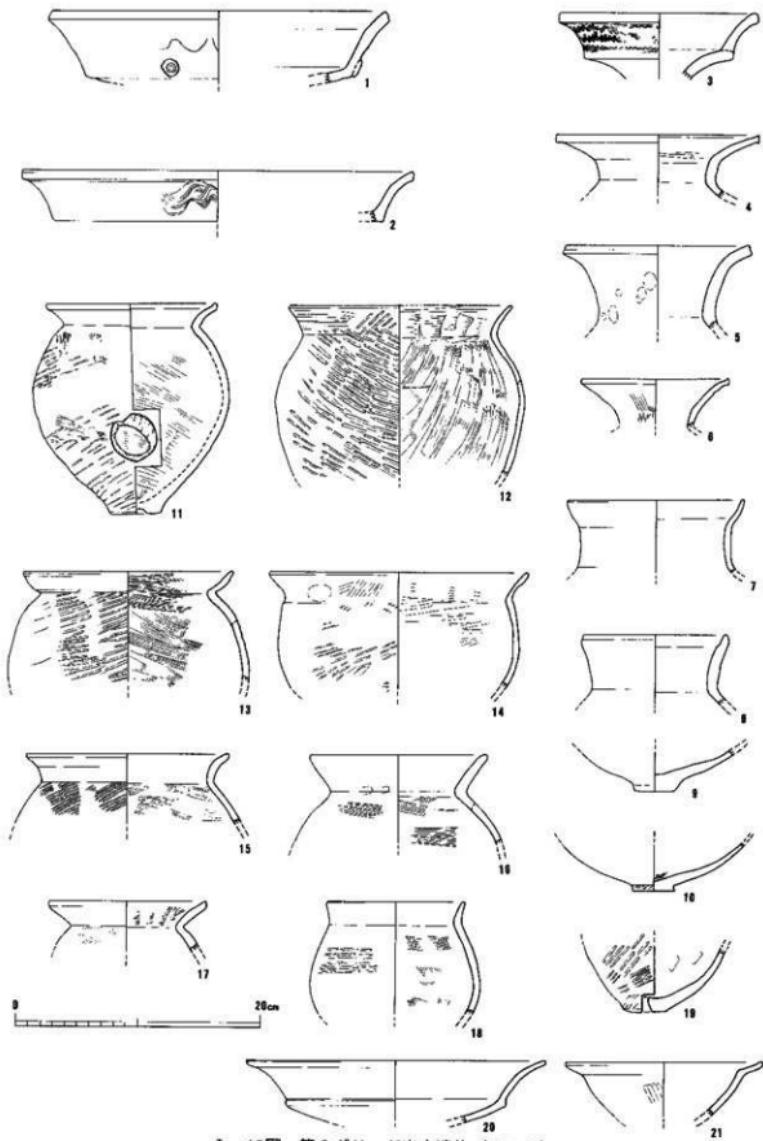
d. 小結

以上検出した遺構から各時期を概観してまとめに代えることとする。

弥生時代終末期以前 第3・12グリッドで検出された自然流路が若干認められる程度である。但し埋没時には弥生終末期の土器に覆われていることから北側に隣接する地域にはその時期の集落の存在が想定される。

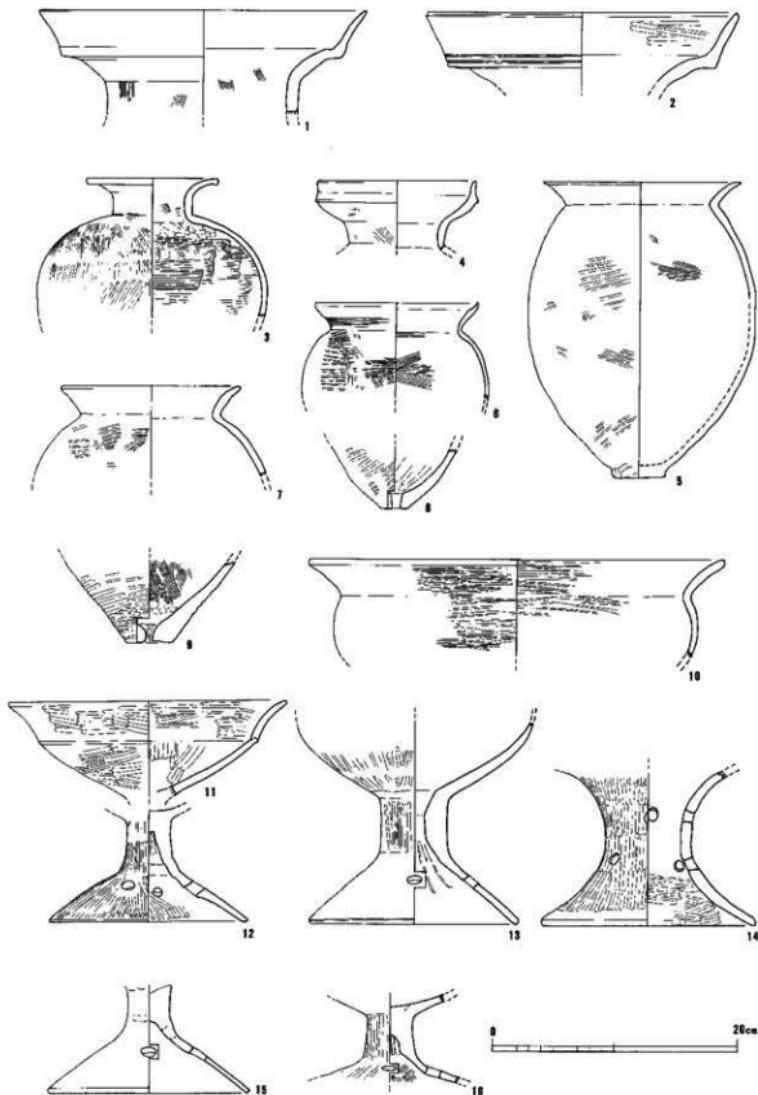
古墳時代中期から後期 第4・6グリッドの成果からこの時期の集落の存在が想定される。但し検出状況から中心部ではなく南端部の可能性が高い。

歴史時代以降 7世紀代と推定される遺構は第4グリッドから検出された溝だけであり、それ以降の明確な遺構も存在しない。この溝も人為的な遺構とは認めがたく、閑散な地域と想定される。



I-13図 第3グリッド出土遺物 (1 : 4)

3.周辺の調査



I-14図 第12グリッド出土遺物 (1:4)

(2) 第2次調査の概要

第2次調査は1979年7月に印刷工場建設に伴って実施した確認調査である。調査はI-15図に示すように東西方向に大小5本のトレンチを設定して行った。

その結果、分流或いは支流を有し、大きく蛇行しながら南流する大溝を検出した。以下、この流路の状況と出土遺物について報告する。

a. 検出した遺構

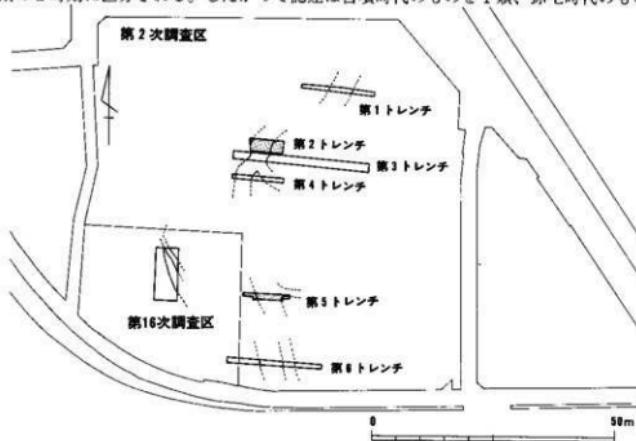
流路は第5層（黄褐色粘質土、地山）上面で検出されたもので、幅4.5~5.0m、深さ0.8~1.0mを測る。埋土は黒色系の砂質粘土層と灰色系の砂礫層とに大きく区分され、時期も出土遺物から区別される。開溝時期は溝底の黒色系埋土から弥生時代終末期の土器類が出土することから、この時期には存在していたことがわかる。その後堆積土で覆われ埋没傾向を示しているが、ある時期に多くの水量を伴った急速な流れがあり、それ以前に堆積した上層をえぐって流出した状況がうかがえ、その時点の埋土が灰色系であることが観察される。この時期の溝幅は当初の溝幅の約半分、2.5m前後に縮小をしているが深さは当初とほぼ同じである。この時期は出土遺物から古墳時代中期中葉頃に比定される。

また特筆すべきこととして、この大溝の底面を構成する低位段丘（青灰色シルト層）より国府型ナイフ形石器、盤状剥片石核などが出土している。

他に第2トレンチ西側において、幅8m以上の河川とみられる落ち込みを検出しているが、時期等は出土遺物が細片で少量のため、確定することはできないがほぼ上述の流路と同様な時期と推定される。この流路は他のトレンチでは検出されていない。

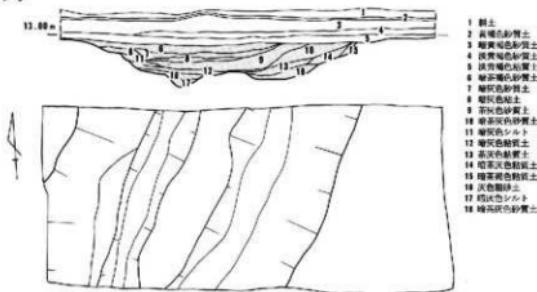
b. 出土遺物

流路から出土した遺物は上器類が主体を占める。その土器類は古墳時代中期中葉と弥生時代終末期の2時期に区分される。したがって記述は古墳時代のものを1類、弥生時代のものを2類として

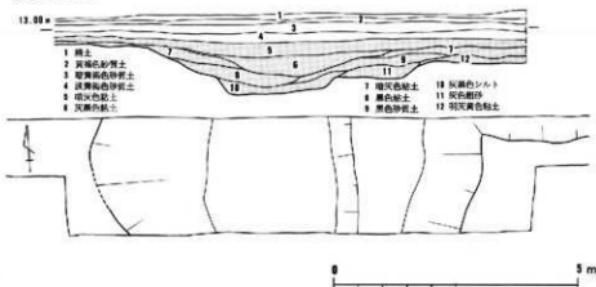


I-15図 第2次調査区グリッド位置図 (1:1,000)

第2トレンチ



第5トレンチ



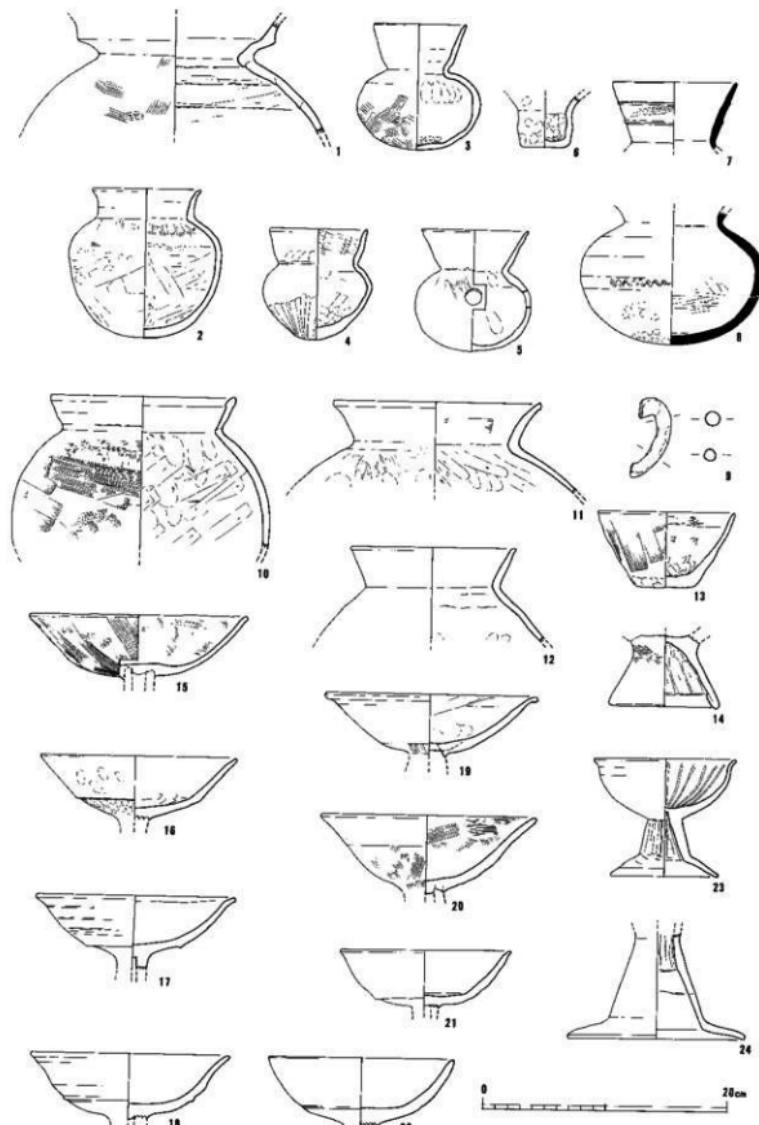
I-16図 調査区平面・断面図 (1:100)

扱うこととする。その他、後期旧石器時代の石器が下部の低位段丘層から出土している。

1類 (I-17図) 土師器と若干の須恵器が共伴している。土師器の器種では壺・甕・高杯・鉢等である。壺では複合口縁壺(1)や小型の短頸壺(2)、直口壺等が見られるが、なかでも(5)のような小型丸底壺の体部に円孔を穿つて須恵器の題を意識させる特異なものもある。また(6)はミニチュアの手づくね土器である。甕では口縁端部が内面に肥厚するものとしないものがある。(14)は東海地方の台付き甕の脚台とみられる。鉢(13)は平底を有し、外斜上方にやや内反気味に延び、そのまま罐部に移行する。高杯は杯部形態が稜を有するものと椀型タイプのものがある。稜を有するものがほとんどであるが、稜が消える過度期の様相を示している。椀型タイプの(23)のみ調整がやや丁寧で、内面には放射状の暗文が施されている。以上の土師器類は粗製のものが殆どであり、調整も粗いハケ仕上げのものが主流を占めている。

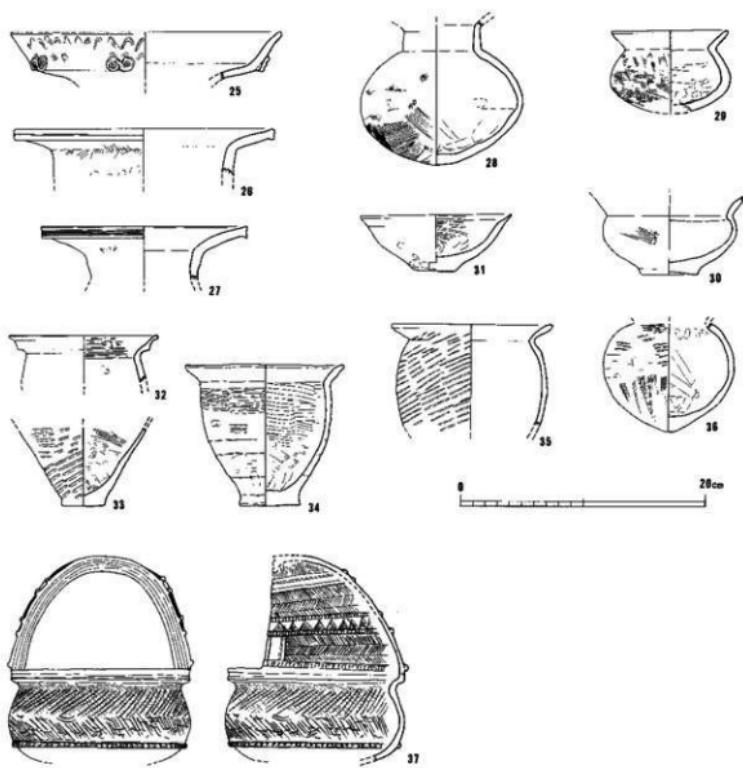
須恵器は3点出土している。(7・8)は長頸壺の口頸部と体部で、(9)は把手付き椀の把手部である。(7)は2条の突帯を設け、その間に崩れた波状文が施されている。(8)も同様に肩部に崩れた波状文が施文されている。これらの須恵器は長頸壺の施文方法に退化傾向がみられるが概ね初期須恵器の範疇に収まるものとみられる。

2類 (I-18図) 出土した弥生土器類は壺・甕・鉢・手焙り形土器等である。壺には二重口縁壺



1-17図 出土遺物 1 (1 : 4)

3.周辺の調査



I-18図 出土遺物2 (1:4)

(25・28) 広口壺 (26・27)、小型壺などみられる。なかでも (26) は頸部径が大きく、口縁部が短いもので、北四国系統の可能性がある。壺はタタキ窯が主流である。口縁部は外折し、端部は丸く收めるものが殆どであるが、32のような受け口状のものも存在する。底部は平底のものに加えて尖り底 (36) のものもみられる。手培り形土器は精製されたもので施文も入念に施されたものである。近江あるいは東海地方からの搬入品の可能性がある。これらの様相は弥生時代終末期にみられるものであるが、そのなかでも古い様相を示している。

(3) 第14次調査の概要

調査地は豊中市螢池西町2丁目51-2に所在する。発掘調査は、工場建設に伴い約90m²を1995年8月22日～同年9月11日まで実施した。検出した遺構は、自然流路1条、溝1条、柱穴1基である。ここでは検出した遺構について概要を記す。

a. 検出した遺構

溝1 調査区西部で検出した幅0.3m、深さ0.2m程度の溝である。溝は、「U」字状の断面形態を呈する。また、溝の埋土は、南端付近で大別3層に区分され、中層に段丘堆積土を母材とするブロック状の堆積土が確認できる。よって、溝1は人為的な行為によって掘削された溝であり、柱穴1とともに集落開闢遺構となる可能性が想定できる。

溝1内からは土器器細片が極少量出土しただけにとどまり、その時期については明確にはできないが、埋土の特徴をみると古墳時代以降、おそらくは平安時代頃の所産となる可能性が考えられる。

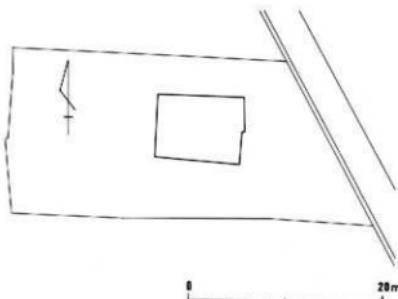
河川1 調査区西部で検出した本報告E-2区河川2に相当する河川と考えられる。

当調査区において、河川1は、南西から南東方向へと流れを変え蛇行し、その上下流は先のE-2区へ続く。

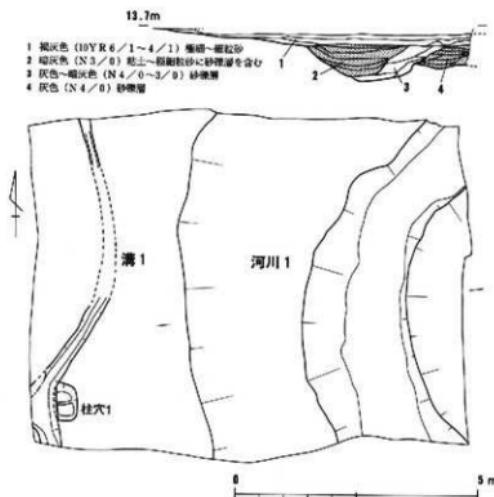
河川内の堆積状況をみると、堆積土に明確な重複関係が認められることから、流路が若干変更していることが確認できた。流路の変更是、同一河川内における微妙な変更にすぎないが、堆積土の相違が明確に確認できることから、おののの流路を新・旧流路として扱うこととする。

新流路は、河川内西侧で検出しておらず、その規模は幅約3.0m、深さ0.7mをはかる。

新流路はさらに2時期に区



I-19図 第14次調査区配置図 (1:500)



I-20図 調査区平面図 (1:100)

3.周辺の調査

分できる堆積状況が確認できるが、特に新しい段階の堆積土から古墳時代中期前葉から中葉にかけての遺物がまとまって出土している。これらの出土遺物のほとんどは完形に近い状態で、また器體外面の摩耗もみられない。また、堆積土の状況から比較的の止水に近い堆積環境が予想されることから、これらの出土遺物は川岸の近辺から投棄された可能性が想定できる。

旧流路は西部を新流路に削平され、また大半が調査区外にあるため、その規模は明確ではない。流路下層からは土器片が川床に密着した状態で出土しているが、多くは破片であり、新流路の様相とは異なる。旧流路は、これら出土遺物から弥生時代終末期に機能したと考えられる。

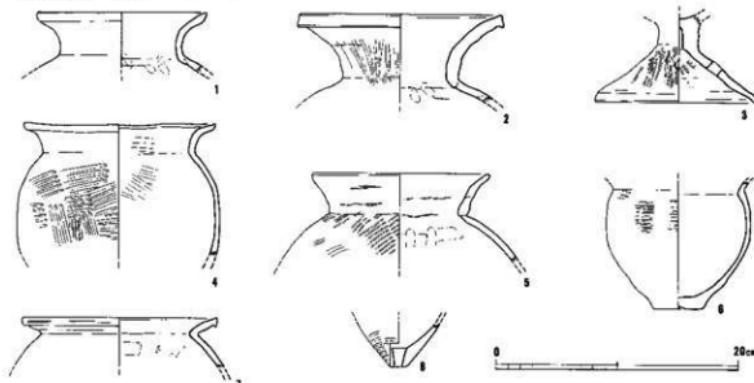
なお、河川1の西岸は河川にむかってゆるやかに傾斜し、落ち込み状の地形を呈する。当該部分の段丘堆積土上面は、濃密な踏み込み状の搅拌が認められ、河川周囲が湿地帯になっていた可能性がある。また、当該部分は出土遺物から古墳時代後期以降に埋没したものと考えられる。

b. 出土遺物

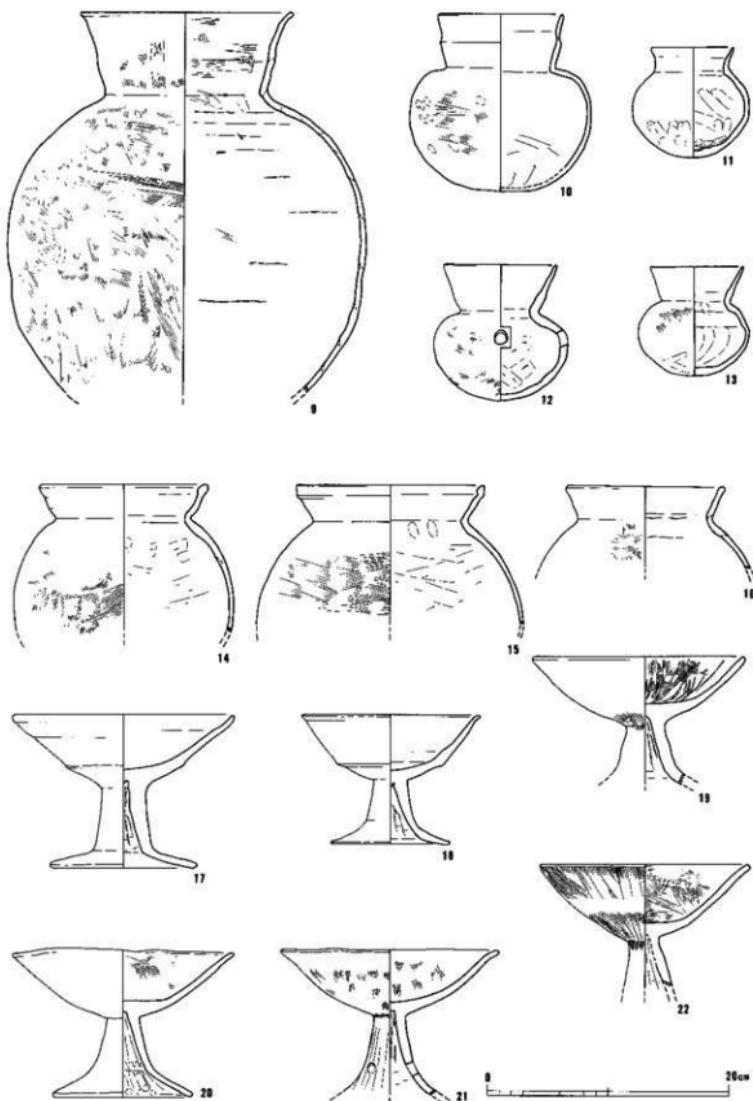
出土した遺物は第2次調査と同様、古墳時代中期中葉前後と弥生時代終末期の2時期に分けられる。したがって記述では古墳時代のものを1類、弥生時代のものを2類として扱うこととする。

1類（I-22図） 土師器のみで、須恵器は出土していない。器種は壺・甕・高杯などであるが、小型丸底壺と高杯類が顕著である。9は大型の広口壺で若干長胴化を示している。調整は粗いハケ仕上げである。10は小型の複合口縁壺である。僅かにハケ調整痕が認められるが、大半はナデで内外面とも平滑に仕上げている。12は体部最大径付近に直径8mm程度の円孔を穿っている。須恵器の趣と同一の用途とみられる。壺は口縁端部を肥厚するものとしないものとがある。肥厚するものは体部内面にケズリを施し、しないものはナデ仕上げである。外面調整は粗いハケである。高杯は杯部外面に僅かに稜を残すものと内反気味に緩やかな弧状を成すものとがある。調整は杯部内外面ともハケ仕上げのものが大部分で、ヘラ仕上げのものが少しみられる。脚部内面はケズリである。

2類（I-21図） 弥生時代終末期の土器群とみられる。器種は壺・甕・高杯・瓶などがある。器形と調整は第V様式のものとほとんど同一であるが、3の高杯や8の瓶底部の形状がやや新しく庄内期古段階の様相とみられる。



I-21図 出土遺物1 (1:4)



I-22図 出土遺物2 (1:4)

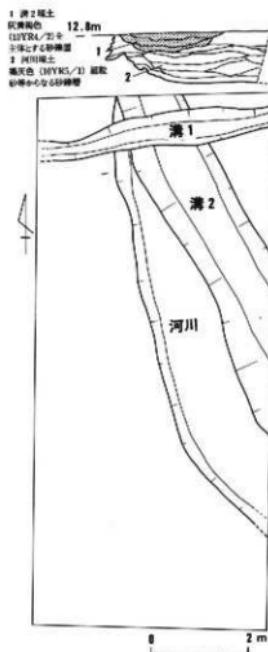
(4) 第16次調査の概要

第16次調査地は豊中市螢池西町2丁目64-1・66-1に所在し、共同住宅建設に伴って約44m²を1998年7月21日～同年8月4日まで事前調査を実施した。当調査区は、第2次調査グリット位置図に記したとおり第2次調査区内にあたるが、過去の調査では建築範囲外にあったため、今回あらためて調査を行うこととなった。

その結果溝2条、自然流路1条を検出したので、その概要を記す。

a. 検出した遺構

溝1 調査区の北端部を東西方向に横断する幅60cm、深さ15cmの溝である。埋土は灰褐色系の細粒砂（～粗粒砂）で、最上層は上部の包含層と同様の堆積物がみられる。出土遺物は土器の極小碎片が数点あったのみなので時期の限定は難しいが、状況から判断して平安時代以降の耕作に伴う溝であろうと判断される。



I-23図 第16次調査区平面図

溝2 幅1.5m、深さ40cm（遺存状態）程度を測る。後述する自然流路の埋没後、その流路上の窪みを利用するかたちで掘削されたものと考えられる。時期的には溝1より先行することが、その重複関係から明らかである。

自然流路 調査範囲のほぼ半分を占める幅3.0m以上、深さ0.8m（遺存状態）の流路である。肩部の形状を見ると北西方向から南東方向に緩やかに円弧を描いており、調査範囲内では流路の攻撃斜面側を検出したものと考えられる。したがって掘り形の形状も下部は抉れて疊（～極粗粒砂）がベース土であるシルト（～粘土）に深く食い込んでいる。また、堆積層の下部では掘り形から剥ぎ取られたシルト（～粘土）のブロックが偽礫となって混入していることからも、当該自然流路の形成時には流速が速く、強い流れであったことがわかる。時期的には出土遺物から弥生時代後期以降の流路であることが判明したが、攻撃斜面側であることから、流路底面にはあまり遺物が遺存していなかった。

今回の調査では、以上に概述したように耕作関連の溝や自然流路が検出された。耕作関連の溝については、その時期が確定できなかったが、条里制の地割り方向なども考慮し、周辺部の調査の進展により検討して行かなくてはならないとみられる。自然流路については、集落の縁辺部や自然地形の変化が既往の調査によりかなり判明してきており、それらとの関連事例として包括されるものとみられる。

II 発掘調査の成果

- 1 調査区の概略
- 2 周辺の地形と基本層序
- 3
3 A-1～E-2区の調査
30
- 31 出土した石器

1. 調査区の概略

(1) 調査区の設定

今回の調査は、「I 2. 調査の経緯と経過」で述べたように、実際に掘削が行われる地下埋設物移設部分と橋脚基礎部分を対象とした。また、これら各々の調査区は土地買収後に順次調査を行ったことによって、各調査区の名称は調査担当者毎に個別に命名した。この結果、調査段階における調査区の名称に共通性がないため、本報告作成段階であらためて調査区の名称を設定することとした。調査区はT区が阪神高速道路大阪池田線の東西に設定されていることから、東側からA～Eの順に、また各橋脚、地下埋設移設部分はそれぞれ分断されていることから、北から1、2、3への順で調査区の数に応じて設定することにした。なお、調査区名称の対応は、II-1表に記すとおりである。以下、A～E区の概略を記す。

(1) A区の概要

A区は、阪神高速池田延伸線上り車線合流部の橋脚基礎工に先立つ地下埋設物の移設に伴って設定された調査区である。各調査区は幅2～4m、長さ10～110mのトレーナーであり、その総延長は330mをはかる。A区における遺構面は北から南へ次第に低くなり、A-7区では埋没地形に伴う堆積層が確認され、斜面へと続く地形となることが明らかにされた。A-2区でも古墳時代前期の土器を含む谷地形を検出しておらず、起伏に富む状況が推測できる。

A区で検出した遺構は、密集土坑群、集落および耕作関連遺構にまとめられるが、特にA-2区からA-6区北半部にいたる各調査区では、密集土坑群が主要な遺構となる。これら土坑群が集中する一帯においては、土坑掘削とともに土坑面の破壊もあってか、集落関連遺構は殆ど認められなかった。一方、A区北端部のA-1区および南部のA-6・7区ではまとまりには欠けるものの、柱穴を主体とする集落関連遺構を検出している。このうち、A-1区では平安中期を中心とする柱穴を、またA-6区では弥生時代後期から古墳時代中期頃までの柱穴・土坑を検出しており当該期集落の位置を考える上で軽視できない。耕作関連遺構は、いずれの調査区においても検出されているが、その多くは平安時代後期以降の所産と推定される。このうち、A-7区では耕作に伴う可能性が考えられる鎌溝が、またA-5区では灌漑用に掘削された近世の素掘りの井戸が確認された。

この他、A-2区の谷地形からは古墳時代前期の多量の土器とともに木製品が出上している。これら木製品は農工具および建築材が主体となるが、鐵形木製品などの祭祠関連遺物も出土しており、注目される。

(2) B区の概要

阪神高速池田延伸線上り車線の橋脚部分の調査である。調査は橋脚基礎部分について、それぞれ調査区を設定して行った。調査区は総延長300mの区間に橋脚の数と同じ17区が設定され、それぞれの調査区同士の関連性は求めにくい状況となっている。よって、それぞれの調査区における地形の復元などは明確にしがたいものの、東側に位置するA区で確認された地形との連続性が予想できる。

B区で検出した遺構は、密集土坑群・河川・集落関連遺構・耕作関連遺構であり、その内容はA

区と類似する。このうち、密集土坑群はB-4～9区で確認され、特にB-6・7区付近では密集する状況がうかがえた。河川はB-2区およびB-4区で確認されたが、その時期は各々の調査区で差があるものの、弥生時代後期から古墳時代中期までの範囲にまとめることができ、A-2区の谷地形に伴う河川の下流にあたる可能性がある。集落関連遺構は、B-1・10～13区で確認している。B-1区では柱穴や溝を検出し、A-1区付近から広がる微高地上に展開する平安時代後期の建物群の存在が予想される。一方、B-10～13区では弥生時代後期もしくは古墳時代前期と古墳時代後期のいずれかの時期に属する可能性が考えられる遺構を検出したが、これらの遺構はすべて基底部が残存するだけにとどまる。ただし、これらの遺構は当該期の集落の範囲を考える上で参考となる成果となった。B-14～17区では、中世の耕作関連遺構と弥生時代後期頃の自然地形に伴う溝状遺構が検出されている。

この他、B-3区については、段丘形成層堆積時におけるシートバーを確認しただけで、人為的な遺構は確認されなかつたため、本文をもって報告にかえることにしたい。

(3) C区の概要

C区は、阪神高速池田延伸線分岐線の橋脚4基および地下埋設物移設部分に相当する。このうち、C-1・2区はD・E区の北方にあり、遺構の関連性がある程度想定されるが、C-3区は西方に約80m程度離れているため、D・E区などとの遺構の関連性は求められない。各調査区の概要をみると、C-1・2区では河川・溝・密集土坑群・井戸など、C-3区では溝・土坑を検出している。このうち、C-1・2区で検出した溝の多くは7世紀代に機能した可能性が考えられ、その後からC-2区では、密集土坑群の掘削が開始されることが想定されている。C-1・2区ではその後に続く遺構はほとんどなくなるが、ふたたび近世になると灌溉用の井戸が掘削されており、耕地として利用されたことが判明している。一方、C-3区では、溝2条とピット多数が検出されているが、これらの多くは後世の開発により著しい削平を受け、その性格は明確にしにくい状況にある。しかし、包含層の堆積時期からみて、これらの遺構の多くが平安時代後期以降に作られた可能性が想定されている。

(4) D区の概要

D区は、阪神高速池田延伸線下り車線に伴う橋脚基礎部分に相当する。調査対象となった橋脚は合わせて11基に及ぶ。それぞれ調査区の面積は限定され、また一定の間隔を有していることから、各調査区で検出した遺構の関連については明確にできない部分も含まれている。

各調査区の概要をみると、D-2・3・5～7区では河川跡が、またD-7～9区では上坑群が、またD-10区では河川跡・溝・土坑・柱穴が検出されている。このうちD-5～7区で検出された河川1からは弥生時代後期から古墳時代前期の遺物が多量に出土した。これらの遺物は河川内の資料であるため一括には欠けるものの、当該期の土器様相を知る上で注目される内容を有している。一方、D-7～9区の上坑群はその特徴から、A・B・E区の各調査区で検出した密集土坑群と一連のものになる。この他、D-6区では小型丸底壺1個体が完形で出土し、その性格が注目される土坑1が検出されている。また、D-10区の遺構については河川・溝が古墳時代前期～中期頃の所産となる可能性が想定される以外、時期を特定することはできなかった。

なお、調査区のうち、D-1区は埋設物による擾乱で著しく破壊されていたため遺構等は検出されず、またD-4・11区では耕作痕等が検出されただけにとどまるため、本文をもって報告にかえ

ることにしたい。

(5) E区の概要

E区はD区本体基礎工に先立ち、地下埋設物の移設に伴って行われた調査である。よって、調査区の範囲は幅2~4m、総延長200mにおよぶトレンチ調査となった。このため、遺構の面的な調査は制約され、遺構相互の関係などについては十分な検討はできず、遺構の評価についても個別の範囲にとどまざるを得なかった。

各調査区で検出した遺構は、土坑群と河川が中心となるが、弥生時代終末期から古墳時代前期の遺構も散漫な状態ではあるものの各所で検出している。弥生時代終末期から古墳時代前期の土坑は、土器を一括して放棄するものが多く、特にE-1区の上坑1およびE-2区の土坑5は、当該期の土器を考える上で良好な資料と言える。また、E-2区河川1からも弥生時代終末期~古墳時代前期にかけての遺物が多量に出土しており、時期幅はあるもののD-5~7区の資料とあわせて注目される内容を有している。この他、E-2区河川2はその位置関係から第14次調査区で検出した河川跡と同一のものであることが判明している。

この他、E-1区では各基本層の上面から耕作闊達遺構を検出している。これらの遺構は調査区の制約をうけているため、概要が知られる程度であるが、第IV層上面で検出した溝5・6はこの地域における水路の系統が中世末期または近世初期にかけて成立した可能性を示唆する遺構として注目される。

なお、E-2区では、明確な柱痕を有する柱穴を若干検出したが、調査範囲の制約もあり建物に復元できるものはなかった。よって、詳細については報告を省略したが、この付近にいくつかの建物が存在した可能性を小唆し得るものと言えよう。

1. 調査区の概略

II-1表 調査区一覧

調査区	次数	旧調査区名	面積	主 要 な 遺 槽	時 期	その他の
A-1区	7次	3区	80m ²	縄文柱造物	平安	
A-2区	7次	1区	155m ²	埋没地形に伴う溝・土坑	古墳～中世	埋没地形
A-3区	9次	B区	168m ²	密集土坑群	古墳～奈良	
A-4区	7次	2区	95m ²	密集土坑群	古墳～奈良	
A-5区	9次	D区	79m ²	密集土坑群	古墳	
A-6区	9次	C区	69m ²	密集土坑群・柱穴	弥生?・古墳	
A-7区	5次	Aライン	375m ²	溝・土坑・耕作痕	中世?	埋没地形
B-1区	8次	1P-A17	190m ²	柱穴・溝	平安?	
B-2区	8次	1P-A16	43m ²	河川跡	古墳	
B-3区	8次	1P-A15-1	45m ²			本項参照
B-4区	11次	1P-A15	47m ²	密集土坑群	古墳	
B-5区	11次	1P-A14	44m ²	密集土坑群・井戸	古墳・中世	
B-6区	11次	1P-A13	75m ²	密集土坑群	古墳	
B-7区	8次	1P-A12	68m ²	密集土坑群	古墳	
B-8区	8次	1P-A11	68m ²	河川跡・土坑・密集土坑群	弥生・古墳	
B-9区	11次	1P-A10	58m ²	密集土坑群	古墳	
B-10区	11次	1P-A9	68m ²	ビット	弥生?	
B-11区	11次	1P-A8	71m ²	溝	弥生?	
B-12区	11次	1P-A7	61m ²	溝・ビット	弥生?	
B-13区	6次	1グリット	62m ²	溝		
B-14区	6次	2グリット	68m ²	溝・土坑		
B-15区	6次	3グリット	68m ²	溝		
B-16区	6次	4グリット	57m ²	溝・土坑		
B-17区	6次	5グリット	49m ²	溝		
C-1区	4次	C-2トレンチ C-3グリット	170m ²	溝・井戸	古墳?・近世	
C-2区	4次	C-1トレンチ C-1-2トレンチ	383m ²	河川跡・溝・土坑・密集土坑群	古墳～奈良・平安	
C-3区	7次	4区	345m ²	溝・ビット	平安以降	
D-1区	11次	1P-B12	72m ²			本項参照
D-2区	11次	1P-B11	72m ²	河川跡	弥生～古墳	
D-3区	11次	1P-B10	72m ²	河川跡	弥生～古墳	
D-4区	11次	1P-B9	68m ²	耕作痕		本項参照
D-5区	11次	1P-B8	72m ²	河川跡	弥生～古墳	
D-6区	11次	1P-B7	72m ²	河川跡・土坑・密集土坑群	弥生～古墳	
D-7区	5次	Aグリット	54m ²	河川跡・土坑・密集土坑群	弥生～古墳	
D-8区	5次	Bグリット	46m ²	密集土坑群	古墳	
D-9区	5次	Cグリット	42m ²	密集土坑群	古墳～奈良	
D-10区	5次	Dグリット	44m ²	河川跡・溝・柱穴・土坑	古墳	
D-11区	5次	Eグリット	34m ²			本項参照
E-1区	9次	A区	180m ²	河川跡・土坑・溝・井戸・密集土坑群	弥生～近世	
E-2区	4次	B-1・B-2	396m ²	河川跡・土坑・溝・井戸・密集土坑群	弥生～古墳	

2.周辺の地形と基本層序

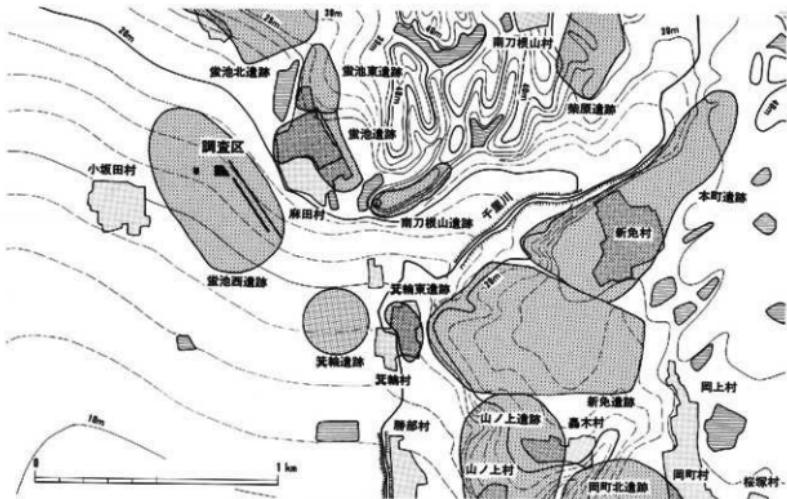
(1) 周辺の地形

調査区は螢池西遺跡の中部から南端部にかけて位置するが、一帯の地形は現状から最低位段丘および後背湿地の範囲に区分されている。一方、実際の地形および堆積土の様相をみると後背湿地と判断されるような堆積はみられない。また、後述のとおり段丘堆積層上に長期にわたる耕作土層の堆積がみられることから、低位段丘裾部から最低位段丘平坦部にかけて位置すると判断できる。しかし、遺跡南端付近は現状の地形では平坦であるが、埋没する段丘崖が存在することが周辺の試掘調査やA-7区南部の斜面堆積などから予想され、また低位段丘縁辺部から派生する開析谷の一つがA-2区で検出されるなど、本來は起伏に富む地形であったことが想定できる。このような起伏に富む地形は水成堆積による谷地形の埋没と、古代以降の耕地開発によって現況に近い平坦面が形成されたものと予想される。

(2) 基本層序

このようにやや起伏に富む地形上に位置し、しかも総延長360m以上が範囲となる当調査区では、その基本層序はきわめて複雑なものとなる。さらに、調査期間が足掛け8年におよんだ上に、3人の調査担当者がそれぞれの調査区を担当した経緯もあって、本報告において調査区全体で共通する基本層序を確定することはできなかった。

よって、ここでは遺跡周辺の基本土層が比較的良好な状態で堆積していると判断したE-1区北



II-1図 遺跡周辺の地形 (1:20,000)

2.周辺の地形と基本層序

部の層序を基準として、各調査区の層序へ援用する方法を採用することにした。このため、各々の調査区で設定した基本層序が調査区全体のそれと異なる部分が生じることから、調査区全体における基本層序は大別層の範囲にとどめることにした。一方、調査区内からは埋没した段丘崖や開析谷が検出されていることを先に述べたが、このうち、A-2区の埋没谷については報告中において検討しているため、ここでは割愛した。また、E-2区の埋没谷については、A-7区と類似する状況が予想され、また調査自体も省略されているため、ここでは記載しなかった。

以下、調査区全体の基本層とA-7区の埋没地形に伴う基本層について、その特徴を記すことにする。

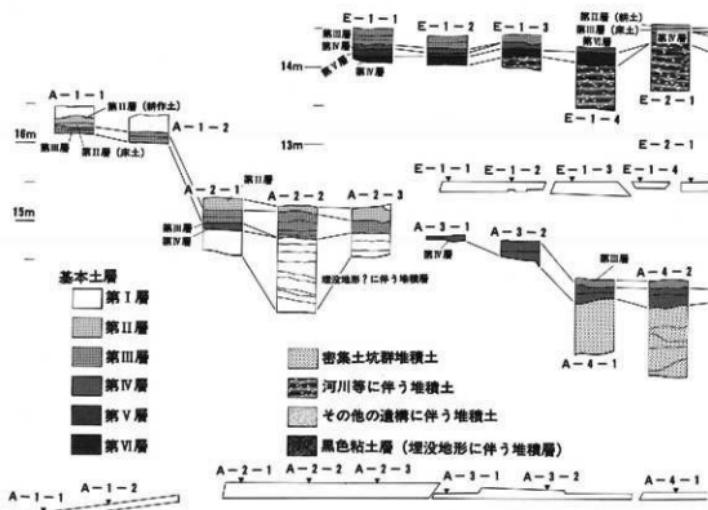
a. 基本層序

基本層は、大別7層に区分できるものと判断したが、第Ⅲ層以下の特徴については先の理由により各々の調査区で異なる部分がある。よって、ここで示す基本層の特徴は大枠にすぎない。なお、多くの調査区ではあらかじめ第V層以上を重機により掘削し、調査を行っている。

第I層 現地表までを覆う盛り土で、ほぼ調査区全体に分布する。周辺地における宅地および阪神高速道路建設時の造成に伴うものと判断される。

第II層 第I層直下にみられる旧耕作土・床土で、調査区全域に分布する。盛り土による造成以前の耕地に伴う客土と判断される。

第III層 にぶい黄色（2.5Y 5.5/2～6/4）極細粒砂の堆積層を基準とする。上層ほど土色に黄味が強くなり、マンガン斑の密度が濃くなる傾向が認められる。また、上下層間の搅拌も激しく、一部では床土との識別が困難なところもある。同層は調査区のほぼ全域に分布する。



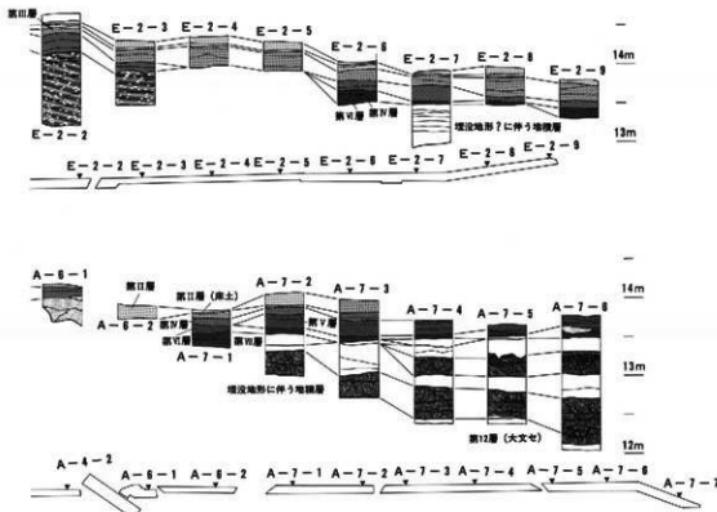
II-2図 調査区壁面柱状模式図

なお同層からは、備前焼鉢や肥前系磁器など中世後期から近世の陶磁器が出土していることから、中世後期から近世にかけての耕作土の一部と考えられる。

第IV層 明黄褐色（10YR5.5/5）、にぶい黄橙色（10YR5/4）を呈する極細粒砂～細粒砂からなる堆積層を基準とする。第III層と比べ、マンガン斑が濃密にみられる。また、上下層の攪拌やA-7区などの耕作痕の存在から、第III層と同様に耕作土と推定される。A・B区の比較的標高が高い調査区では見られないことから、中世後期から近世にかけての開発で削平された可能性も考えられる。調査区全域をとおして確認できる土層とは言いにくいが、C～E区ではほぼ全域で確認できることから基本層に含めた。下層からは綠釉陶器・灰釉陶器・黒色土器などが、中層以上から各時期の瓦器・土師器片などが出土していることから、10世紀頃から中世前期にかけての耕作土と考えられる。出土遺物の様相からみて、さらに三層程度に細分が可能な調査区もあるが、共通の区分を設けることが難しいため本項では大枠でまとめている。なお、E-1区では同層上面より16世紀代とされる溝5・6を検出している。

第V層 褐灰色（10YR4/1）、暗褐色（10YR3/4）などの極細粒砂～細粒砂からなる堆積層を基準とする。須恵器杯A・Bなどの細片が出土していることから、古墳時代後期末以降、奈良時代を中心とする時期の耕作土と考えられる。第VI層とよく類似する。第V層と同じ層位に褐色中～粗粒砂からなるラミナを含む土層が、A-3区、B-7・8区で検出されている。E-1区溝2～4などが同層上面から検出されている。また、多数検出された土坑群の最上層が同層の堆積となるケースも確認されている。

第VI層 褐色（10YR4/4）、暗褐色（10YR3/3）などの極細粒砂～細粒砂からなる堆積層を基準と



する。初期須恵器や弥生上器の細片が出土している。調査段階では、弥生時代後期から古墳時代にかけての遺物包含層として扱う場合が多かったが、A-5・6区のように遺構形成時に堆積した可能性が想定できるものや、河川内堆積土の最上層部分にあたるものなど、堆積要因は多様に考えられる。

第VII層 灰白色（7.5Y8/I） 極細粒砂などからなる段丘堆積層である。遺構のほぼすべては同層上面から検出した。

b. 埋没地形に伴う堆積層

A-7区南部では埋没した段丘とともに斜面堆積層が確認されている。この斜面堆積層は大阪モノレール建設とともに走行された（財）大阪文化財センターの調査でも確認されている。以下、（財）大阪文化財センターによる調査⁽¹⁾を参考にしつつ、基本層第VI層以下に対応する堆積層（第V層を除く）を対象に概要を記す。

第1層 黄灰色（2.5Y5/I） 中粒砂からなる。同層上面から中世頃と考えられる耕作痕などが検出されているが、堆積土の状況から基本層第VI層との関連はないものと判断される。

第2層 上部は暗褐色（10YR3/4）粘質土（調査段階の表記で極細粒砂～細粒砂と推定される。）、下部は黒褐色（7.5YR2/2）シルト～粘土からなる。第2層は上下で2層に区分可能であるが、上部は土壤化による変質と推定されていることから、同一層としてあつかうこととした。なお、同層は（財）大阪文化財センターによる調査で設定された第9層に対応するものと考えられる。

第3層 オリーブ褐色（2.5Y4/4） シルト～粘土、黄灰色（2.5Y6/I）シルトなどからなり、（財）大阪文化財センターによる調査で設定された第10層に対応するものと考えられる。

第4層 黒色（7.5YR1.7/I）～（10YR2/1） シルト～極細粒砂からなり、3～4層に細分可能である。大阪文化財センター調査で設定された第11層に対応するものと考えられる。

第5層 灰色（5Y4/1） 粘土からなる。（財）大阪文化財センターによる調査の第12層に対応するものと考えられる。当調査区では遺物が出土していないため時期は不明であるが、（財）大阪文化財センターによる調査では国府型ナイフ形石器などが2次堆積の状態で出土していることから、旧石器時代後期以降の堆積と考えられる。（財）大阪文化財センターの調査によれば、さらに第13層を介して沖積層に到達するとされているが、当調査区では確認できなかった。

なお、調査区最高所の第VII層（段丘堆積層）検出面の標高は16.5mで、A-7区第4層の検出高との標高差は4.3mにおよぶ。

【参考文献】

- (1) (財) 大阪文化財センター「第VI章 蛍池西遺跡（1）」「農中市所在 宮の前遺跡・螢池東遺跡・螢池遺跡・螢池西遺跡 1992・1993年度発掘調査報告書－大阪モノレール螢池東線・西線建設に伴う発掘調査－」1994 および (財) 大阪文化財調査研究センター「第Ⅳ章 蛍池西遺跡（2～4）」「池田市・農中市所在 宮の前遺跡・螢池東遺跡・麻田瀬陣屋跡・螢池遺跡・螢池南地区・螢池西遺跡 1993～1996 年度発掘調査報告書－大阪モノレール螢池東線・西線建設に伴う発掘調査－」1997

3.A-1区の調査

(1) 調査区の概要

A-1調査区は全調査区の北端に位置し、阪神高速道路上り車線の歩道部分に当たる。調査範囲は幅2m、長さ48m、調査面積は約80m²である。遺構は調査区の南側3分の1には存在せず、それより北側に集中する。

第1層は近年までの水田耕作土、第2層は黄褐色中粒砂、第3層はオリーブ褐色細粒砂で両層とも水田の床土としての整地土層である。第4層は褐色細粒砂で遺物包含層として認知される。奈良～平安時代と推定される。第5層は明黄褐色極細砂で低位段丘を形成している洪積層である。表層にはマンガン粒の斑点が多く認められる。層厚は第1層から第5層上面まで約0.3m程度で、第4層の厚さは5～7cmである。第5層上面の標高は北端でT.P 16.1m、南端でT.P 15.6mを測り、南北で0.5mの高低差がある。

第4層包含層からはII-4図に示す様な上器類が出土している。1は須恵器の壺、2は黒色土器A類楕、3は円筒埴輪の破片である。1と2の遺物から、この包含層の形成された時期は平安時代と推定される。

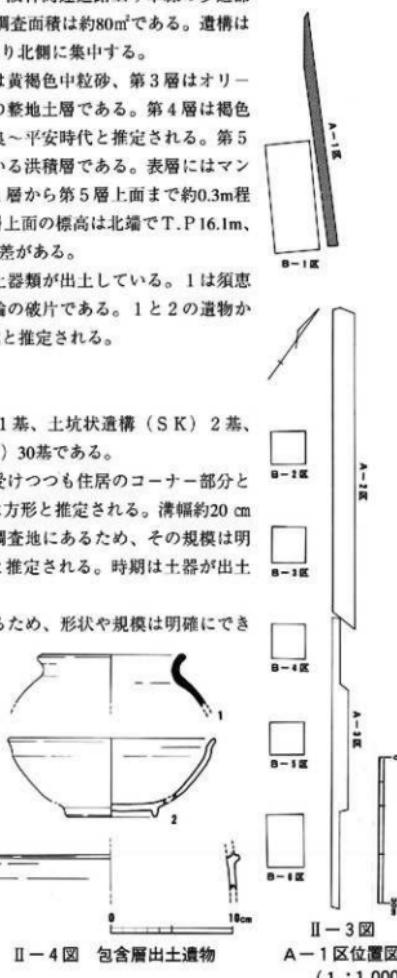
(2) 検出した遺構と出土遺物

検出した遺構は堅穴住居状遺構(SH)1基、土坑状遺構(SK)2基、溝及び、溝状遺構(SD)4条、柱穴(SP)30基である。

SH-1 調査区の中央西側で、削平を受けつつも住居のコーナー部分と推定される側溝のみを検出した。平面形態は方形と推定される。溝幅約20cm、残存深さ3～5cmである。遺構の大半は未調査地にあるため、その規模は明確にできないが、4～5m程の通有のものと推定される。時期は土器が出土していないため確定できない。

SK-1 遺構の大半が未調査地に延びるため、形状や規模は明確にできないが土坑と考えられる。長径は1.2m以上、深さは現存で5～7cm、埋土はにぶい黄褐色細粒砂で遺物は出土していないため時期は確定できないが、SP-5に切られていることにより新旧関係は明らかである。

SK-2 この遺構も大半が未調査地にあるため形状や規模は明確にできないが、現状では長軸を南北にとする楕円形を呈している。SP-9に北側は切られる。長径は0.7m以上、深さ5cm、埋土は灰黄色細粒砂で出土遺物はない。



II-4図 包含層出土遺物

A-1区位置図
(1 : 1,000)



II-5図 溝2出土遺物 (1:4)

類似が出土している。出土遺物より SD-1は、10世紀後半以降の所産となる。

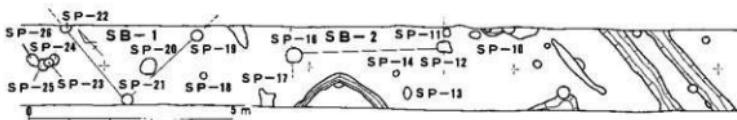
SD-2 SD-1の北側、0.5mほど離れて並行して検出された溝である。規模もSD-1とほぼ等しく、幅0.4m、残存深度0.12mを測る。埠上は第1層が灰白色微粒砂土、第2層が灰白色細粒砂土に褐色細粒砂土が混入する土層である。断面の状況から2時期が想定される。遺物はII-5図に示すような土師質の羽笠片が出土している。SD-2から出土した遺物をII-5図にあげた。両者とも短い鍔を有する上師器の羽笠である。4は口径が21cmで内外面ともハケ調整である。5は口径が25.4cmで、緩く外反する口縁部を有する。時期は平安時代中葉以降とみられる。

SD-3・4 SD-2の北側で検出した小溝状のもので、その状況は非常に悪く一部分しか残存していない。SD-1・2と方向が同一のため溝と想定した。時期は明確にはできないが溝のなかではもっとも新しいものと考えられる。

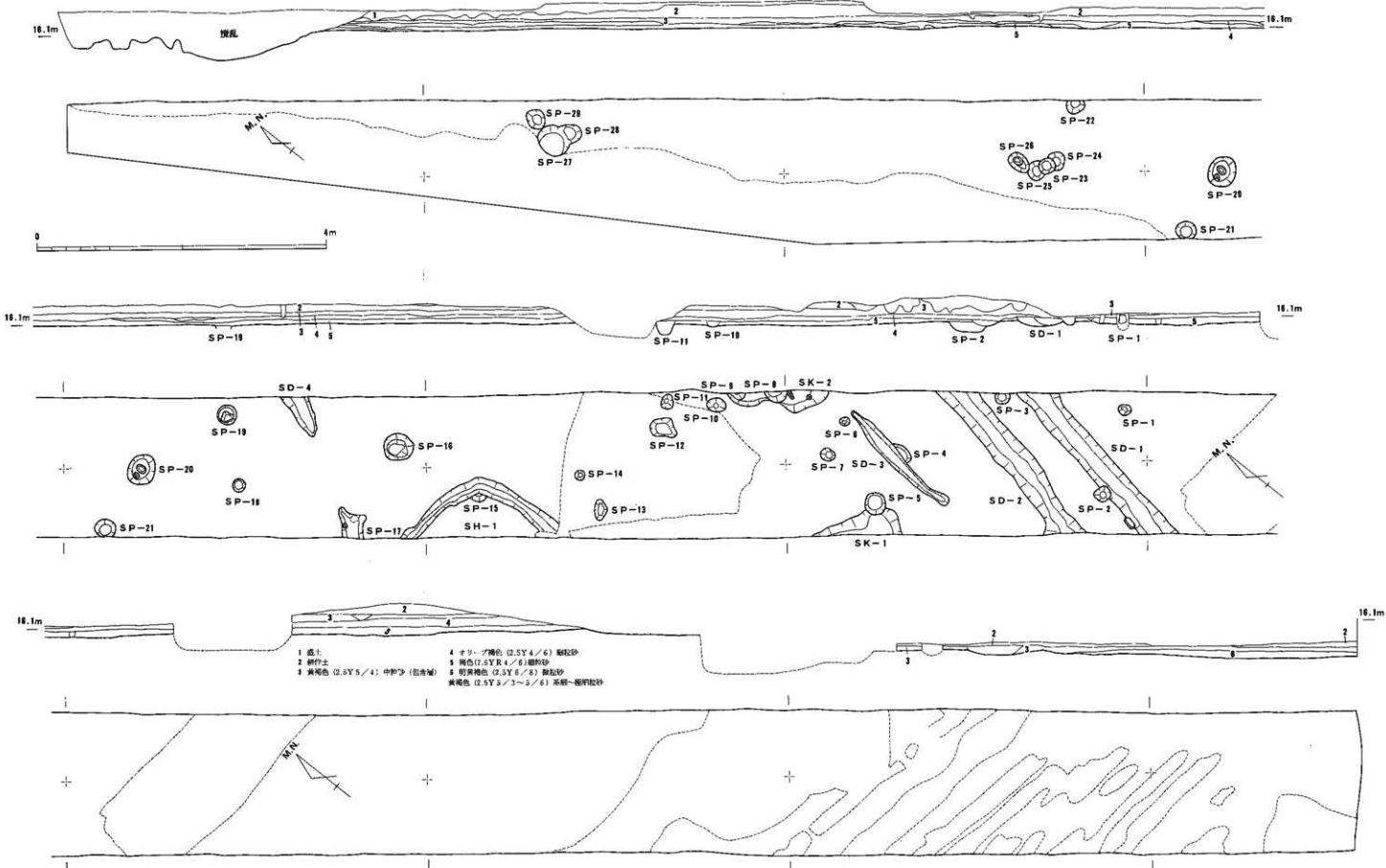
柱穴 約30基が確認され、掘立柱建物に伴うものと推定される。しかし調査範囲が幅2mと限定された範囲内では明確な規模と方向を決めることが困難である。したがって推定が可能なものについてのみ述べることにするが、その前に層位関係から第5層（地山）上面検出のものと第4層（包含層）上面検出のものがある。また柱穴の残存深度から4時期が想定され、その深度が30cm以上のもの、25cm前後のもの、15cm前後のもの、10cm未満のもの等である。以上のことと基本としながら他の要素も考慮して建物跡を復元すれば、時期を異にして3棟以上が推定される。

SB-1 調査区の中央やや北側で検出したもので、SP-19・SP-21・SP-22によって復元されるものである。直徑は20~25cm、深度はSP-19が27cmとやや浅いがSP-21・22は35cm前後のものである。柱の径は埋土の痕跡から7~8cm前後が推定される。建物方向はSP-19の南側やSP-22の東側には輪に合うものが存在しないことからSP-21を南西角の柱として決めることができ、北と東側に延びることになる。この向きはSD-1・2とも合致し、磁北方向となる。柱間は2.3~2.35mである。SP-22からはII-9図にあるような上器が出土しており、時期も平安時代中期と判断される。

SB-2 SB-1の南側で検出したもので、一部SB-1と重複する。トレチの中央で南北に3個並ぶもので柱穴の直徑が35cm前後とほぼ等しいSP-16・SP-20等である。SP-16は35cm、SP-20は47cmの深さであり、柱穴深度がもっとも深い一群である。柱の径は埋土の観察から約10cmである。建物の方向はこの3基を軸線で結んだ場合、柱間は3.6mと間隔が長くなり無理が



II-6図 建物復元想定図 (1:120)



II-7図 A-1区平面・断面図 (1:50)

あるとみられる。ならばSB-1と同一方向で考えた場合、南北軸柱間2.2~2.3m、東西軸柱間2.8~2.9m間隔で縦柱の建物として考えることができ、この復元案が可能性として高いと推定される。SP-20から黒色土器A類が出土している。

その他の柱穴 上記の柱穴群のほかにも明らかに柱穴と考えられるものがある。それらを上記と同じ磁北方向で見てみれば、数種が想定される。例えばSP-1・9は南北軸で柱間2.1m、SP-6・8は東西軸で柱間2.2mである。SP-8・9・11は第4層上面から掘り込まれたものである。

SP-22ではII-9図に示すように須恵器の壺と土師器の小皿類が出土している。6は肩部外面に自然釉の痕跡がみられる。外面上半部はナデ仕上げ、下半部はハケ調整である。小皿は口径が10cm前後のものがほとんどであるが、19と20はやや大きく11cm前後である。タイプは口縁部の収め方により数種に分けられる。内反気味のもの、斜め上方に真っ直なもの、外面からの強いナデによる有段気味のもの、「て」の字状のもの、緩く外反させ端部を水平気味にするもの等である。これらの時期は平安時代中葉と考えられる。

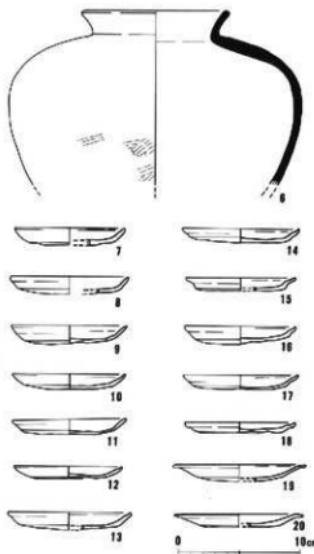
(3) 小結

検出した主な遺構は、古墳時代と推定される方形の竪穴住居跡と平安時代と推定される溝と掘立柱建物跡である。平安時代の遺構は溝と建物の方向が描うことから一体のものとして捉えることができる。また溝の南側には柱穴等の遺構が検出できることから、これらの溝は建物に付随し、それらを区画するためのものとして考えることが可能である。

調査区南端で検出された近・現代の鋤状耕作痕も上記の溝に直行することから長い間土地使用の地勢が同一であったことが窺える。



II-8図 SP-22遺物出土状況



II-9図 SP-22出土遺物 (1:4)

II-2表 A-1区土器観察表

No	図版	器種	出土位置	法量(cm)	口部(受部)		体部(側部)		底部(底部)		色調	残存度	備考	
					上段:外縁	下段:内縁	上段:外縁	下段:内縁	上段:外縁	下段:内縁				
1		土師器 瓢	包含層	体高径 11.6	—							淡黄褐色	10%	
2	15-1	黒色土器A單 甌	包含層	口径 24.0								淡黄褐色	45%	
3	—	包含層	体高径 20.2				ナデ					灰	—	
4	土師器 羽釜	S D - 3	口径 11.6	ナデ	—		ナデ~ハケ					灰黄	—	
5	土師器 羽釜	S D - 3	口径 21.0	ナデ			ハケ					淡黄褐色	—	
6	15-3	陶器 瓢	S P - 22	口径 25.4	ナデ		ナデ					灰	20%	
7	土師器 小皿	S P - 22	口径 8.9	ナデ	無調整	ナデ	無調整	ナデ	無調整	ナデ	無調整	灰白	100%	
8	土師器 小皿	S P - 22	口径 9.6	ナデ	無調整	ナデ	無調整	ナデ	無調整	ナデ	無調整	灰白	25%	
9	15-4	土師器 小皿	S P - 22	口径 9.3	ナデ	無調整	ナデ	無調整	ナデ	無調整	ナデ	淡黄褐色	25%	
10	15-4	土師器 小皿	S P - 22	口径 9.2	ナデ	無調整	ナデ	無調整	ナデ	無調整	ナデ	淡黄褐色	25%	
11	15-4	土師器 小皿	S P - 22	口径 9.2	ナデ	無調整	ナデ	無調整	ナデ	無調整	ナデ	淡黄褐色	80%	
12	土師器 小皿	S P - 22	口径 9.2	ナデ	無調整	ナデ	無調整	ナデ	無調整	ナデ	無調整	に赤い黄褐色	—	
13	土師器 小皿	S P - 22	口径 10.0	ナデ	無調整	ナデ	無調整	ナデ	無調整	ナデ	無調整	灰白	—	
14	15-4	土師器 小皿	S P - 22	口径 9.6	ナデ	無調整	ナデ	無調整	ナデ	無調整	ナデ	に赤い黄褐色	—	
15	土師器 小皿	S P - 22	口径 9.0	ナデ	無調整	ナデ	無調整	ナデ	無調整	ナデ	無調整	淡黄褐色	—	
16	15-2 15-4	土師器 小皿	S P - 22	口径 9.2	ナデ	無調整	ナデ	無調整	ナデ	無調整	ナデ	灰白	100%	
17	15-4	土師器 小皿	S P - 22	口径 9.4	ナデ	無調整	ナデ	無調整	ナデ	無調整	ナデ	灰白	50%	
18	土師器 小皿	S P - 22	口径 9.1	ナデ	無調整	ナデ	無調整	ナデ	無調整	ナデ	無調整	淡黄褐色	50%	
19	土師器 小皿	S P - 22	口径 10.6	ナデ	無調整	ナデ	無調整	ナデ	無調整	ナデ	無調整	に赤い褐色	100%	
20	土師器 小皿	S P - 22	口径 11.4	ナデ	無調整	ナデ	無調整	ナデ	無調整	ナデ	無調整	に赤い褐色	100%	

4.A-2区の調査

(1) 調査区の概要

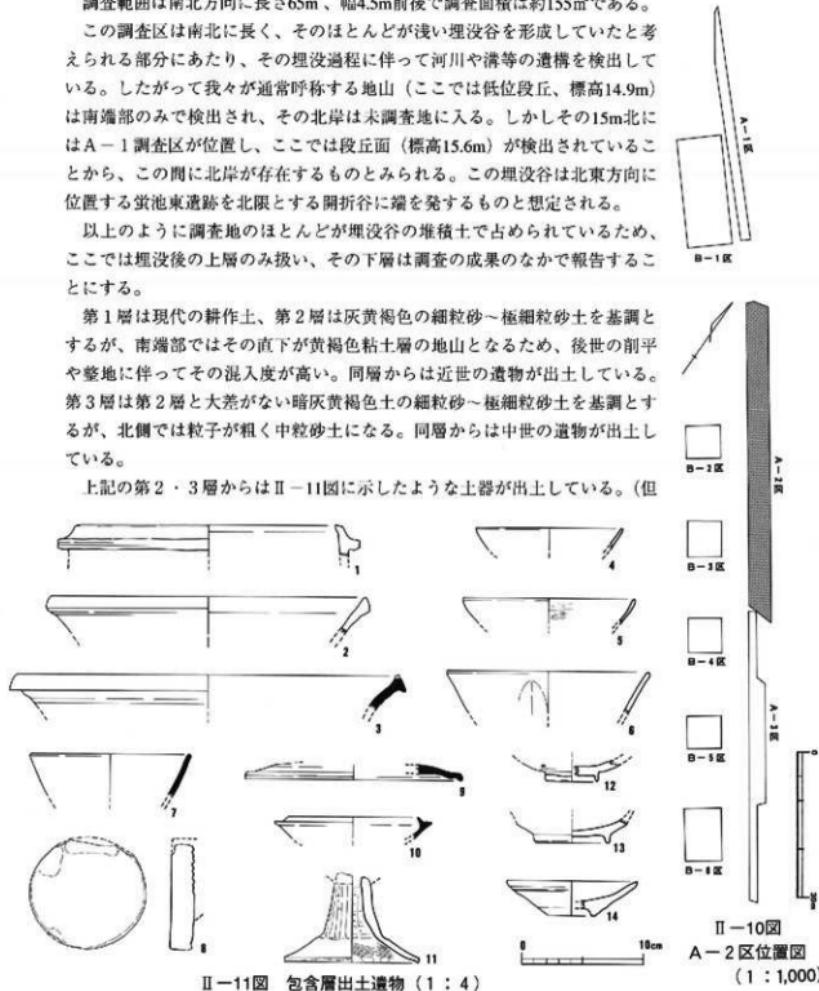
調査範囲は南北方向に長さ65m、幅4.5m前後で調査面積は約155m²である。

この調査区は南北に長く、そのほとんどが浅い埋没谷を形成していたと考えられる部分にあたり、その埋没過程に伴って河川や溝等の遺構を検出している。したがって我々が通常呼称する地山（ここでは低位段丘、標高14.9m）は南端部のみで検出され、その北岸は未調査地に入る。しかしその15m北にはA-1調査区が位置し、ここでは段丘面（標高15.6m）が検出されていることから、この間に北岸が存在するものとみられる。この埋没谷は北東方向に位置する螢池東遺跡を北限とする開折谷に端を発するものと想定される。

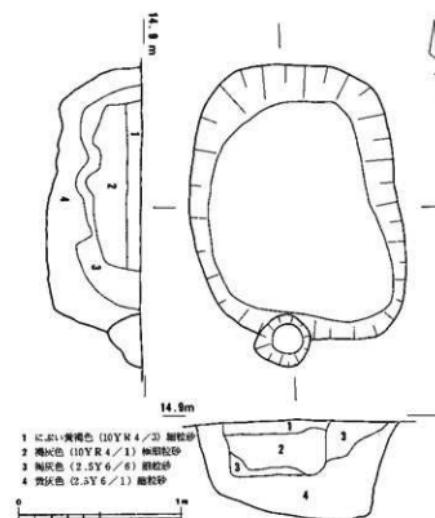
以上のように調査地のほとんどが埋没谷の堆積土で占められているため、ここでは埋没後の上層のみ扱い、その下層は調査の成果のなかで報告することにする。

第1層は現代の耕作土、第2層は灰黄褐色の細粒砂～極細粒砂土を基調とするが、南端部ではその直下が黄褐色粘土層の地山となるため、後世の削平や整地に伴ってその混入度が高い。同層からは近世の遺物が出土している。第3層は第2層と大差がない暗灰黄褐色土の細粒砂～極細粒砂土を基調とするが、北側では粒子が粗く中粒砂土になる。同層からは中世の遺物が出土している。

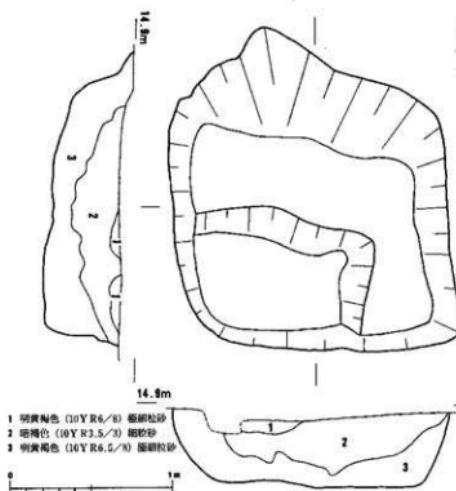
上記の第2・3層からはII-11図に示したような土器が出土している。（但



II-11図 包含層出土遺物 (1 : 4)



II-12図 土坑1平面・断面図 (1:30)



II-13図 土坑2平面・断面図 (1:30)

し1は落ち込み1新段階の埋上から出上) 2は瓦質のこね鉢、3は東播系須恵器のこね鉢、4・5は瓦器椀、6は青磁椀、7・9・10は須恵器類、12は磁器の椀、13・14は陶器の椀と小皿で14は唐津焼である。12~14は第2層、1・4~6などが第3層から出土している。

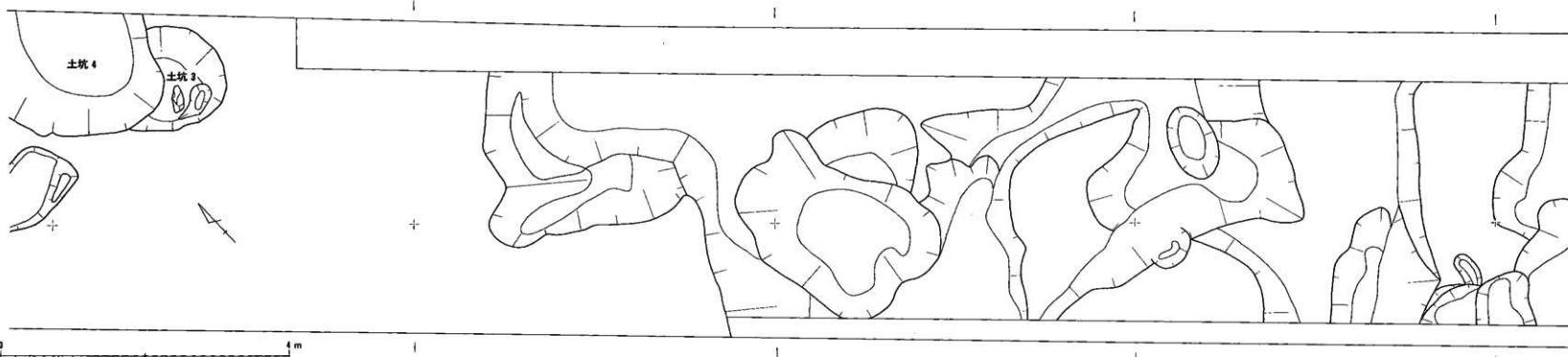
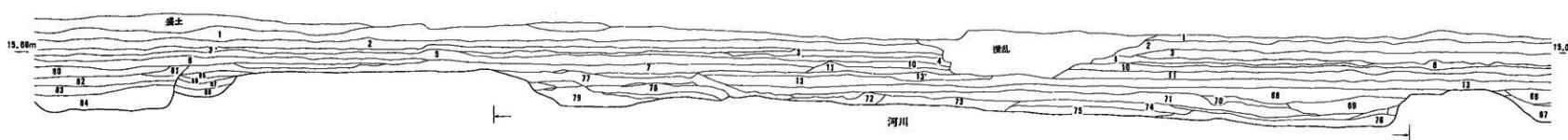
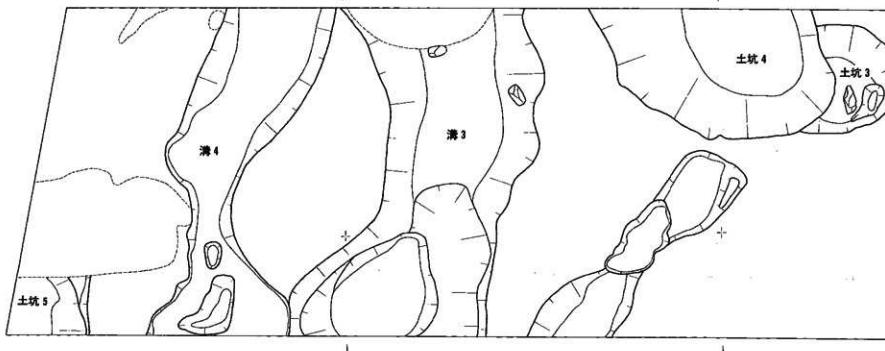
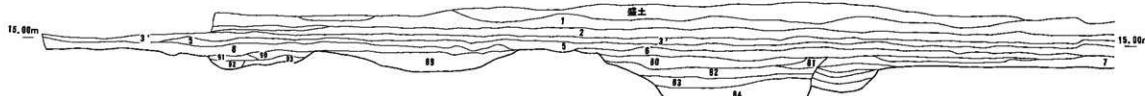
(2) 検出した遺構と出土遺物

検出した遺構は土坑5基・溝4条・小穴6基・埋没谷・河川などである。以下これらの遺構について記述するが、溝2については埋没谷のなかで検出したので、そのなかで報告する。

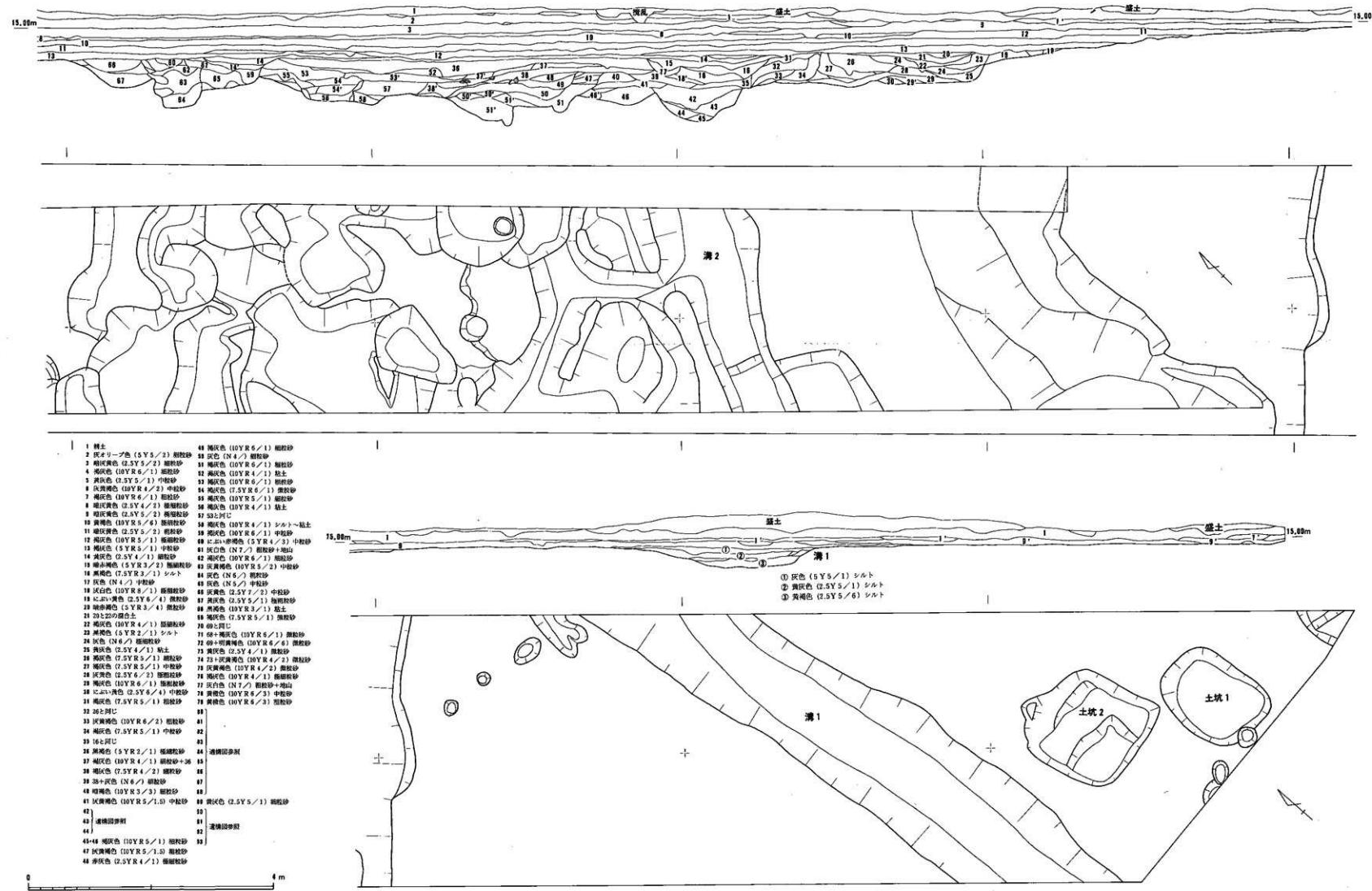
土坑1 (II-12図) 調査区の南端で検出したものである。平面形態は梢円形を呈する。規模は長辺1.7m、短辺1.15m、深さ0.55mを測る。埋土は4層に分層される。下層の3・4層は全体を包むかのように施され、そのなかに1.0m×0.6mの箱型を想定させるように2層と1層の埋土が存在することから土壙塗の可能性がある。遺物は出土していないため、時期は不明である。

土坑2 (II-13図) 土坑1の北側に隣接して検出したものである。平面形態は方形に近い。規模は1.8m×1.7m、深さ0.5mを測る。埋土は2層に大別される。両層とも弧状を描く堆積土で、下層は地山の影響を受けたと思われる明黄褐色極細粒砂土で上層は暗褐色細粒砂土である。この土坑ではII-18図に示すような遺物が出土している。16は須恵器の杯、17~19は土師器で、17は小型瓶、18・19は高杯の脚部である。この土坑の時期は、これらの遺物から二分

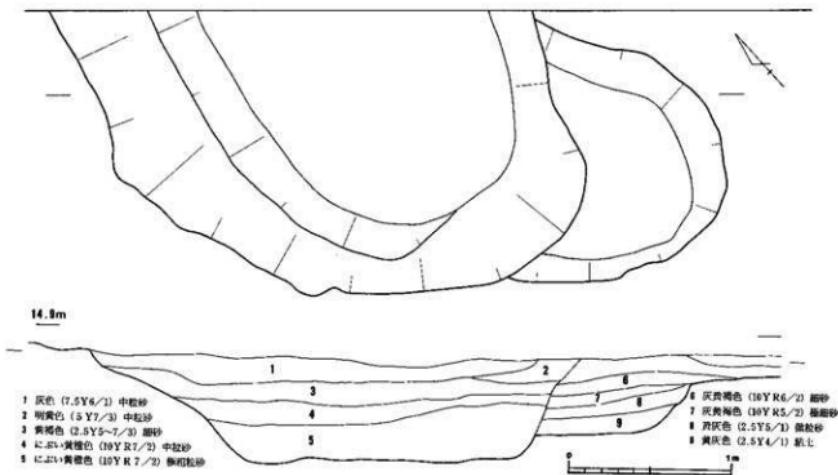
- 1 黄土
 2 棕褐色 (5 YS 5/2) 粘粒砂
 3 棕褐色 (2.5 YS 5/2) 粘粒砂
 4 黑褐色 (2.5 YR 5/1) 中粒砂
 5 黄褐色 (2.5 YR 5/1) 中粒砂
 6 黄褐色 (2.5 YR 5/1) 中粒砂
 7 黄褐色 (2.5 YR 5/1) 中粒砂
 8 黄褐色 (2.5 YR 5/1) 中粒砂
 9 黄褐色 (2.5 YR 5/1) 中粒砂
 10 黄褐色 (2.5 YR 5/1) 中粒砂
 11 黄褐色 (2.5 YR 5/1) 中粒砂
 12 黄褐色 (2.5 YR 5/1) 中粒砂
 13 黄褐色 (2.5 YR 5/1) 中粒砂
 14 黄褐色 (2.5 YR 5/1) 中粒砂
 15 黄褐色 (2.5 YR 5/1) 中粒砂
 16 黄褐色 (2.5 YR 5/1) 中粒砂
 17 黄褐色 (2.5 YR 5/1) 中粒砂
 18 黄褐色 (2.5 YR 5/1) 中粒砂
 19 黄褐色 (2.5 YR 5/1) 中粒砂
 20 黄褐色 (2.5 YR 5/1) 中粒砂
 21 黄褐色 (2.5 YR 5/1) 中粒砂
 22 黄褐色 (2.5 YR 5/1) 中粒砂
 23 黄褐色 (2.5 YR 5/1) 中粒砂
 24 黄褐色 (2.5 YR 5/1) 中粒砂
 25 黄褐色 (2.5 YR 5/1) 中粒砂
 26 黄褐色 (2.5 YR 5/1) 中粒砂
 27 黄褐色 (2.5 YR 5/1) 中粒砂
 28 黄褐色 (2.5 YR 5/1) 中粒砂
 29 黄褐色 (2.5 YR 5/1) 中粒砂
 30 黄褐色 (2.5 YR 5/1) 中粒砂
 31 黄褐色 (2.5 YR 5/1) 中粒砂
 32 黄褐色 (2.5 YR 5/1) 中粒砂
 33 黄褐色 (2.5 YR 5/1) 中粒砂
 34 黄褐色 (2.5 YR 5/1) 中粒砂
 35 黄褐色 (2.5 YR 5/1) 中粒砂
 36 黄褐色 (2.5 YR 5/1) 中粒砂
 37 黄褐色 (2.5 YR 5/1) 中粒砂
 38 黄褐色 (2.5 YR 5/1) 中粒砂
 39 黄褐色 (2.5 YR 5/1) 中粒砂
 40 黄褐色 (2.5 YR 5/1) 中粒砂
 41 黄褐色 (2.5 YR 5/1) 中粒砂
 42 黄褐色 (2.5 YR 5/1) 中粒砂
 43 道路回填砂
 44 道路回填砂
 45 黄褐色 (2.5 YR 5/1) 粘粒砂
 46 黄褐色 (2.5 YR 5/1) 粘粒砂
 47 黄褐色 (2.5 YR 4/1) 粘粒砂



II-14図 A-2区平面・断面図1 (1:50)



II-15図 A-2区出土平面・断面図2 (1:50)



II-16図 土坑3・4平面・断面図 (1:30)

されるが、古い17~19を混入とみて新しい16の時期（奈良～平安時代）で捉えることとする。

土坑3 調査区の北部で検出したものである。土坑4によって北半分が削平されている。平面形態

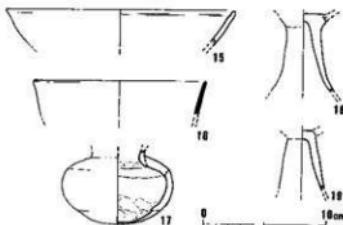
は梢円形を呈しているとみられ、断面形状は弧状である。規模は短辺1.4m、深さ0.45mを測る。埋土は灰黄色を基調とする砂粒のブロック土である。遺物は出土していない。

土坑4 土坑3を切って北側に検出したもので東半分は未調査地である。平面形態は梢円形を呈するものとみられ、断面形状は底面が平坦な逆台形状である。規模は短辺2.5m以上、深さは0.5mを測る。埋土は黄灰色あるいは灰褐色系を基調とする砂粒土で水平堆積である。遺物は出土していないが、検出面は後述する落ち込みの新しい段階の埋没途中からのものであることが確認されることから、平安時代～中世の間に収まるものとみられる。

土坑5 調査区の北端の北西角で一部分のみを検出した。大部分が未調査地にあるため、土坑かどうか判断できないが、ここでは一応土坑として報告する。平面形態は弧状を呈するものとみられる。規模は不明であるが、深さは0.3m以上を測る。埋土は黄灰色の砂粒土を基調とするが、底面には黒褐色のブロック土が堆積する。遺物が出土していないため、時期は不明である。



II-17図 溝1断面図 (1:20)



II-18図 溝1・土坑2出土遺物 (1:4)

溝 1 調査区の南部で検出したもので、北から南に流れを持つ。幅1.5~1.9m、深さ0.3mを測る。形状は底面中央が平坦であるが、両壁はゆるい弧状を描く。埋土は4層に大別され、黄灰色を基調とするが、最下層は褐灰色のシルト層である。その上層は細粒あるいは極細粒の砂層とシルト層の互層であり、ゆるい流れと淀みがあったことがうかがえる。この溝からはII-18図15の土器が出土している。榎葉型の黒色土器B類碗で10世紀代のものとみられる。

溝 3 調査区の北部で検出したもので、東から西に流れを持ち蛇行する浅い溝である。溝3と合流あるいは切り合いながら存在するものとみられる。幅は2.0m内外、深さは0.2m~0.3mで部分的に滲りのような深いところがある。形状は弧状を描いている。埋土は灰褐色系の中粒から粗粒砂が主で、滲りは粘土と砂層の混在である。遺物は出土していない。

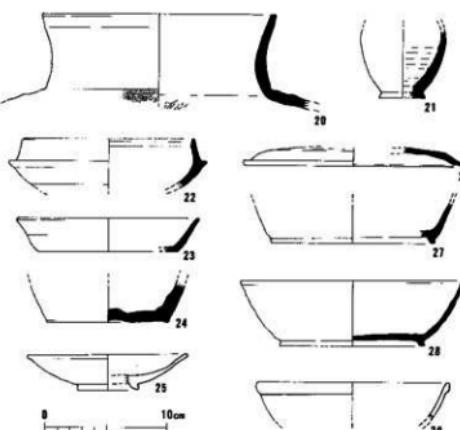
溝 4 溝2の北側に接して検出したもので、溝2と同様な流れを持つ。溝幅は一定していない、0.5~1.5mの範囲で極狭い部分も有し、深さも0.1~0.2mと浅い。埋土は黄褐色系の細粒砂~粗粒砂土が主である。遺物は出土していない。

小穴 調査区の南部を中心に6基の小穴を検出した。直径、深さとも20cm内外であり、はたして柱穴と判断されるかどうかは疑問である。したがって、調査範囲の狭さもあるが建物に伴うものか判断できない。

埋没谷に伴う遺構

落ち込み1 埋没谷の最終段階の凹地を落ち込み1として扱った。この落ち込みは新段階(時期)に分かれる。新段階のものは調査区の北部で、古段階の上層埋土を押し流すようにして上下2層の中粒砂から粗砂の砂層が堆積している。その深さは0.2mと浅いが流れを有していたものとみられる。その幅は北側が未調査地に伸びるために明確ではないが、検出部分から20m以上の規模を有するものとみられる。時期は平安時代後期から中世となる可能性がある。なお土坑4や溝3・4は下層上面に存在するものである。

古段階の落ち込みは調査区の中央に存在する。埋土は上下2層に大別され、上層は上述したよう



II-19図 落ち込み1出土遺物 (1:4)

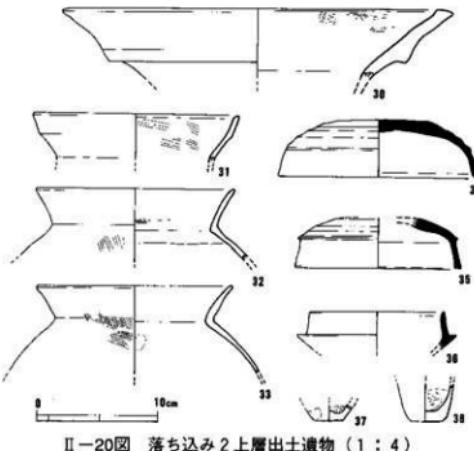
に新段階のものによって切られている。その幅は約28m、深さ20m前後で、埋土は暗灰黄色極細粒砂である。下層は下部に存在する河川の最上層を含むもので、その幅29.5m、深さ0.2mである。埋土は褐灰色極細粒砂から細粒砂上で河川の上部ほど褐色が強い。

この落ち込み1からはII-11図1とII-19図に示すような土器が出土している。II-11図1は新段階の埋土から出土したもので、瓦質の羽釜である。口径22cmを測り、内面に横方向のハケが施される。12世紀頃の所産であろうか。II-19図のものは古段階の埋土から出土したもので、20~24・26が上層、

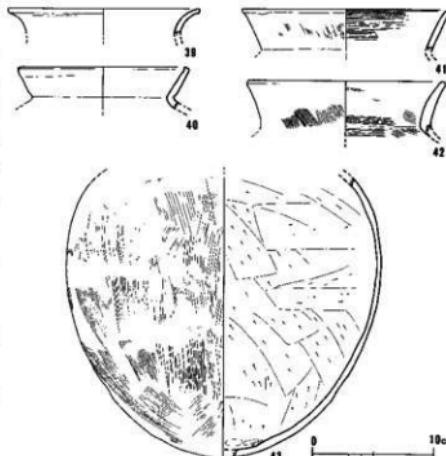
25・27~29が下層から出土のものである。20は須恵器の壺で、口頸部はヨコナデ、体部外面は縱方向のタキ、内面には当て具の同心円文を残す。21は水瓶で底部は糸切りである。22は須恵器の杯Aで内外面ともヨコナデである。24は須恵器の平底壺の底部である。25は貼り付け高台の皿で、緑釉陶器である。26は須恵器の杯蓋、27・28は杯Bである。29は白磁碗で玉縁の口縁を有する。これらの遺物は9世紀から10世紀を中心とするが29のように12世紀代と考えられる遺物が下層から出土することから、落ち込み1の埋没はそれ前後からと考えられる。ただ、白磁以外に瓦器などの中世以降の遺物は出土していないため、白磁碗が搅拌などの作用により混入した可能性もあり、埋没時期の決定には検討の余地を残している。

落ち込み2 落ち込み1の下層で、中央部に段丘の地山が隆起しており、これにより北部の河川と南部の落ち込みは三分される。このうち、南部の落ち込みについて落ち込み2と呼ぶことにする。落ち込み2の埋土も便宜的に上下二層に大別する。下層は溝2が埋没するまでの段階、上層は溝2の埋没後から落ち込み1までの間層とする。幅は約15m、深さは0.5~1.0m前後である。埋土は灰褐色系を基調とし、下層は粗粒砂~中粒砂土、上層は中粒砂~細粒砂で上部に極細粒砂土が堆積する。この堆積状況はこの埋没谷が河道として機能していたときの氾濫により堆積したものと判断され、中層に溝2のような遺構が存在することから幾度かに分かれて氾濫が起きたものと推定される。上層においては溝2上部と同様の溝が、またその両側にも溝状の遺構が認められる。

この落ち込みからはII-20・21図に示した土器が出土している。

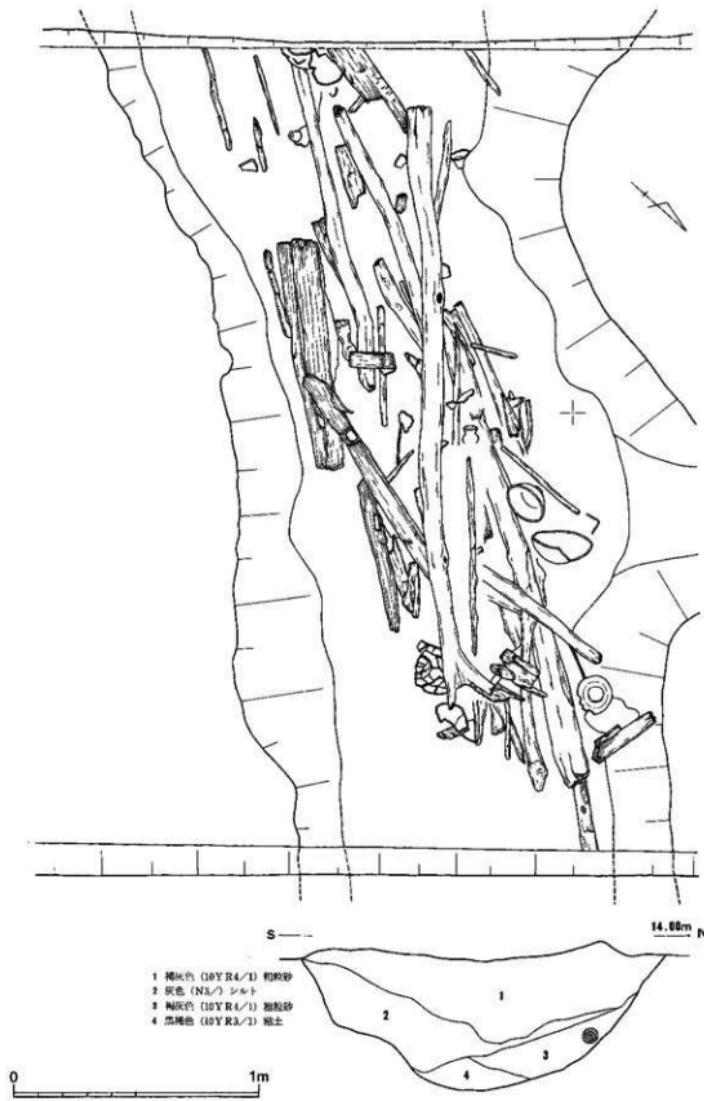


II-20図 落ち込み2上層出土遺物 (1:4)

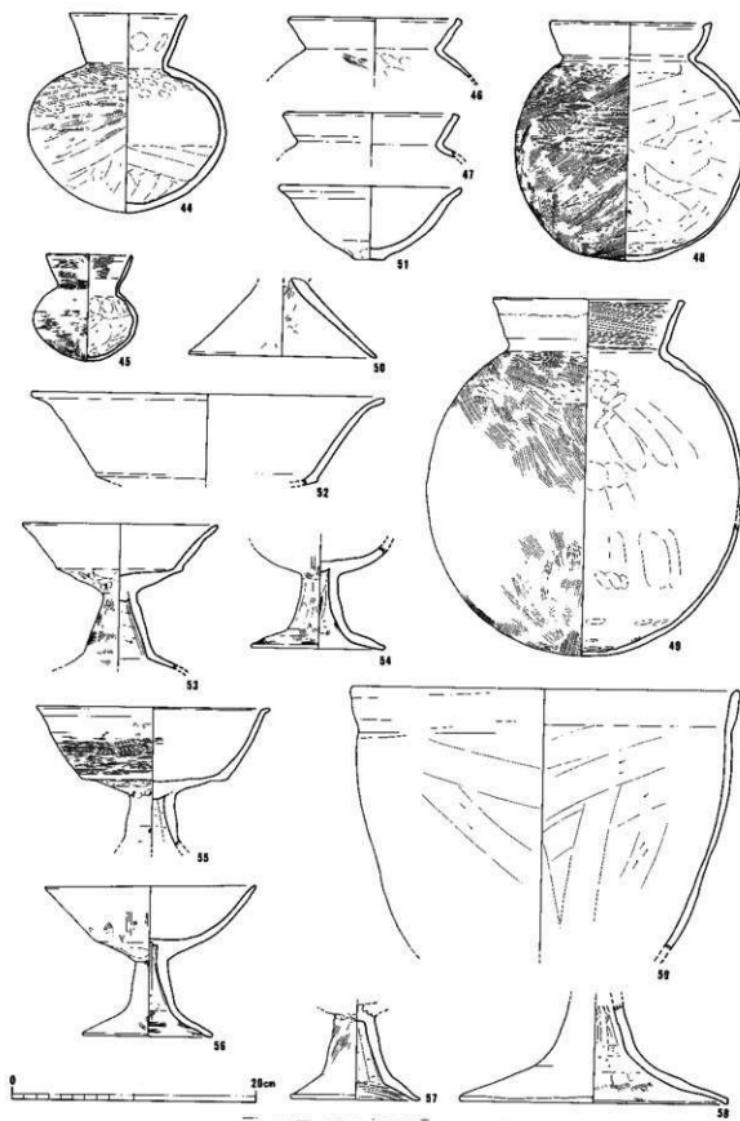


II-21図 落ち込み2下層出土遺物 (1:4)

4.A-2区の調査

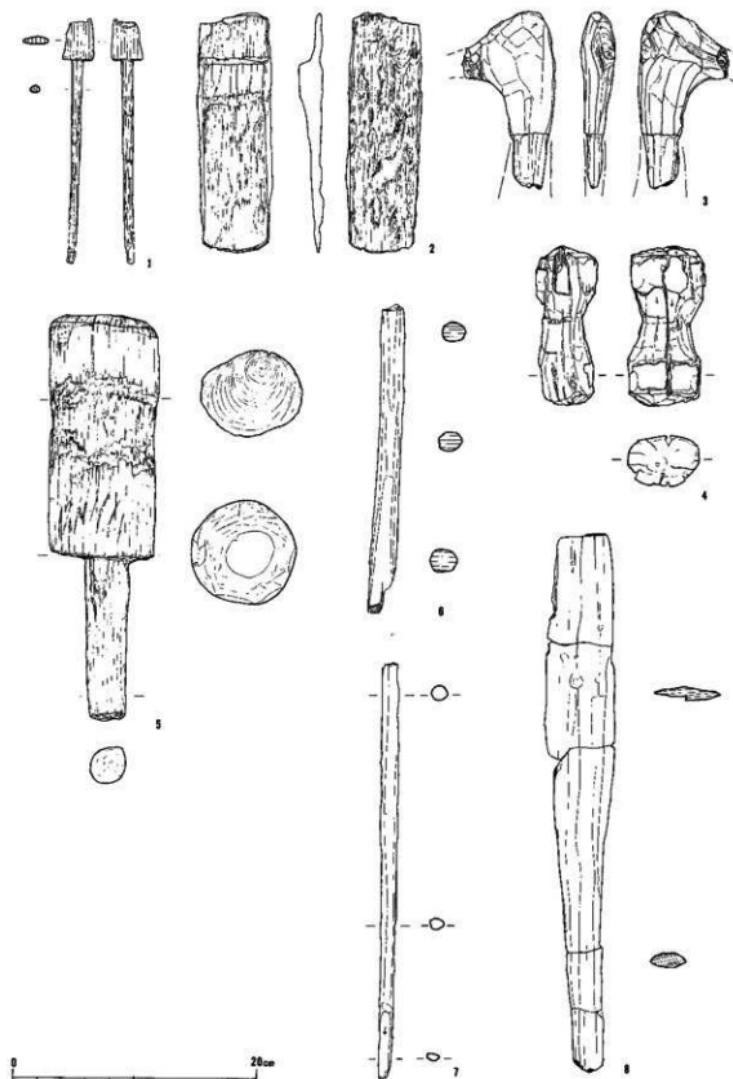


II-22図 溝2遺物出土状況 (1:20)

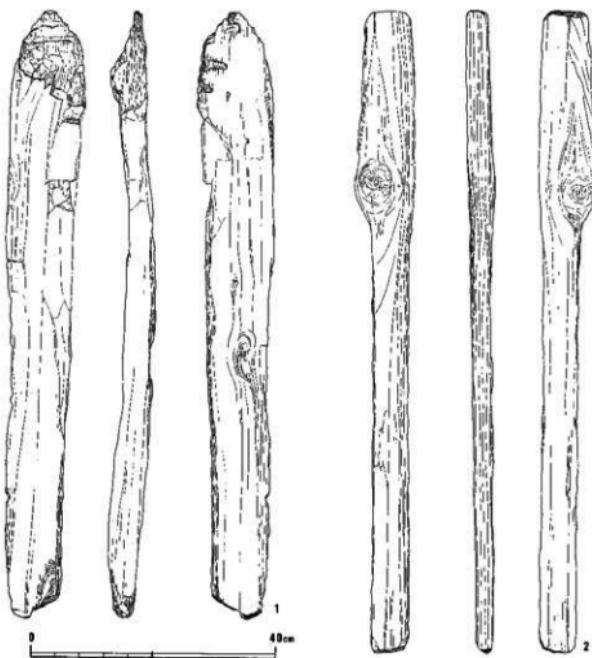


II-23図 溝2出土遺物 (1:4)

4.A-2区の調査

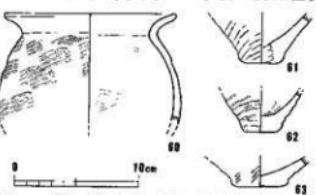


II-24図 溝2出土遺物 木製品1 (1:4)



II-25図 溝2出土遺物 木製品2 (1 : 8)

II-20図の上器は上層から出土したものである。30は土師器の二重口縁壺である。器面は風化が激しく調整は不明である。31~33は土師器の壺である。布留式土器の特徴である口縁端部の肥厚はみられない。31は内反気味のまま、32・33は外反のままである。調整は粗いハケ仕上げである。34・35は須恵器の杯蓋で36は杯身である。34は稜と口縁端部内面の段は鈍く形骸化している。ケズリは天井部のみである。口径は16.5cmと大型である。35は稜がまだシャープで、口縁端部は内傾する凹面を有する。ケズリは広く稜付近まで及んでいる。口径は13cmとやや小型である。36は口径が11cmと小型で、立ち上がりは内傾気味であるが上方にやや高く、口縁端部は丸く收める。37・38は粗製の手づくねの土器である。これらの土器の時期は30が下層の溝2の出土遺物と同時期とみられ、二次的な混入である。34の須恵器は陶邑編年のMT-15、35はTK-23、36はTK-47段階のものとみられ。31~33の土師器もこれらの段階に伴うものであろう。34は、この落ち込みの最上層から出土したもので氾濫による埋没時期を示すものである。



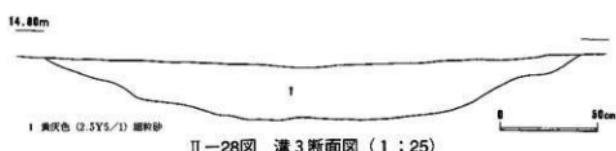
II-26図 溝2最下層出土遺物 (1 : 4)

4.A-2区の調査



II-27図 満2出土遺物 木製品3 (1 : 8)

II-21図は下層上面、溝2検出面と想定される層位で出土したものである。溝2出土遺物と同時期と捉え



II-28図 溝3断面図 (1:25)

られ、溝2の埋没に連動するものとみられる。この面では溝のほかに土坑状の遺構が断面や底面の形状から想定されるが、埋土は砂層を主体にするものであるため、氾濫等による凹みと判断した。

図示したものはすべて土師器で須恵器は伴わない。口縁部の特徴は端部の内面肥厚が形骸化しながらもわずかに認められる40の他は、大きく外反するもの(39)、わずかに外反するが斜め上方に立ち上がるものの(41・42)の二種で端部は肥厚しない。調整は39・40はナデ、41・42はやや粗いハケ仕上げである。43は外面を縦あるいは斜め方向のハケ、内面は底付近に指頭圧痕を残すが、その上部はケズリである。布留3式の範疇に含まれるものである。

溝2 下層と上層の間で東西方向に検出したものである。溝幅約1.5m、深さ0.5mを測り、埋土は砂層を主体とする。この溝にはII-22図に示すように木製品が一括で遺棄された状態で検出された。これらの木製品は柱や勝穴を有する割材等の建築部材とみられるものとともに木槌・槌の子・鐵形木製品などが含まれている。

この上部にはII-23図に示すような土器類が出土している。51・59を除いて他はすべて土師器で須恵器は1点も出土していない。器種は壺・甕・鉢・器台・高杯などである。44は球形の体部に直向する口縁部を有する小型の壺である。口縁部は内外面ともナデ仕上げ、体部は外面をミガキ、内面をナデで仕上げる。45は小型丸底壺Cタイプである。口縁部は内外面ともナデ仕上げ、体部は外面をハケ、内面はケズリとナデ仕上げである。46~49は布留型甕である。48のみが斜め上方にやや長くのびる口縁部を有する。口縁端部は形骸化した内面肥厚がわずかに認められる。48・49は完形品で、48は口縁部内外面ともナデ仕上げ、体部は外面をハケ、内面は底部付近に指頭圧痕を残すがその上部はケズリで仕上げる。49は口縁部外面をナデ、内面をハケで仕上げる。体部はハケ、内面は底部付近に指頭圧痕を残し、その上部はナデ仕上げである。底部内面に炭化物が付着する。51は底部を有する鉢である。体部は斜め上方にゆるく内反し、口縁部はゆるく外反する。内外面ともナデ仕上げである。この鉢は弥生時代後期のものであり、二次的な混入品である。50は小型器台の脚部とみられる。52~58は高杯である。52と58は大型品の杯部と脚部である。杯部の形態は、杯部が深く杯底面が大きく屈折して稜を有するもの(52・53・55)、その稜が形骸化したもの(56)と槌状の杯部のもの(54)がある。脚部は脚柱が小さくて大きく屈曲する通有のものである。調整は器面が風化しているため定かにし難いが、杯部内外面と脚部外面はハケ仕上げで、脚柱部内面はケズリ、柄部内面はハケ仕上げである。

59はこれらの土器群の中では異質である。深鉢の形態を有し、口縁部は器壁が体部に比べてわずかに厚く、頸部をヨコナデで形成することによって体部と区別できる。体部内外面ともケズリが施された粗製の土器である。繩文時代晩期の所産とみられ、二次的な混入品である。また最下層からは弥生時代後期のタタキ甕が出土している。これらも二次的な混入品とみられる。

II-24・25・27図は、この溝から出土した木製品である。II-24図1は鐵形木製品で、鐵身の形狀は三角形を呈するとみられるが、先端部は欠損する。残存部の全長は20cm、鐵身部3.5cm、茎部長16.5cmを測り、断面形状は鐵身部がレンズ状、茎部が梢円形状を呈する。2は楔状の形狀を有し、

基部は端部から4cmほどの範囲を厚さ5~6cmと薄く仕上げる。全長19.5cm、幅6cmを測る。用途は不明である。3は袋状鉄斧の柄の先端部とみられる。全長14.5cm、着装部長4.5cmを測り、断面形状は偏平である。加工痕を顯著に残す。4は中央部が凹むもので、槌の子と考えられる。全長13cm、断面形状は梢円形を呈し、長径6cm、中央部凹み4cmを測る。中央部の凹みには使用痕とみられるものが認められる。5は木槌である。槌身部、柄部とも円形を呈する。全長33cm、槌身部長19.7cm、柄部長13.3cm、槌身部径9cm、柄部径3.5cmを測る。槌身部中央は使用により擦り減っている。6・7は棒状の製品である。両者とも断面は円形を呈する。6は現存長25.5cm、径2.0cm、7は現存長34cm、径1.5cmと1cmで一方を細く仕上げる。両者は同一の製品の可能性もあるが、用途は不明である。8は板状のものであるが、一方の端を細く仕上げる。全長44cm、最大幅5.6cm、最小幅2.5cm、断面はレンズ状で厚さ1.2cmを測る。用途は不明である。II-25図~II-27図は建築部材と考えられるものである。II-27図1は削材で一方端部に一辺6cmの腰穴を有する。現存長1.3m、中央部幅9cm、厚さ6cmを測る。2は板材で、現存長90cm、幅11.5cm、厚さ2~3cmを測る。欠損部が多い。3は柱材とみられるもので、現存長95cm、径11cmを測る。4も柱材とみられるもので現存長2.3cm、径10cm前後の自然木である。II-25図1は削材でII-27図1と同様なもので、片方端部は火を受け炭化している。現存長1m、幅12cm、厚さ5cmを測る。2は板状のもので、全体の約1/3ほどが幅が広い。全長1.05m、両端部の幅は8cmと6cm、厚さ4cmを測る。用途は不明である。

河川 落ち込み2の北側に隣接し蛇行して存在するものである。落ち込み1の下層埋土が一部河川の最上層埋土になる。この河川は堀没谷の河道として機能し、当初は北側にも流水があったものとみられるが、徐々に中央部から南側に流水の軌道が移り、川幅も徐々に狭めてきたものとみられる。したがって河川より北側は早くに陸化した部分である。検出時の川幅約10m、深さは南側(0.6m)と北側(0.4m)では異なり、南側が深くなる。埋土は下層が極細粒砂~微粒砂上、中層が下層の粒土にシルトが混じり、上層がシルト層である。出土遺物がないため、機能時期は明確にはできないが溝2の機能時には存在し、落ち込み2の上層埋没と軌を一にしているものと層位から考えられる。

(3) 小結

当調査区はそのほとんどが埋没谷の範囲内であり、検出した遺構も埋没過程のなかで検出したものが主である。その埋没過程のなかで人為的な遺構が出現するのは、古墳時代中期前半ごろと推定される溝2からで、その後平安時代まで続く。しかし遺構密度は薄く、単発的で、その後平安時代を待つまでは人為的な遺構は少なく、平安時代になっても凹地という性格上、生活の主な舞台にはならなかった。ただ、この埋没谷からは縄文時代晚期や弥生時代後期、古墳時代から平安時代にわたる土器が出土することから、この付近ないし上流域にはこれらの時代の生活舞台が存在するものとみられる。

II-3表 A-2区土器観察表1

No	国別	器種	出土位置	法量(cm)	上部(表面) 下段:外底:上底:内面	底部(表面) 下段:外底:上底:内面	色調	残存度	備考
1	瓦質	利茶	落ち込み 折接合	口径 21.0	ナデ		黒	5%	
2	瓦質上器 こね味	包含層 下層	口径 26.0	-			一	7%	
3	東播系須恵器 こね味	包含層 上層	口径 32.6	回転ナデ			灰白 白	5%	
4	瓦器	碗	包含層 下層	口径 11.9	ナデ ミガキ	ナデ ミガキ	灰	3%	
5	瓦器	碗	包含層 下層	口径 14.0	ナデ ミガキ	ナデ ミガキ	暗灰	8%	
6	青銅	椀	包含層 下層	口径 16.4	回転ナデ	濃青 回転ナデ	オリーブ灰 (緑)	6%	
7	須恵器	杯	包含層 下層	口径 13.0	回転ナデ	回転ナデ	灰白	8%	
8	新丸瓦		包含層 上層	-			暗灰	90%	
9	須恵器	蓋	包含層 下層	口径 17.8	回転ナデ	回転ナデ	灰白	5%	
10	須恵器	杯身	包含層 上層	口径 10.6	回転ナデ	回転ナデ	灰白	10%	
11	15-5	土師器	高杯	包含層 上層	御都径 9.2	ミガキ ケズリ	一 ハケ	30%	
12		磁器	碗	包含層 上層	底径 4.0		回転ケズリ	青白 (緑)	5%
13	16-1	陶器	椀	包含層 上層	底径 6.0		ハラ切り 回転ナデ	褐 灰白	47%
14	16-1	肥前系陶器	皿	包含層 上層	口径 10.8 底径 3.8	回転ケズリ	回転ケズリ	に赤い 食糞	6%
15		雪色十字切 楠	湯 1	-			オリーブ黒	15%	
16		須恵器	杯	土坑 2	口径 14.0	回転ナデ	回転ナデ	灰白	8%
17	15-6	土師器	小型壺	土坑 2	御都径 9.1	ナデ	一 押圧	灰白	100%
18		土師器	高杯	土坑 2	御都径 3.0	-	-	橙	100%
19		土師器	高杯	土坑 2	御都径 2.3	-	-	灰白	100%
20		須恵器	壺	落ち込み 1 古接合	口径 19.2	回転ナデ		灰 灰白	10%
21		須恵器	水瓶	落ち込み 1 古接合	御都径 2.3	回転ナデ	回転水切り ナデ	オリーブ灰 灰白	20%
22		須恵器	杯身	落ち込み 1 古接合	口径 14.0	回転ナデ 回転ナデ	回転ナデ ケズリ	灰 灰白	4%
23		須恵器	杯 A	落ち込み 1 古接合	口径 14.8	回転ナデ	一 ナデ	灰白	10%
24		須恵器	壺	落ち込み 1 古接合	底径 10.0	ナデ	一 回転ナデ	青灰	27%
25	16-1	縄輪陶器	皿	落ち込み 1 古接合	口径 13.1 番高 2.9	ナデ	回転ケズリ 回転ナデ	-	灰 25%
26		須恵器	蓋	落ち込み 1 古接合	口径 17.8	回転ナデ	回転ナデ	灰	10%
27		須恵器	杯	落ち込み 1 古接合	民都径 13.2	回転ナデ	ナデ	灰白	15%
28		須恵器	杯 B	落ち込み 1 古接合	口径 18.4	回転ナデ	ナデ 回転ケズリ	青灰	10%
29	16-1	白組	碗	落ち込み 1 古接合	口径 16.0	回転ナデ	-	明オリーブ灰	18%
30	17-1	土師器	二重口盃	落ち込み 2 上層	口径 30.6	一 ハケ		灰白	50%
31		土師器	类(布留)	落ち込み 2 上層	口径 16.8	ナデ ハケ		浅黄褐色	60%
32	17-1	土師器	甕(布留)	落ち込み 2 上層	口径 16.2	ナデ ハケ・ナデ	ハケ ナデ	灰黃褐色 浅黃	40%
33	17-1	土師器	甕(布留)	落ち込み 2 上層	口径 16.0	ナデ	ハケ ナデ	灰白・暗灰	30%
34	17-1	須恵器	杯壺	落ち込み 2 上層	口径 16.4 番高 4.3	回転ナデ	回転ケズリ 回転ナデ	灰 45%	
35		須恵器	杯壺	落ち込み 2 上層	口径 13.8	回転ナデ	回転ケズリ 回転ナデ	灰白	20%
36		須恵器	杯身	落ち込み 2 上層	口径 10.9	回転ナデ	-	灰白	5%
37		七脚 ミニチュア上器	落ち込み 2	御都径 2.3	-	-	淡黄褐色 黒褐色	100%	
38		土師器	落ち込み 2	御都径 2.3	-	-	てづくね ナデ	に赤い 食糞	100%
39		土師器	甕	落ち込み 2 下層	口径 15.8	ナデ		淡黄	12%
40		土師器	甕(布留)	落ち込み 2 下層	口径 13.6	ナデ		淡黄 に赤い	30%

II-4表 A-2区土器觀察表2

No	図版	器種	出土位置	法量(cm)	上縁形(外縁)		側部(斜邊)	底部(裏面)		色調	残存度	備考
					上段:外縁	下段:内縁		上段:外縁	下段:内縁			
41		土師器 壺	落ち込み2 下層	口径 17.2	ハケ					灰白 灰青	25%	
42		土師器 壺	落ち込み2 下層	口径 16.0	ハケ		ハケ			灰白 灰青	25%	
43		土師器 壺(老乳)	落ち込み2 上層	口径 26.0			ハケ ケズリ	ハケ 押付		灰白 灰青 にぶい黄緑	一	
44	17-1	土師器 直口壺 (布留)	溝 2	口径 9.5 高さ 16.2	ナデ		ミガキ-ケズリ ケズリ+ナデ	ナデ 板ナデ		灰白	100%	
45	17-1	土師器 小型丸足壺	溝 2	口径 6.9 高さ 8.6	ナデ		ハケ ケズリ+ナデ	ハケ+ナデ 板ナデ		灰白	100%	
46		土師器 壺(布留)	溝 2	口径 14.2	ナデ		ハケ ナデ			にぶい黄緑	25%	
47		土師器 壺(老乳)	溝 2	口径 14.4	ナデ					灰白	45%	
48	17-1	土師器 壺(老乳)	溝 2	口径 13.0 高さ 14.5	ナデ		ハケ ケズリ	ハケ 押付		灰白 灰青 にぶい緑	95%	
49	17-1	土師器 直口壺 (布留)	溝 2				ナデ ハケ	ハケ 押付+ナデ		灰青 灰灰	95%	
50	18-1	土師器 小型合食	溝 2	腹直径 15.0			ミガキ ハケ	-		浅黄 灰青	25%	
51		弥生 跖	溝 2	口径 15.0 高さ 6.0	-		ナデ -	-		灰白 にぶい緑	35%	
52		土師器 高杯	溝 2	受部径 28.8	-					浅黄 灰白	10%	
53	18-4	土師器 高杯	溝 2	受部径 16.0	-		ハケ ケズリ	ハケ		灰白 にぶい緑	52%	
54		土師器 高杯	溝 2	腹直径 15.0	ハケ		ミガキ ケズリ	ハケ		灰白 灰青	45%	
55	18-2	土師器 高杯	溝 2	口径 19.0	ナデ+ハケ		ハケ?	ハケ		灰 にぶい緑	90%	
56	18-3	土師器 高杯	溝 2	口径 17.1 高さ 12.5	ハケ		ケズリ	ハケ		浅黄	100%	
57		土師器 高杯	溝 2	高さ 16.6			ハケ ケズリ	ハケ		灰青	50%	
58		土師器 高杯	溝 2	腹直径 22.0			-	ハケ		灰白	75%	
59		織文 深鉢	溝 2	口径 31.6	ナデ		ケズリ			浅黄 灰青	15%	
60		弥生 壺	溝 2 級下層	口径 13.8	ナデ		タタキ ハケ			にぶい黄緑	30%	
61		弥生 壺	溝 2 級下層	高さ 3.8			タタキ -			にぶい黄緑 灰灰	20%	
62		弥生 壺	溝 2 級下層	高さ 2.7			タタキ -	ケズリ ハケ		黄灰 灰青	100%	
63		弥生 壺	溝 2 級下層	高さ 2.5			タタキ -	- ナデ		にぶい黄緑 灰青	100%	

5.A-3区の調査

(1) 調査区の概要

当調査区は全長60m、幅1.5~3mをはかる。当調査区における遺構検出面の標高は北端で14.8m、南端で14.2mをはかり、若干の高低差が認められる。この高低差を反映するように、北部では中世以降の耕作土（第Ⅲ層）の堆積が確認されただけにとどまり、包含層の堆積が認められたのは中~南部に限られるが、南部のほとんどは削平を受けており堆積の状況は十分に確認にはできなかった。また、調査区中部一帯では、B-6・7区と同様に中世耕作土の下に褐色粗粒砂からなる水成層（第V層対応層）を確認した。よって、近世耕作土より以下の基本層序の構成は南北で微妙に異なるが、大枠では「II-2周辺の地形と基本層序」に述べたところと対応する。なお、遺構はすべて段丘上面に堆積する灰白色粘土層上面（第Ⅶ層）から検出した。

(2) 検出した遺構と出土遺物

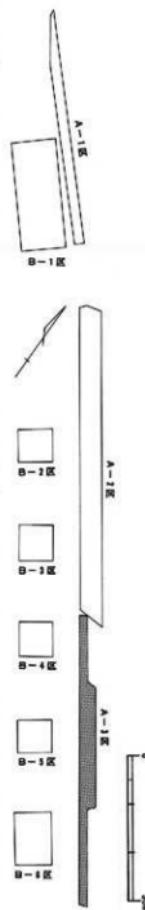
当調査区では、60基を数える土坑を検出した。これらの土坑は、ほぼ同一の性格を有することから、一括して土坑群として扱うこととした。

土坑群 検出した土坑は重複するものが多く、また調査区が限定されていることもあって、多数の土坑は部分的な検出にとどまる。このため、正確な規模・形状が明確なものや推定可能なものは一部に限られている。これら形状や規模が推定できるものをみると、土坑の規模・形状に大まか二つの傾向が認められる。一つは直径2m前後をはかる円形の土坑であり、土坑2・9・10などがこれに該当する。もう一つは、長軸が1.0m~1.8mをはかる楕円形の土坑であり、土坑1・4・7などがこれに該当する。後者は規模にばらつきが見られるものの、主軸長が1.6mを前後するグループと1.0mをグループに細分できる。

すべての土坑の埋土には、第Ⅶ層を母材とする灰白色シルト等のブロック土を多量に含み、堆積状況に方向性が認められることで共通する。また、土坑の中には、土坑3・14のように土坑最下層や中層に厚さ2~3cm程度の自然堆積層が存在するものもあり、土坑の埋め戻しが2回以上に及ぶものや開口後しばらく放置されたあとに埋め戻されたものも認められる。

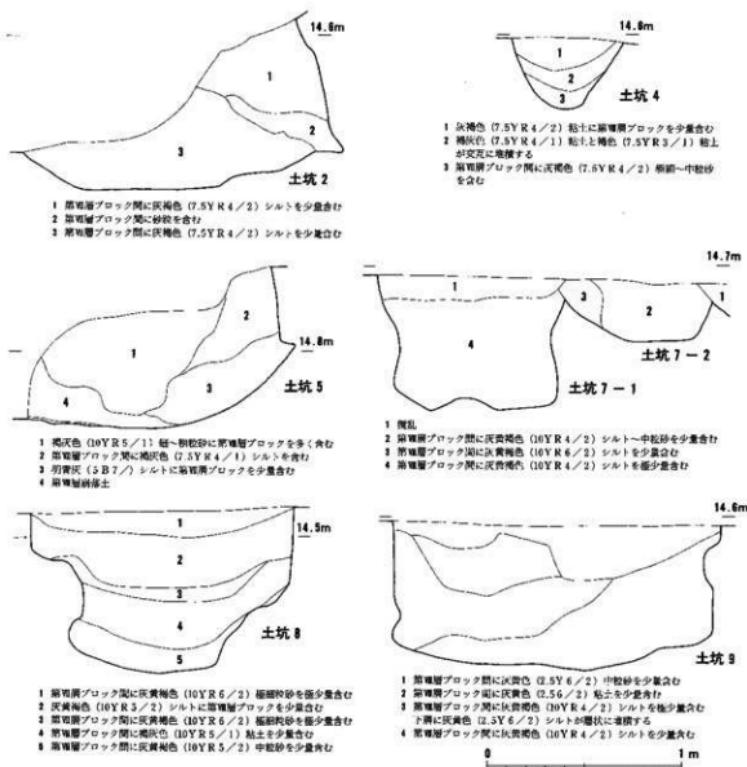
また、土坑は下半部の外周をえぐり取るように掘削されており、袋状の断面形を呈する。このとき、大型の土坑はほぼ下半部全周を、小型のものは一定方向を掘削する傾向が認められる。これに関連して、土坑の検出面には約0.6mの高低差があるにもかかわらず、その掘削面は標高13.7~13.9mの範囲でおさまり、土坑の規模に関係なく掘削が一定面にとどまっていたことがわかる。

土坑群からは須恵器甕、壺や土師器長胴甕、小型甕が出土しているが、その量は少ない。出土した遺物の多くは、大型の破片もしくは一部を損壊した



II-29図
A-3区位置図
(1:1,000)

5.A-3区の剖面



II-30図 土坑群断面図 (1:25)

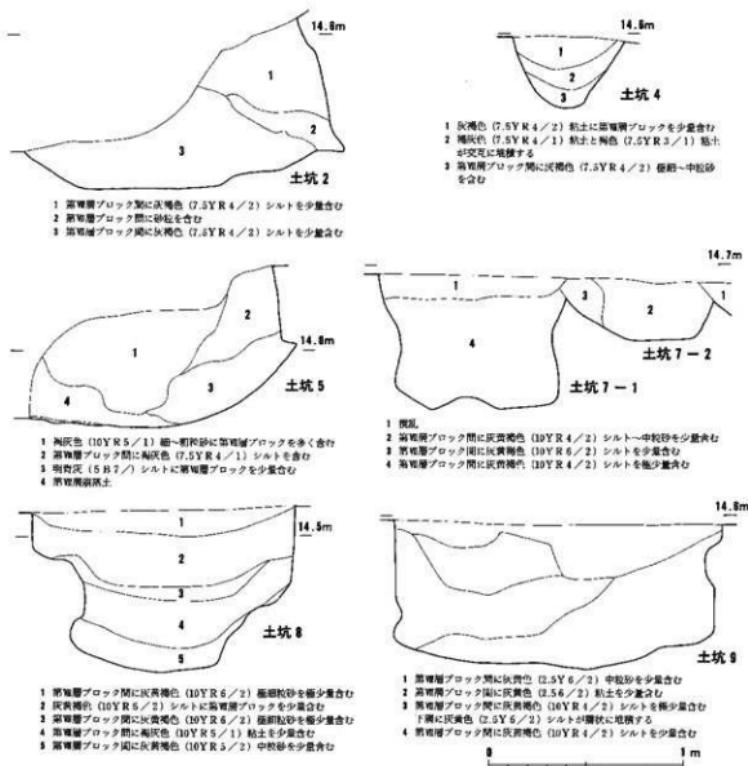
個体で、不特定の土坑から散発的に投棄された状況で出土し、意図的に埋納したと思われる遺物はなかった。遺物のうち図化できたものはII-33図にあげたが、遺物全体をみると土師器長胴甕もしくは小型瓶体部の破片がもっとも多く見られ、須恵器壺・壺類の体部の總量を上回るようである。

なお、図化した遺物のうち、1・3～5の高杯は古墳時代前～中期の特徴を有していることから、土坑の埋め戻しに際して混入したものと考えられる。

2は土坑1から出土した鉢である。体部内外面に横ナデを施すが、ミガキによる暗文加飾は認められない。本報告では、胎土および焼成の状態から土師器として扱ったが、焼成不良の須恵器となる可能性を残す。6～8は、土師器長胴甕である。6は土坑6、7は土坑10、8は土坑11から出土した。6～8の体部外面はいずれもハケを施すが、内面の調整は、6・8が板状工具によるナデと考えられ、7は明確ではないものの押圧痕が残ることからナデの可能性が考えられる。

9～11はいずれも須恵器壺である。9は土坑12、10は土坑14から出土している。11は重機掘削時に土坑14付近から出土したものであり、厳密な出土位置は確定していない。9は中型の壺で口縁は

5.A - 3区の調査



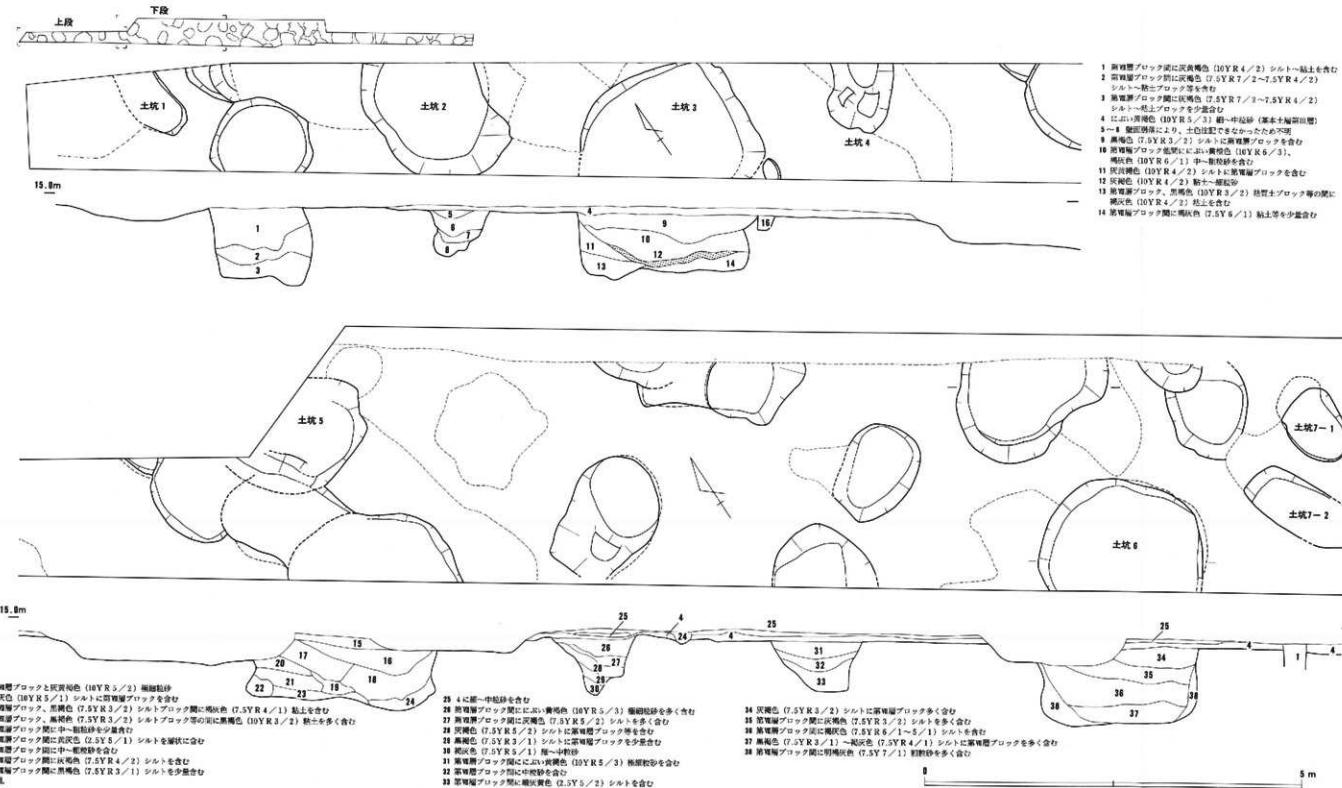
II-30図 土坑群断面図 (1:25)

個体で、不特定の上坑から散発的に投棄された状況で出土し、意図的に埋納したと思われる遺物はなかった。遺物のうち図化できたものは II-33図にあげたが、遺物全体をみると土師器長胴壺もしくは小型壺部の破片がもっとも多く見られ、須恵器壺・壺類の体部の総量を上回るようである。

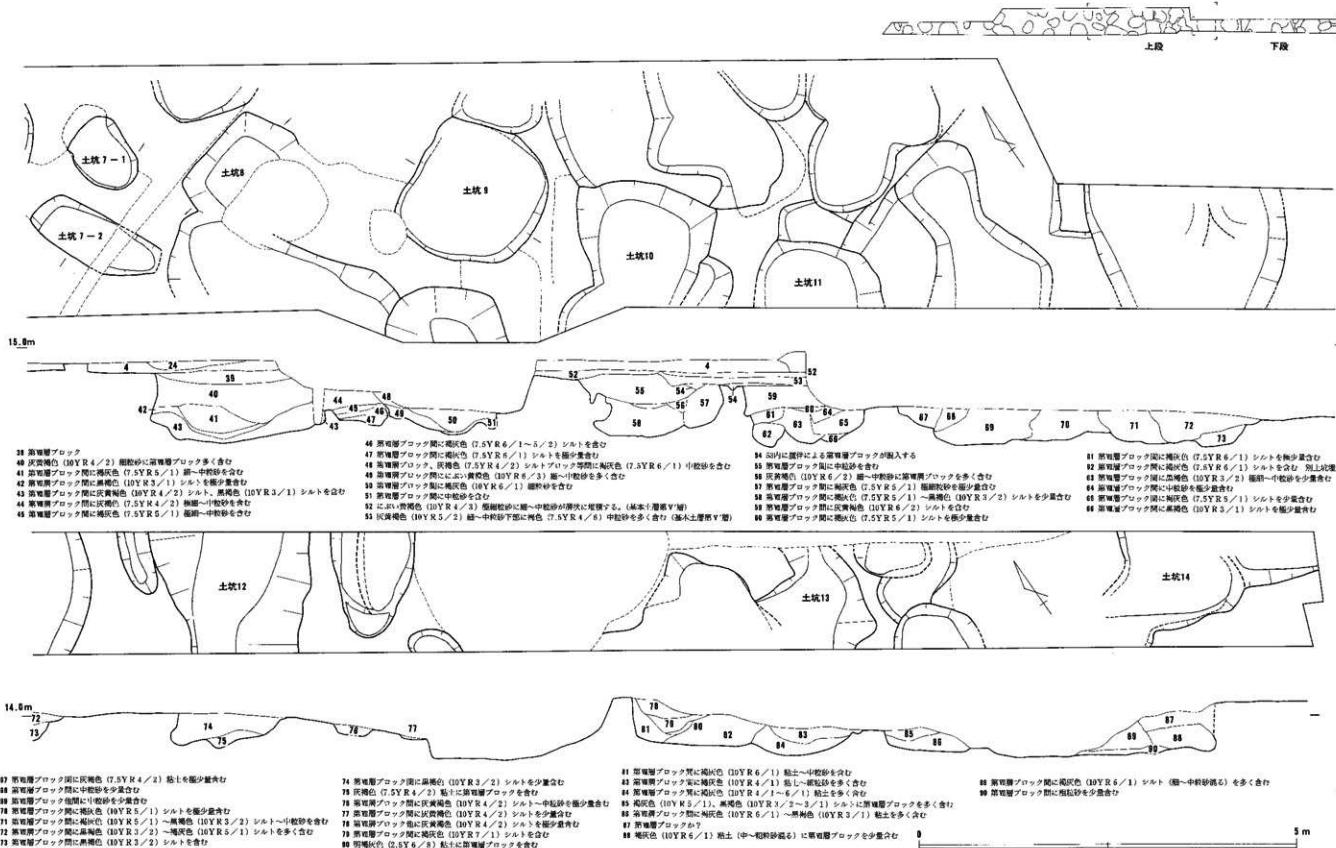
なお、図化した遺物のうち、1・3～5の高杯は古墳時代前～中期の特徴を有していることから、土坑の埋め戻しに際して混入したものと考えられる。

2は上坑1から出土した鉢である。体部内外面に横ナデを施すが、ミガキによる暗文加飾は認められない。本報告では、胎土および焼成の状態から土師器として扱ったが、焼成不良の須恵器となる可能性を残す。6～8は、土師器長胴壺である。6は上坑6、7は上坑10、8は土坑11から出土した。6～8の体部外表面はいずれもハケを施すが、内面の調整は、6・8が板状工具によるナデと考えられ、7は明確ではないものの押圧痕が残ることからナデの可能性が考えられる。

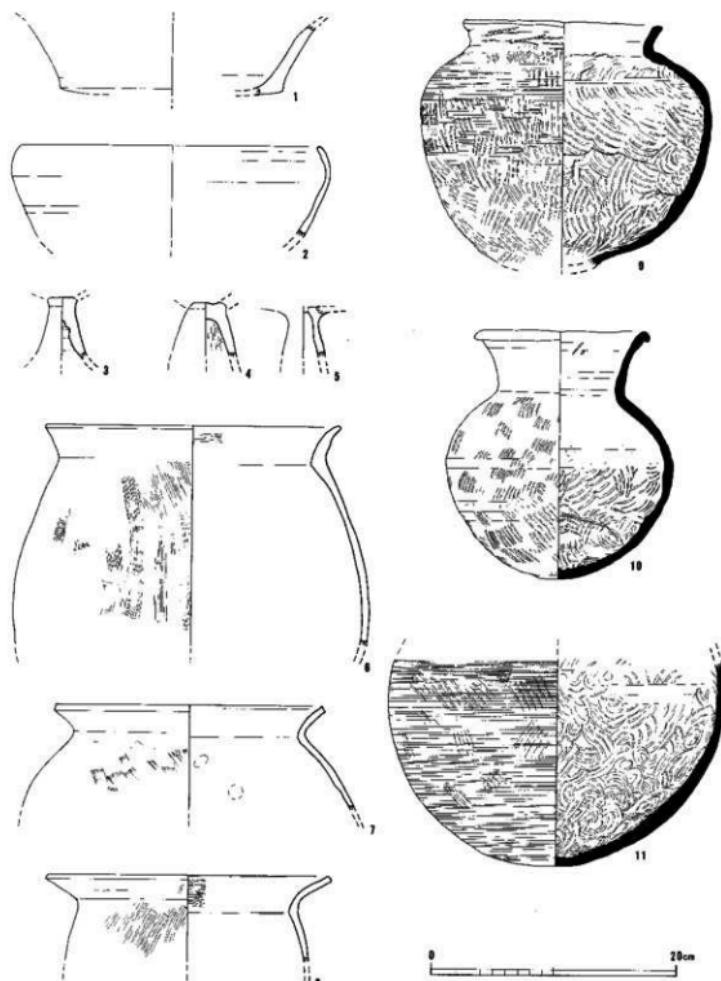
9～11はいずれも須恵器壺である。9は土坑12、10は土坑14から出土している。11は重機掘削時に上坑14付近から出土したものであり、厳密な出土位置は確定していない。9は中型の壺で口縁は



II-31図 A-3区平面・断面図1 (1:50)



II-32図 A-3区平面・断面図2 (1:50)



II-33図 土坑群出土遺物（1：4）

短くやや外反氣味に立ち上がる。体部下にはカキメを施す。10は、小型の壺ではほぼ完形であるが、口縁部の一部が欠損している。口縁部は外反し、端部は折り込まれ丸く仕上げている。体部外面には横ナデを施すが、タタキ痕を明確に残す。11の体部外面にはカキメが施されている。この他に上坑4からTK-201型式併行の須恵器杯身が出土している。この杯身については、本報告では掲載

5.A-3区の調査

しなかつたが胎土分析を行なった結果、大阪周辺の須恵器窯で生産された須恵器とは異なる胎土を有していることが指摘され、搬入品となる可能性が想定されている。

(3) 小結

当調査区で検出した土坑群は、A-2・4区などにも広がるものであり、広い範囲に分布する。これら土坑は、その特徴からみて特定土層の採掘を目的とする可能性が高いと考えられるが、その形状は多様である。土坑の採掘時期は、出土した遺物から古墳時代後期から飛鳥時代にかけて、特に6世紀末から7世紀前半にかけての時期が中心時期となるものと考えられる。また、土坑1から出土した鉢は8世紀前半頃となる可能性が考えられ、土坑群の掘削が終了する時期を知る上で注目されよう。

II-5表 A-3区土器観察表

No	回版	器種	出土位置	法量(cm) -底：外面 下段：内面	口部(受部) -底：外面 下段：内面	体部(軸部) -底：外面 下段：内面	底部(脚部) -底：外面 下段：内面	色調	残存度	備考
1		土器器 高杯	土坑1	体部径 11.6 -	-	-	-	橙	-	
2	20-1	土器器 鉢	土坑1	口径 24.0	ナデ	ナデ	ナデ	灰白～灰青	30%	採掘開始成形の可能性
3		土器器 高杯	土坑1	-	-	-	-	明黄褐	100%	
4		土器器 高杯	土坑3	-	-	ケズリ	-	にごい橙	50%	
5		土器器 高杯	土坑3	-	-	-	-	にごい橙	50%	
6	20-2	土器器 長脚甕	土坑6	口径 24.0 ハケ	ナデ ハケ	ハケ 板ナデか?	-	橙	50%	
7		土器器 長脚甕	土坑10	口径 21.5	ナデ	ハケ 押住	-	灰青～橙	50%	
8	20-3	土器器 長脚甕	土坑11	口径 23.0	ナデ ハケ	ハケ 板ナデ	-	浅黄褐～灰白	25%	
9	20-4	須恵器 瓢	土坑12	口径 16.0	タタキ 四輪ナデ	タタキのちカキメ 当て具痕	-	灰～灰白	60%	
10	21-1	須恵器 瓢	土坑14	口径 13.4	回転ナデ	タタキ 当て具痕	タタキ 当て具痕	灰～灰白	100%	
11	21-2	須恵器 瓢	土坑14付近	体部径 27.4	-	タタキのちカキメ 当て具痕	タタキのちカキメ 当て具痕	灰白	100%	

6.A-4区の調査

(1) 調査区の概要

調査範囲は南北方向に設定された幅2m、長さ37mで、面積は95m²である。

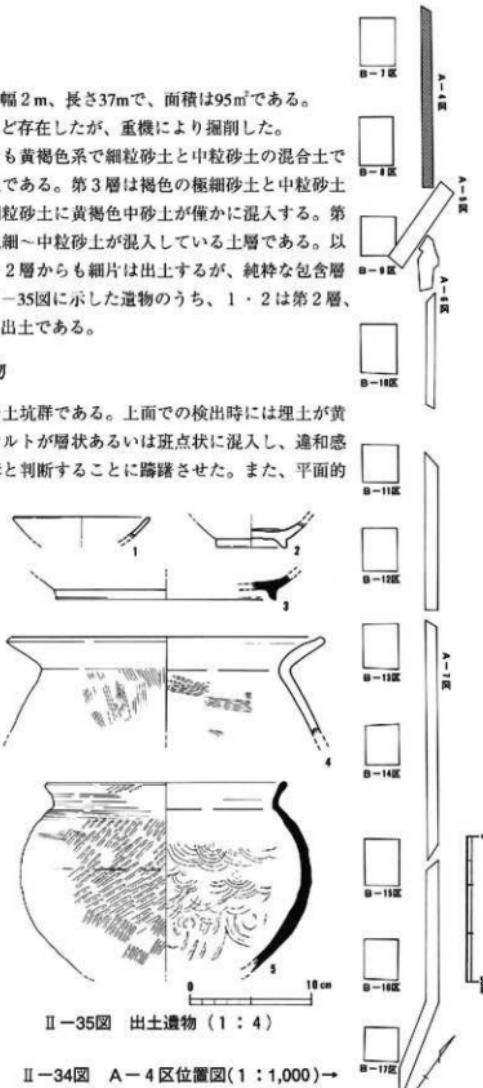
第1層の上部には表土層が10cmほど存在したが、重機により掘削した。

第1層は黄褐色中粒砂土、第2層も黄褐色系で細粒砂土と中粒砂土の混合土である。この1層・2層は水田の客土である。第3層は褐色の極細砂土と中粒砂土の混合土である。第4層は黒褐色細粒砂土に黄褐色中砂土が僅かに混入する。第5層は黒褐色極細粒砂土に明黄褐色細～中粒砂土が混入している土層である。以下は遺構埋土である。遺物は第1～2層からも細片は出土するが、純粹な包含層としては第3層～第5層である。II-35図に示した遺物のうち、1・2は第2層、3・4は第3層、5は第5層からの出土である。

(2) 検出した遺構と出土遺物

土坑群 検出した遺構は不定形な土坑群である。上面での検出時には埋土が黄褐色粘土（地山）のなかに黒褐色シルトが層状あるいは斑点状に混入し、違和感のある堆積土を形成しており、遺構と判断することに躊躇させた。また、平面的には確実な遺構の切りあいを確認することは困難であった。埋土の掘削を始めると壁面がオーバーハングしたり、多面的な形を形成するなど、最後まで遺構としての性格が掴めないまま調査を終了した。これらの土坑はすべてが切り合っており、正確な形や規模は明確にし難いが、底面の状況から円形あるいは梢円形を呈しているとみられる。径は1～2m前後、深さは1m弱である。これらの土坑群からは土器が1点も出土しないことから時期は判断できなかった。

出土遺物 II-35図に5点ほど示した。上記したように遺構から遺物は出土しておらず、すべて上層から出土したものである。1は第2層から出土した唐津焼とみられる小皿である。



II-35図 出土遺物 (1:4)

II-34図 A-4区位置図(1:1,000)→

2も第2層出土で灰釉陶器とみられる碗である。3・4は第3層出土のもので、3は須恵器で高台付きの杯である。4は土師器の壺である。口縁部内外面はナデ仕上げ、体部外面は縱方向のハケ、内面は斜め方向のハケ仕上げである。5は第5層出土の須恵器で、球形の体部に短く外反する口縁部を有する。口縁部内外面ともナデ仕上げであるが、タタキの痕跡をわずかに残す。体部外面は右上がりのタタキ痕、内面には同心円文の当て具の痕跡を残す。これらの出土遺物の時期は1は江戸時代、2・3は平安時代、4・5は奈良時代前期ごろのものとみられる。

(3) 小結

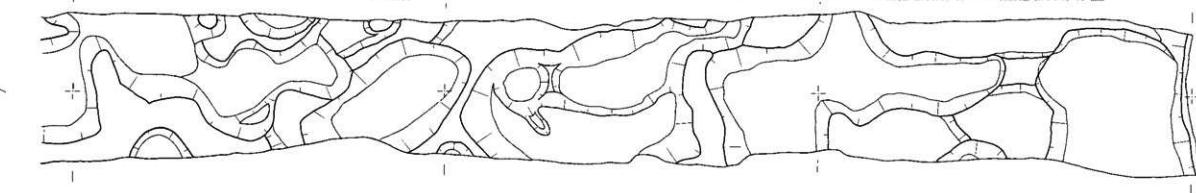
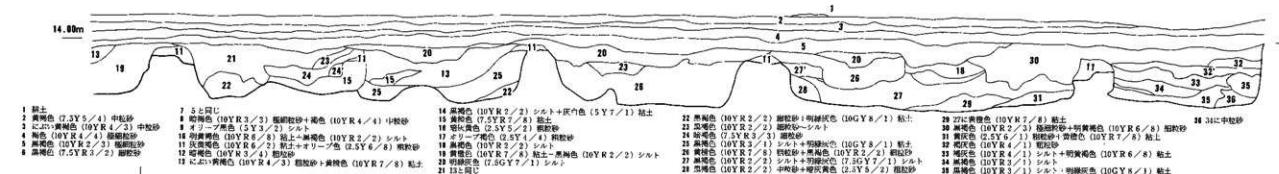
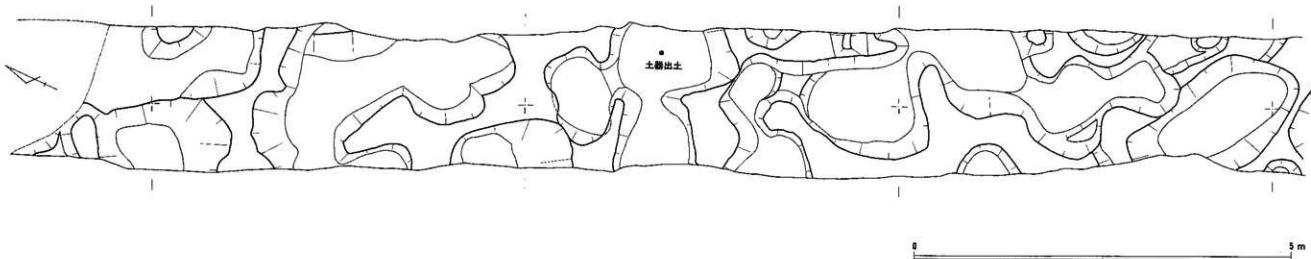
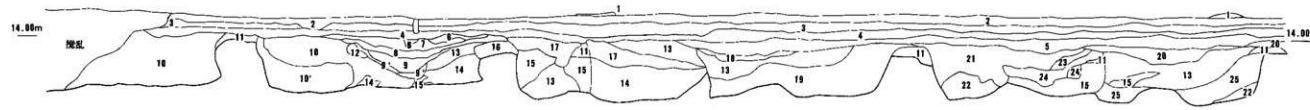
まずこれらの土坑群の性格であるが、後の調査でも同様なものが検出され、土塙墓か粘土採掘坑の可能性が考えられるようになり、その判断は埋土の脂肪酸分析に委ねることになった。その結果、現状では粘土採掘坑として捉えている。

この土坑群は採掘した後、埋められたのではなく、採掘するために生じた残土を廃棄したものである。したがって完全に埋まっているものが存在し、その上部に黒褐色シルトや砂粒土が凹みに堆積し、溝あるいは土坑状の状況を呈することになったのである。

時期は出土遺物がないことから明確にできないが、II-35図5に示すような土器が土坑の上層（基本層序の第5層）から出土していることによりそれ以前であることはおさえることができ、その時期は7世紀以前である。

II-6表 A-4区土器観察表

No	層級	器種	出土位置	法寸(cm)	口縁部(外側) 上段：外縁；下段：内縁	体部(側面) 上段：外側；下段：内側	底部(裏面) 上段：外刃；下段：内刃	色調	残存度	備考	
1	肥前系陶器	皿	包含層	口径 11.0	回転ケズリ			褐(新牛) 灰青(鰐)	10%		
2	灰釉陶器	碗	包含層	底深径 5.6		回転ケズリ ナデ	回転ケズリ ナデ	灰白	40%		
3	須恵器	杯B	包含層	底深径 18.0	—		回転・ナデ・ナデ ナデ	灰白 にぶい煙	12%		
4	土師器	瓦制壺	包含層	口径 25.4	ナデ	ハケ		浅黄	6%		
5	21-3	須恵器	壺	包含層	口径 19.6	タタキのちナデ ナデ	タタキ 一部ナデ		浅黄 灰白	15%	



II-36図 A-4区平面・断面図 (1:50)

7.A-5区の調査

(1) 調査区の概要

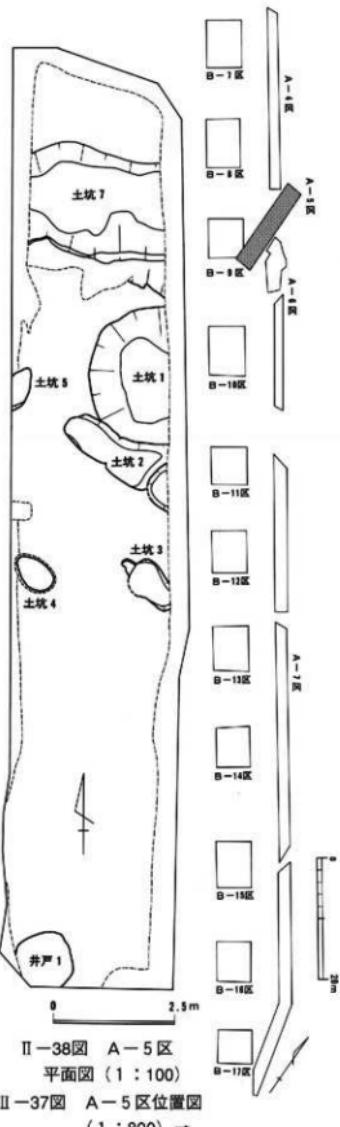
当初、調査対象範囲に設定されていない地区であったが、水路護岸を撤去後にさらに掘削を行うことが判明し、急遽工事を中止し調査を行うこととした。なお、遺構面は工事のため少なくとも0.5m以上は削平され、また調査に着手する段階では周囲の土留めが終了しており、基本層序も明確にできなかった。

(2) 検出した遺構と出土遺物

当調査区からは土坑9基、井戸1基を検出した。また、上面の削平が著しいことや南に位置するA-6区の状況をふまえると、この他にも柱穴など集落関連遺構が存在した可能性は十分に残されている。

なお、土坑9基は、他の調査区にみられた土坑と同様の特徴を有することから、土坑群として扱い一括して報告することにした。

土坑群 検出した土坑は9基を数える。これらの土坑は調査区の北部を中心に分布する。土坑は、2基以上の土坑が重複した土坑7および調査区外に伸びる土坑6を除き、規模・形状から二つのグループにわけることができる。一つは直径2.9mをはかる平面円形の土坑1、もう一つは主軸長1.0m前後をはかり、平面楕円形を呈する土坑2～5のグループである。これらの土坑はいずれも土坑下半部がえぐり取られるように掘削され、袋状の断面形を呈する。また埋土に第Ⅳ層を母材とする灰白色シルトのブロック土を含むことでも共通しており、その性格に大きな違いは認めにくい。なお、土坑1・2・4では最下層に、土坑3では中層に漏水による堆積が考えられる均質な黒褐色シルト層などを確認しており、これらの土坑が掘削後、しばらく時間をおいて埋め戻されたり、あるいは埋め戻しが中断することがあった可能性が考えられる。



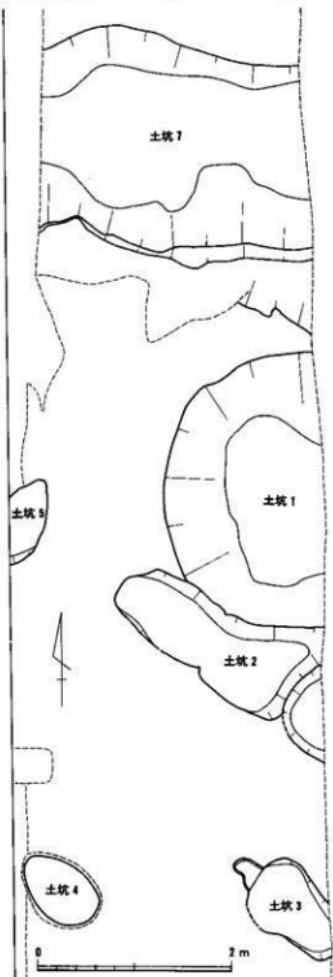
また、当調査区土坑1・2・7について、各土坑の上下2~3層から土壤を採取し、後日土壤理化学分析および脂質分析を行った。その詳細については「Ⅲ 2. 蛍池西遺跡の土坑内容物について」で報告されるが、当調査区のものについてはリン酸等の含有は少なく、または乳類等に由来する高級脂肪酸も土壤として期待されるほど検出されなかったことから、遺体が埋葬された可能性はないものと判断できる。

各土坑からは、他の調査区と同様に土師器長胴壺や小型壺、また須恵器壺の破片が出土している。このうち、図化できた遺物は土坑1・2の出土遺物に限られた。1・2は土坑1から、3~5は土坑2から出土したものである。4を除く他の遺物はすべて細片であり、土坑埋め戻し時に流入したものと考えられる。

II-41図1~3の須恵器片は、胎土および焼成の状況が極めて類似していることから同一個体と考えられる。3は壺の口縁部にあたるが、直径を復元できるほどは残っていない。口縁部下部に稜線状の突帯が付くものと考えられる。

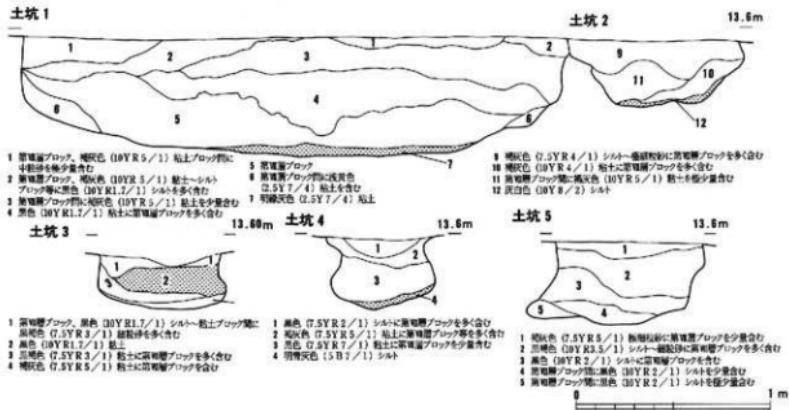
1・2は体部であるが、器壁の変化は殆どないうえ、外面はタタキ痕を丁寧にすり消し、内面も板状工具による丁寧なナデを施すことから、図化した断面の上下関係は明確ではない。なお、1~3は、口縁の形態からTK-216型式に併行するものと考えられるが、共伴した土師器長胴壺(4)は、体部外面にハケ調整を、内面にケズリを施していることから、7世紀前後の時期と推定できる。のことから、1~3が土坑の時期を示すものとは考えにくく、またA-6区の包含層からも同一個体と考えられる須恵器片が出土していることから、これらの遺物はA-6区周辺に広がる包含層から流入した可能性が考えられる。

また、図には示さなかったものの、土坑3から6世紀以降と考えられる須恵器壺体部の大型破片が出土しており、これら土坑群の時期は6世紀以降、他の調査区のものを参考にするならば、7世紀前後を中心とする時期の所産と考えられる。

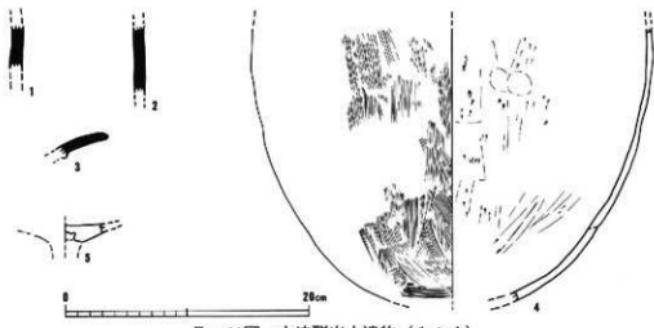


II-39図 土坑群平面図 (1:50)

II 発掘調査の成果



II-40図 土坑1～5断面図 (1:25)

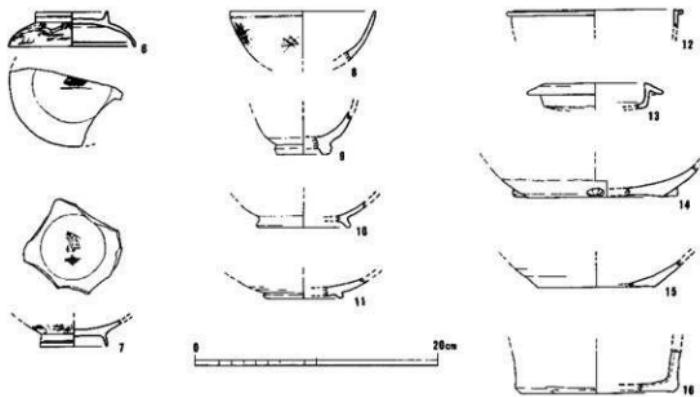


II-41図 土坑群出土遺物 (1:4)

井戸1 調査区南端で検出した、直径1.2mをはかる円形の井戸である。井戸の上面は著しく削平され、また完掘していないことから、井戸の深さや本来の構造については不明であるが、掘削部分では井戸枠などを確認していないことから素掘りの井戸と考えられる。

井戸内には、褐灰色の比較的均質な細粒砂が堆積していたが、完掘していないため井戸下層の状況は明確ではない。埋土からは近世陶磁器を主体とする遺物が若干出土した。

6～8は肥前系磁器である。6の破断面には「継」による接着痕が認められる。天井部内面には花鳥風の意匠を染め付けている。7は碗として扱っているが、底部が残存するだけで蓋となる可能性もある。見込みに水鳥の意匠を染め付けている。9は陶器碗の底部である。厚めの器壁に緑灰釉を施釉する。外面の施釉にはわずかに塗掛けの痕跡が確認できる。10は高台付の土師器碗である。底部が残存するだけで全体の器形は明確ではない。高台は手づくねにより貼り付けられている。11は灰釉陶器碗の底部で、釉薬は塗掛けとされ、貼付高台が特徴となる。黒窓90号窯に併行するもの



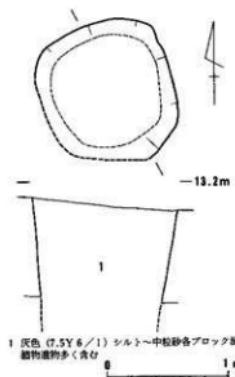
II-42図 井戸1出土遺物 (1 : 4)

と考えられる。10・11は10世紀前後の遺物であり、包含層からの流入品と考えられる。

14・15は美濃系の陶器と考えられる。外面に鉄軸がかけられている。16は備前焼の鉢と考えられるが明確ではない。底部は回転ケズリを施す。以上、10・11を除く遺物は19世紀以降の所産となる。

(3) 小結

井戸1およびその周辺は暗渠抜去などにより削平されて周辺の状況は明確ではないため、井戸が屋敷などに伴うものか、灌漑用になるのか判然としない。ただし、周辺の調査区では宅地等に見られる整地層は全く確認されていないことから、近世以降に灌漑を目的として掘削された可能性が考えられる。また、当調査区は現在も機能している用水路の直近に掘削されていることは、井戸の性格を考える上で注意される。なお、同様の特徴を有する素掘りの井戸は、B-5区、C-1区などでも検出されているが、その分布をみると特に当該調査区周辺に多く見られ、土地利用の点で注目される。

II-43図
井戸1平面・断面図 (1 : 40)

II-7表 A-5区土器観察表

No	因版	器種	出土位置	法量(cm)	口部部(受部) 上段：外面 下段：内面	体部(側部) 上段：外面 下段：内面	底部(脚部) 上段：外面 下段：内面	色調	残存状	備考
1		須恵器 壺	土坑1	破片		押圧 ナデ		灰～紫灰	—	
2		須恵器 壺	土坑1	破片		押圧 ナデ		灰～紫灰	—	
3		須恵器 壺	土坑2	破片	ナデ			灰～紫灰	—	
4		土師器 民請壺	土坑2			ハケ ケズリ		浅黄～ にぶい黄黄	—	
5		土師器 高杯	土坑2			ミガキ ナデ		灰黄～灰黄	—	
6	22-1	肥前系縦轍 盖	井戸1	口径 10.4	回転ケズリ 回転ナデ	回転ケズリ 回転ナデ		明緑灰～灰白	60%	
7		肥前系縦轍 直？	井戸1	高台径 5.6	—	回転ナデ		灰白～青灰	100%	
8	22-1	肥前系縦轍 陶	井戸1	口径 12.0	回転ケズリ 回転ナデ	回転ケズリ 回転ナデ		灰白～灰 水白・尾	40%	
9	22-1	肥前系縦轍 陶	井戸1	底盤径 4.5		高台ケズリ出し ナデ		浅黄根 ・にぶい根	30%	
10	22-1	土師器 線	井戸1	底盤径 7.8		貼行高台 —		浅黄根 灰白・橙	40%	
11	22-1	灰陶陶器 袋	井戸1	底盤径 6.0		ケズリ出し高台 ナデ		灰白～灰白	15%	
12		盪合台	井戸1		回転ナデ			灰～ 明オリーブ灰	—	
13	22-1	急須の落とし蓋	井戸1	口径 8.4	ナデ 施釉			オリーブ灰～ 淡黄	30%	
14	22-1	袋足陶器 路または上蓋	井戸1	直脚径 11.2		回転ナデ ナデ 施釉		暗褐～灰黄	20%	
15	22-1	跳ね陶器 跡？	井戸1	直脚径 9.7	—	ケズリ ナデ 施釉		灰黃～にぶい根	10%	
16	22-1	猪首焼 跡	井戸1	底盤径 13.8		回転ナデ		暗灰～ にぶい赤根	10%	

8.A-6区の調査

(1) 調査区の概要

当調査区では、耕作土以下に第Ⅲ層と対応が考えられる近世耕作土、褐灰色細粒砂からなる耕作土（第Ⅳ層）、暗褐色細粒砂からなる古墳時代後期頃の遺物包含層（第Ⅴ層）の堆積を確認した。

調査区における第Ⅴ層（段丘形成層）の標高は14.3mとA-5区から一段高くなるためか、近世耕作土以下の上層の層厚は薄く、基本層序との対応は明確にはできないが、褐灰色耕作土（第Ⅳ層対応層？）からは奈良時代の遺物が、また遺物包含層（第ⅤまたはVI層対応層？）からは初期須恵器と考えられる壺体部の破片（II-45図1）が出土しており、これら土層の堆積時期を考える上で参考となる。また、1はA-5区土坑1・2で出土した壺体部および口縁部と同じ特徴をもつことから、同一個体となる可能性がある。

なお、遺構は黄褐色中粒砂からなる段丘形成層上面から検出したが、一部柱穴は包含層上面（第Ⅴ層）から掘り込まれた可能性が高い。

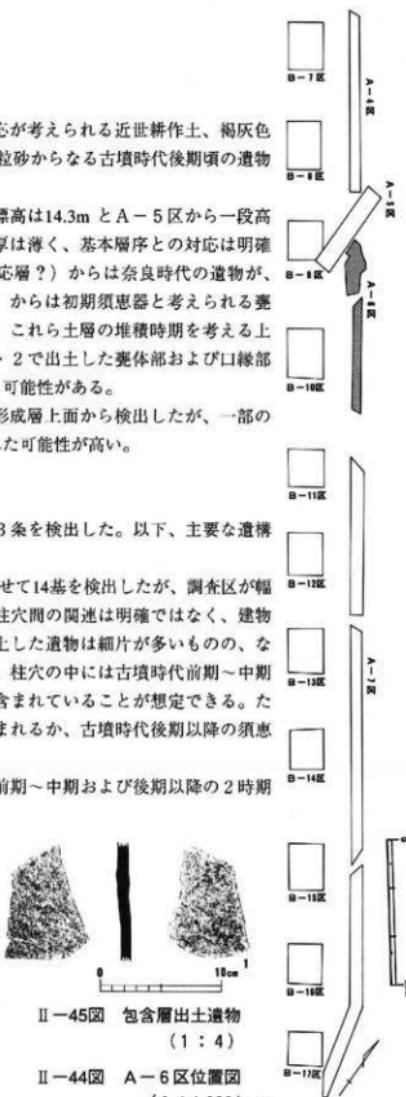
(2) 検出した遺構

調査区からは、柱穴14基、土坑7基、溝3条を検出した。以下、主要な遺構について検討する。

柱穴 明確に柱根を確認したものはあわせて14基を検出したが、調査区が幅1.5m前後のトレチであることもあって、柱穴間の関連は明確ではなく、建物には復元できなかった。これら柱穴から出土した遺物は細片が多いものの、なかには土師器として認識できるものもあり、柱穴の中には古墳時代前期～中期にかけての所産となる可能性があるものも含まれていることが想定できる。ただし、柱穴の多くの多くは包含層上面から掘り込まれるか、古墳時代後期以降の須恵器片を含むものであった。

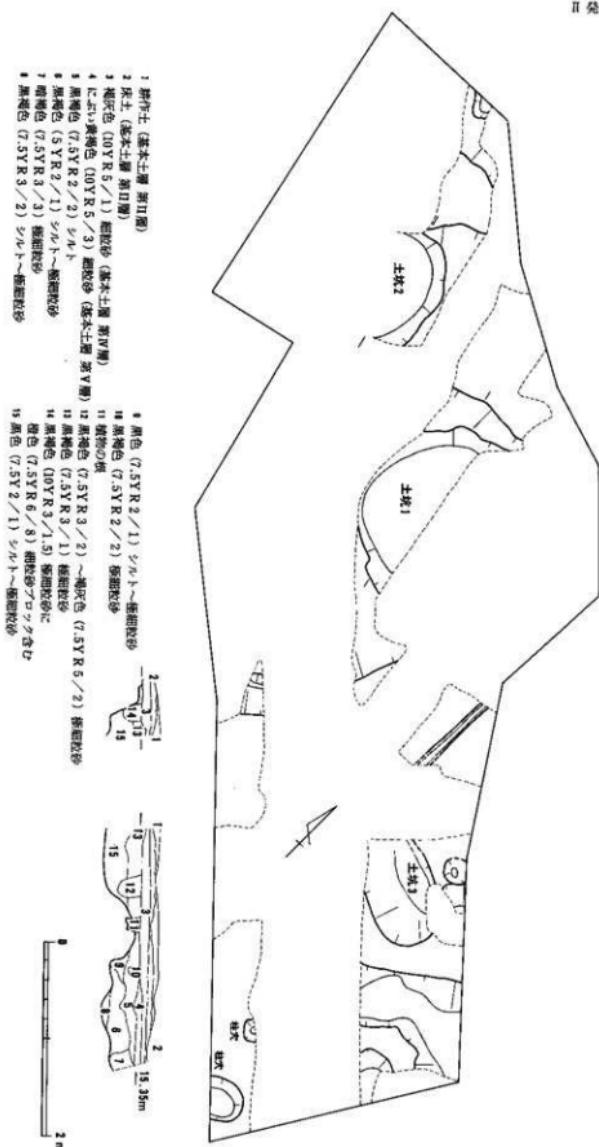
これら主要な柱穴の時期から、古墳時代前期～中期および後期以降の2時期の集落が存在した可能性が考えられるが、周辺の調査区の状況から西方への広がりは認めがたく、集落の中心は調査区東方に広がる平坦部に位置する可能性が考えられる。

土坑1・2 調査区北部で検出した、大型の土坑である。土坑1は、直径2.4m、深さ0.9mをはかり、土坑の上半部は擂鉢状に開口し、下半部は袋状の断面形を呈する。土坑2は直径1.2mと土坑1にくらべ小型で、土坑上半部は土坑1のように擂鉢状の



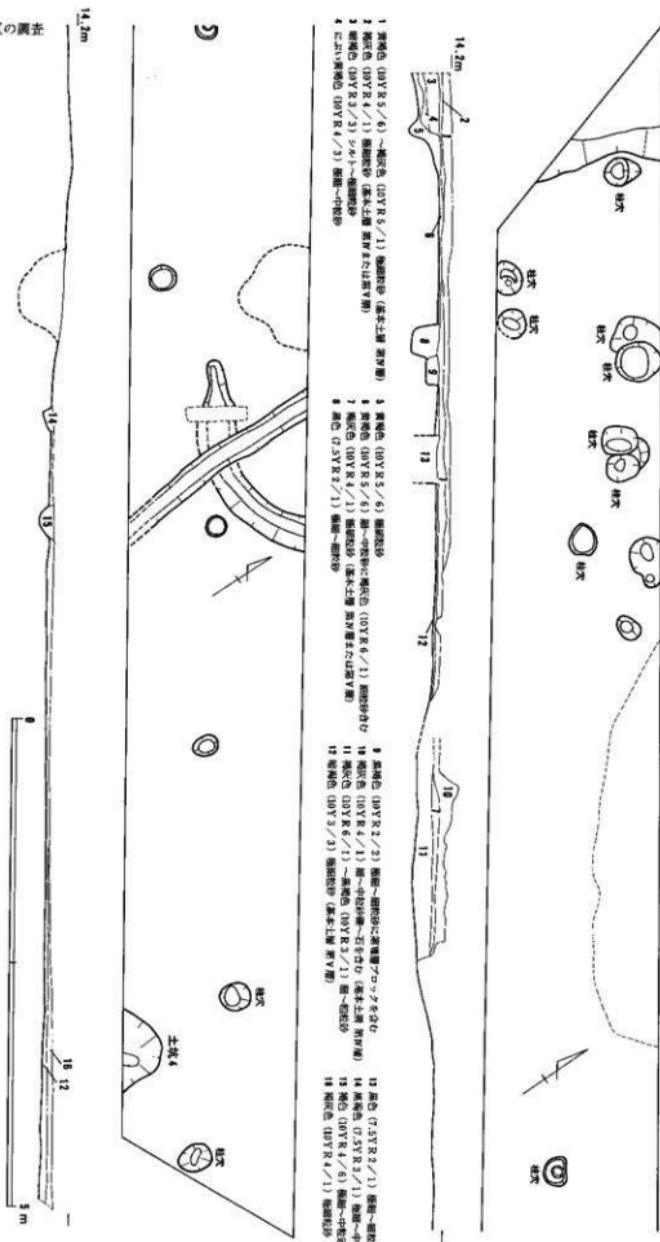
II-45図 包含層出土遺物
(1:4)

II-44図 A-6区位置図
(1:1,000) →

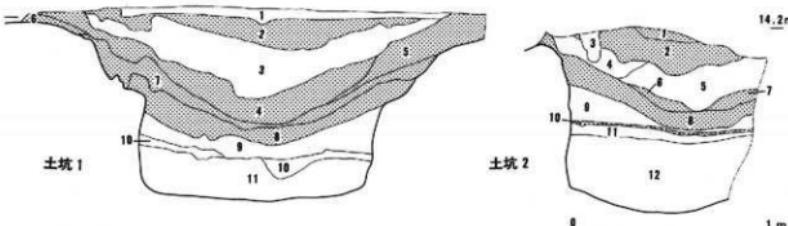


II-46図 A-6区平面・断面図1 (1:50)

8.A-6区の調査



II-47図 A-6区平面・断面図2 (1 : 50)



- 1 にぶい黄褐色 (10YR 4/4) シルト (基本土層 埋め戻しの一部)
 2 黒色 (7.5YR 4/4) シルト
 3 灰褐色 (10YR 3/3) シルト～粘土質砂に埋め戻しブロックを多く含む
 4 黑褐色 (10YR 3/1) シルト～粘土質砂
 5 黑褐色 (10YR 2/2) シルト
 6 黄褐色 (7.5YR 3/4) シルト～細粒砂
 7 黑褐色 (7.5YR 3/1) シルト
 8 灰褐色 (7.5YR 4/2) 黏土と黑褐色 (10YR 3/2) 黏土が層状に堆積する
 9 黑褐色 (10YR 2/2) 黏土層に埋め戻しブロックを含む
 10 黑褐色 (10YR 2/2) 黏土に紫青層ブロックを少量含む
 11 紫青層ブロック間に灰褐色 (10YR 5/3) シルトを少量含む

II-48図 土坑1・2断面図 (1:25)

開口部を有しないものの、下部の形状と埋土の特徴は共通する。

これら土坑1・2の上層は、灰白色シルトなどのブロック土を含む埋戻土と黒色シルトを主体とする腐植土の交互堆積からなる。下層は前者の占める比率が著しく高くなり、北部に展開する土坑群と全く同じ堆積状況を呈する。これらの特徴から、土坑1・2は土坑群の一部になることが言える。

土坑3・4 調査区中部および南部でそれぞれ1基ずつ土坑を検出している。土坑3は地下埋設物による擾乱で削平され、また土坑4は調査区外に伸びることから、いずれも規模・形状については明確ではない。また、いずれの土坑からも遺物の出土ではなく、時期は不明である。ただ、土坑内の堆積土に第Ⅲ層を母材とする灰白色シルトなどのブロック土などは含まれておらず、北部で検出している土坑群とは明らかに異なる。柱穴と一連の集落関連遺構になる可能性も残されている。

(3) 小結

当調査区では、土坑群のほかに、柱穴、土坑、溝など集落関連遺構を検出し、これらの遺構から、古墳時代前期頃と後期以降の2時期に集落が展開する可能性が考えられるようになった。また、土坑1・2は過去に著しい削平を受けなかったためか、土坑上半部の状況について明確にできた。これにより、土坑が数次にわたる埋め戻しにより埋没する過程が明らかになった。

II-4表 A-6区土器観察表

No.	回数	器種	出土位置	法縫(cm)	口部縫(受縫)	底部(軸部)	色調	残存度	備考
1		須恵器 瓶	包含層	破片	上縫：外縫 下縫：内縫	上縫：外縫 下縫：内縫	ナガ消し 板ナゲ	灰～紫灰	—

9.A-7区の調査

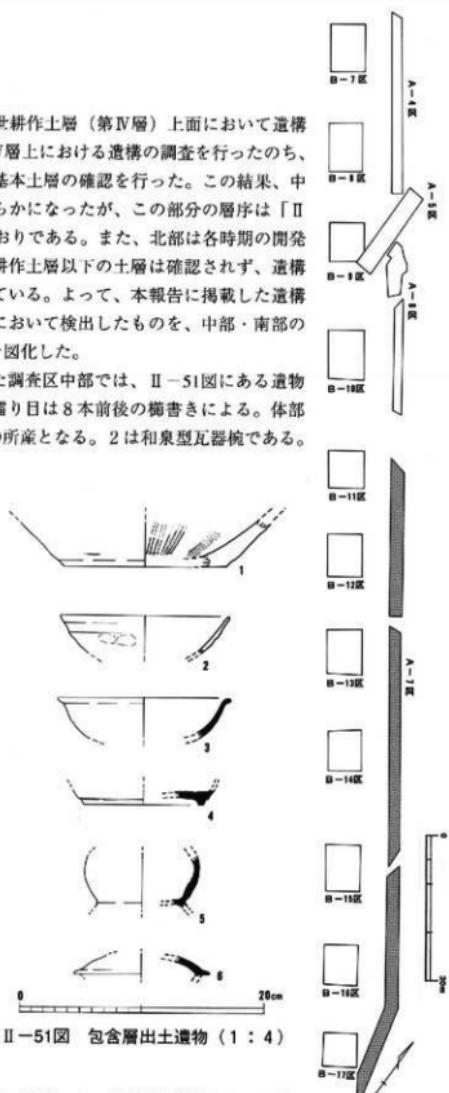
(1) 調査区の概要

当調査区では、段丘形成層および中世耕作土層（第IV層）上面において遺構を検出した。このうち、中南部では第IV層上における遺構の調査を行ったのち、トレンチ内の数箇所にグリッドを設け基本土層の確認を行った。この結果、中部以南では埋没地形に続く緩斜面が明らかになったが、この部分の層序は「II-2.周辺の地形と基本層序」で述べたとおりである。また、北部は各時期の開発による影響を強く受けたらしく、中世耕作土層以下の土層は確認されず、遺構は第V層（段丘形成層）上面で検出している。よって、本報告に掲載した遺構全体図の北部のものは段丘形成層上面において検出したものを、中部・南部のものは中世耕作面上面で検出したものを図化した。

旧耕作土以下の中層がよく残っていた調査区中部では、II-51図にある遺物が出土している。1は備前焼擂鉢で、擂り日は8本前後の櫛書きによる。体部外面は赤色化しており、間壁編年V期の所産となる。2は和泉型瓦器碗である。外面は風化しており、調整は明確ではないが、器形からIII期以降の所産となる。1・2はいずれも第III層から出土したものであるが、1が第III層の堆積時期を反映したものと考えられる。3は須恵器碗であるが、器形からみて縦軸陶器碗に施釉しなかったものと言える。4は須恵器杯B、5は須恵器壺、6は須恵器蓋である。3・4は第IV層、5・6は第V層から出土したものである。

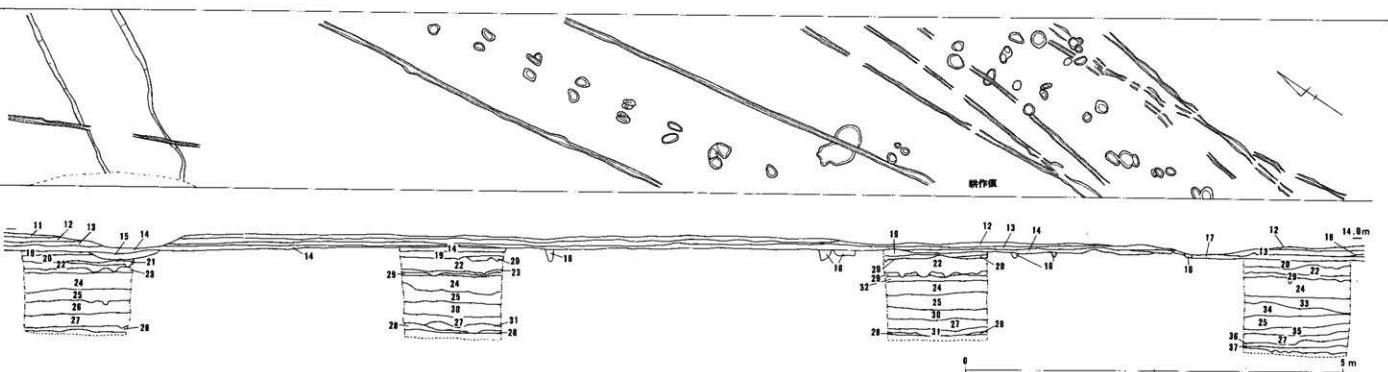
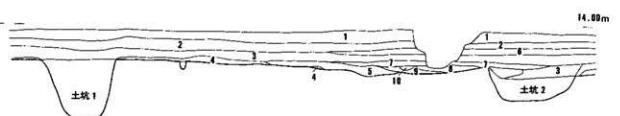
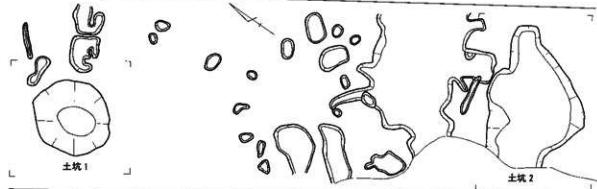
(2) 検出した遺構と出土遺物

当調査区で検出した遺構は、いずれも遺物にまとまりがなく、時期を特定できたものはなかったが、検出面を基準に大体で中世以前と以降の2時期に区分できる。よって、ここでは中世以前を第1期、以降の時期を第2期とし、それぞれ主要な遺構について述べる。



II-51図 包含層出土遺物 (1:4)

II-50図 A-7区位置図 (1:1,000) →



II-52図 A-7区平面図 (1:50)

a. 第1期の遺構

この時期の所産となる可能性が考えられる遺構としては、調査区北部で検出した土坑2基が該当する。以下、主要な遺構について報告する。

土坑1 直径1.0m、深さ0.85mをはかり平面は円形を呈する。土坑は、ほぼ垂直に近い傾斜で掘り込まれ、U字状の断面形となる。埋土は、大まか2層に区分でき、上層には均質な暗褐色極細粒砂が、下層には第Ⅶ層を母材とする灰白色シルトのブロックを含む褐色細粒砂と灰色粗粒砂の交互層が堆積する。これら埋土の堆積状況から、上坑は機能停止後、若干埋め戻されたまま、放置された可能性が想定できる。

同様の特徴を有する土坑は、D-9区、E-1・2区でも検出し、当報告では井戸として扱っているが、上坑1については機能停止後に土器の一括放棄は見られず、下層に機能時の堆積と見られる粗粒砂と黒色細粒砂の交互層がみられないことから、井戸となる可能性はあるものの土坑として扱った。

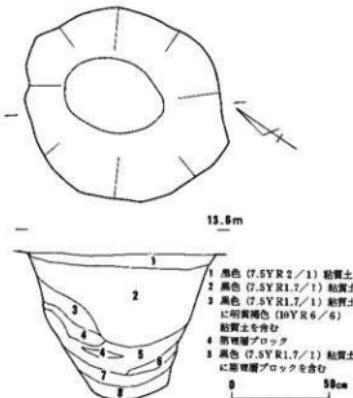
土坑1からは遺物の出土はなく、時期を決定する手がかりはないが、埋土および遺構の特徴から古墳時代前期もしくは中期頃の所産となる可能性が想定できる。

土坑2 幅1.3m、深さ0.4m前後をはかる不整形の土坑である。一見して落ち込み状の遺構のように見えるが、土坑の底面は起伏に富むものの掘り込みは明確である。遺構の東西は調査区へ広がることから、溝となる可能性も考えられる。埋土は黒褐色極細粒砂を主体とし、弥生時代後期頃の土器片を多く含むが、固化できる遺物は出土しなかった。これらの出土遺物から、土坑2は弥生時代後期または終末期の所産と考えられるが、その性格等については明確にはできなかった。

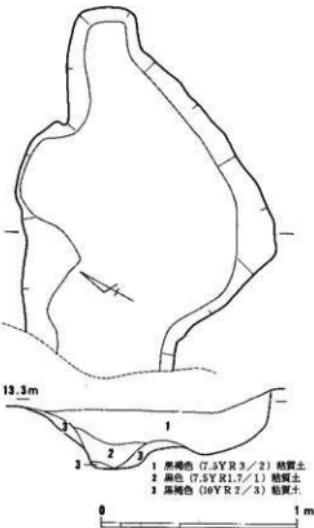
b. 第2期の遺構と出土遺物

中世耕作面上から掘り込まれた遺構を第2期の遺構として扱うが、出土遺物の様相および遺構間の関連性から溝1もこの時期のものとして扱うこととした。以下、主要な遺構について記述する。

土坑3 調査区中部で検出した土坑で、一部が溝

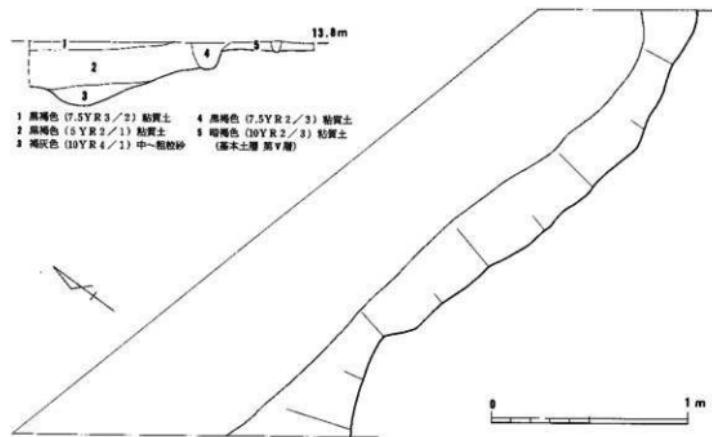


II-53図 土坑1平面・断面図 (1:25)

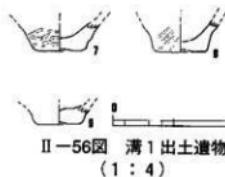


II-54図 土坑2平面・断面図 (1:25)

9.A～7区の調査

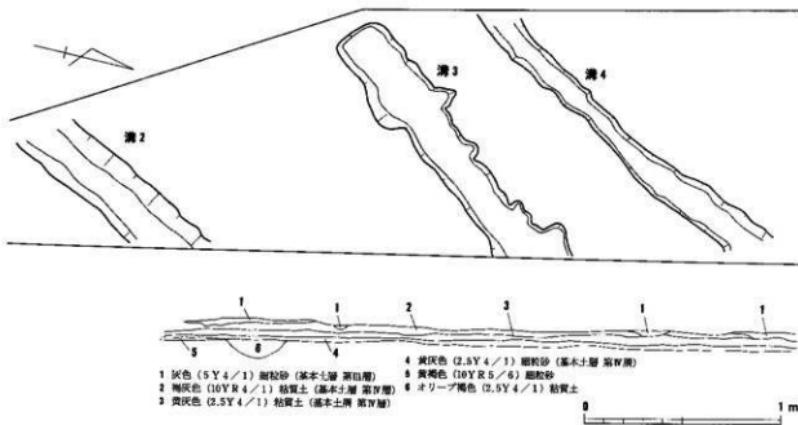


II-55図 溝1平面・断面図 (1:25)



II-56図 溝1出土遺物
 (1:4)

と重複する。また、土坑の西側は調査区外に伸びるため、全体の規模・形状は不明であるが、検出部分をみる限り直径1.6m、深さ0.65mの平面円形の土坑となる可能性が考えられる。埋土は、黄褐色粗粒砂層と黒褐色または褐灰色極細粒砂の交互層を主体とし、流水による堆積が予想される。また、重複する溝も同様の堆積状況を呈し、埋土の状況から先後関係を明確にすることはできなかった。土坑の性格は明確ではないが、周辺に集落関連遺構



II-57図 溝2～4平面図 (1:50)

は確認されていないことや、検出面が中世耕作土上にあることから、灌漑目的の遺構となる可能性が考えられる。

溝 1 調査区北端で検出した東西に伸びる溝である。溝の北側は調査区外にあるため規模は明確にできないが、検出した部分から幅1.2m以上、深さ0.35m以上の規模になるものと考えられる。埋土は2層に大別され、下層には中～粗粒砂の層状堆積が見られる。埋土からはII-56図にみる遺物が出土しているが、いずれも摩耗しており、包含層などからの混入品と考えられる。また、この他に須恵器片なども出土していることから、溝が古墳時代後期以降の所産となることは明確である。なお、溝の方向は第IV層上面で検出した耕作痕の方向と直交しており、その関連性が考えられる。よって、溝の時期はこれら耕作痕の時期と同時期になる可能性が考えられる。

溝2～4 調査区南端で検出した溝群である。これらの溝は、南西または南南西方向に伸び、ほぼ併行する関係にある。それぞれの溝は、幅0.5m前後、深さ7～15cmをはかる。埋土は褐灰色系細粒砂の單一層である。なお、溝4からII-58図に掲載した遺物などが出土しているが、いずれも包含層からの流入遺物と考えられる。

耕作痕（轍痕） 当調査区南部一帯で検出した。耕作痕は、幅3～5cmの断面V字状の溝2条が1.5m間隔で併行し、その中央には同一方向に歩行する牛と考えられる足跡の痕跡が認められる。その特徴からみて、唐駄などによる耕作痕もしくは、荷車等の轍となる可能性も考えられる。これらの耕作痕のうち、特徴の明確な耕作痕1～3の方向をみると、1は座標北に対して4°西へ、2は3°東へ、3は5°東に傾き、ほぼ略北に方向をとることで共通するが、比較的広い範囲で検出されていることから、道路状遺構とは考えにくく、耕作に関連するものと考えられる。

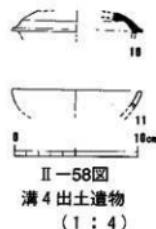
これらの耕作痕の時期は明確にできないが、第III層下層もしくは第IV層上層から掘り込まれていることから、中世のいずれかの時期のものと考えられる。

なお、これら耕作痕は当調査区に限らずE-2区など調査区一帯で検出されており、調査地周辺が耕地として開発の対象となっていたものと推定できる。また、これらの耕作痕の方向が一定であることは、この段階に固定された大型の地割りが施行されていた可能性を示唆するものと言える。

(3) 小結

当調査区では土坑群は検出されず、かわって耕作関連の遺構を確認した。これら耕作関連遺構は、いずれも中世以降の所産となるが、出土した遺物は下層からの混入品であり、その時期は確定しにくい。ただ、これら耕作痕を調査区全体で総合すると、この時期には安定した大型の、おそらくは条里地割りによる区画が成立していたことが推定される。

また弥生時代以降の遺構も検出したが散発的な状況は否めず、当調査区北部が集落範囲の南限となる可能性が考えられる。



II-58図
溝4出土遺物
(1:4)

II-9表 A-7区土器觀察表

No	形取	器種	出土位置	法縦(cm)	口部部(外部)	体部(頂部)	底部(脚部)	色調	残存度	備考
					上段；外面 下段；内面	上段；外面 下段；内面	上段；外面 下段；内面			
1	横前焼	攪鉢	包含層	底部径 13.2			一 擦り目	黄灰、灰赤	5%	
2	瓦器 棚	包含層	口徑 13.6	ナデ・押庄 —				灰~灰白	—	和泉型
3	無施釉陶器 棚	包含層	口徑 14.0	回転ナデ				灰白	10%	
4	須志器 杯B	包含層	底部径 9.5				回転ナデ・貼付高台 回転ナデ	青灰~灰白	20%	
5	須志器 罐	包含層			回転ナデ	—		黄灰~灰	—	
6	須志器 杯G蓋	包含層		回転ナデ			タタキ ハケ	黄灰、褐灰	8%	
7	弥生 壺	溝 1	底部径 4.1			—	タタキ	にぶい澄~灰白	100%	
8	弥生 壺	溝 1	底部径 4.0				タタキ		25%	
9	弥生 壺	溝 1	底部径 3.5					灰色	50%	
10	須志器 杯G蓋	溝 4			回転ケズリ 回転ナデ			褐灰、明青灰	—	
11	上部器 小皿	溝 4	口徑 10.6	ナテ				浅黄~黄灰	—	

10. B-1 区の調査

(1) 調査区の概要

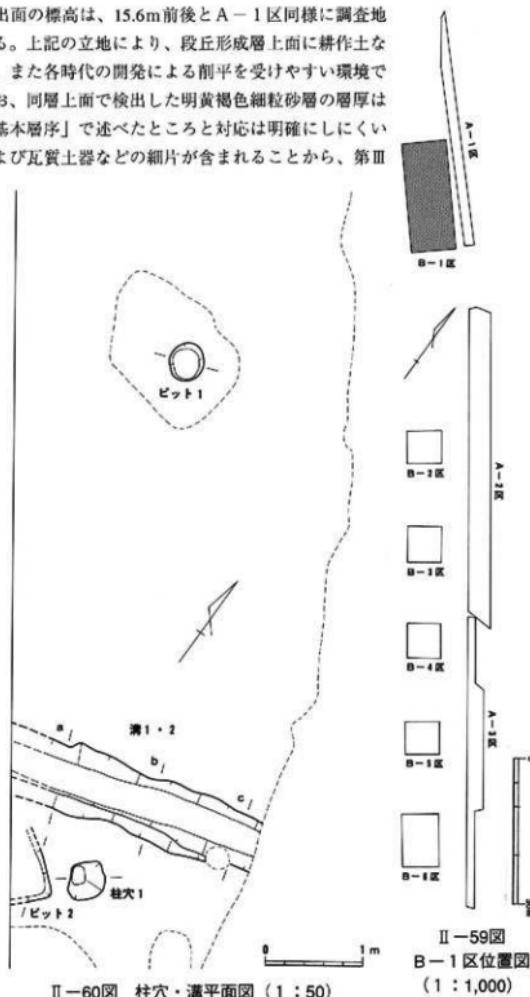
調査区における第VII層検出面の標高は、15.6m前後とA-1区同様に調査地としては高い地点に位置する。上記の立地により、段丘形成層上面に耕作土などが堆積する条件は乏しく、また各時代の開発による削平を受けやすい環境であることが想定できる。なお、同層上面で検出した明黄褐色細粒砂層の層厚は薄く、「II-2周辺の地形と基本層序」で述べたところと対応は明確ににくいが、出土した遺物に瓦器および瓦質土器などの細片が含まれることから、第III層に対応する土層となる可能性がある。

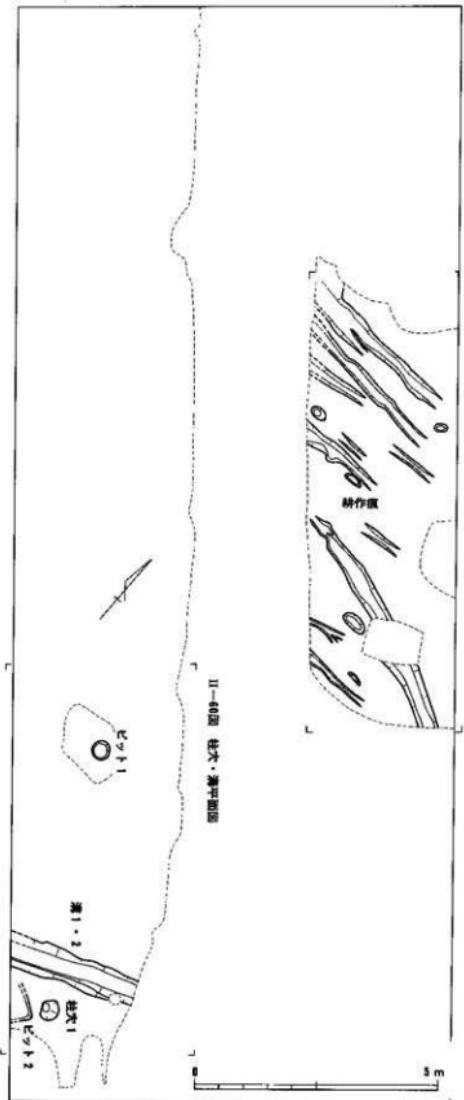
なお、明黄褐色細粒砂層は、同層内から掘り込まれた鶴溝の断面観察から2層以上の細分が可能であったが、調査段階では上下2層にまとめて分層を行っている。

(2) 検出した遺構

当調査区から検出した遺構は、柱穴を含むピット3基、溝1条、耕作痕を検出した。このうち、柱穴・溝を検出した地区は既設の地下埋設物およびこれらの撤去時の掘削で著しく削平を受けているため、本来は柱穴等が存在した可能性も少なからず残されている。以下、検出した遺構について概要を述べる。

柱穴（ピット） これらの遺構は、調査区南西部一帯で検出したが、散漫な分布状況を呈し、建物には復元できなかった。





II-61図 B-1区平面図 (1:100)

また、これらピットで、明確な柱痕を検出したものは、柱穴 1 の 1 基にとどまる。なお、柱穴 1 は、直径 0.3m、深さ 15cm をはかるが、上面の削平を考えると、深さ 40cm 以上になるものと考えられる。

柱穴 1 以外のピットは、埋土は柱穴 1 と変わらないものの、土層断面には柱痕はみられず、ピットとして扱うこととした。このうち、ピット 1 は断面形態および埋土の堆積状況をみると、明らかに柱穴とは考えにくく、別の性格が考えられる。一方、ピット 2 は擾乱により著しく削平され、検出状況が悪かったこともある、柱痕が確認できなかったが、平面形から柱痕となる可能性は十分に残されている。しかし、これら柱穴およびピットの位置関係に関連は見られず、建物等を復元するには至らなかった。

溝 1・2 いずれも調査区南西隅で検出した東西にのびる溝で、重複して検出した。溝 1・2 の東側は調査区外に伸び、西側は擾乱により破壊されているため、溝の延長は明確ではない。検出部分における溝 1 の幅は 0.5m、深さ 0.3m をはかり、その断面は台形状を呈する。溝 2 は溝 1 埋没後にはほぼ同位置に掘削された溝であり、溝 1 の再掘削とも解釈できる。断面から推定される溝の幅は 0.25m、深さ 0.25m をはかり、V 字状の断面形を呈する。

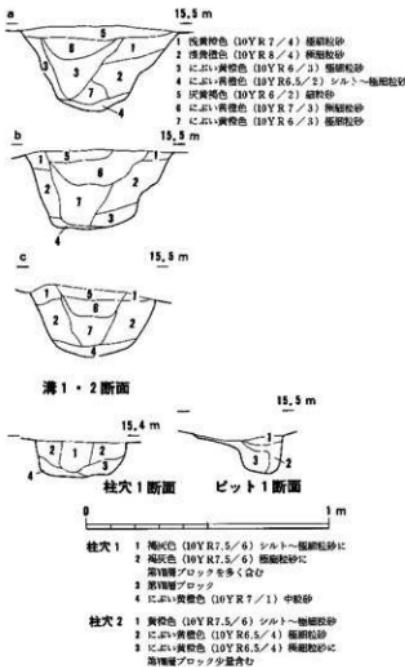
溝1・2の埋土は、いずれも褐色系の細粒砂からなり、3層に細分できるが、溝1は溝2が重複するため、堆積状況の詳細は明確にしにくいが溝2とほぼ同様の状況が推定できる。一方、溝2の堆積上のうち、下層は溝機能時の自然堆積と判断できる極細粒砂が堆積し、中層には第Ⅳ層の小ブロックを含む細粒砂が堆積していることから、何らかの条件によって溝の機能が停止した段階で意図的に埋め戻された可能性が考えられる。

溝の性格および時期は明確ではないが、埋土の特徴はピットと共に通ることから、これらとの関連が想定できる。

耕作痕 調査区西部一帯で検出した第Ⅲ層対応層から掘り込まれる小溝群である。これら耕作痕は幅15cm前後、深さ3~10cm程度で、多くは北(座標北)にほぼ直交するか、北西方向に傾く。これらの方向が異なる小溝が同時期ではないことは明らかであるが、断面の堆積状況をみるとかぎり遺構の重複関係が複雑なため、その前後関係については明確にできなかった。

(3) 小結

当調査区では、柱穴など集落関連遺構の可能性を有する遺構群を検出した。これらの遺構からは遺物が殆ど出土しなかったため、その時期を明確にできなかった。しかし、これらの遺構は、近接するA-1区の建物群とともに柱穴とほぼ同様の特徴が見られることから、遺構の時期がA-1区の遺構群の時期と前後する可能性も想定できる。なお、A-1区の遺構は、土師器皿から11世紀前半頃と考えられる。



II-62図 柱穴・溝断面図 (1:20)

11.B-2区の調査

(1) 調査区の概要

当調査区はB-1区から約37mほど南西に位置する。調査区における遺構検出面（河川堆積土上面）の標高は15.5mで、B-1区から約0.3mほど低くなっている。この間の高低差に、旧耕作土以下、「II-2周辺の地形と基本層序」で述べた層序とかわらない土層の堆積が見られるが、このうち、第Ⅲ層（中世後期以降の耕作土）の層厚はやや薄い状況が認められる。

(2) 検出した遺構と出土遺物

当調査区の全面において、河川跡を検出した。以下、河川1について報告する。

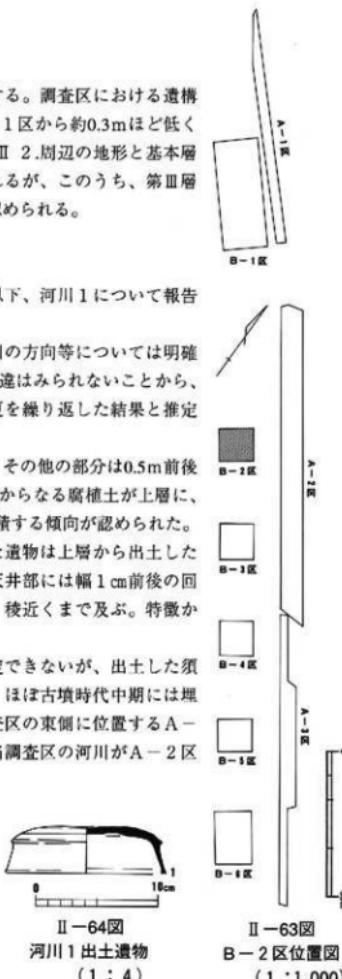
河川1 河川は調査区全面で検出したため、河川の方向等については明確にはできなかった。ただ、河川内の埋土に著しい相違はみられないことから、河川内の埋土の重複関係は、同一河川が流路の変更を繰り返した結果と推定できる。

河川の最深部は検出面から1.3mの深さを測るが、その他の部分は0.5m前後で比較的浅い。埋土は黒褐色または褐灰色極細粒砂からなる腐植土が上層に、褐灰色粗粒砂と褐灰色極細粒砂の交互層が下層に堆積する傾向が認められた。

河川からの出土遺物は極めて少なく、図化できた遺物は上層から出土したII-64図の須恵器杯蓋の一点に限られた。杯蓋の天井部には幅1cm前後の回転ケズリが施される。ケズリの方向は時計回りで、接近くまで及ぶ。特徴からみてTK-208型式併行の所産と言える。

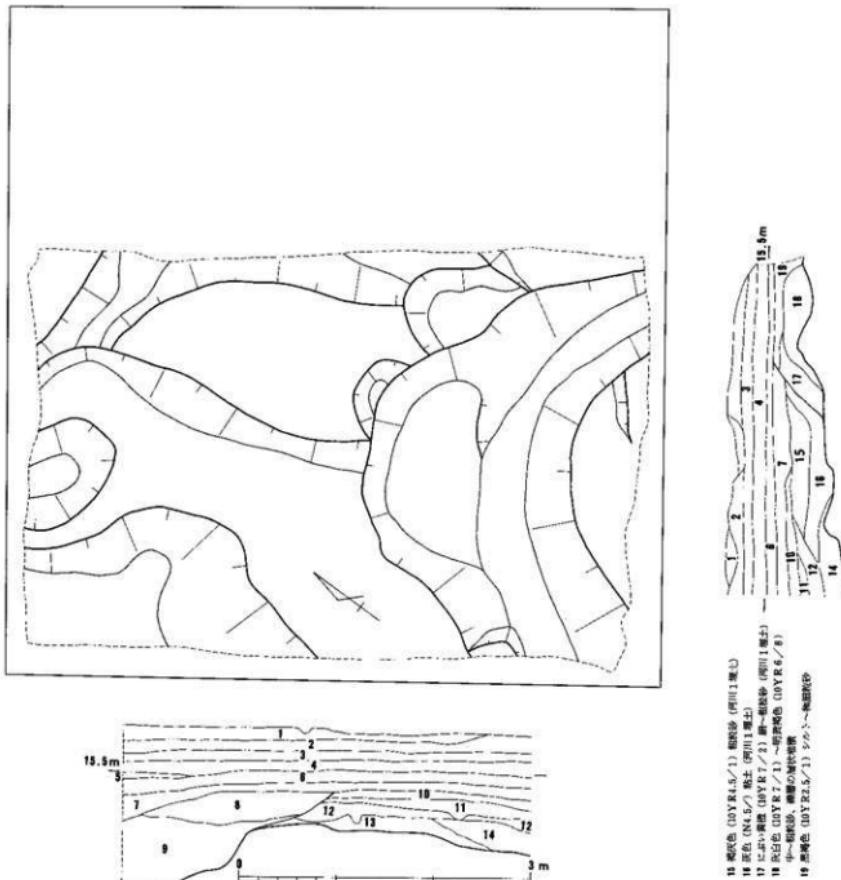
河川からの出土遺物は乏しいため堆積時期は確定できないが、出土した須恵器杯蓋が殆ど摩耗していないことをふまると、ほぼ古墳時代中期には埋没し湿地化した可能性が想定できる。また、当調査区の東側に位置するA-2区では、谷地形に伴う河川が検出されており、当調査区の河川がA-2区の下流部にあたるものと考えられる。

なお、同様の時期に堆積がほぼ終了した河川としては、B-8・D-7・9・E-2区などで検出した河川1があげられる。ただ、この河川は当調査区より北方から流れていることが確認できることから、同一の河川となる可能性は乏しいものの、これらの河川と合流する可能性は十分に残されている。



II-10表 B-2区土器観察表

No	開拓	層種	出土位置	法量(cm)	口部部(受部) 上段：外側 下段：内側	体部(胸部) 上段：外側 下段：内側	底部(脚部) 上段：外側 下段：内側	色調	残存度	備考
1	39-1	須恵器　杯蓋	河川1	口径 基高 3.8	13.0 回転ナデ	回転ナデ	回転ケズリ・ナデ 回転ナデ	灰	35%	



II-65図 B-2区平面・断面図 (1:50)

12.B-4・5区の調査

(1) 調査区の概要

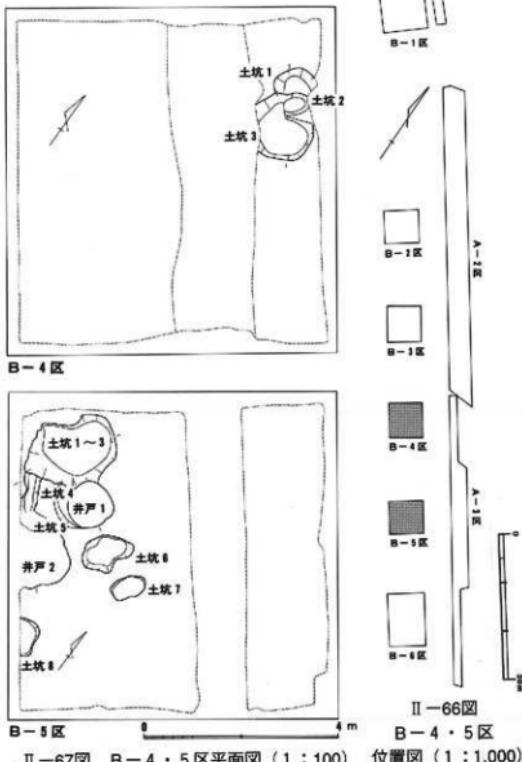
B-4区は、地下埋設物の抜去時に第Ⅶ層にいたる著しい削平を受けていたため、基本層序等について明確にできなかった。また、遺構についても、土坑3基が検出されただけにとどまるが、著しい削平をふまえるならば、本来は周囲に多数の遺構が存在した可能性が考えられる。

一方、B-5区もB-4区と同様に地下埋設物の抜去時に第Ⅶ層にいたる著しい削平を受け、基本層序等について明確にできなかったが、土坑8基と井戸2基を検出した。

(2) 検出した遺構と出土遺物

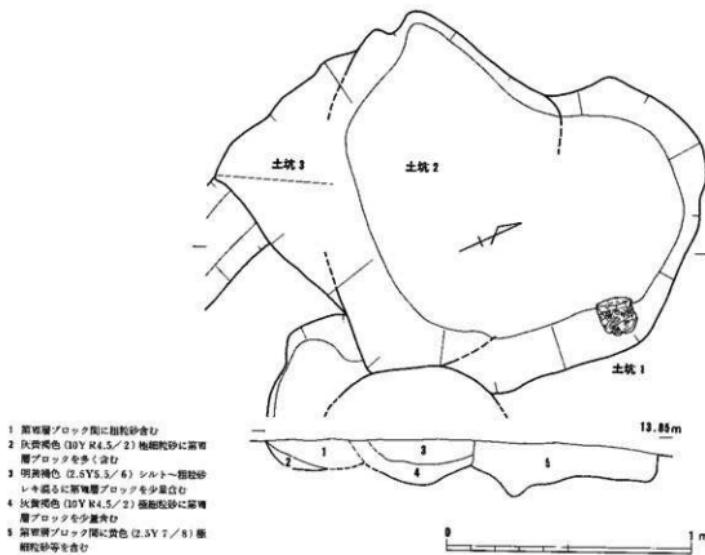
a. B-4区の遺構

土坑1～3 これらの土坑は削平され、本来の規模や形状は明確にしにくいが、残存部分から一定の推定が可能である。土坑1・2はいずれも平面梢円形を呈する小型の土坑で、土坑1の主軸長は0.9mを、土坑2の主軸長は0.6mをはかる。土坑3は、直径1.5mをはかる平面円形の中型の土坑である。これらの土坑は、断面観察から1から3の順で掘削されたことが明確にうかがえる。なお、土坑1の断面形状は明確にできないが、土坑2・3は袋状の断面形となり、また土坑の埋土には、第Ⅶ層を母材とする灰白色シルト等のブロック土が多量に含まれることから、これらの土坑はA-2～6区などで検出した土坑群の一部と言える。これら土坑からは時期を比定できるだけの遺物が出土しなか





II-68図 B-4区土坑1～3断面図 (1:20)



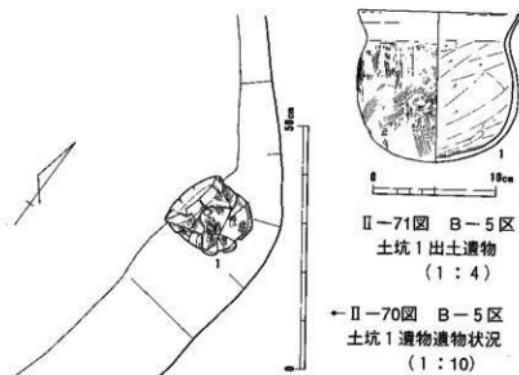
II-69図 B-5区土坑1平面・断面図 (1:20)

ったため、その時期については確定できないが、他の調査区の事例から7世紀前後となる可能性が想定できる。

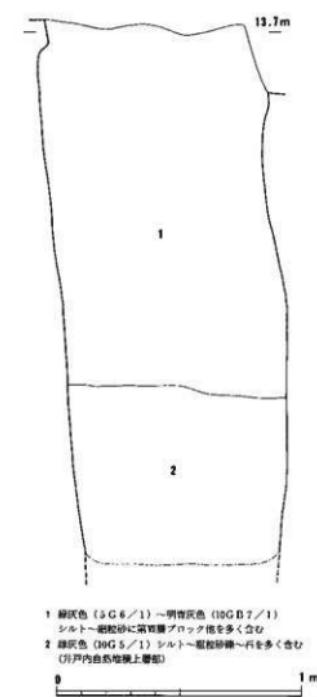
b. B-5区の遺構

土坑群 検出した土坑8基は、削平を受け基底部が残存するだけにとどまる。

このうち、土坑1～3は重複しているため、検

II-71図 B-5区
土坑1出土遺物
(1:4)II-70図 B-5区
土坑1遺物遺物状況
(1:10)

12.B-4・5区の調査



II-72図 B-5区井戸1平面・断面図 (1:20)

と考えられる陶器壺が出土している。陶器壺は、玉環状の口縁端部を有する。また肩部に把手を貼り付けるものであるが、残存部位が少なく把手の数は明確ではない。また、体部外面には、透明釉が施される。19世紀以降の所産と考えられる。

なお、井戸2は、土留め工により大半が破壊されていたため調査しなかったが、上面で灰色シリト～粘土に第Ⅶ層等の大型ブロックを多く含む埋め戻し土の堆積を確認している。よって、下層の堆積状況などについては明確ではないが、埋戻土の様相は井戸1と共にすることから、井戸1と前後する時期の所産と考えられる。

II-11表 B-5区土器観察表

No	回転	器種	出土位置	法量(cm)	口部部(受邊) 上段：外側 下段：内面	体形(脚底) 上段：外側 下段：内面	底部(脚部) 上段：外側 下段：内面	色調	残存度	備考
1	39-2	土留器 小型壺	土坑1	11径 13.0 高さ 12.4	ナデ	ハケ ケズリ	ハケ 押圧・ケズリ	灰白～緑	95%	
2		陶器 壺	井戸1	11底 12.0 回転ナデ	回転ナデ			暗赤褐色～ にぶい緑	6%	透明(透明)



出時に平面形を明確に確認できなかったが、掘削後堆積土の状況などから、それぞれの土坑は主軸長1.2m～1.5m程の平面橢円形を呈することが推定できた。

また、この他の土坑は残存状況が良くないため、本来の形状などは明確にできないが、土坑1～3と同様の形状になる可能性が考えられる。これらの土坑埋土は、B-4区の土坑と同様の特徴を呈することから、同様に土坑群の一部と言える。なお、土坑1下層からII-71図の土師器小型壺が土坑最下層から横転した状態で出土した。出土した小型壺は、土坑群出土のものとしては珍しく、ほぼ完形であり口頭部などに意図的に打ち欠いた痕跡等も見られなかった。小型壺はやや内反気味の口縁に縫部が内側につまみあげられ、端面を丸く処理されている。また、体部外面に縱方向のハケを、内面にケズリを施す。6世紀末から7世紀前半頃の所産になる可能性がある。

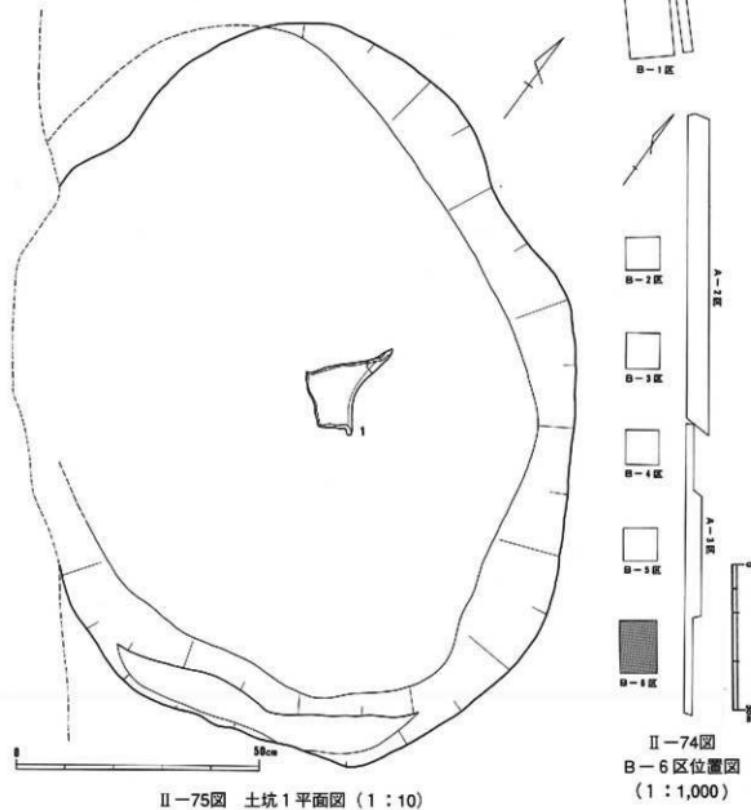
井戸1・2 調査区西部で検出した蒸掘りの井戸である。井戸1・2はいずれも平面円形を呈し、それぞれの直径は井戸1で0.9m、井戸2は1.1mをはある。

井戸1は、検出面から2.2mまで掘削を行った結果、1.5mのところで埋戻土から自然堆積土へかわることを確認したが、湧水層および井戸機能時の堆積層については確定できなかった。井戸1埋戻土中から、丹波焼

13.B-6区の調査

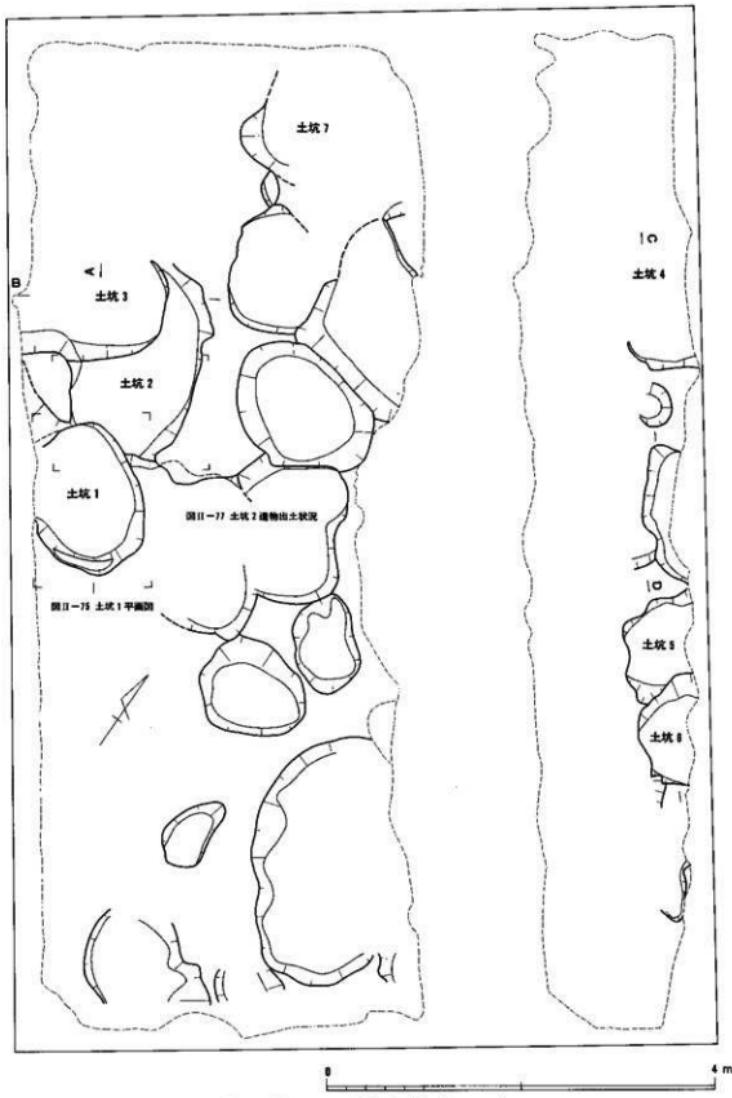
(1) 調査区の概要

B-4・5区と同様に、地下埋設物抜去に伴う擾乱が著しく、第Ⅱ層（耕作土層）以下、第Ⅶ層にいたる基本層序の詳細については明確にはできなかった。しかし、一部、擾乱による削平を受けなかった部分では、大別3層による堆積層が確認され、「II-2.周辺の地形と基本層序」で述べた構成とはほぼ同様の堆積が認められる。ただし、これらの土層の層厚は比較的薄く、ある程度後世の削平が断続的に及んだ可能性がある。



II-75図 土坑1平面図 (1:10)

II-74図
B-6区位置図
(1:1,000)

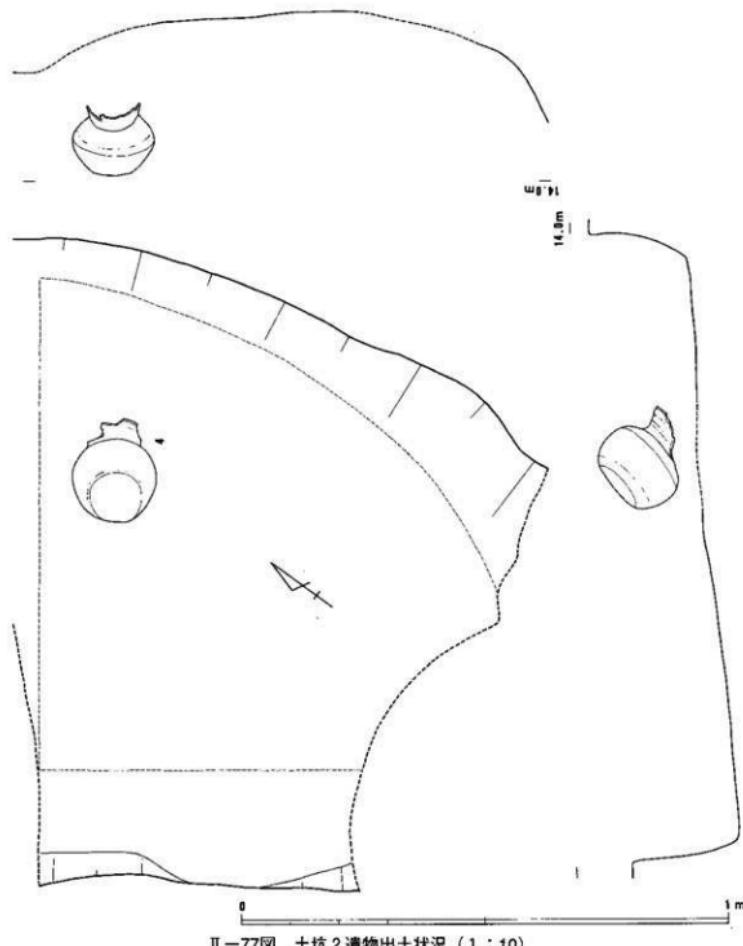


II-76図 B-6区平面図 (1:50)

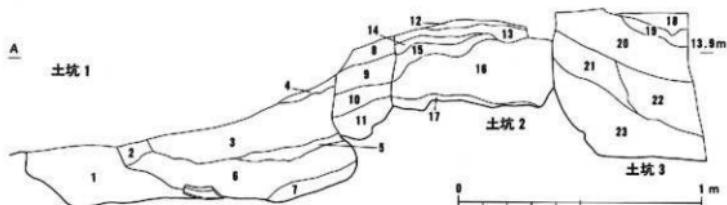
(2) 検出した遺構と出土遺物

削平を受けた部分を除き、調査区のほぼ全面で土坑を検出した。以下、これら土坑群について報告する。

土坑群 これら土坑のうち、規模・形状が明確なものをみると、平面楕円形状または長方形を呈し、主軸長1.5～2.2mをはかる大型の土坑と、同じく楕円形で主軸長1.0m前後の小型のものの

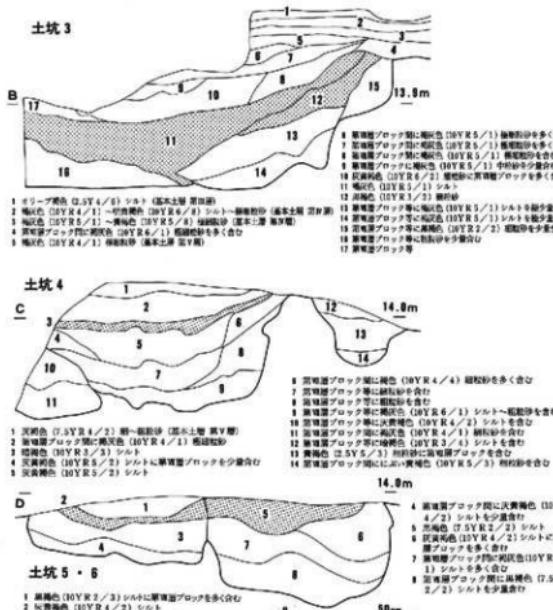


II-77図 土坑2遺物出土状況 (1:10)



- 1 黒褐色ブロック間に地灰色 (10YR 5.1/1) 細粒～粗粒砂を多く含む
 2 地灰色 (10YR 6.1/1) シルトに黒褐色ブロックを多少含む
 3 地黃褐色 (10YR 5.2/2) シルト～細粒砂に黒褐色ブロックを含む
 4 地黃褐色 (10YR 5.2/2) シルトに黒褐色ブロックを少々含む
 5 暗灰色 (10YR 5.1/1) シルト～中粒砂に黒褐色ブロックを少々含む
 6 褐灰色 (10YR 3.5/1) シルト～粗粒砂に黒褐色ブロックを含む
 7 黑褐色ブロック間に地黃褐色 (10YR 3.1/1) シルト～粗粒砂を含む
 8 褐灰色 (10YR 6.1/1) シルト～細粒砂
 9 暗灰色 (10YR 5.5/1) シルトに黒褐色ブロックを多く含む
 10 黑褐色ブロック間に地黃褐色 (10YR 4.1/1) シルトを含む
 11 黑褐色ブロック間に地黃褐色 (10YR 5.5/1) ～地灰 (10YR 4/1) 粗粒砂を含む
 12 地黃褐色 (10YR 6.1/1) シルト～細粒砂に黒褐色ブロックを含む
 13 黑褐色ブロック間に地黃褐色 (10YR 6.1/1) シルト～粗粒砂を含む
 14 地黃褐色 (10YR 4.2/2) シルトに黒褐色ブロックを多く含む
- 15 黒褐色ブロック
 16 黑褐色ブロック間に地黃褐色 (10YR 4.5/2) シルトに少々含む
 17 黑褐色ブロック
 18 黑褐色ブロック間に地黃褐色 (10YR 5.1/1) 細粒砂を多く含む
 19 黑褐色ブロック間に地黃褐色 (10YR 5.1/1) を少々含む
 20 地黃褐色 (10YR 6.1/2) 細粒砂に黒褐色ブロック等を含む
 21 地黃褐色 (5YR 5/1) シルト～粘粒砂に黒褐色ブロック等を含む
 22 地黃褐色 (10YR 5/1) シルトに黒褐色ブロックを少々含む
 23 黑褐色ブロック間に地黃褐色 (10YR 4/1) シルト等を含む

II-78図 土坑1～3断面図 (1:20)



II-79図 土坑3～6断面図 (1:25)

2つに大別することができる。

いずれの形態の土坑でも土坑下部は拡張され、袋状の断面形を呈する。また、土坑埋土は第Ⅶ層ブロックを多く含むことで共通するが、土坑3～6のように土坑中位に顕著な自然堆積層を含むものも見られる。なお、これらの中の土坑の掘削深度は、40～70cmとまとまりにかけるが、掘削深度に新旧の差はあまり反映されていないようであり、掘削深度の相違は採掘しようとする粘土（第Ⅶ層）の微妙な質の相違が反映した可能性も想定できる。

これら土坑からの出土遺物は極めて少ないが、土坑1・2・7からそれぞれ土師器・須恵器の大型片が出土している。

土坑1では、上部器長頸壺(1)の一部が土坑基底部にほぼ密着する状態で出土した。土坑2では、土坑中央付近にて埋土中層部からほぼ完形の須恵器広口壺(4)が転倒した状態で出土したほかに長頸壺の破片(3)も出土した。土坑2から出土した広口壺(4)は、ほぼ完形であるが口縁部を欠損しており、

意図的な打ち欠きも想定できる。また土坑7からも埋土下層から須恵器壺片(2)が出土している。

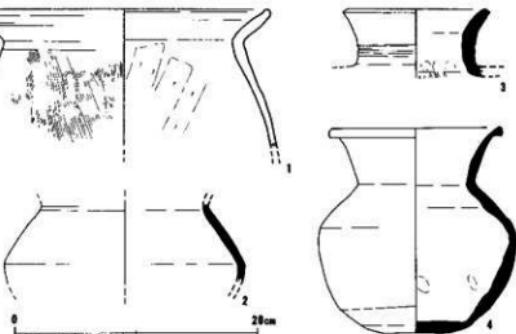
これら出土した遺物のうち、土坑1から出土した上部器長頸壺(1)は体部外面に比較的丁寧なハケ調整を、内面にはケズリを施す。口縁部はやや外方に開き、端部は若干内面を肥厚させ端面は丸く収められる。これらの特徴から、1は6世紀末から7世紀前半の所産と考えられる。土坑7から出土した須恵器壺(2)は、残存部が体部だけに限られるため、器種の詳細については明確ではないが、体部内面にもナデを施すことから、比較的新しい時期の所産となる可能性が想定できる。土坑2から出土した須恵器長頸壺(3)は、頭部だけに限られる。頭部上半から口縁にかけては、ゆるやかに外反し、口縁端部はナデによりや丸く収められる。また、頭部下半には2~3条の凹線を施す。同じく4は広口壺であるが、胎土には粗粒砂を多く含み、やや粗雑といえる。壺外面は回転ナデを、内面は不定方向のナデを施す。

(3) 小結

当調査区においても、A-3~6区、B-4~6区と同様に密集する土坑群を検出した。これら土坑群を構成する土坑は、その特徴から他の調査区で確認された土坑と性格が異なるものではなく、付近一帯が土坑群の分布範囲となることが判断される。これら土坑群の時期は、出土遺物の時期から6世紀末から7世紀前半となる。

II-12表 B-6区土器観察表

No	四版	器種	出土位置	法量(cm)	口縁部(全等)	体部(削痕)	底部(削痕)	色調	残存度	備考
1	34-9	上部器 長頸壺	土坑1	L1壁 23.6	ナデ	ハケ ケズリ?		灰白~ に赤い光澤	12%	
2		須恵器 壺	土坑7			回転ナデ ナデ		灰色~ に赤い光澤	15%	
3		須恵器 壺	土坑2	口径 11.1	ナデ ナデ	タタキナデ消し タタキ		明青灰~青灰	-	
4	39-3	須恵器 壺	土坑2	口径 13.8 底面 16.8	回転ナデ	押圧・ナデ	押圧・ケズリ 押圧	青灰~明青灰	85%	



II-80図 土坑出土遺物 (1:4)

14.B-7区の調査

(1) 調査区の概要

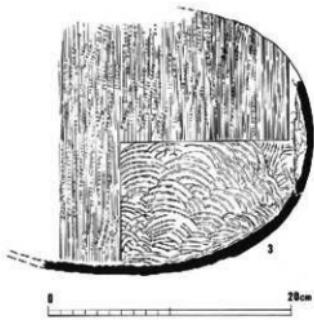
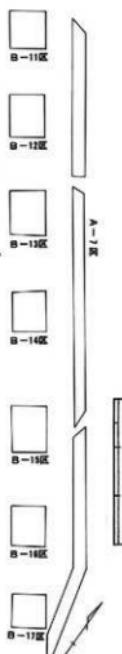
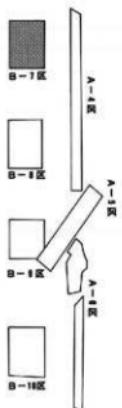
当調査区における層序は、「II 2.周辺の地形と基本層序」で述べた構成とほぼ同じであるが、第Ⅳ層上面には遺物包含層（第V層）は確認できず、かわりに褐色中～粗粒砂のラミナからなる水成層の堆積が認められた。同様の水成層は、当調査区の当方にあたるA-3区中部付近や後に述べるB-8区においても検出されているが、その範囲は限られており付近に極小規模な河川が存在した可能性が考えられる。

なお、水成層上層に堆積する耕作土からは、II-82図1・2の須恵器皿、壺が出土している。これらの遺物は、奈良時代後半頃の所産と考えられることから、同層の堆積時期は、8世紀前半までの時期、おそらくは7世紀末から8世紀前半にかけての時期になる可能性が考えられる。

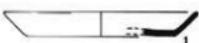
(2) 検出した遺構と出土遺物

調査区からは、48基以上の土坑を検出した。これらの土坑の多くは、重複して検出しており実際の土坑の数はこれ以上になる可能性が高い。

土坑群 検出した土坑は、直径または主軸長が1.3m以上の大型のものを中心には、1～2mの規模のものが多い。一方、土坑の平面形状には円形、長方形、梢円形、不整円形等がみられ多様である。当調査区における土坑は多様な形状を呈するためか、形状と規模に対応性が認められない。なお、小型の土坑は5基が確認できただけにとどまるが、周辺は大型土坑が密集しており、これらの掘削による削平などを考慮すると、実際には小型の土坑は検出数以上に存在した可能性がある。土坑の掘削深度は、50～80cmを中心に浅いものでは30cm程度のものも含まれ、ばらつきが著しい。掘削深度と土坑の新旧関係は明確ではなく、また土坑の中に

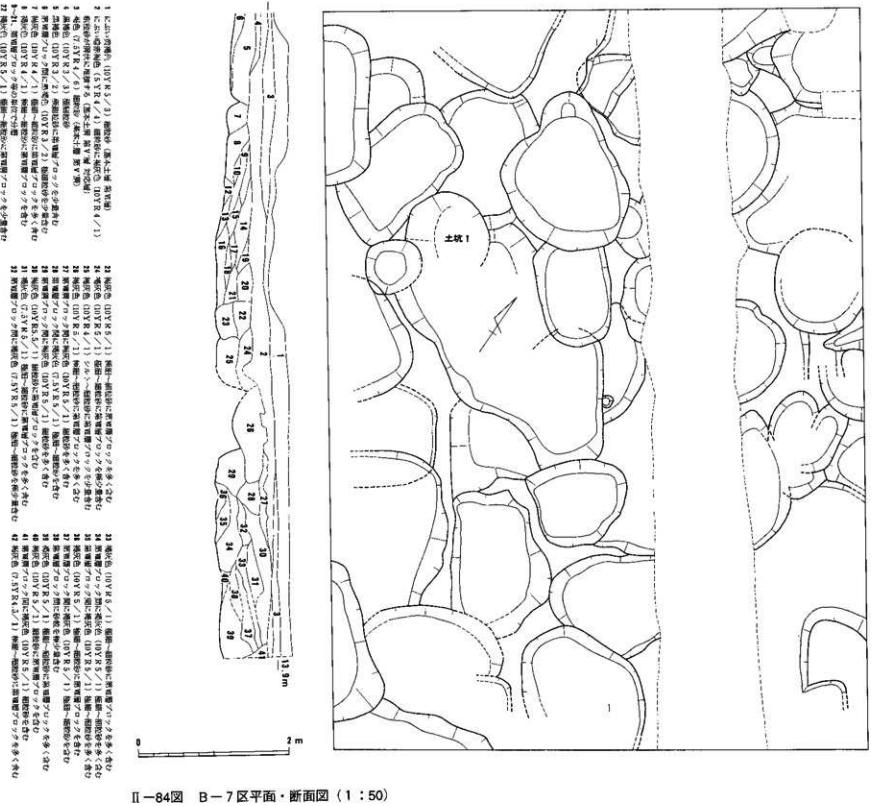


II-83図 土坑1出土遺物 (1:4)

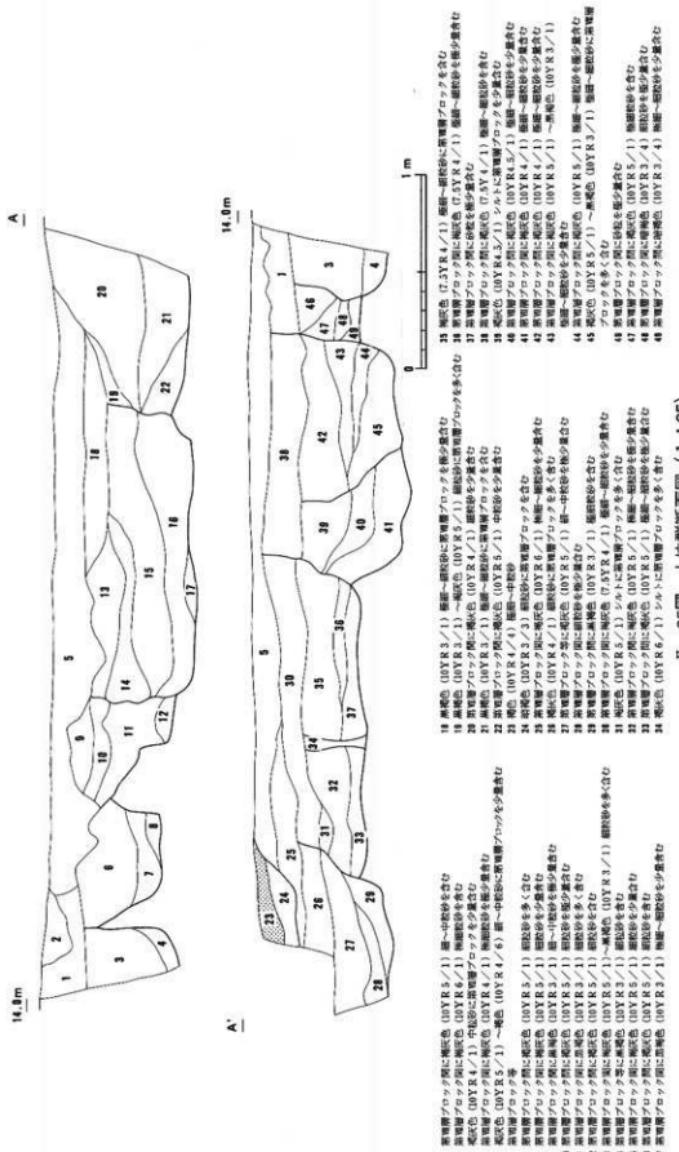


II-82図
包含層出土遺物 (1:4)

II-81図 B-7区位置図→
(1:1,000)



II-84図 B-7区平面・断面図 (1:50)



II-85図 土坑群断面図（1：25）

は掘削を途中で断念したようなものも含まれており、目的とする粘土層の有無などの状況により掘削深度が変化した可能性が考えられる。

検出した上坑のうち、土坑1から横瓶体部の破片（II-83図3）が出上しているが、この他の土坑からは陶化できる遺物は出上していないため、土坑の掘削時期は他の調査区と同様に十分に確定できないが、おおむね7世紀前後の時期が想定できる。なお、土坑1から出土した須恵器壺について胎土分析を行なった結果、在地産とは異なる胎土が用いられた可能性が高いことが指摘された。A-3区SK-4出土の須恵器杯身とあわせて、上坑群に廃棄された須恵器の中に搬入品が混入する可能性があることは土坑群の性格、特にその掘削目的を考える上で注目される。

(3) 小結

当調査区の土坑は、平面形状が多様であり、規模と形状に対応性が明確に認められない点において、他の調査区と異なる状況が見られた。また、土坑の分布密度も他の調査区に比べ著しく密集する状況があり、調査区周辺が土坑の掘削が集中した部分にあたる可能性が高い。

II-13表 B-7区土器観察表

No	閲覧	器種	出土位置	法量(cm)	口部形(受削) 上段:外壁 下段:内壁	底部(脚部) 上段:外壁 下段:内壁	裏部(底面) 上段:外壁 下段:内壁	色調	残存度	備考
1		須恵器 壺	包含帶	口径 15.8	圓転ナデ		ナデ 回転ナデ	灰白	10%	
2		須恵器 壺	包含帶	高台径 7.8		回転ケズリ 回転ナデ	回転ナデ	青灰・明黃灰	5%	
3 39-5	須恵器 横瓶	土坑1			タタキのちカキメ 当て具足	タタキ 押圧	灰白	..		

15.B-8 区の調査

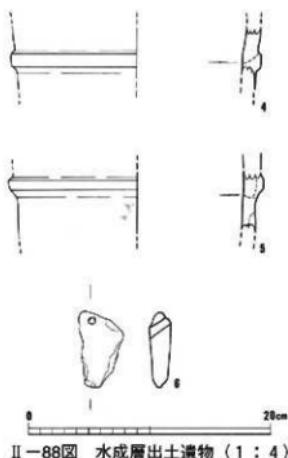
(1) 調査区の概要

当調査区における基本層序は、B-7 区とほぼ同様の状況である。唯一の相違点としては、第Ⅶ層（段丘形成層）上面に堆積する水成層が2層に区分され、また水成層中のラミナの堆積状況に方向性が見られることがある。また後述する土坑8の最上層は同層が堆積しており、その部分から埴輪片数点（II-88図4～6）が出土している。このうち、6には穿孔が認められ、形象埴輪となる可能性も考えられる。埴輪は、いずれも細片で著しく摩耗しているが、退行したタガと器壁外面に1次調整と考えられるタテ方向のハケが確認できる。これらは、同層の堆積時に流入したものと考えられるが、周囲に古墳の存在は知られていないため、未知の古墳が存在する可能性を示唆させる出土遺物と言える。また、第Ⅳ層からは、II-87図1～3にある須恵器杯蓋・杯A・土師器高杯などが出土している。これらの遺物は時期幅が大きいことからいずれも混入品となるが、1は土坑群と3は河川1との関連が考えられる。

(2) 検出した遺構と出土遺物

当調査区において検出した遺構は、土坑34基、河川1条である。このうち、土坑は弥生時代後期の土坑1と古墳時代前期の土坑2・3を除くと他は古墳時代後期以降の土坑で、一帯に分布する土坑群の一部を構成するものである。

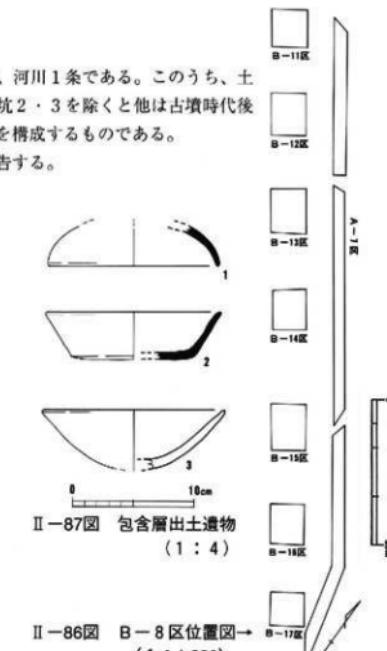
以下、土坑1～3・土坑群・河川について報告する。



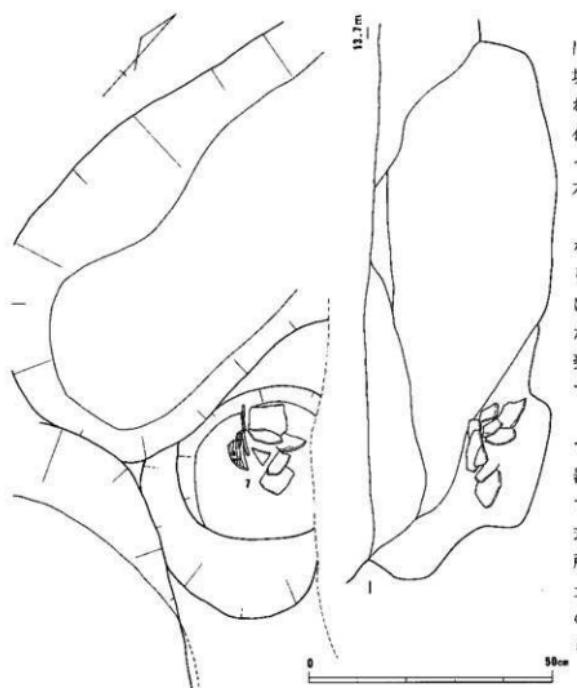
II-88図 水成層出土遺物 (1 : 4)



II-86図 B-8 区位置図→ (1 : 1,000)



II-87図 包含層出土遺物 (1 : 4)



II-89図 土坑1遺物出土状況(1:10)

土坑1 調査区北部で検出した。土坑の大部分は土坑群と擾乱により破壊され、上坑下半部の一部が残存しただけにとどまる。よって、本來の形状・規模は不明である。

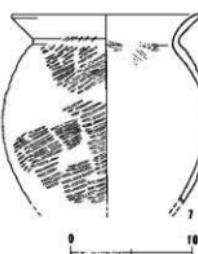
土坑埋上は、比較的均質な灰黄褐色細粒砂からなり、土坑群のものとは明確に区別できるものであった。また、土坑下層からは甕(II-90図7)が出土している。

甕(7)の底部は残存していないが、やや肩のはる器形で、3分割成形が想定できる。おそらくは第V様式後半か、または終末期の所産と考えられる。よって、土坑1は弥生後期後半以降の時期となる可能性を考えられる。

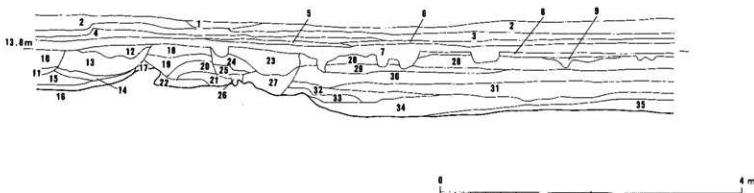
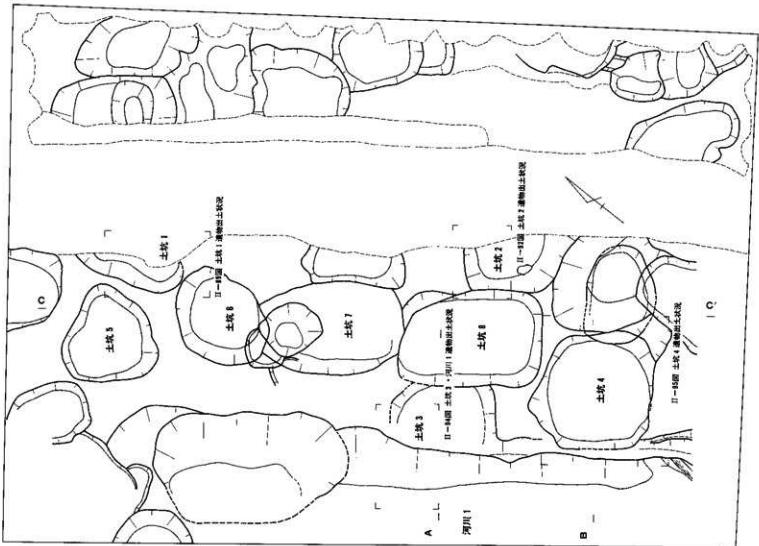
II-90図 土坑2 調査区中部にて検出した土坑である。その

周囲は古墳時代後期の土坑により著しく削平され、本来の規模、形状については明確にできなかった。また、同時期の土坑3が西側に隣接していることから、一連の遺構となる可能性も残されているが、隣接部分では掘り方が明確に確認できるため、土坑3とは区別して単独の土坑として扱うこととした。

土坑2の埋土は、上～中層にかけて黒褐色板細粒砂が、また下層に褐灰色シルトの堆積が認められる。その層には層厚1～3cmの炭化物層が堆積し、その上面から土師器が出土した。これらの土器と炭層は密着していないことから、炭化物層の堆積から土器の投棄までに若干の時間差があった可能性がある。土坑2からはII-93図8・9が出土したが、いずれも保存状態が悪く、復元できた部分は一部にとどまる。8は二重口縁甕(複合口縁)で寺沢分類F1類に該当する。頸部と体部の屈曲は緩やかで、口縁下端部の突起も退行し、この器種としては新しい様相をみせる。9の布留式甕は、内外



II-90図 土坑1出土遺物(1:4)



II-91図 B-8区平面・断面図 (1:50)

- 1 穴隙。
- 2 黒灰色 (D Y R 4 / 1) 穴隙地盤に海灰色 (W Y K 5 / 1) 小粒砂ブロックを含む (基本土層 第Ⅱ層に対応)
- 3 黑灰色 (D Y R 3.5 / 1) 線～中粒砂 (基本土層 第Ⅲ層に対応)
- 4 黑灰色 (D Y R 3.5 / 1) 線～中粒砂 (基本土層 第Ⅲ層に対応)
- 5 黑灰色 (D Y R 3.5 / 6) 線～中粒砂中に粗粒砂を含む (基本土層 第Ⅳ層に対応)
- 6 黑灰色 (D Y R 3.5 / 4) 線～中粒砂に粗粒砂を含む (基本土層 第Ⅳ層に対応)
- 7 黑灰色 (D Y R 3.5 / 4) 線～中粒砂に粗粒砂ブロックを含む (基本土層 第Ⅳ層に対応)
- 8 黑灰色 (D Y R 3.5 / 4) 線～中粒砂に粗粒砂、灰白色 (N 7 / 1) 小粒砂を含む
- 9 灰色 (N 4.5 / 7) 粗粒。
- 10 灰色 (D Y R 1 / 4) 線～中粒砂に粗粒砂ブロックを少量含む
- 11 黑灰色 (D Y R 4 / 1) 線～中粒砂に粗粒砂ブロックを含む
- 12 黑灰色 (D Y R 4 / 1) 線～中粒砂に粗粒砂ブロックを含む
- 13 黑灰色 (D Y R 4 / 1) 線～中粒砂に粗粒砂ブロックを含む
- 14 黑灰色 (D Y R 5 / 1) 線～中粒砂に粗粒砂ブロックを少量含む
- 15 黑灰色 (D Y R 5 / 1) 線～中粒砂に粗粒砂ブロックを少量含む
- 16 黑灰色 (D Y R 5 / 1) 線～中粒砂に粗粒砂ブロックを少量含む
- 17 黑灰色 (D Y R 4 / 1) 線～中粒砂に粗粒砂ブロックを含む
- 18 黑灰色 (D Y R 4 / 1) 線～中粒砂に粗粒砂ブロックを含む
- 19 黑灰色 (D Y R 4 / 1) 線～中粒砂に粗粒砂ブロックを含む
- 20 黑灰色 (D Y R 4 / 1) 線～中粒砂に粗粒砂ブロックを含む
- 21 黑灰色 (D Y R 4 / 1) 線～中粒砂に粗粒砂ブロックを含む
- 22 黑灰色 (D Y R 3.5 / 1) 穴隙～中粒砂に粗粒砂ブロックを多く含む
- 23 黑灰色 (D Y R 4 / 1) 線～中粒砂に粗粒砂ブロックを含む
- 24 黑灰色 (D Y R 4 / 1) 線～中粒砂に粗粒砂ブロックを含む
- 25 黑灰色 (D Y R 3.5 / 1) 穴隙～中粒砂に粗粒砂ブロックを含む
- 26 黑灰色 (D Y R 3.5 / 1) 線～中粒砂 (自然堆積)
- 27 灰色 (N 4.5 / 7) 粗粒～粗粒砂
- 28 黑灰色 (D Y R 4 / 1) 線～粗粒砂
- 29 灰色 (N 4.5 / 7) 粗粒～粗粒砂
- 30 黑灰色 (D Y R 4 / 1) 線～粗粒砂
- 31 灰色 (N 4 / 7) 粗粒～粗粒砂
- 32 黑灰色 (D Y R 4 / 1) 線～粗粒砂
- 33 黑灰色 (D Y R 4 / 1) 線～粗粒砂
- 34 黑灰色 (D Y R 4 / 1) 線～粗粒砂
- 35 黑灰色 (D Y R 7 / 1) 粗粒砂～粗粒砂

面ともに風化が激しく調整等は明確にできなかったが、口縁部の屈曲はやや緩くなっている。河川および土坑3のものと大きく変わるものではない。

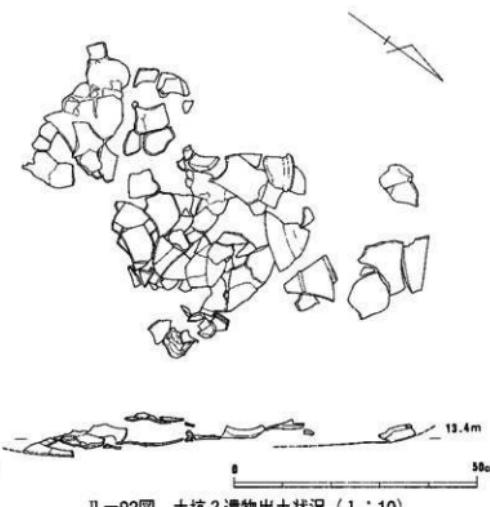
土坑3 河川1に接して検出された上坑である。土坑埋土は、河川1と共にし、また河川1の岸側を一部を張り出すように掘削していることから、河川1に関連する遺構と考えられる。

土坑3は、その東側が古墳時代後期以降の土坑群によって削平をされているため、平面形は明確ではない。検出部分における土坑の南北長は1.4m、深さ0.35mを測る。土坑基底部は平坦であるが、中央に河川に向かって蛇行する幅10cmほどの小溝がある。埋土は黒褐色極細粒砂などからなり、河川1とほぼ同様の堆積状況を示し、土坑は埋め戻されることなく河川とともに埋没したことがうかがわれる。

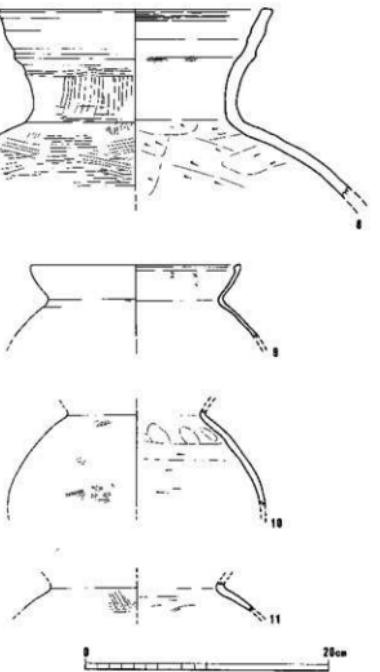
土坑3からは、II-93図10・11の布留式甕が出土しているが、いずれも保存状態は悪く、また口縁部は接合段階で復元できず、固化できなかった。また、この他小型丸底甕も出土したが、同様に風化が著しく接合できなかった。ただ、これら遺物については出土時の状況から、古墳時代前期後半頃となる可能性が考えられる。

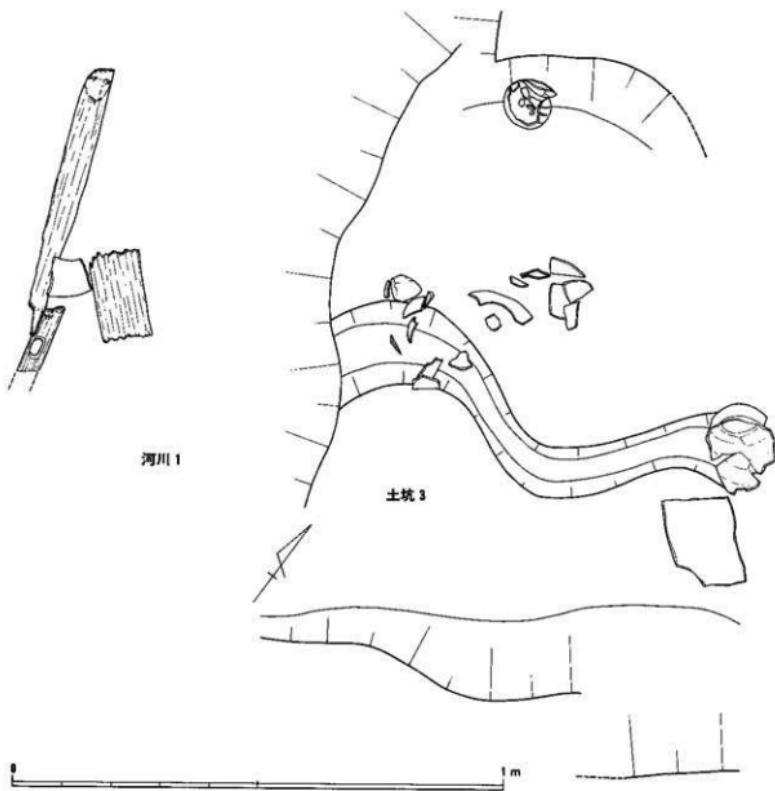
土坑群 当調査区では、31基以上の上坑を検出した。これらの土坑の多くは重複しており、土坑の実際の数はこれ以上になるものと予想される。

II-93図 土坑2・3出土遺物→
(1:4)



II-92図 土坑2遺物出土状況 (1:10)



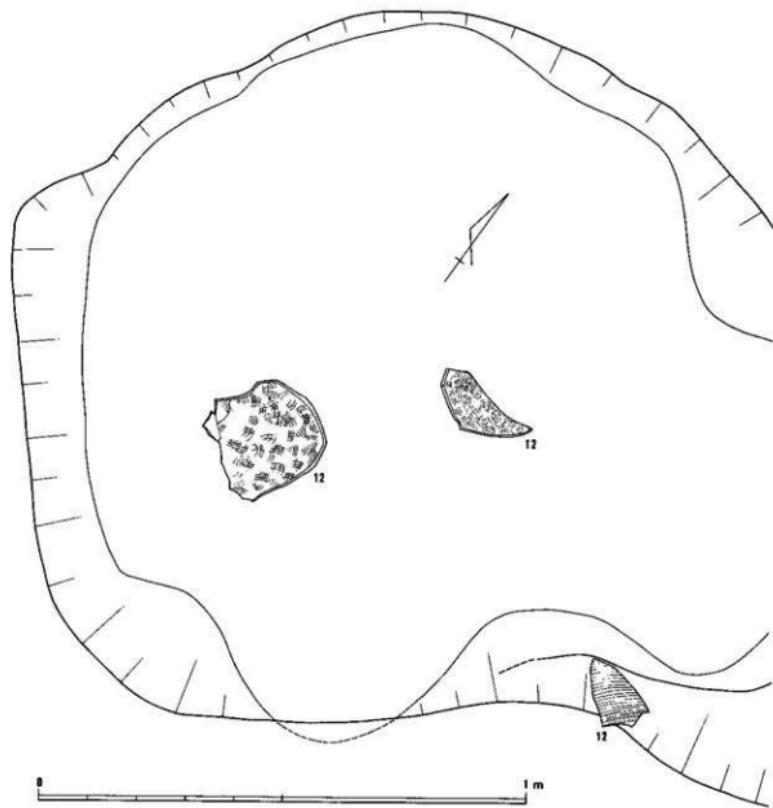


II-94図 土坑3・河川1遺物出土状況(1:10)

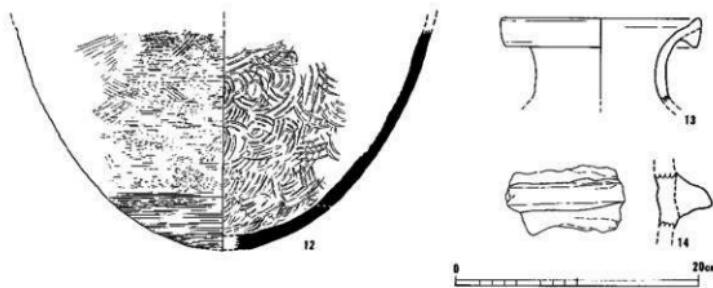
土坑の規模は直径または主軸長が1.3～1.5mをはかる中型のものと主軸長が2.2～2.5mをはかる大型のものの二つに区分できる。土坑の平面形状は、規模に関係なく楕円または長方形のものが一般的であり、円形は中型の1基に限られる。また、小型の上坑と確定できたものは1基に限られるが、B-7区同様に大型土坑による削平を受けた可能性もあり、実際はこれ以上の土坑が掘削された可能性が残されている。

いずれの土坑も下半部をえぐり取るように掘削し袋状の断面形を呈する点や、第Ⅶ層のブロック土を含むことで共通している。なお、これら上坑の中には、埋土中に自然堆積土からなる間層を含むものが多数認められた。

なお、土坑からの出土遺物は極めて少なかったものの、土坑4からは須恵器甕の大口径片が土坑中下層から出土している。

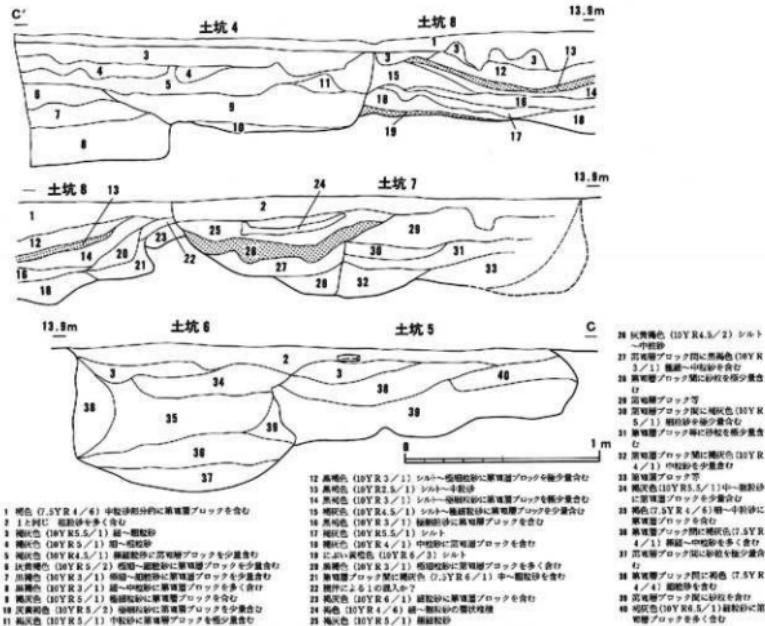


II-95図 土坑4 遺物出土状況 (1:10)

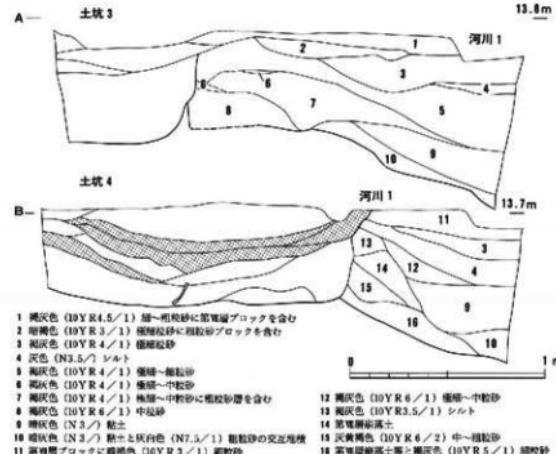


II-96図 土坑4 出土遺物 (1:4)

15.B-8区の調査



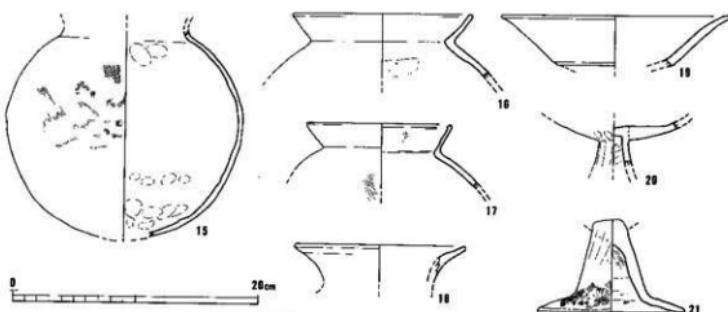
II-97図 土坑群断面図 (1:25)



II-98図 河川1断面図 (1:25)

図化できた遺物は土坑4から出土したII-96図12～14の3点に限られる。弥生土器(13)とカマド片(14)は混入品と考えられる。14は焚き口上部にあたるつばの部分となることを想定して横向きに図化しているが、細片のため全体における部位が明確ではなく、復元した上で図化したものではない。12の須恵器壺底部は破片であるが、大甕のものと考えられる。

河川1 調査区西端で、東岸の一部を検出した



II-99図 河川1出土遺物（1:4）

た。検出部分における河川の深さは1.0mで、岸側のかけあがりは、流水時の侵蝕によってえぐられている部分がある。河川内の堆積は上下2層に大別でき、その堆積状況から北から南へ流れる河川となる可能性が考えられる。上層は土坑3と共有する黒褐色極細粒砂が、下層には褐灰色粗粒砂などが堆積する。また最上層には第VII層ブロックを含む堆積土がみられるため、土坑群の掘削が河川埋没後その上面にも及んだ可能性がある。

下層との層境には流木などとともにII-99図18・20が出土しているが、出土した遺物の総量は少ない。また、上層からはII-99図15～17・19・21などの遺物が出土している。この他にも小型丸底壺なども出土しているが、土坑3と同様に遺物はいずれも保存状態が悪く図化できなかった。

このように河川1の出土遺物の多くは保存状態が極めて悪く、図化できたものは一部に限られる。15～17は布留式壺であるが、このうち15は体部のみで口縁部が残存していなかった。16・17の布留式壺は口縁の屈曲からみて若干の時期差があるものと考えられるが、器壁はやや厚めである。また、内面に明顯なケズリを施すことが確認できたのは、16の1点に限られる。また、18は壺口縁部として扱ったが、破断面は形成時の接合痕であり、二重口縁壺または複合口縁を有する器種になる可能性も残されている。19～21は高杯であるが、接合部が残る20・21はいずれも挿入付加法による。また、21は柱状部をケズリ、裾部を細かい単位のハケを施す。これらの遺物は、時期幅はあるものの布留式前半の時期におさまるものと考えられる。

(3) 小結

当調査区では土坑群の他、弥生時代後期および古墳時代前期の遺構を検出した。これらの遺構は、土坑群による削平をうけて残存状態は悪く、その性格について十分明確にはできなかった。このうち、土坑2・3は河川1とはほぼ同時期の所産であり、これらの土坑が集落の一部として作られたものとするよりは、むしろ河川との関連性が考えられる遺構と言える。なお、河川1はその位置と出土遺物の時期からみて、A-2区からB-3区を経て南へ蛇行する河川の一部となる可能性が考えられる。

II-14表 B-8区土器観察表

No	図版	器種	出土位置	法面(cm)	I(頭部(交部))		各種(頭部) 上段:外側 下段:内側	底部(脚部) 上段:外側 下段:内側	色調	残存度	備考
					上段:外側	下段:内側					
1		須恵器 杯形	包含層	I口径 14.8	頭板ナデ	—			灰白~灰	10%	
2		須恵器 杯形	包含層	口径 14.2	回転ナデ	回転ナデ		ヘラ切りのちナデ 回転ナデ	灰	8%	
3		土師器 高杯	包含層	口径 15.0	—				浅黄橙~褐灰	7%	
4	40-1	円筒埴輪	水成層	側部径 20.5	ハケ	—			に赤い鉛	—	
5	40-1	円筒埴輪	水成層	側部径 21.0	ハケ	—			に赤い鉛	—	
6	40-1	形象埴輪	水成層						灰白・浅黄橙	—	
7		鉢 素	土坑1	口径 15.6	—	タタキ ナデ・ハケ			灰白	25%	
8	40-2	土師器 二重口縁	土坑2	口径 22.3	ナデ・ハケ ナデ・ハケ	ハケ ケズリ			に赤い鉛・赤	20%	
9		土師器 壺(布留)	土坑2	口径 16.8	ハケ	—			灰青 一部に赤い鉛	10%	
10		土師器 壺(布留)	土坑3			ハケ? ケズリ			灰白・明褐色	—	
11		土師器 壺(布留)	土坑3			ハケ ケズリ			灰白~棕	—	
12		須恵器 壺	土坑4			タタキのちカキメ 当て具抜	カキメ 押圧・当て具痕		灰	—	
13		弦纹 広口壺	土坑4	口径 16.0	—	—			オリーブ黒~ 浅黄橙	10%	
14	40-1	カマド	土坑4	10×5.5		押圧・ナデ			灰白	—	
15	41-1	土師器 壺(布留)	河川1			ハケ ナデ	—	押圧	に赤い鉛	—	
16		土師器 壺(布留)	河川1	口径 14.4	—				浅黄橙	5%	
17	40-4	土師器 壺(布留)	河川1	口径 11.5	—	—			に赤い鉛	12%	
18		土師器 壺	河川1	口径 13.2	—				に赤い鉛	5%	
19		土師器 高杯	河川1	口径 18.4	ナデ ハケ				灰白~褐灰	25%	
20		土師器 高杯	河川1		ナデ 押圧・ナデ	ミガキ ケズリ			淡黄~黄橙	—	
21	40-3	土師器 高杯	河川1	裾部径 12.2		ケズリ・ナデ ケズリ	ハケ ケズリ・ナデ		に赤い鉛	70%	

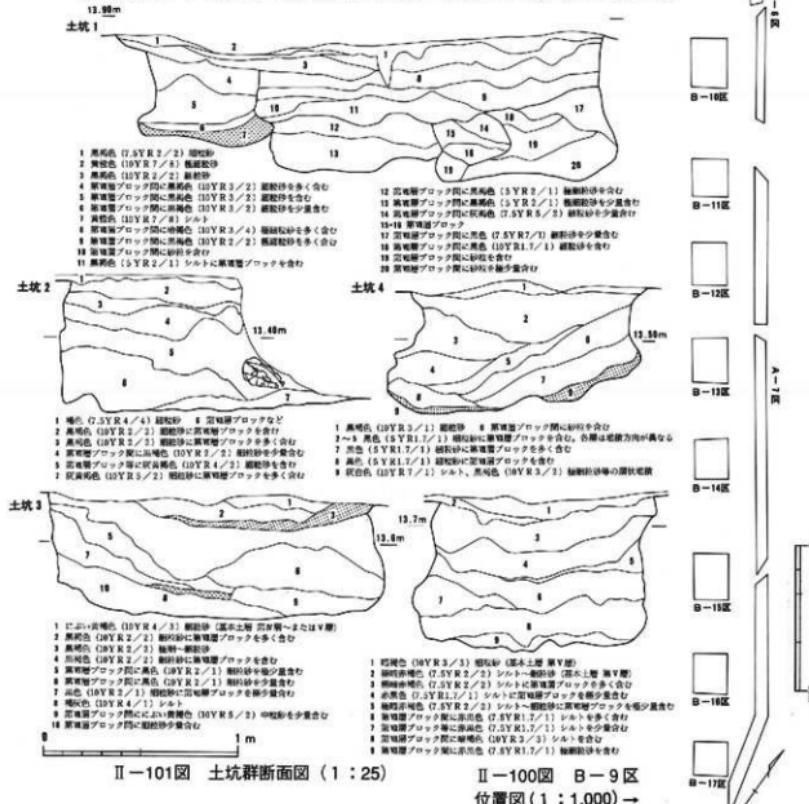
16.B-9区の調査

(1) 調査区の概要

遺構面にいたる堆積土は、地下埋設物抜去などの工事時に削平され、当調査区における基本層序は確認できなかった。なお、遺構は第Ⅶ層上面で検出したが、その範囲は擾乱による削平を受けなかった調査区北部の4分の1にとどまるが、本来は調査区全面に遺構が分布していた可能性が高い。

(2) 検出した遺構と出土遺物

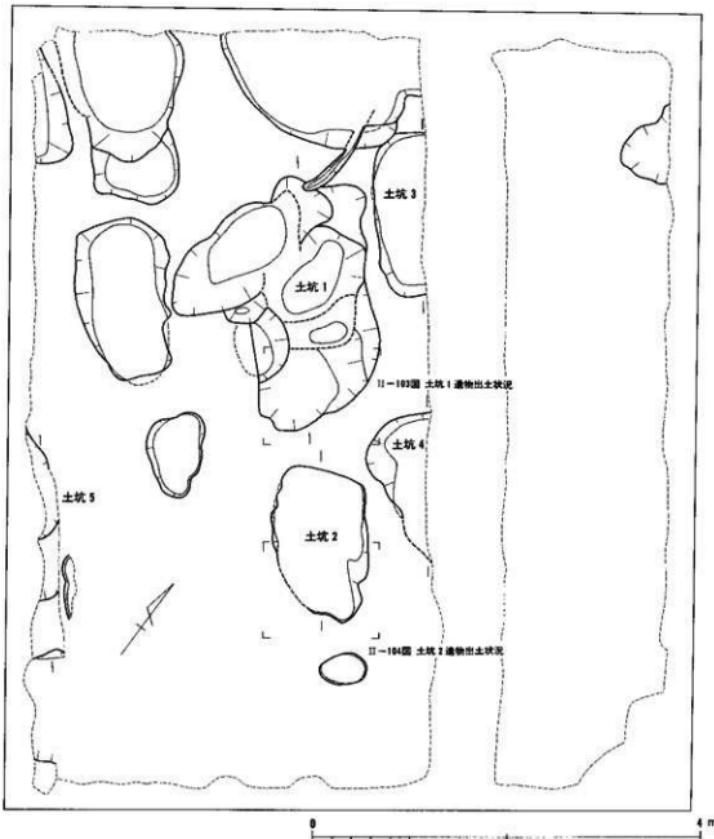
当調査区は、その約4分の3が擾乱による削平を受けたにもかかわらず、土坑



II-101図 土坑群断面図 (1:25)

II-100図 B-9区

位置図 (1:1,000) →

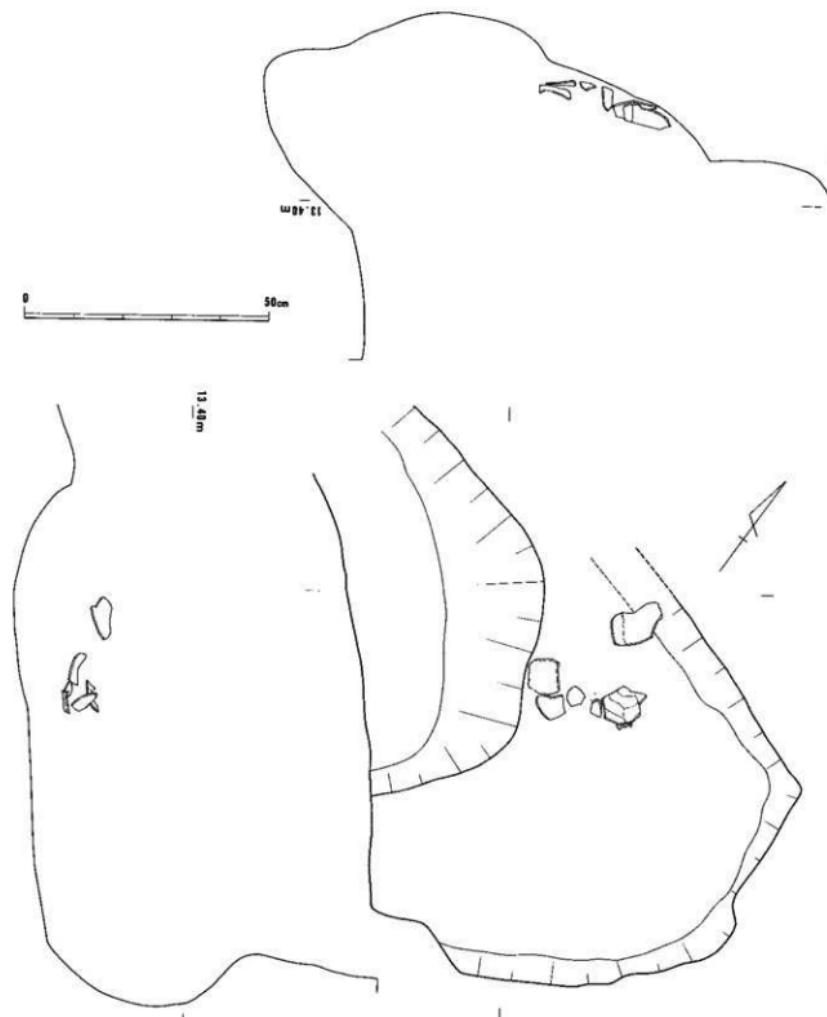


II-102図 B-9区平面図 (1:50)

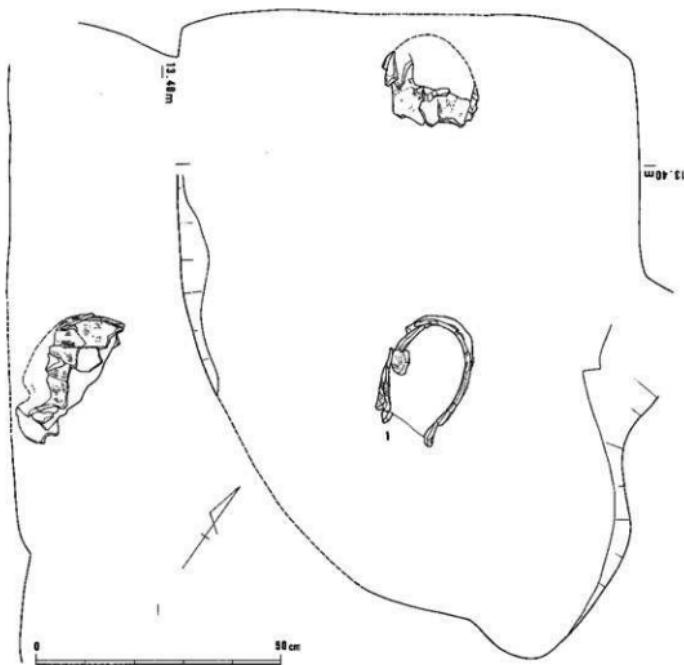
19基を検出した。以下、土坑群について報告する。

土坑群 当調査区で検出した土坑のほとんどは、他の調査区のものと同様に重複しているため、規模、形状を明確にできるものは少なかったが、復元可能なものを含めて概観すると、土坑の多くは平面橢円形もしくは長方形を呈し、主軸長が1.7m前後のやや大型の土坑を中心となる傾向を示す。しかし、土坑6のように平面円形の大型のものや、逆に土坑7のように平面橢円形を呈するものの、主軸長が1.0mに満たない小型のものもある。土坑の形状と規模は多様であるが、A-3区などでみられた土坑の規模と形状にみる対応性は、当調査区でもある程度確認できよう。

なお、土坑内の堆積土のはばすべてに第VII層を母材とするブロック土を含むが、土坑2などの



II-103図 土坑1遺物出土状況 (1:10)

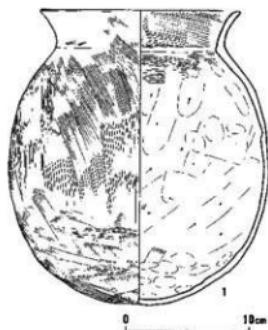


II-104図 土坑2遺物出土状況（1：10）

一部の土坑には、中層もしくは下層～最下層に自然堆積層を確認している。なお、土坑の断面形態については他の調査区と同様に土坑下部がえぐり取られ、断面袋状を呈する。

土坑からの出土遺物の多くは、弥生時代後期頃の遺物包含層からの混入品で占められ、土坑の時期を反映する遺物は、土坑1・2から出土した遺物に限られる。

土坑1では、最下層から土師器長胴壺の破片が須恵器と混ざり、散乱した状態で出土している。しかし、土坑1から出土したこれらの遺物は、残存状態が悪く復元できなかつたため図化しなかった。土坑2では埋土中層から土師器壺が横転したような状態で出土した。土坑2は、埋土中層部に明確な自然堆積層がみられることから、2度にわけて埋め戻しを行っていることがわかる。出土した壺の位置は1度目の埋戻土の上面であり、埋め戻し終了時にこの壺を放棄した可能性が考えられる。

II-105図 土坑2出土遺物
(1：4)

出土した壺は口径16.0cm、器高12.5cmを測る。口縁部は体部から緩やかに屈曲し、外方向へあまり開かない。口縁部外面はナデを、内面にはハケを施す。体部内面はケズリを施し、底部には整形時の押圧痕を残し調整は施していない。体部外面は全面にハケを施し、一部に煤が付着している部分が認められる。なお、土坑群は壺の時期から7世紀前半頃の可能性が考えられる。

II-15表 B-9区土器観察表

No	回数	器種	出土位置	法蓋(cm)	口縁部(受持) 上段：外刃 下段：内刃	体部(側面) 上段：外側 下段：内側	底部(脚部) 上段：外刃 下段：内刃	色調	残存度	備考
I	41-2	土師壺 素	土坑2	口径 16.0 器高 12.5	ナデ ハケ	ハケ 押圧・ナデ・ケズリ	ハケ	黒褐・灰黄	50%	

17.B-10~12区の調査

(1) 調査区の概要

B-10・11区は、全面が近現代の整地層などにより、耕作上から第Ⅶ層上面まで削平を受け、遺構もほとんど痕跡を残すだけにとどまる。B-12区もほぼ同様の状況を呈するが、削平は第Ⅳ層上面（褐色細粒砂包含層）にとどまる。よって、いずれの調査区でも基本層序は明確ではない。以下、各調査区で検出した遺構について述べることとする。

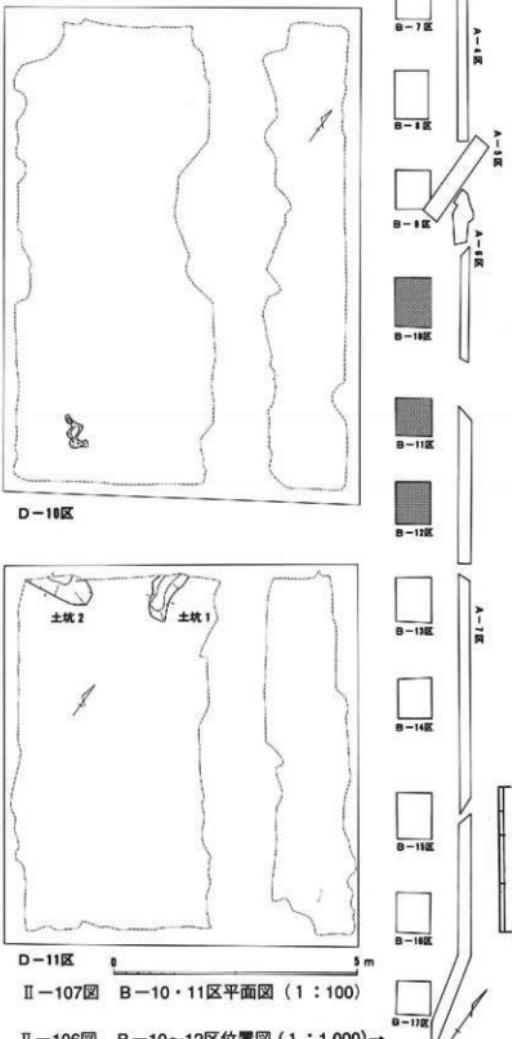
(2) 検出した遺構

ピット B-12区で9基を検出した。いずれのピットも深さ2~5cmと浅く、柱痕を確認できるものはないかった。また、ピットの分布から建物に復元できるものは認められなかった。

土坑 各調査区で検出したが、先に述べたようにいずれの調査区でも残存状態は良くない。以下、調査区毎に土坑の概要を述べることにする。

B-10区では深さ6cm前後の不整形土坑1基を検出した。これら土坑内からは、遺物が出土していないことから、時期等は不明である。

B-11区では検出長1.0m、幅0.4m、深さ0.12m前後の土



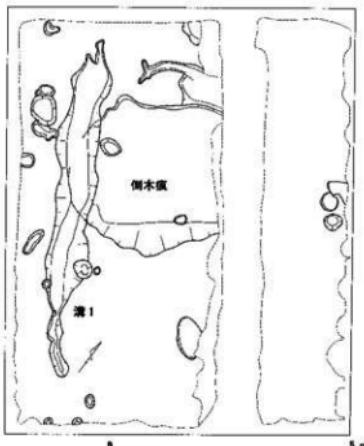
坑1と検出長1.3m、幅0.6m、深さ0.2mの土坑2を検出した。いずれも痕跡をとどめる程度である。このうち、土坑2から土師器細片と須恵器片が出土しているが、図化できるものはなかった。

B-12区でも2基を検出したが、どちらも深さ2~4cm程度と浅く、痕跡を残す程度にとどまる。またこれらの土坑からは、土器細片が出土しているが、図化できるものはなかった。

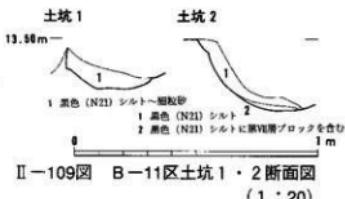
溝 B-12区で検出した溝1の1条に限られる。溝1は、幅0.9m、深さ0.15mをはかるが、両端は削平されたらしく消滅しており、上面の削平の著しさがうかがわれる。埋土は、辛うじて2層に区分できるが、ともに灰黄褐色細粒砂からなり、大きな相違は認められない。埋土からは、弥生土器細片が出土しているが、溝の時期を反映しているものか判断しにくい。

(3) 小結

B-10~12区では、集落関連遺構の存在が確認できたものの、遺構の保存状態は極めて悪く、その状況を明確にすることはできなかった。しかし、これらの遺構はA-5区付近の弥生時代後期~終末期、または古墳時代中期頃の集落の広がりを意味する可能性も考えられ、一定の注意を払う必要もあるろう。



II-108図 B-12区平面図 (1:100)



II-109図 B-11区土坑1・2断面図 (1:20)



II-110図 B-12区溝1・倒木痕断面図 (1:20)

18.B-13~17区の調査

(1) 調査区の概要

B-13~17区は各調査区の面積が狭いこと、一定の距離をおいて連続していることから、基本的には層序に大きな変化がみられなかった。よって基本層序については一括で扱い、その後各調査区の状況を記述することにする。

(2) 検出した遺構と出土遺物

a. 基本層序

層序はまず大きく大別し、その中を分層することにより、各調査区との関連性が掴みやすいように努めた。なお下記の層序の上部には現代の水田耕土層と盛土が存在したがそれらは機械掘削により除去した。

第1層は灰色を基調としたシルト～極細砂層で、2層に分層される。第2層は明黄褐色粘土層で北端のB-17区中央付近で始まり、南側に進むにつれて若干層厚を増す單一層である。第3層は黄灰色砂～細砂（3-A層）と灰白色極細砂（3-B層）に分層される。第4層は黒褐色粘土を基調とした層で4層に分層される。4-A層は色調は黄橙色であるが、土質がシルト系であることから同一層として扱った。第5層は褐灰色・黄灰色をベースにした粘土層で橙色の砂粒を含む。A～Dの4層に分層される。第6層は黒褐色を基調にした粘土層で2層に分層される。第7層は北側（灰黄色粘土）と南側（明緑灰色粘土）では色調を異にするが同一層と判断される。

これらの層の推定期は出土する遺物から、第1層が近世から近代、第2層～第3層が古代から中世とみられ、以下は無遺物のため時期は不明である。人為的な遺構は第5層上面までで、以下は自然堆積層である。第1層から第6層までが沖積層、第7層以下が洪積層とみられる。

b. B-13区

明確な遺構として検出したものはほとんどない。第2層上面で東西に走る鉢溝らしきものと直径約20cm、深さ10cm前後の小穴を検出したのみである。固化的した最下層のものは樹木の根等の腐朽に伴う落ち込みと考えられ人為的な遺構ではない。

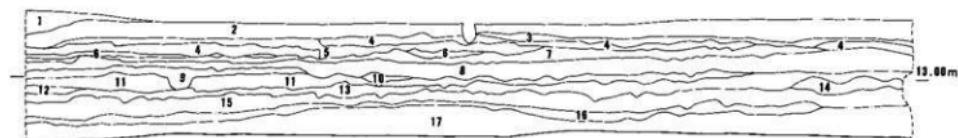
出土した遺物は少量で細片のみである。そのなかで4点ほど図示（II-112）



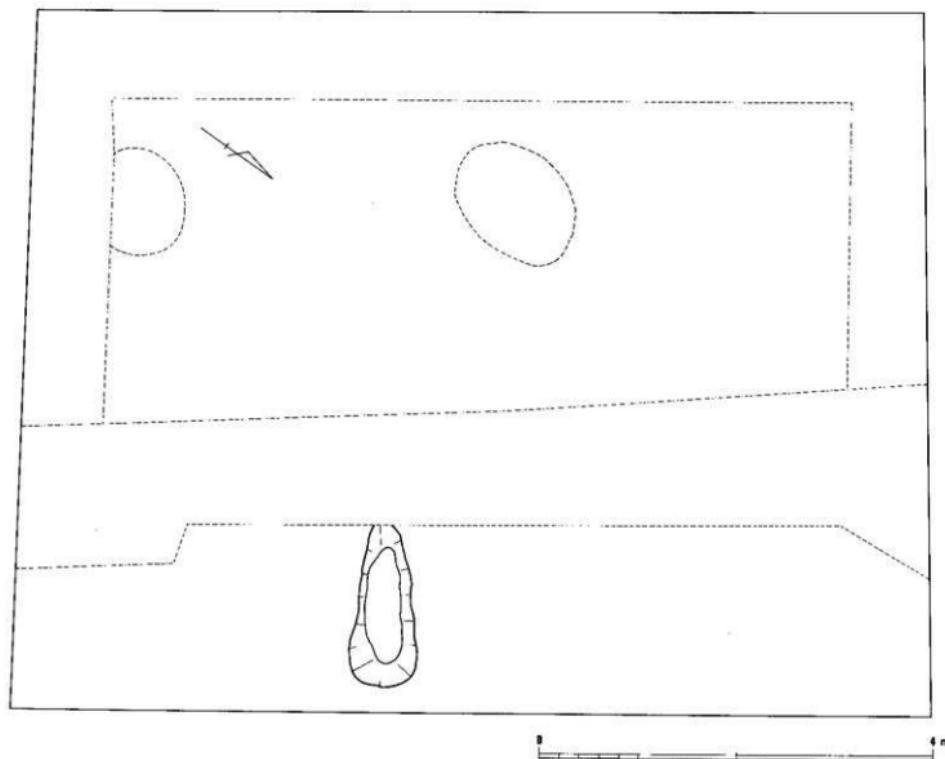
II-112図 B-13区出土遺物
(1:4)

II-111図 B-13~17区位置図
(1:1,000) →

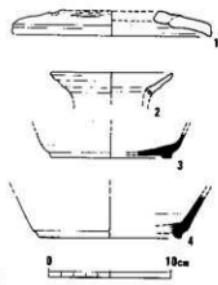
II 掘削調査の成果



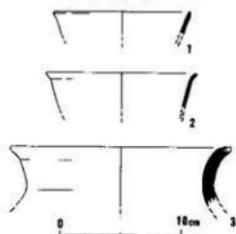
- | | |
|------------------------------|------------------------------|
| 1 灰色 (7.5Y 6/1) 堆積砂シルト (IA) | 10 淡黃褐色 (DGYR 4/2) シルト |
| 2 深灰色 (DGYR 6/1) 堆積砂 | 11 暗灰色 (DGYR 5/1) 粘土 (VA) |
| 3 黄褐色 (2.5Y 5/1) 堆積砂 | 12 暗灰色 (7.5YR 4/1) 粘土 |
| 4 明黄褐色 (2.5Y 7/6) シルト (IB) | 13 灰白色 (5Y 7/1) 粘土 (VD) |
| 5 と同じ | 14 黑色 (N2') 粘土 (WA) |
| 6 に近い黄褐色 (10YR 6/4) シルト (VA) | 15 淡黄色 (2.5Y 7/2) 粘土 (VA) |
| 7 深褐色 (5YR 3/1) 粘土 (NB) | 16 淡黄色 (2.5Y 7/8) シルト混入 (VB) |
| 8 灰褐色 (10YR 3/1) 粘土 (NC) | 17 灰白色 (5Y 7/1) 粘土 (VC) |
| 9 黑褐色 (SYR 3/1) 粘土 (ND) | |



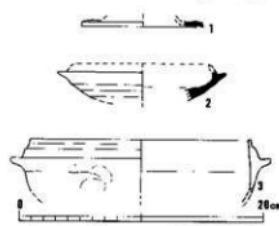
II-113図 B-13区平面・断面図 (1:50)



II-114図 B-14区出土遺物 (1:4)



II-115図 B-15区出土遺物 (1:4)



II-116図 B-16区出土遺物 (1:4)

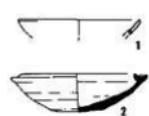


図) した。1は土師器、4は施釉陶器で他は須恵器である。平安時代のものとみられる。出土層位はすべて第1層である。この層は近世の整地上とみられる。

c. B-14区

遺構らしきものは土坑状のものと小溝4条で第6-B層上面で検出した。しかし土坑状のものは断面図の中央部分にみられるように樹木の根の腐朽の可能性が高く、小溝も溝状の凹みとみられることから人為的な遺構とは考えにくい。また、この上層のA層は黒色粘土層であることから沼状の湿地帯が想定される。遺物は出土していない。

図示した遺物は1層(1~3)と2層(4)から出土したものである。1は土師器で表面は粗いハケ、内面は接合痕と指痕を残す粗製の土器である。器種は明確にできない。2は唐津焼の皿とみられる陶器である。3・4は須恵器の杯類である。

d. B-15区

このグリッドでは第2層上面で数条の溝状遺構を検出したのみである。遺物は3点図示した。すべて第1層から出土している須恵器類で1は杯、2は椀、3は甕とみられる。

e. B-16区

検出した遺構は第2層上面で東西方向に走る小溝を1条と第7層上面での土坑状のもの1基である。第7層面検出の土坑状のものは人に人為的な遺構とは考えにくく、樹木の根の可能性が高い。

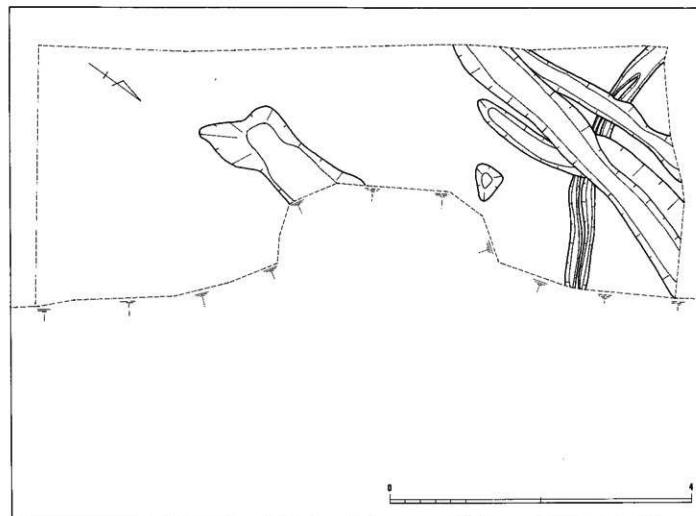
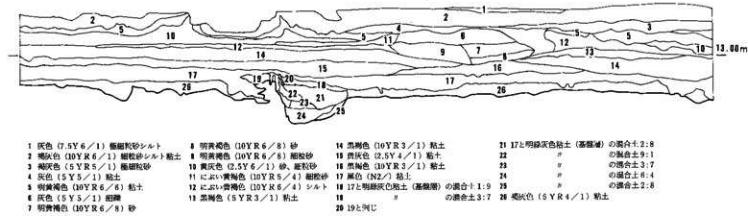
遺物が出土しているのは第3層までであるが、図化できるのは第1層から出土したのみである。そのなかで3点を図示した。1・2は須恵器で杯蓋と杯身、3は瓦質の有段の羽釜である。

f. B-17区

遺構は第4層中間層と第5層上面で数条の緩く弧を描く溝を検出した。

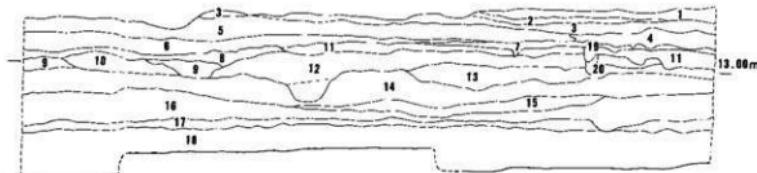
第4層検出の溝は幅0.5m、深さ0.2mで北東から南西方向に流れを持つ。第5層検出のものは幅1m、深さ0.3m程で東から西方向に流れを持つ。検出状況から人為的な遺構とは考えにくい。これらの溝の時期は出土遺物がなく不明であるが、層位的には弥生時代から占墳時代の可能性がある。

図示した遺物はすべて第1層から出土したものである。1は土師器の杯類、2は須恵器の杯身、3は瓦器椀である。

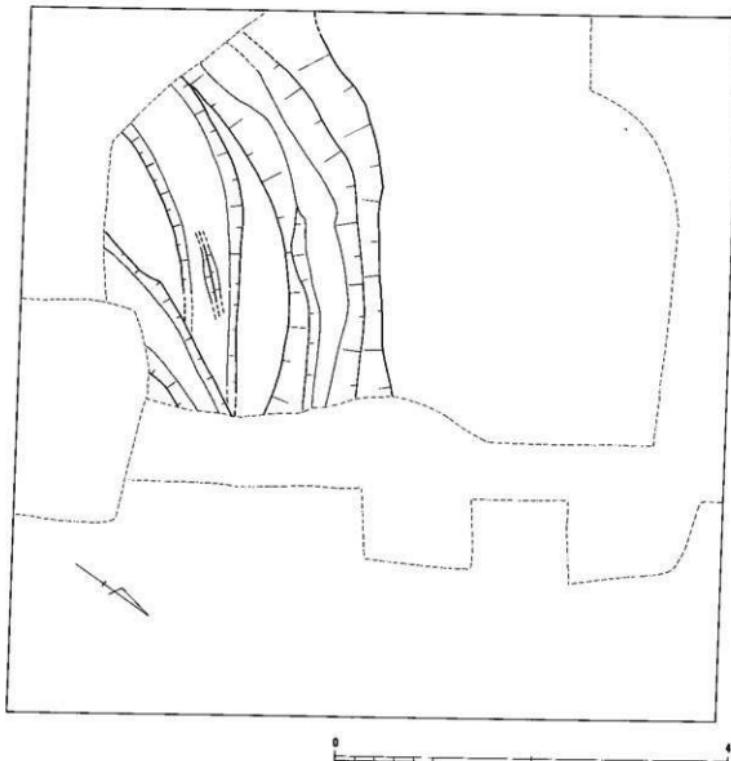


II-118図 B-14区平面・断面図 (1 : 50)

II 発掘調査の成果

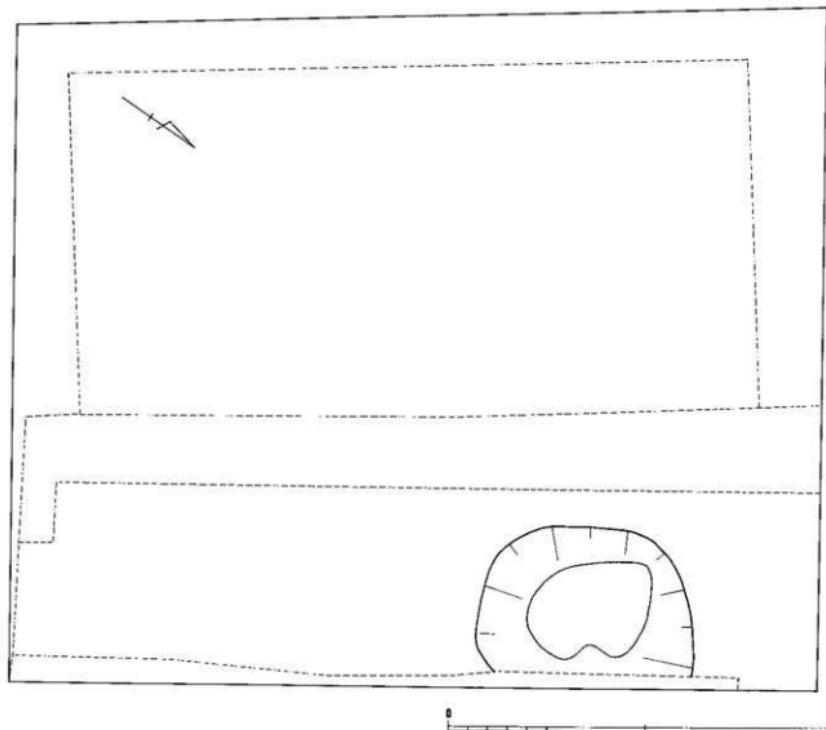
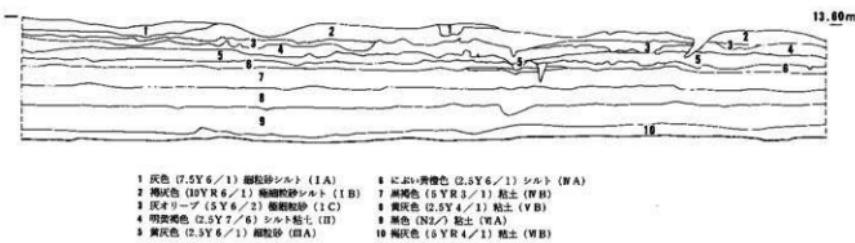


- 1 灰色 (7.5Y 6/1) 細粒砂シルト (IA)
- 2 棕灰褐色 (10YR 6/1) 細粒砂 (IB)
- 3 明黄色 (D9Y R 6/6) 黏土 (II)
- 4 棕褐色 (2.5Y 6/1) 細粒砂 (III A)
- 5 明黃褐色 (D9Y R 6/6) 細粒砂 (III B)
- 6 にじみ黄褐色 (D9Y R 6/4) シルト (IV A)
- 7 黑褐色 (5YR 3/1) 黏土 (IV B)
- 8 黑褐色 (10YR 3/1) 黏土に青灰色 (5B 5/1) 細粒砂切入
- 9 黄褐色 (2.5Y 5/6) 細粒砂
- 10 灰色 (IN 6/1) 黏土
- 11 黑褐色 (10YR 3/1) 黏土 (IV C)
- 12 黑褐色 (10Y R 3/1) 黏土に褐褐色 (7.5YR 3/3) シルト混入 (WD)
- 13 黑褐色 (10Y R 5/1) 黏土 (V A)
- 14 黃褐色 (2.5Y R 5/1) 黏土 (V B)
- 15 黑褐色 (2.5Y R 3/1) 黏土に黒褐色 (7.5YR 6/8) 細粒砂混入
- 16 黑褐色 (N 2/1) 黏土 (VI A)
- 17 隅状褐色 (5 YR 4/1) 黏土 (VI B)
- 18 明銀灰色 (10G Y 7/1) 黏土 (VII)
- 19 IIとほぼ同じ
- 20 IIIとほぼ同じ



II-119図 B-17区平面・断面図 (1 : 50)

18.B-13~17区の調査



II-16表 B-13区土器観察表

No	図版	器種	出土位置	法量(cm)	口部(受部) 上段：外周 下段：内面	体部(胴部) 上段：外周 下段：内面	底部(脚部) 上段：外周 下段：内面	色調	残存度	備考
1		十輪器 壺	包含層	口径 14.5	ナデ			に赤い縦 明黄褐色	7%	
2		須恵器 盆	包含層	口径 16.3	回転ナデ	回転ナデ		灰白	12%	
3		須恵器 杯	包含層	口径 14.8	回転ナデ			灰白	4%	
4		陶器 筒	包含層	口径 21.9	ナデ	—		灰白(胎土)	11%	

II-17表 B-14区土器観察表

No	図版	器種	出土位置	法量(cm)	口部(受部) 上段：外周 下段：内面	体部(胴部) 上段：外周 下段：内面	底部(脚部) 上段：外周 下段：内面	色調	残存度	備考
1		上部器 ?	包含層	口径 16.2	—	ハケ ナデ		淡黄	5%	
2		肥前系陶器 盆	包含層	口径 10.0	回転ナデ	回転ナデ		に赤い黄褐色 灰白(釉)	12%	
3		須恵器 杯B	包含層	底径 9.8		回転ナデ	回転ナデ ナデ	灰白	15%	
4		須恵器 杯B	包含層	底径 11.8		回転ナデ	—	灰	15%	

II-18表 B-15区土器観察表

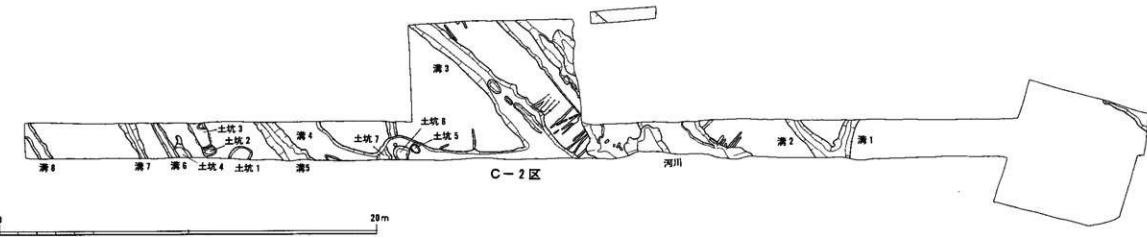
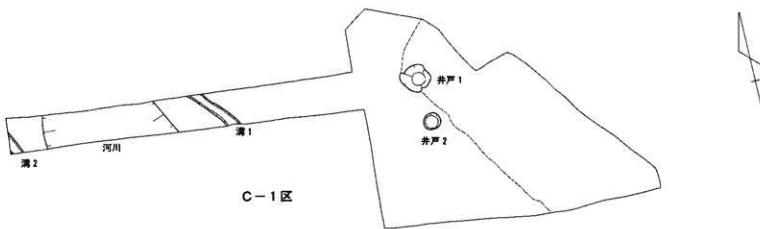
No	図版	器種	出土位置	法量(cm)	口部(受部) 上段：外周 下段：内面	体部(胴部) 上段：外周 下段：内面	底部(脚部) 上段：外周 下段：内面	色調	残存度	備考
1		須恵器 杯 (1-B)	包含層 (1-B)	口径 13.8	回転ナデ			灰	6%	
2		須恵器 杯	包含層 (1-B)	口径 12.2	回転ナデ	回転ナデ		灰白	8%	
3		須恵器 瓢	包含層 (1-B)	口径 17.5	回転ナデ			灰	5%	

II-19表 B-16区土器観察表

No	図版	器種	出土位置	法量(cm)	口部(受部) 上段：外周 下段：内面	体部(胴部) 上段：外周 下段：内面	底部(脚部) 上段：外周 下段：内面	色調	残存度	備考
1		須恵器 杯壺 (1-B)	包含層 (1-B)	口径 10.0	回転ナデ			灰	6%	
2		須恵器 杯身 (1-B)	包含層 (1-B)	口径 13.8	回転ナデ	回転ナデ～ケズリ 回転ナデ		灰白	8%	
3		瓦質 刷毛	包含層 (1-B)	口径 17.5	ナデ	押正 —		黒 淡黄	7%	

II-20表 B-17区土器観察表

No	図版	器種	出土位置	法量(cm)	口部(受部) 上段：外周 下段：内面	体部(胴部) 上段：外周 下段：内面	底部(脚部) 上段：外周 下段：内面	色調	残存度	備考
1		土師器 小皿	包含層 (1-A)	口径 9.8	ナデ			灰白	10%	
2	41-3	須恵器 杯身	包含層 (1-A)	口径 9.3 高さ 3.2	回転ナデ	回転ナデ～ケズリ 回転ナデ	回転ナデ 回転ケズリ	灰	7%	
3		瓦質 梗	包含層 (1-A)	口径 10.9	ミガキ	ミガキ		灰白	8%	



II-121図 C-1・2区平面図 (1:200)

19.C-1区の調査

(1) 調査区の概要

調査範囲はII-122図に示すようにグリッドとトレンチを接続したもので、調査面積は約170m²である。当調査地は南に緩傾斜する地形に位置する。遺構検出面での標高は15.2m前後である。

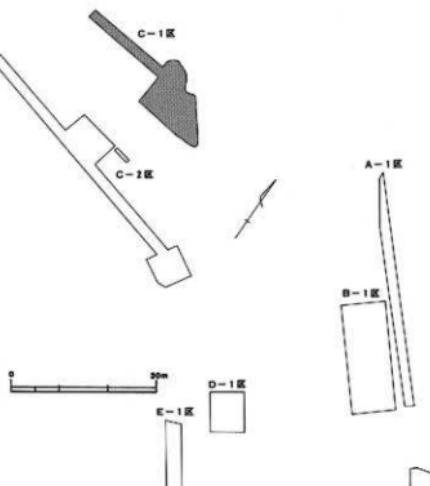
基本的な層序は「II-2」周辺の地形と基本層序」で述べたところと殆ど変わらず、耕作土下に中世（第Ⅲ層）、平安時代前～中期（第Ⅳ層）、古墳時代後期～奈良時代（第Ⅴ層）の包含層の堆積がみられる。これらの基本土層の堆積は調査区の全域で安定しており、著しい層位の変化はみられないが、全体的に古代以降の包含層の堆積が著しく、包含層から出土した遺物もこの時期のものが多い。

これらの土層からは弥生土器から瓦器にいたるものまで出土しているが、なかでも第2・3層からは古代～中世の遺物が多く出土しており、その一部をII-123図に示した。1は2層から出土したもので、和泉型瓦器碗である。高台は省略され皿型化している。見込みのミガキは器壁の摩耗により確認できない。復元径9cm前後で尾上編年IV-2～3期にかけての時期に比定される。2は須恵器杯Bである。焼成は良好で胎土は赤灰色を呈する。高台は底部外周に貼り付けられ、体部との境界は不明瞭になりつつある。8世紀後半～末の所産である。3は碗と考えられる底部である。内面には黄緑色の施釉がかろうじて認められる。高台は削り出しの蛇目高台で、ほぼ9世紀後半の縁釉陶器とみなせる特徴を有するが、成形は粗雑で器壁も厚く、产地については明確にできない。

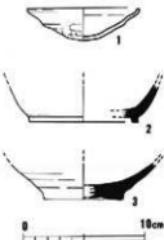
(2) 検出した遺構と出土遺物

当調査区で検出した遺構は溝2条、井戸2基である。以下、各遺構について報告する。

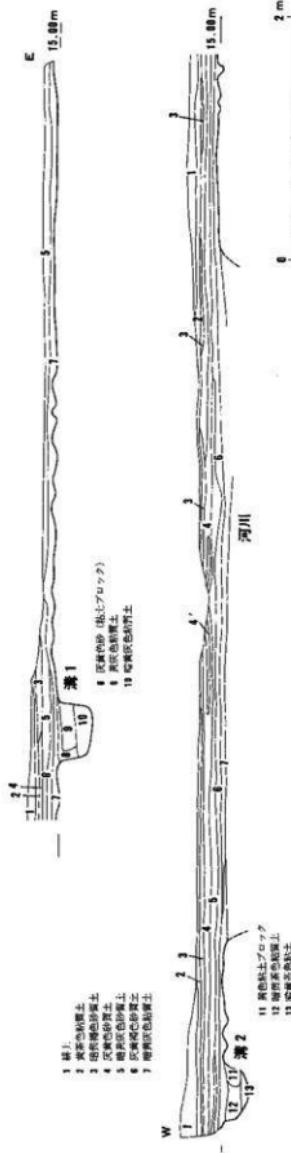
溝 1 調査区西部トレーニチの中央で検出したもので、北西方向から南東方向へ延びる溝である。幅0.5m、深さ0.3m前後の規模を有する。埋土は2層に大別することができる。この溝はC-2区溝1に連なる可能性が考えられる。遺物は出土していない。



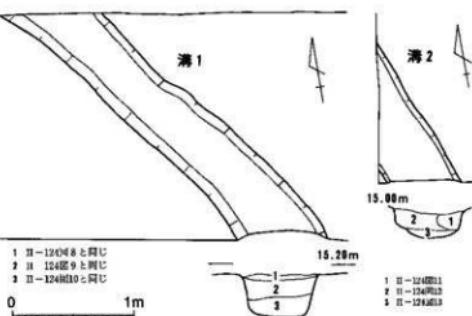
II-122図 C-1区位置図 (1:1,000)



II-123図 包含層出土遺物 (1:4)



II-124図 南壁断面図 (1:50)



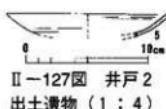
II-125図 溝1・2平面・断面図 (1:40)

溝2 調査区西端で、その一部を検出した。溝の大部分は西側の調査区外にあるため、正確な規模等は不明であるが、幅0.5~0.6m、深さ0.3m前後を測るものと推定される。埋土は2層に大別され、下層は砂が堆積したもので流水の可能性が考えられ、上層中には第VII層を母材とするブロック土の混入が認められるなど、機能停止後に埋め戻された可能性が考えられる。この溝も遺物が出土していないため、時期は明確にできないがC-2区で検出している溝群と同様の時期となる可能性がある。

井戸1 調査区東部中央で検出したもので、その南側1.5m付近には井戸2が存在する。平面形態は円形で、直径1.4mを測る素掘りの井戸とみられるが、深さは完掘していないため不明である。井戸の上面から2m付近のところでは地山の崩落によって生じた凹みが認められるが、その下位はほぼ垂直に下降する。検出面から湧水層となる深さ2.8m付近では黄灰色砂礫層が露出する。その間の埋土は機能停止後の埋戻土であるが、それ以下は黒灰色粘土で間に砂層を挟むなど、機能時の堆積土とみられる。

遺物は埋土中から近世陶磁の破片が少量出土している。そのうち図化できたのはII-126図に示した白磁小碗の底部(4)の1点である。時期は明確にはできないが18世紀以降と考えられる。

井戸2 井戸1の南側で検出したものである。平面形態は円形を呈し、直徑0.9mを測る素掘りの井戸であるが、深さは完掘していないため不明である。検出面

II-126図 井戸1
出土遺物 (1:4)II-127図 井戸2
出土遺物 (1:4)

からはほぼ垂直に掘り込まれている。上面から1.5m付近のところでは機能時に堆積したとみられる上層が観察され、その15cm下からは葉状の植物遺体と網籠が出土している。これ以下の状況は、掘削できなかったため不明である。

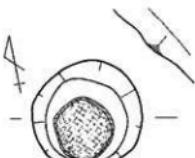
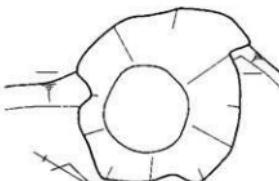
井戸2からは陶磁器および土師皿が出土しているが、図化できたのはII-127図に示した土師皿(5)の1点である。器壁は火を受けて黒色を呈する。端部は口縁罐上面を面取りすることにより鋭く仕上げている。時期は16世紀頃のものと考えられるが、二次的な混入品とみられる。

(3) 小結

検出した遺構は奈良時代前後の溝2条と近世の井戸2基に限られるため、周囲の状況は推定しにくく、南側に隣接するC-2区とあわせて検討する必要があろう。ただ近世段階の状況については井戸1・2の存在から推定される。この時期の遺構は、この他には検出されていないことから周囲に村落または屋敷が存在する可能性は乏しく、この井戸が日常生活に不可欠な飲料用の水資源としてみると困難である。ならばあとは生産にかかわる水供給のため、掘削されたものとみることができ、農業用に用いられた可能性が考えられ、周囲が耕地化されていたことがうかがえる。

II-21表 C-1区土器観察表

No	図版	器種	出土位置	法寸(cm)	II調査(受持) 上段:外壁 下段:内壁	体部(胴部) 上段:外壁 下段:内壁	底盤(脚部) 上段:外壁 下段:内壁	色調	残存度	備考
1	47-1	瓦器 梗	包含層	口径 9.0 高さ 2.6	ナデ	ナデ・押圧	押圧	灰白~灰	45%	和泉型
2		如意器 杯B	包含層	底盤径 8.9		回転ナデ	回転ナデ	明赤灰~灰白	20%	
3	47-2	縦輪陶器 瓢?	包含層	高台径 6.4		回転ナデ	ケズリ出し高台 回転ナデ	灰	60%	
4		肥前系磁器 梗	井戸1	高台径 4.4		回転ナデ	白~灰白	60%		
5		土器器 瓢	井戸1	口径 13.4	ナデ	-		黒褐	10%	

II-128図 井戸2平面・
断面図 (1:40)II-129図 井戸1平面・断面図
(1:40)

20.C-2区の調査

(1) 調査区の概要

調査範囲は東西方向にトレーンチとグリッドを接続させたもので、調査面積は約383m²である。

基本層序はC-1区と同様に「II.2.周辺の地形と基本層序」で述べた状況とほとんど変わらない。このうち、古代～室町時代の包含層（第III～IV層）は遺構検出面が起伏に富むにもかかわらず、安定した堆積がみられる。その一方、古墳時代後期から奈良時代にかけての包含層（第V層）は河川の影響を受けて調査区中央付近では明確な堆積がみられるものの、調査区東西では確認されておらず、平安時代における削平が著しいものであったことがうかがえる。遺構検出面の標高は14.9m～15.1mで調査区中央付近は河道の影響により低くなっている。

出土遺物はII-131図に示したように瓦質の羽釜2点とそれらに付随する三脚の一部分が、第III層から出土しており、時期は中世のものとみられる。

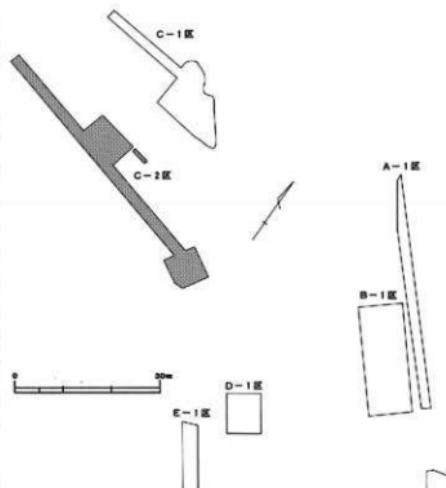
(2) 検出した遺構と出土遺物

当調査区で検出した遺構は土坑7基、溝9条、河川1条である。以下、各遺構について報告する。

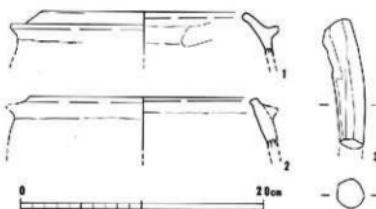
土坑群 調査区東部の河道から西側

を中心で数基の土坑を検出した。これらの土坑は形状、埋土に共通する特徴を有することから総じて土坑群とした。

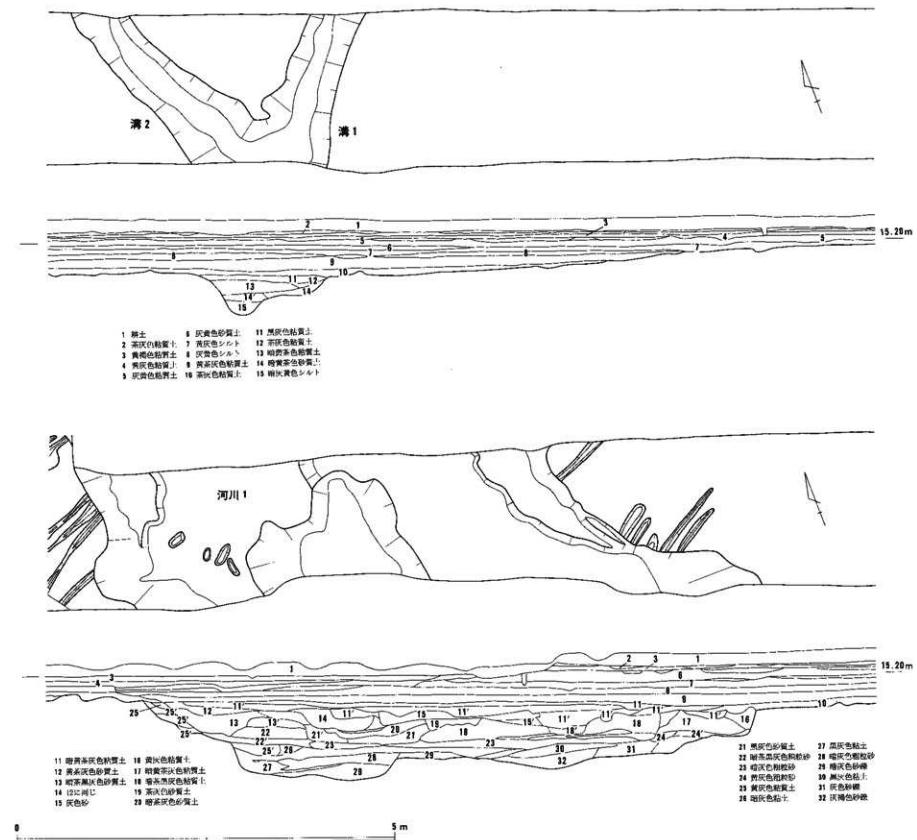
土坑の多くはその一部を検出しただけで、全体の規模を明確にできたものは1基に限られる。ほぼ形状を知ることができる土坑5（0.7m×0.4m）と土坑3（0.7m×1.0m）をみると、楕円形で小型の部類に属するものが主要となるようである。いずれの土坑も下半部が拡張され袋状の断面形態を呈し、埋土は第V層等を母材とするブロック土を多く含むことから、同様の性格のものと考えることができる。



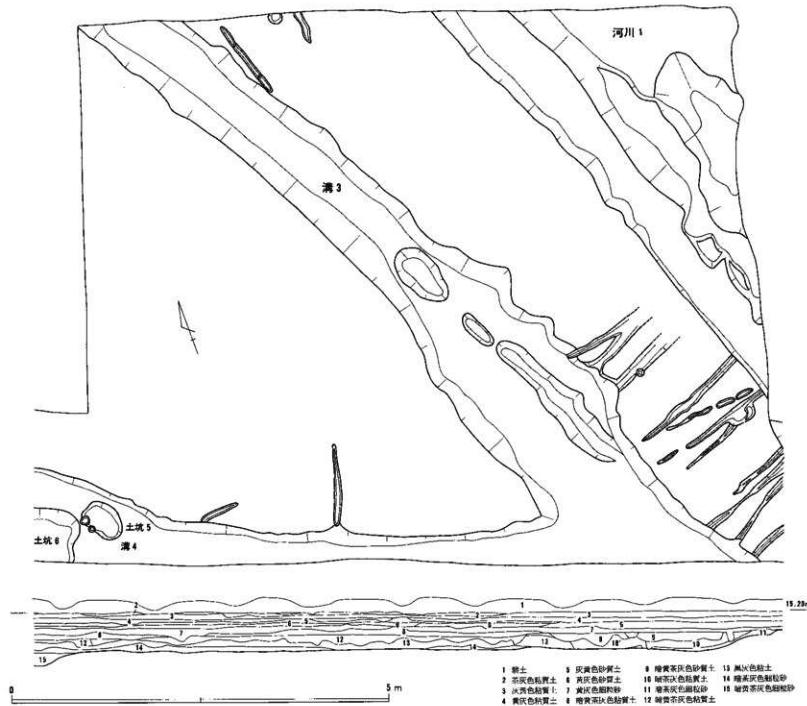
II-130図 C-2区位置図 (1 : 1,000)



II-131図 包含層出土遺物 (1 : 4)



II-132図 C-2区平面図1・2 (1:50)



II-133図 C-2区平面図3 (1:50)